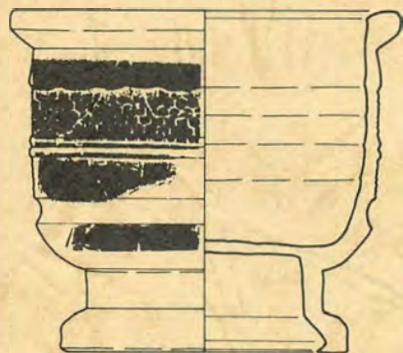


万 年 寺 遺 跡

——建設省 南九州西回り自動車道建設事業に伴なう埋蔵文化財調査報告——



1997

熊本県教育委員会



2号堀出土遺物（高田焼）



2号堀出土遺物（染付）

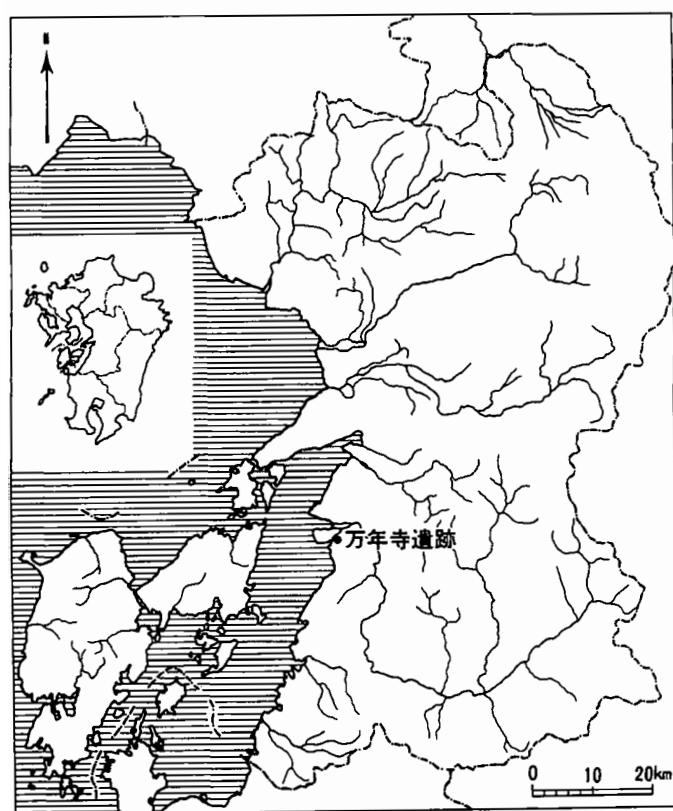


万年寺遺跡航空写真（南より）



2号堀出土遺物

万年寺遺跡



1997

熊本県教育委員会

序 文

熊本県には豊かな自然や歴史、風土の中で培われた多彩な地域の伝統文化が数多く残されています。これらを守り、さらに新しい文化を創造し、後世に引き継いでいくためには、県民の方々の文化財に対する深い御理解と御協力をいただかねばなりません。

本書は、八代市の南九州西回り自動車道建設事業に先行して行った万年寺遺跡の発掘調査報告書です。万年寺遺跡からは、弥生時代の遺物、中世の館跡にともなう遺構や遺物、またそれに続く寺院跡の遺構や五輪塔を含む遺物が大量に出土しました。また近世から現代に至る多種多様の陶磁器類も確認でき、当時の文化交流も窺い知れる貴重な資料を提供してくれました。

この報告書が、八代市ひいては熊本県の歴史を学ぶうえで、また埋蔵文化財をより深く理解していただくうえで、御活用いただければさいわいです。

最後に、調査の円滑な実施に御理解と御協力をいただきました地元の方々、建設省八代工事事務所、八代市教育委員会、並びに関係機関に対して厚くお礼申し上げます。

平成9年3月31日

熊本県教育長 松尾 隆樹

例　　言

- 1 本書は熊本県八代市平山新町に所在する、万年寺遺跡の調査報告書である。
- 2 調査は南九州西回り自動車道建設事業に伴う事前調査として、建設省八代工事事務所の依頼を受け、熊本県教育文化課が実施し、調査は平成7年4月から平成8年3月まで実施した。整理・報告は平成8年4月から平成9年3月まで行った。
- 3 本書に使用した地形図は、建設省八代工事事務所から提供をうけたものを基礎にしている。
- 4 現地調査に関する実測及び写真撮影は主に調査員で行った。また、遺物の写真撮影は今村龍太郎が行った。
- 5 遺物の実測は主として園村辰実と戸田紀美子が、五輪塔は山城敏昭が行い、陶磁器類の一部は有限会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。製図は戸田紀美子と瀬口絹代が行った。
- 6 本書の執筆は主として園村辰実がこれにあたり、一部を松本健郎（第Ⅰ章第1節1）、澤田宗順（第Ⅱ章）が担当した。また、万年寺遺跡の出土人骨については、分部哲秋（長崎大学医学部解剖学第2教室講師）、佐伯和信（同助手）の両先生に実測及び取り上げをお願いした。
- 7 本書の編集は、熊本県教育文化課で行い、園村が担当した。

凡　　例

1. 現地での実測図の縮尺は、遺構配置図は200分の1で、遺構は土坑・土壙墓は10分の1、その他は20分の1、弥生時代の遺構等は2分の1、5分の1で行った。本書に掲載した縮尺は土坑・土壙墓は30分の1、弥生時代の遺構は10分の1、その他は60分の1で統一した。
2. 遺構の方位はすべて磁北である。
3. 出土遺物の番号は、すべてを通して付した。なお縮尺は陶磁器類については2分の1、瓦は4分の1、窯道具は3分の1、瓦質土器の大型のものは4分の1、小型のものは3分の1で行った。
4. 弥生時代の出土遺物、11号土壙墓出土遺物以外は、すべて観察表に記載した。
5. 出土遺物はすべて熊本県文化財収蔵庫で保管している。

[本文目次]

口絵カラー

序文

例言

凡例

本文目次

挿図目次

表目次

図版目次

第Ⅰ章 調査の概要 1

 第1節 調査に至る経緯と経過 1

 1 調査に至る経緯 1

 2 調査の経過 2

 3 整理の経過 2

 4 調査の方法 3

 5 遺跡の基本土層 3

第Ⅱ章 遺跡の概要 7

 第1節 地理的環境 7

 第2節 歴史的環境 7

第Ⅲ章 調査の成果 11

 第1節 弥生時代の遺構と遺物 11

 1 遺構 11

 2 遺物 12

 第2節 中世から近世現代にいたる遺構と遺物 15

 1 土坑 15

 2 土壙墓 26

 3 掘立柱建物跡 29

 4 堀跡 105

 5 土壘 106

 6 五輪塔 106

 第3節 まとめ 124

 1 染付について 124

 2 朝妻焼について 124

 3 高田焼について 125

参考文献 127

図版

[挿 図 目 次]

第1図 地形図	4	第38図 2号堀出土遺物実測図(4)	62
第2図 万年寺遺跡遺構配置図	5	第39図 2号堀出土遺物実測図(5)	63
第3図 周辺遺跡分布図	9	第40図 2号堀出土遺物実測図(6)	64
第4図 弥生土墳実測図	13	第41図 2号堀出土遺物実測図(7)	65
第5図 弥生土器実測図	14	第42図 2号堀出土遺物実測図(8)	66
第6図 土坑実測図(1)	20	第43図 2号堀出土遺物実測図(9)	67
第7図 土坑実測図(2)	21	第44図 2号堀出土遺物実測図(10)	68
第8図 土坑実測図(3)	22	第45図 2号堀出土遺物実測図(11)	69
第9図 土坑実測図(4)	23	第46図 2号堀出土遺物実測図(12)	70
第10図 土坑実測図(5)	24	第47図 2号堀出土遺物実測図(13)	71
第11図 土坑実測図(6)	25	第48図 2号堀出土遺物実測図(14)	72
第12図 土坑実測図(7)	26	第49図 2号堀出土遺物実測図(15)	73
第13図 土墳実測図(1)	31	第50図 2号堀出土遺物実測図(16)	74
第14図 土墳実測図(2)	32	第51図 2号堀出土遺物実測図(17)	75
第15図 土墳実測図(3)	33	第52図 2号堀出土遺物実測図(18)	76
第16図 土墳実測図(4)	34	第53図 2号堀出土遺物実測図(19)	77
第17図 掘立柱建物跡実測図	35	第54図 2号堀出土遺物実測図(20)	78
第18図 1号堀実測図	36	第55図 2号堀出土遺物実測図(21)	79
第19図 2号堀実測図	37	第56図 2号堀出土遺物実測図(22)	80
第20図 1号堀出土遺物実測図(1)	38	第57図 2号堀出土遺物実測図(23)	81
第21図 1号堀出土遺物実測図(2)	39	第58図 2号堀出土遺物実測図(24)	82
第22図 1号堀出土遺物実測図(3)	40	第59図 2号堀出土遺物実測図(25)	83
第23図 1号堀出土遺物実測図(4)	41	第60図 2号堀出土遺物実測図(26)	84
第24図 1号堀出土遺物実測図(5)	42	第61図 2号堀出土遺物実測図(27)	85
第25図 1号堀出土遺物実測図(6)	43	第62図 2号堀出土遺物実測図(28)	86
第26図 1号堀出土遺物実測図(7)	44	第63図 2号堀出土遺物実測図(29)	87
第27図 1号堀出土遺物実測図(8)	45	第64図 2号堀出土遺物実測図(30)	88
第28図 1号堀出土遺物実測図(9)	46	第65図 2号堀出土遺物実測図(31)	89
第29図 1号堀出土遺物実測図(10)	47	第66図 土壙断面実測図	106
第30図 1号堀出土遺物実測図(11)	48	第67図 五輪塔実測図(1)	107
第31図 1号堀出土遺物実測図(12)	49	第68図 五輪塔実測図(2)	108
第32図 1号堀出土遺物実測図(13)	50	第69図 五輪塔実測図(3)	109
第33図 1号堀出土遺物実測図(14)	51	第70図 五輪塔実測図(4)	110
第34図 1号堀出土遺物実測図(15)	52	第71図 五輪塔実測図(5)	111
第35図 2号堀出土遺物実測図(1)	59	第72図 五輪塔実測図(6)	112
第36図 2号堀出土遺物実測図(2)	60	第73図 五輪塔実測図(7)	113
第37図 2号堀出土遺物実測図(3)	61	第74図 五輪塔実測図(8)	114

第75図 一括遺物実測図（1）	119	第77図 一括遺物実測図（3）	121
第76図 一括遺物実測図（2）	120		

[表 目 次]

第1表 周辺遺跡地名表	10	第16表 2号堀出土遺物観察表（9）	98
第2表 1号堀出土遺物観察表（1）	53	第17表 2号堀出土遺物観察表（10）	99
第3表 1号堀出土遺物観察表（2）	54	第18表 2号堀出土遺物観察表（11）	100
第4表 1号堀出土遺物観察表（3）	55	第19表 2号堀出土遺物観察表（12）	101
第5表 1号堀出土遺物観察表（4）	56	第20表 2号堀出土遺物観察表（13）	102
第6表 1号堀出土遺物観察表（5）	57	第21表 2号堀出土遺物観察表（14）	103
第7表 1号堀出土遺物観察表（6）	58	第22表 2号堀出土遺物観察表（15）	104
第8表 2号堀出土遺物観察表（1）	90	第23表 2号堀出土遺物観察表（16）	105
第9表 2号堀出土遺物観察表（2）	91	第24表 五輪塔観察表（1）	115
第10表 2号堀出土遺物観察表（3）	92	第25表 五輪塔観察表（2）	116
第11表 2号堀出土遺物観察表（4）	93	第26表 五輪塔観察表（3）	117
第12表 2号堀出土遺物観察表（5）	94	第27表 五輪塔観察表（4）	118
第13表 2号堀出土遺物観察表（6）	95	第28表 一括遺物観察表（1）	122
第14表 2号堀出土遺物観察表（7）	96	第29表 一括遺物観察表（2）	123
第15表 2号堀出土遺物観察表（8）	97		

[図 版 目 次]

図版1 (上. 遺跡近景 東より, 中. 1号弥生土壙, 下. 3号弥生土壙)	図版15 (上. 38号土坑, 中. 39号土坑, 下. 1号土 壙墓)
図版2 (上. 4号弥生土壙, 中. 5号弥生土壙, 下 . 1号土坑確認状況)	図版16 (上. 2号土壙墓, 中. 3号土壙墓, 下. 4 号土壙墓)
図版3 (上. 1号土坑完掘, 中. 2号土坑, 下. 3 号土坑)	図版17 (上. 5号土壙墓, 中. 6号土壙墓, 下. 7 号土壙墓)
図版4 (上. 4号土坑, 中. 5号土坑, 下. 6号土坑)	図版18 (上. 8号土壙墓, 中. 9号土壙墓, 下. 10 号土壙墓)
図版5 (上. 7号土坑, 中. 8号土坑, 下. 9号土坑)	図版19 (上. 11号土壙墓, 中. 12号土壙墓, 下. 13 号土壙墓)
図版6 (上. 10号土坑, 中. 11号土坑, 下. 13号土坑)	図版20 (上. 14号土壙墓, 中. 15号土壙墓, 下. 16 号土壙墓)
図版7 (上. 14号土坑, 中. 15号土坑, 下. 16号土坑)	図版21 (上. 17号土壙墓, 中. 18号土壙墓, 下. 20 号土壙墓)
図版8 (上. 17号土坑, 中. 18号土坑, 下. 19号土坑)	図版22 (上. 21号土壙墓, 中. 22号土壙墓, 下. 23 号土壙墓)
図版9 (上. 20号土坑, 中. 21号土坑, 下. 22号土坑)	図版23 (上. 1号堀跡, 中. 2号堀跡北西断面,
図版10 (上. 23号土坑, 中. 24号土坑, 下. 25号土坑)	
図版11 (上. 26号土坑, 中. 27号土坑, 下. 28号土坑)	
図版12 (上. 29号土坑, 中. 30号土坑, 下. 31号土坑)	
図版13 (上. 32号土坑, 中. 33号土坑, 下. 34号土坑)	
図版14 (上. 35号土坑, 中. 36号土坑, 下. 37号土坑)	

下. 2号堀跡中央断面)

- 図版24 (上. 2号堀跡及び土壙断面, 中. 発掘調査
風景, 下. 人骨実測風景)
- 図版25 万年寺遺跡出土遺物 No. 1 ~ No. 13
- 図版26 万年寺遺跡出土遺物 No. 14 ~ No. 34
- 図版27 万年寺遺跡出土遺物 No. 35 ~ No. 44
- 図版28 万年寺遺跡出土遺物 No. 45 ~ No. 61
- 図版29 万年寺遺跡出土遺物 No. 62 ~ No. 75
- 図版30 万年寺遺跡出土遺物 No. 76 ~ No. 81
- 図版31 万年寺遺跡出土遺物 No. 82 ~ No. 84
- 図版32 万年寺遺跡出土遺物 No. 85 ~ No. .
- 図版33 万年寺遺跡出土遺物 No. 91 ~ No. 108
- 図版34 万年寺遺跡出土遺物 No. 109 ~ No. 117
- 図版35 万年寺遺跡出土遺物 No. 118 ~ No. 137
- 図版36 万年寺遺跡出土遺物 No. 138 ~ No. 152
- 図版37 万年寺遺跡出土遺物 No. 153 ~ No. 162
- 図版38 万年寺遺跡出土遺物 No. 163 ~ No. 176
- 図版39 万年寺遺跡出土遺物 No. 177 ~ No. 192
- 図版40 万年寺遺跡出土遺物 No. 194 ~ No. 200

- 図版41 万年寺遺跡出土遺物 No. 201 ~ No. 209
- 図版42 万年寺遺跡出土遺物 No. 210 ~ No. 215
- 図版43 万年寺遺跡出土遺物 No. 216 ~ No. 230
- 図版44 万年寺遺跡出土遺物 No. 231 ~ No. 247
- 図版45 万年寺遺跡出土遺物 No. 248 ~ No. 262
- 図版46 万年寺遺跡出土遺物 No. 263 ~ No. 276
- 図版47 万年寺遺跡出土遺物 No. 277 ~ No. 288
- 図版48 万年寺遺跡出土遺物 No. 289 ~ No. 300
- 図版49 万年寺遺跡出土遺物 No. 301 ~ No. 309
- 図版50 万年寺遺跡出土遺物 No. 310 ~ No. 321
- 図版51 万年寺遺跡出土遺物 No. 322 ~ No. 356
- 図版52 万年寺遺跡出土遺物 No. 357 ~ No. 368
- 図版53 万年寺遺跡出土遺物 No. 369 ~ No. 380
- 図版54 万年寺遺跡出土遺物 No. 381 ~ No. 391
- 図版55 万年寺遺跡出土遺物 No. 392 ~ No. 401
- 図版56 万年寺遺跡出土遺物 No. 402 ~ No. 412
- 図版57 万年寺遺跡出土遺物 No. 413 ~ No. 424
- 図版58 万年寺遺跡出土遺物 No. 425 ~ No. 443
- 図版59 万年寺遺跡出土遺物 No. 444 ~ No. 455

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯と経過

1 調査に至る経緯

一般国道3号線は、北九州を起点に、福岡市、熊本市、八代市、水俣市を経て鹿児島市に至る、総延長443.8kmの幹線道路で、九州を縦断する動脈として重要な役割を果している。

しかし、八代以南の区間は、その地域にとって唯一の幹線道路にもかかわらず、道路の整備が遅れ、交通渋滞等が慢性化し、南九州の発展にとって大きな障害の一つとなっていた。

昭和62年の「第四次全国総合開発計画」において、多極分散型の国土形成に向けた高規格幹線道路網の整備が提案された。その一環として計画されたのが、南九州西回り自動車道である。

南九州西回り自動車道は、八代市と鹿児島市の間、約140kmにおよぶが、熊本県内では先ず八代・日奈久間約12.88kmが施工されることになった。事業の所管は、建設省九州地方建設局八代工事事務所である。

平成2年4月17日、八代工事事務所長から、県教育長あてに、八代・日奈久間の埋蔵文化財について協議を受けた。

これを受けて、平成2年5月22日・23日、八代工事事務所調査第2課、県土木部道路建設課、八代市教育委員会文化課の立会いのもとに、県文化課の桑原憲彰（文化財調査第2係長）、前川清一（文化財保護主事）が、遺跡の分布調査を行った。

その結果、薬師堂、木下窯跡、松岡屋敷跡、万年寺跡、平山古墳、平山城跡、平山遺跡、窯跡の8カ所について確認調査を実施し、路線内での遺跡の有無、内容等を確認する必要があるとの回答文書を平成2年8月28日付けで発送した。

その後、用地の購入状況等にあわせ、平成4年2月20日付で八代工事事務所長から県教育長へ、八代市奈良木町から平山新町間の木下窯跡、松岡屋敷跡、平山遺跡、窯跡についての確認（試掘）調査依頼があった。

この依頼を受けて、平成4年5月20日から6月3日まで、確認（試掘）調査を行った。確認（試掘）調査は、村崎孝宏（文化財保護主事）が担当した。

確認調査の結果、平山遺跡と窯跡とは一連のものであることとその調査範囲、木下窯跡と松岡屋敷跡については調査の必要な範囲やそれぞれの遺跡の概要等について、平成4年6月15日付で八代工事事務所長あてに通知した。

その後、八代工事事務所と県文化課、八代市教育委員会文化課で発掘調査の実施について協議を重ね、調査面積が広い松岡屋敷跡、平山遺跡（窯跡を含む）、万年寺遺跡は県教育委員会が、他の木下窯跡、平山古墳、平山城跡は八代市教育委員会が調査を担当することとなった。

また、用地取得状況や工事工程等から、平成7年度は県が万年寺遺跡の発掘調査を、八代市が薬師堂・木下窯跡の整理報告書の作成を行うこととなった。

平成6年11月から、調査費の積算や調査工程の作成等の事務処理と建設省との協議を重ね、平成7年4月3日付で建設省九州地方建設局八代工事事務所長（横溝敏治）と熊本県知事（福島譲二）との間に「発掘調査委託契約書」を、平成8年4月1日付で建設省九州地方建設局八代工事事務所長（柳木 威）と熊本県知事（福島譲二）との間に「整理作業委託契約」を締結した。

2 調査の経過

本調査に先立って、平成2年5月22・23日に実施された分布調査の結果、万年寺遺跡には中世から近世にかけての五輪塔や六地蔵と思われる板碑が存在しており、遺跡の存在が確認された。この結果をうけて、工事予定区域内の遺跡の範囲を確定し、平成7年4月から本調査を実施した。

文化課では下記のような体制で、万年寺遺跡の調査を平成7年4月から平成8年3月まで実施した。調査区内には未買収地が2ヶ所含まれていたので、そこを除く地域から調査を開始し、未買収地は用地取得がすみ次第調査にとりかかることを建設省八代工事事務所と確認し、園村辰実が現地調査を担当した。また、調査には多くの方が参加され、貴重なご助言をいただいた。御芳名を記し、感謝の意を表したい。

調査主体	熊本県教育委員会						
調査責任者	桑山 裕好（文化課長）						
調査総括	丸山 秀人（文化課課長補佐）						
	松本 健郎（主幹，						
調査担当	園村 千実（文化財保護主事）						
	三好 伴典（文化課調査嘱託）						
	桑原 憲彰（装飾古墳館副館長，						
	前川 清一（文化課参事，						
調査事務局	白井 哲哉（教育審議員，						
	藤本 和夫（文化課総務係，						
	高浜 保子（文化課総務係，						
専門調査員	分部 哲秋（長崎大学医学部解剖学第二教室講師）						
	佐伯 和信（長崎大学医学部解剖学第二教室助手）						
調査指導助言	松山 丈三（八代市文化課課長）						
	吉永 明（八代市文化課主任）						
	澤田 宗						
	浜田 健資（八代市文化課主事）						
調査作業員							
山本 義明	上角 末人	稻葉 貴子	山本きみよ	稻葉こずえ	宮崎 りえ	山本優香里	
山本 陽子	高野久美子	上野アヤコ	松嶋 正信	白木 昌代	宮本真理代	坂井あけみ	
引地ミツル	上野アヤ子	吉田かつみ	松富美代子	力 スミエ	古閑 征一	岩田 政秀	
高瀬タダ子	田村 譲	白浜 富子	吉見 恭助	本田 貴博	吉川 節子	田村 修	
菅原 貴明	吉永 知司	宮崎布美子					

3 整理の経過

本調査は平成8年3月に終了し、万年寺遺跡から出土した遺物を熊本県文化課文化財収蔵庫に搬入した。平成8年4月から文化財収蔵庫において、万年寺遺跡の整理班を組織し、出土遺物の水洗、注記、接合等の作業をすすめた。同時に整理臨時職員とともに、遺物の実測作業、製図作業等を行った。

平成9年3月には報告書の刊行にこぎつけた。整理について以下の方々の御協力や御助言をいただいた。

以下御芳名を記して感謝の意を表したい。

報告書作製責任者 桑山 裕好（文化課長）

総括 丸山 秀人（教育審議員 文化課課長補佐）

松本 健郎（主幹，

報告書担当 園村 辰実（文化財保護主事）

戸田紀美子（文化課整理臨時職員）

瀬口 絹代（文化課整理臨時職員）

調査事務局 渕上 重喜（教育審議員 文化課課長補佐）

江尻 靖子（文化課総務係長）

高宮 優美（文化課総務係，

岸本 誠司（文化課総務係主事）

調査指導助言 和田 好史（人吉市教育委員会文化課）

美濃口雅朗（熊市教育委員会文化課）

整理作業員

渕上 慶子 上村 孝子 尾方マサミ 益田 久子 白井美恵子 川崎 節子

橋本由美子 境 美恵子 池辺 雅子

4 調査の方法

調査区は寺院跡ということで、かなり以前より墓地として使用されており、土葬墓をはじめ、十数基の納骨堂が建てられていた。路線決定後、納骨堂や土葬墓の路線外への移転のため、重機等での掘り返しが行われ、いたるところで地面の掘り返しやコンクリートの埋め込みがなされていた。さらに、粗大ゴミ等の不法廃棄がおこなわれ、整地のさいの埋め込みも同時に行われるという状況で、調査地内はかなり荒らされた状態であった。

本調査は平成7年4月から平成8年3月まで実施したが、上記のとおりであるため攪乱部分は調査が不可能と判断し、除外を余儀なくされた。

本調査では、最初に重機で表土を取り除いたが、山からの崩落土が厚く堆積しており、地山の土との判別が難しく、遺構の検出にかなりの時間を要した。。グリッドの設定は、北を主軸に10mのメッシュを組み、路線区の設計杭と重ね合わせた。遺構の実測は主軸にそって任意にポイントを設定し、10分の1で、大型のものは20分の1で実測を実施し、遺構番号は任意に設定した。

5 遺跡の基本土層

万年寺遺跡の基本的な土層は次のとおりである。

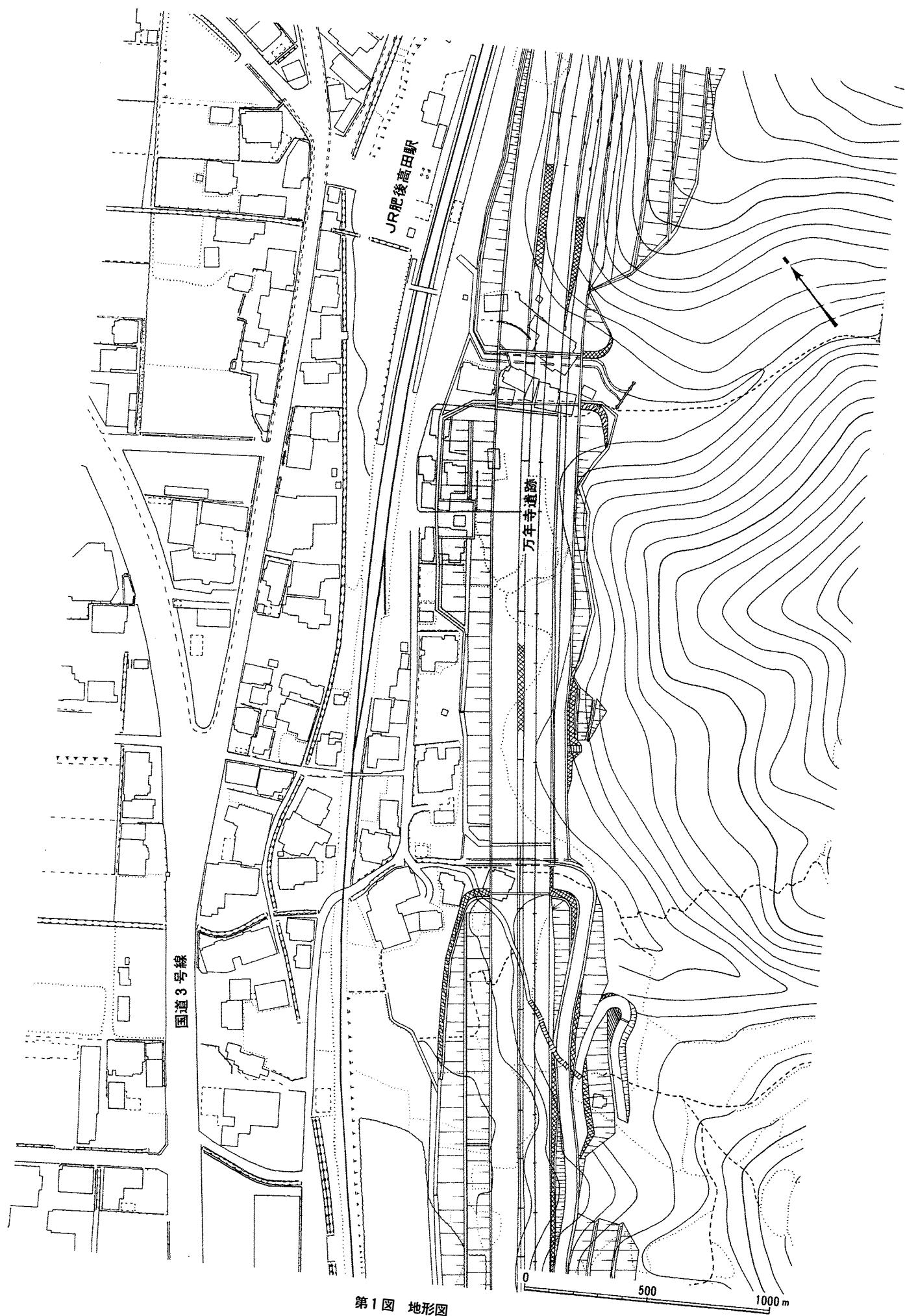
I層 表土（耕作土）

II層 暗褐色土 （土壌墓はこの層から彫り込みを確認する）

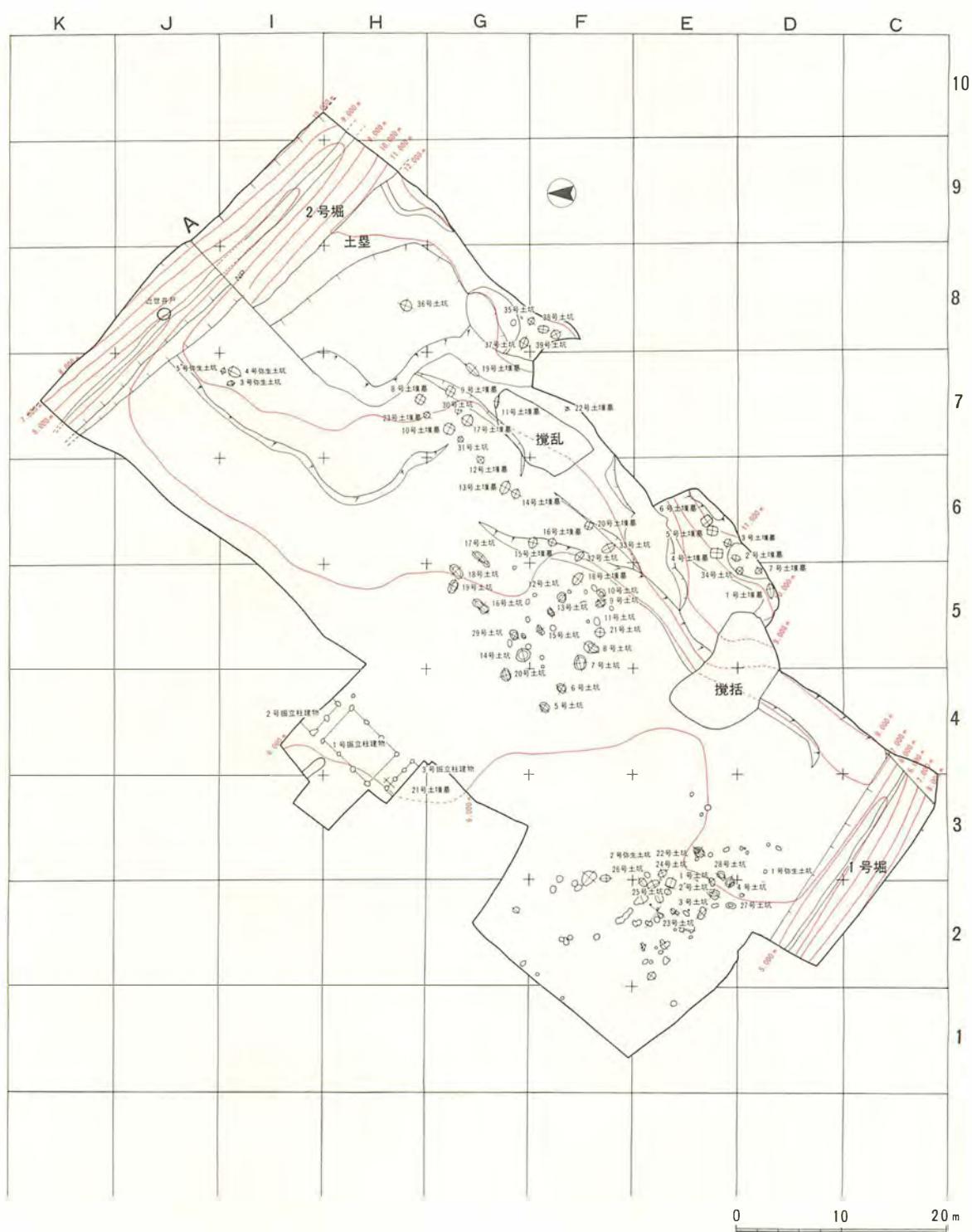
III層 淡黄褐色土

IV層 暗褐色砂礫層

V層 淡黄色砂礫層 （弥生の遺構遺物はこの層に位置する）



第1図 地形図



第2図 万年寺遺跡遺構配置図

第Ⅱ章 遺跡の概要

第1節 地理的環境

遺跡は八代平野の南部、球磨川下流域の左岸（南側）にあり、球磨川から南に約2,500mほどに位置しており、日奈久断層崖を構成する山麓からごくわずかな距離にある。

八代平野は、熊本県の南部、八代海（不知火海）の東岸に形成された南北25kmにわたる沖積平野で、平野西側の大半は近世以降に拓かれた干拓によって形成されている。平野東部は九州山地（球磨山地）の西縁部にあたり、北北東—南南西に日奈久断層と呼ばれる大断層崖が走り、300～500m内外の高さから30度ほどの傾斜を持って落ちる顯著な断層崖である。八代平野はこれら山間から大小多くの河川によって運び出された堆積物により形成された扇状地や、日本三急流の一つである球磨川をはじめ、日置川（水無川）、氷川、砂川などから大量の土砂を運び出し自然に陸化した複合三角州によって形成された沖積平野である。また、八代平野はいたるところ地下水が豊富で、遺跡から約1,300mほど北側にある湧水地からは流藻川となり平野を西流している。八代海は潮の干満の差が大きく広大な干潟ができるため、近世以降は数多くの干拓事業が進められ、現在の八代平野が形成されている。

第2節 歴史的環境

(1)縄文時代

八代平野では縄文時代の遺跡は少なく、川田小筑遺跡や鐘楼堂遺跡から縄文晚期の土器が、球磨川の左岸（南側）では五反田遺跡や田川内貝塚から縄文中期から後期の土器が出土している。また、産島貝塚や高島遺跡といった孤島の上でも土器や石器が検出されているが、これらはいずれも限られた面積で広範な集落遺跡を形成するに至っていない。

(2)弥生時代

弥生時代になると八代平野においてもかなりの遺跡が知られるようになり、球磨川右岸の龍峯山山麓から日置川流域にかけての一帯に分布密度が濃くなっている。西片町遺跡や沖片町遺跡・白石貝塚などがあり、弥生中期ごろからかなりの規模の集落が形成されるようになったと考えられている。球磨川以南の平野部では、近年、下堀切遺跡の調査が行われ、弥生後期の集落をめぐる溝が発見された。この遺跡は、球磨川左岸に形成された沖積平野の末端近くに位置していて、土器、石器のほか、鉄斧の柄などまとまったかたちの木製品が出土している。そのため球磨川左岸の沖積平野も弥生時代にはかなり利用できたと考えられる。

(3)古墳時代

古墳時代になると八代平野部には多くの古墳群が形成される。一つは車塚古墳、岡塚2号墳という前方後円墳を中心とした川田町の古墳群で、もう一つは八代大塚古墳、茶臼山古墳、高取上の山古墳といった前方後円墳群を中心とした上片町から東片町に分布する古墳群である。いずれも球磨川右岸の平野部に形成されている。また、この地域には大きな自然石を組み合わせて横穴式石室を造った「鬼の岩屋」と呼ばれる古墳時代後期の古墳を多くみることができる。球磨川左岸の平野部では横穴式石室の石障や箱式石棺の内側に円文などを刻んだ装飾古墳が多くみられ、球磨川河口にある鼠藏古墳群、平野南端部の五反田・田川内古墳などがその代表である。八代平野には干拓以前は八代海に浮かぶ小島であった所が多く、産島・大島・高島・小鼠藏島・大鼠藏島でも古墳が確認されている。特に大鼠藏山古墳群の楠木山古墳は前期様式の竪穴式石室

を持ち、築造年代は4世紀と考えられ、八代平野南部では最も古い古墳である。

(4)歴史時代

古代の八代郡には、「和名類聚抄」によれば「木行・高田・小河・肥伊・豊福」の5郷が置かれていた。この時代には、郡寺として考えられる興善寺廃寺跡をはじめ能寺跡、護神寺跡、上宮跡などから古瓦が出土し、興善寺廃寺跡・護神寺跡からは塔心礎が発見されている。また、三官火葬墓跡、田平山火葬墓跡からは藏骨器、洗切遺跡からは奈良三彩をはじめ墨書き土器のある須恵器、ヘラ描き文字のある土師器などが出土している。沖片遺跡、池尻遺跡からは須恵器の円面鏡、御内遺跡からは瑞花双鳳八稜鏡も発見されている。

八代庄の成立については不明であるが、八代庄が平家没官領であり、一条能保室（源頼朝の実妹）の遺領の一つとして八代庄の名がみえることから、鎌倉時代成立期には平氏から一条家に伝領されたもので、その後は、北条氏の得宗領か有力一門の領地であったと考えられている。

南北朝時代に入ると、建武元年（1334）に名和義高が八代庄の地頭に任じられ、翌2年には代官として内河義真が下向し、古麓城（＝八代城）を根拠に菊池氏・阿蘇氏と連携し、南朝方の重要な拠点として活躍している。当時の古麓城は八嶽城・鞍掛城・丸山城・勝尾城・飯盛城によって構成されていたと考えられる。名和八代庄麓城を背景に八代庄の経営と、また球磨川の徳渕に港を開き対明貿易を行っていたようである。

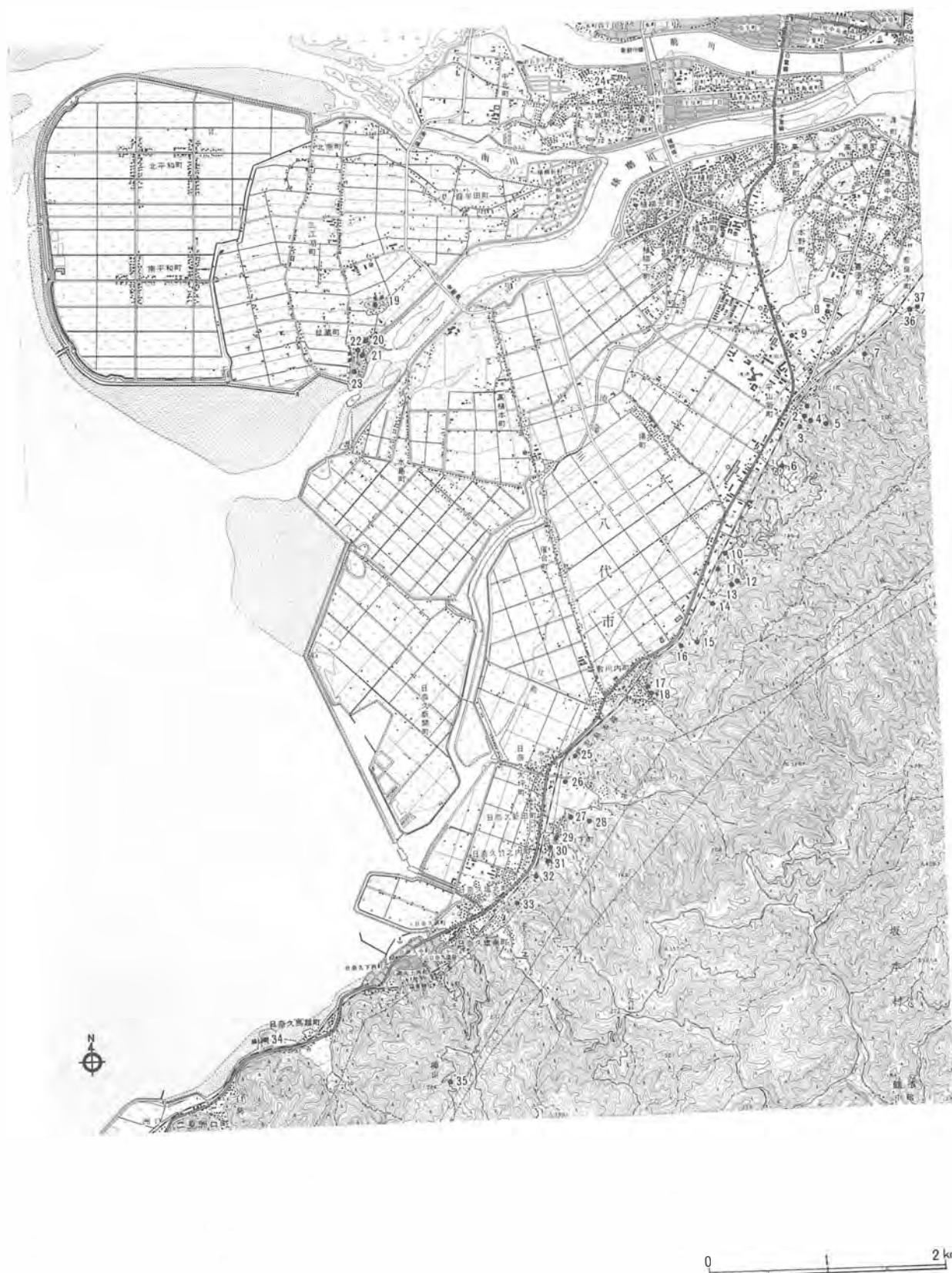
名和氏は文明16年（1448）相良為統に攻められ、本拠八代城を明け渡し、その後は為統が明応8年（1499）まで八代地域を支配した。その間に八代・豊福の知行権を安堵され、球磨・芦北を含む3郡と豊福を所領地域としている。しかし為統は明応8年菊池能運の攻撃にあい、やむなく八代城を放棄し人吉に引き上げ、名和頸忠が城主の地位に復活した。相良長毎は文亀元年（1501）から八代城の攻撃を開始し、また八代城攻略のため「高田古城」（＝平山城）を修築して拠城とし、永正元年（1504）2月名和氏を宇土に追放することで、再び八代を支配することとなった。相良氏はその後新城や鷹峯城を構築し、古麓城の整備をおこなっており、古麓城は戦国期の城郭としては最も完備された構造をもっていたのではないかと考えられている。そのため、天正9年（1581）以降相良氏に替って八代を領地した島津氏もそのまま継続して使用することになった。

天正15年、豊臣秀吉は島津征服のため肥後路を南下し、八代を拠点とし、軍を参集させている。当時の八代の様子を「九州御動座記」のなかで、隈本城以上の「無隠名城」と称し、八つの城を併え、兵数千人入れ置くことができる城であり、城より一里の所に「舟付」を有していたことが明記されている。舟付きは徳渕の津と考えられる。当時古麓城はその領内と城下町に支えられるとともに、外国貿易のできる「舟付」徳渕の津をもつ肥後では最大の城下町であったと考えられる。

天正15年、肥後は佐々成政に与えられたが、翌16年国衆一揆によって成政は失脚し、肥後半国領主として小西行長が領した。古麓城には小西美作行重を城代として入城させたが、行長は古麓城を使用せず、新たに徳渕入江と球磨川に囲まれた麦島に新しい城郭（＝麦島城）を築き、古麓城は廃城となった。

慶長5年（1600）の関が原の役で、小西氏が滅亡し、代って加藤清正が領主となり、麦島城には城代を置いている。元和元年（1615）一国一城令が出されたが、麦島城は熊本城とともに肥後でただ2城残ることになった。その後、元和5年3月の大地震で麦島城が悉く破壊されたために麦島城を廃城とし、加藤忠広は幕府の許可を得、加藤右馬允正方に命じて新たに松江・徳渕二村の海辺に築城させた。元和8年2月に松江城（八代城）は竣工した。加藤正方は城代として城下町の経営に努め、旧八代町の基礎をつくった。

寛永9年（1632）加藤忠広が改易された後は、かわって細川忠利が任命され、八代城には忠利の父三斎が隠居城として入城している。正保2年（1645）八代城内で三斎が没したあとは、藩主光尚が幕府に願って藩の筆頭家老松井興長を城代として八代城を守衛させた。以後は代々松井氏が明治3年（1870）の廃城まで八代城を守衛することになる。



第3図 周辺遺跡分布図

第1表 周辺遺跡一覧

番号	遺 跡 名	時 代	備 考
1	万年寺遺跡	弥生 中世～現代	屋敷跡 寺院跡
2	松岡屋敷跡	中世～現代	屋敷跡
3	平山瓦窯跡	中世～近世	中世～近世にかけての瓦窯跡
4	平山古墳	古墳	小円墳横穴石室
5	平山城跡	中世	
6	平山窯跡	近世	高田焼窯 県指定
7	木下し窯跡	中世～近世	高田焼窯 鍛冶炉
8	下掘切遺跡A	弥生	散布地
9	下堀切遺跡B	弥生	散布地
10	丸山古墳	古墳	横穴式石室
11	丸山古墳群	古墳	
12	丸山製鉄所跡		
13	丸山窯跡	古代	須恵器 土師器
14	吉平瓦窯跡		
15	三宮火葬墓跡	中世	藏骨器出土
16	三宮屋敷跡	中世	
17	五反田古墳	古墳	小口積み石室
18	五反田貝塚		縄文土器 土師器 石鏸
19	小鼠藏山古墳群	古墳	箱式石棺
20	大鼠藏山古墳群	古墳	箱式石棺 人骨 土器 剣 鉄鏸 貝輪 県指定
21	大鼠藏貝塚		須恵器 土師器
22	楠木山古墳	古墳	鉄劍身 鉄鏸
23	尾張宮古墳	古墳	円墳
24	麦島城跡		中世平城
25	塩釜山古墳群	古墳	鏡 勾玉 管玉 小玉 鉄器 人骨 刀剣 金具
26	長迫古墳	古墳	鉄刀 鉄鏸 土師器 陶製管玉
27	田の川内城跡		
28	田の川内関跡		
29	田の川内古墳群	古墳	
30	田の川内貝塚		磨製石斧 銛状石鏸 縄文土器
31	千代永城跡		
32	山の神貝塚		
33	竹の内古墳	古墳	
34	鳩山古墳	古墳	円筒埴輪片 須恵器
35	比丘尼ヶ城跡		
36	薬師堂跡	中世	中世寺院跡
37	うその谷窯跡	中世～近世	瓦窯（登り窯） 炭焼き窯

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 弥生時代の遺構と遺物

1 遺構

本遺跡は平成2年度の分布調査の際に寺院跡と確認され、万年寺跡の存在は明らかであったが、弥生時代の遺構及び遺物の出土はまったく予想されていなかった。寺院跡の立地条件等からみても、新たな発見に驚かされるとともに貴重な発見であることは間違いない。

遺構の出土は散在的に埋甕状の状態で確認され、当時の人々の生活の様子を示すものは何一つ確認できず住居跡や生産に用いられた道具等は皆無であった。埋納された甕は、万年寺遺跡から北に約500m離れた平坦地に位置する弥生時代の遺跡である下堀切遺跡で出土した甕に類似するため、下堀切遺跡と本遺跡との関係を明らかにする必要があるだろう。

また、後述するが本遺跡には堀及び土壙が確認されている。1号堀に付随する土壙は後世の削平等で存在しなかったが、1・2号弥生土壙はこの土壙があったと思われる位置に、3～5号弥生土壙は2号堀に付隨する土壙の下に存在していた。そのため弥生時代の土壙が削平を免れて現存していたと思われる。反面、他の遺構も削平によって消失したとも想像できる。

1号弥生土壙（第4図）

D-2区に位置し、土器の主軸はN-15°-Wである。埋納された際の掘込ラインは確認できず、地山と同質の土及び礫によって覆われた状態での出土であった。

出土遺物は弥生時代後期の甕で、ほぼ水平に倒した状態での出土で、上部は土圧の影響であろうか小破片の状態であった。

2号弥生土壙（第4図）

E-3区に位置し、ここでは2号弥生土壙と記したが、1号弥生土壙と同様埋納の際の掘込ラインは確認出来なかった。出土した状況から、また甕の脚部分のみであるということから、土壙への埋納ではなく、遺物のみの散布という可能性もあるということをここに記しておく。

3号弥生土壙（第4図）

I-7区に位置し、土壙の主軸はN-15°-Wである。掘込の平面プランは楕円形に近い隅丸長方形で、長軸62cm、短軸52.4cm、深さ約8cmを測る。

出土遺物は、弥生時代後期の甕で、水平よりやや上向きの状態で埋納されていた。土器の上部はやや破壊されているが、ほぼ完形の状態で、土壙の主軸とほぼ直角に埋納されていた。

4号弥生土壙（第4図）

I-7区に位置し、3号弥生土壙の東隣で確認された。土壙の主軸はN-30°-Eである。掘込の平面プランは不整形で2個のピットを有し、長軸111cm、短軸70cm、深さ約20cmを測る。2個のピットは焼土や炭化物でうめられ、土壙の埋土も焼土や炭化物混じりの茶褐色土であった。

出土遺物は、弥生時代後期の完形の甕で、水平より約30°起き上がった状態で、土壙の主軸とほぼ直角に埋納されていた。

5号弥生土壙（第4図）

I - 7 区に位置し、4号弥生土壙の北東隣、J - 7 区との境界近くで確認された。土壙の主軸は E - 30° - N である。掘込の平面プランは円形に近い橢円形で、長軸58.8cm、短軸48.8cm、深さ9.2~20cmを測り、土壙の埋土は焼土と炭化物を少量含む礫混じりの黄褐色土である。

出土遺物は、弥生時代後期の甕で、ほぼ直立した状態で確認された。胴部の上位は土圧のためか、小破片の状態で散乱しており、一部欠損していた。

2 遺 物

1号弥生土壙出土土器（第5図 1）

弥生時代後期の甕で、その法量は口径18.2cm、器高28.5cm、胴部最大径19.4cm、脚径8.0cm、脚高2.7cmを測る。脚は短くやや内湾し、胴部は中央よりやや上位に最大径をもち、口縁部はくの字を開く。胴部の内面及び外面は細かな刷毛目調整で、口縁及び口唇部は横なで、内面の底には指頭による押圧がみられる。胎土は砂粒を多く含み、色調はにぶい橙色、焼成はやや良である。

2号弥生土壙出土土器（第5図 2）

脚の部分のみの出土である。法量は脚径13.8cm、脚高は7.5cmその他は不明である。形態の特徴としては脚からみてかなりの大型の甕になるものと思われる。脚はほぼ直線的に長くのび、外面はタタキ、内面は剥離がひどく調整は不明である。胎土中には大粒の白色の砂粒を含み、色調は明赤褐色、焼成はやや良で、内面の底部には焦げ目と思われる黒変がみられる。

3号弥生土壙出土土器（第5図 3）

弥生時代後期の甕で、口縁部の約半分を欠損する。その法量は口径は復元値で16.0cm、器高17.8~18.1cm、胴部最大径13.4cm、脚径17.7cm、脚高2.7cmを測る。脚は短くほぼ直線的に開き、胴部は中央よりやや上位に最大径をもち、口縁部はやや外反しながら開く。胴部の外面は粗い刷毛目調整で、内面は表面の剥離がひどく調整は観察できない。口縁及び口唇部は横ナデ、脚の内外面もナデによる調整である。

胎土は白色の砂粒を多く含み粗い。色調は赤橙色で、焼成は不良、土圧による歪みがみられる。

4号弥生土壙出土土器（第5図 4）

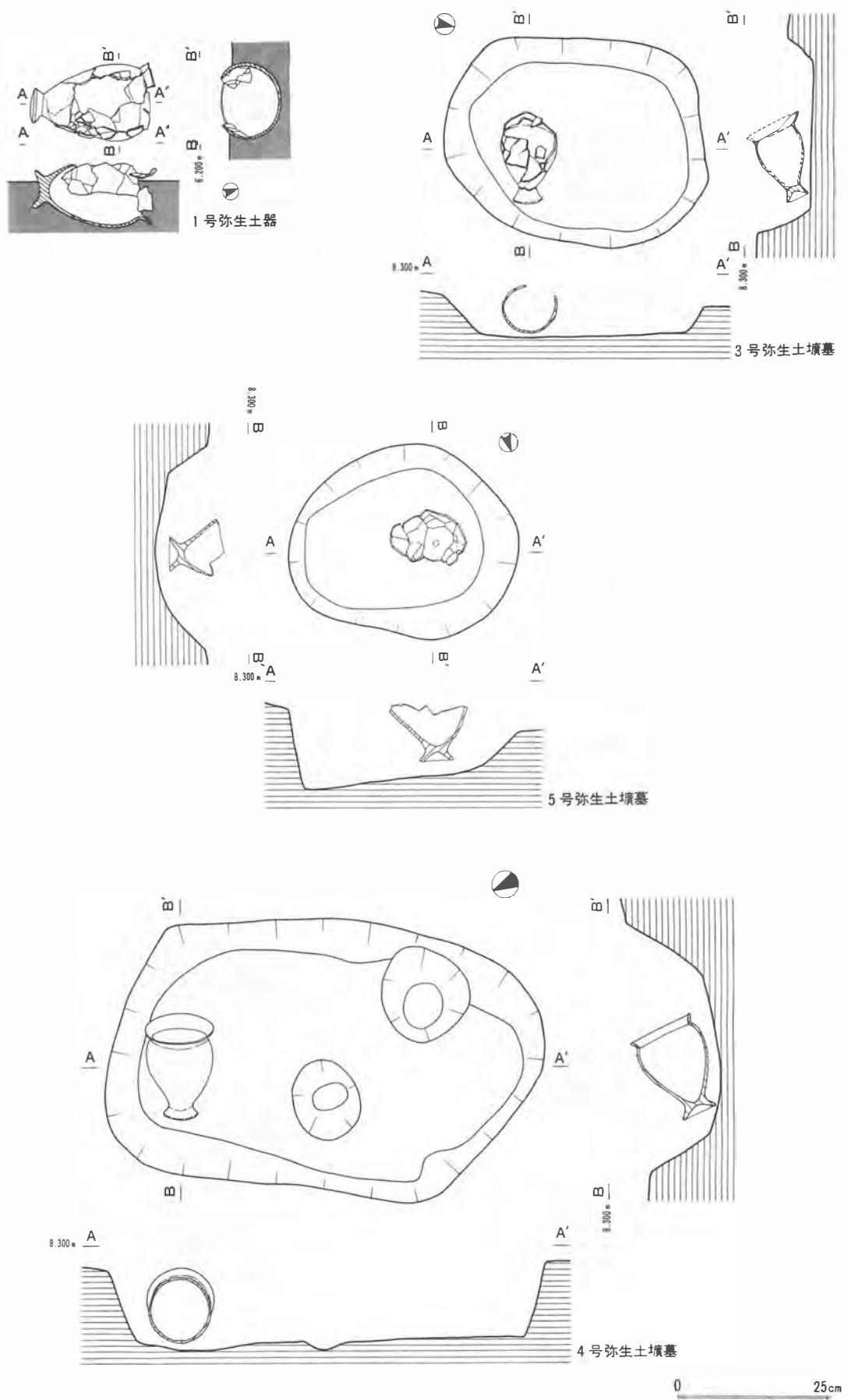
弥生時代後期の甕で、脚のほんの一部を欠損するもほぼ完形で出土した。その法量は口径17.4cm、器高23.7cm、胴部最大径16.8cm、脚径8.8cm、脚高2.7cmを測る。脚は短くやや外反しながら開き、胴部は中央よりやや上位に最大径をもち、口縁部もやや外反しながら開く。胴部の外面は細かい刷毛目調整で、内面はやや剥離がみられるものの、細かい丁寧な刷毛目調整を施す。口縁及び口唇部は横ナデ、脚もナデによる調整を施している。

胎土は白色の砂粒を多く含むが、非常に密で、色調はにぶい橙色で、口縁部の一部に黒変がみられ、焼成は良好で、非常にきれいなプロポーションである。

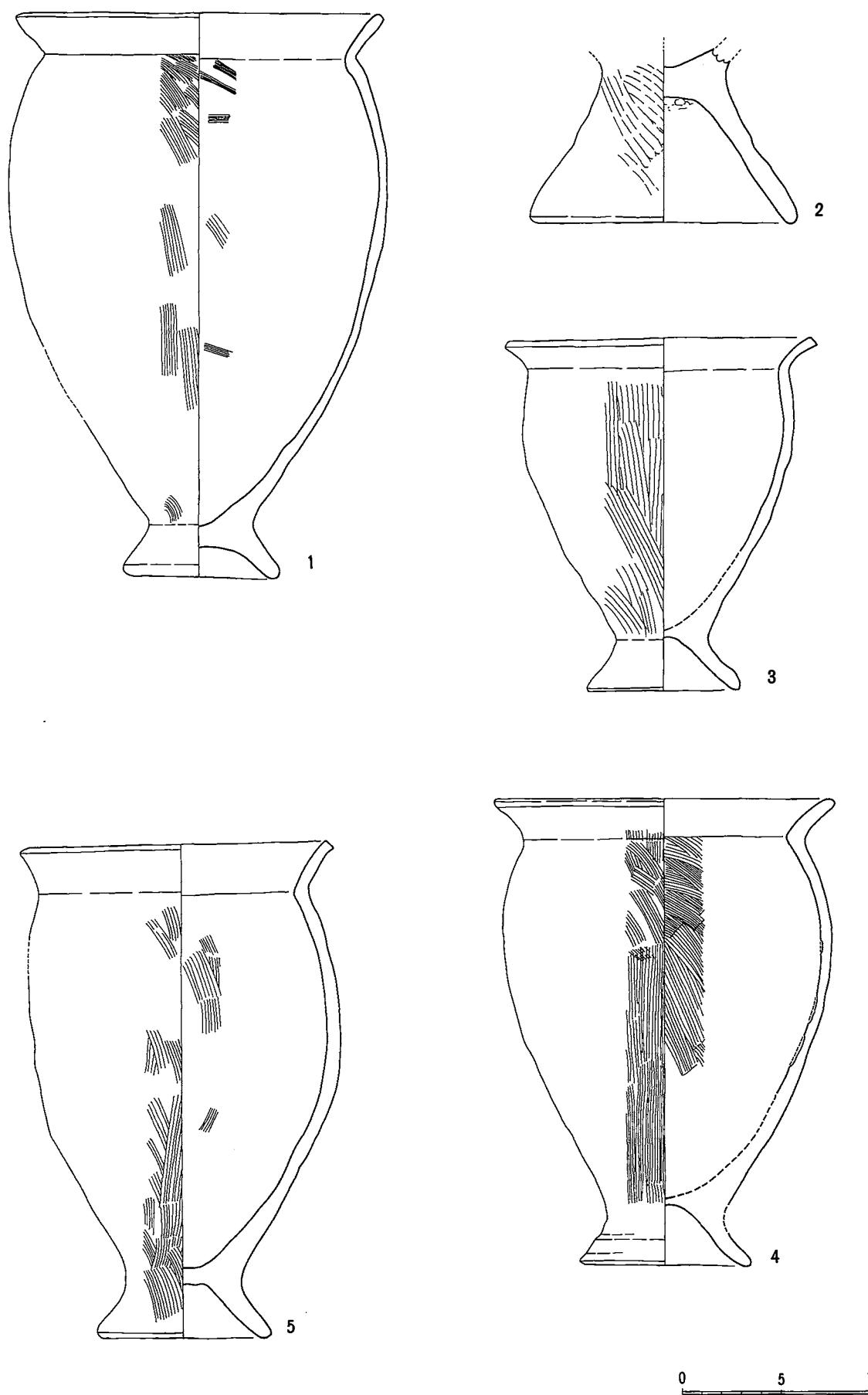
5号弥生土壙出土土器（第5図 5）

弥生時代後期の甕で、胴部から口縁部にかけての約3分の1が欠損している。その法量は口径17.4cm、器高25.0~25.3cm、胴部最大径15.9cm、脚径8.9cm、脚高2.7cmを測る。脚は短くわずかに外反しながら開き、胴部のほぼ中央に最大径をもち、口縁部もやや外反しながら開く。胴部の外面は細かい刷毛目調整で内面はやや剥離がみられるものの、細かな刷毛目調整を施す。口縁及び口唇部は横ナデ、脚の内面は刷毛目、内面はナデによる調整が施されている。

胎土は白色の砂粒を多く含むが密で、色調はにぶい橙色を呈する。焼成は良好であるが、土圧による歪みがみられる。



第4図 弥生土壤実測図



第5図 弥生土器実測図

第2節 中世から近世現代にいたる遺構と遺物

1 土 坑

1号土坑（第6図）

E-3区に位置し、主軸はE-40°-Nである。掘込の平面プランは不整形で、長軸70cm、短軸52.5cm、南端に深さ約40cmを測り、平面形態が円形のピットを有する。土坑には熱を受け赤変した礫が床面よりやや浮いた状態で詰められており、その埋土は焼土及び炭化物であった。

出土遺物は礫に混じり、青磁片が1点出土したが、図化にたえうるものではなかった。

2号土坑（第6図）

E-2区とE-3区をまたぐところに位置し、主軸はN-42°-Eである。上面観察では不整形を呈していたが、下方に2個のピット状の掘込が確認できた。長軸60.0cm、短軸約40.0cmを測る。土坑上には大型の礫があり、熱を受けて赤変しており、埋土は2層に分けられ、上層は焼土と炭化物の混合土、下層は焼土と炭化物を含む暗黄

出土遺物は糸切りの土師器（皿か壺かは不明）が数点出土したが、実測にたえうるものではなかった。

3号土坑（第7図）

E-2区に位置し、主軸はN-27°-Eである。掘込の平面プランは不整形で、基本的には土坑と3個のピットの集合である。規模は長軸119.0cm、短軸79.0cmを測る。土坑の埋土は黒褐色土である。

出土遺物は土師器の小片が数点出土したが、図化にたえうるものではなかった。

4号土坑（第7図）

E-2区とE-3区をまたぐ地点に位置し、主軸はE-18°-Sである。掘込の平面プランは不整形で2段に掘り込められている。規模は長軸100cm、短軸78cm、深さは浅部で約13cm、深部で約37cmを測る。埋土は暗褐色土で、焼土と炭化物を含む。

遺物の出土はなかった。

5号土坑（第7図）

F-4区に位置し、主軸はN-40°-Eである。掘込の平面プランは楕円形を呈し、長軸97cm、短軸72cm、深さは約40cmを測る。埋土は3層に分層でき、上層は礫を含まない黒褐色土、中層は礫を多量に含む暗褐色土、下層は礫を少量含む灰褐色土である。

遺物の出土はなかった。

6号土坑（第7図）

F-4区に位置し、主軸はN-33°-Eである。掘込の平面プランは台形状を呈し、南コーナー部分にさらの掘込をもち、長軸83cm、短軸68cm、深さは浅部で約11cm、深部で約21cmを測る。埋土は2層に分層でき、上層は礫を含まず焼土と炭化物が混ざる暗茶褐色土、下層は礫を含む暗灰色土である。

遺物の出土はなかった。

7号土坑（第7図）

F-4区とF-5区をまたぐ地点に位置し、主軸はE-14°-Nである。掘込の平面プランは不整形で東端にピットを有し、長軸117cm、短軸82cm、深さは浅部で約16cm、深部で約24cm、ピットの深さは約23cmを測る。埋土は2層に分層でき、上層は砂粒と小型の礫を含み、さらに焼土と炭化物が混ざる暗茶褐色土、下層は大型礫を含む暗黄褐色土である。

遺物は染付 1 点、土師器の小片が 2 点出土したが、実測にたえうるものはなかった。

8号土坑（第 7 図）

F - 5 区に位置し、主軸は N - 42° - E である。掘込の平面プランは不整形で、掘込上面に凝灰岩製の五輪の塔の残れと思われる石があった。主軸は N - 37° - E である。規模は長軸 107cm、短軸 93cm、深さは浅部で約 17cm、深部で約 25cm、ピットの深さは約 23cm を測る。埋土は 2 層に分層でき、上層は大型の礫と焼土及び炭化物を含む暗茶褐色土、下層は小型礫を多く含む暗褐色土である。

遺物の出土はなかった。

9号土坑（第 7 図）

F - 5 区に位置し、主軸は N - 34° - W である。掘込の平面プランは楕円形で、規模は長軸 87cm、短軸 66cm、深さは最深部で 40cm を測る。埋土は 3 層に分層でき、上層は焼土炭化物を多量に含み、礫をほとんど含まない赤褐色土、中層は焼土炭化物を小量含み礫を含まない黄褐色土、下層は小型の礫を多く含み礫を含まない黄褐色土である。

遺物の出土はなかった。

10号土坑（第 7 図）

F - 5 区に位置し、主軸は N - 42° - E である。掘込の平面プランは楕円形で、規模は長軸 77cm、短軸 65cm、深さは最深部で 31cm を測る。埋土は 2 層に分層でき、上層は炭化物を少量含む暗黄褐色土、下層は礫を含むしまりのない黄褐色土である。

遺物の出土はなかった。

11号土坑（第 8 図）

F - 5 区に位置し、主軸は N - 25° - E である。掘込の平面プランは不整形で、規模は長軸 86cm、短軸 77cm、深さは最深部で 45cm を測る。埋土は 2 層に分層でき、上層は黄色土のブロックを含む暗褐色土、下層は礫と黄色土のブロックを含む黒褐色土である。

遺物の出土はなかった。

12号土坑（第 8 図）

F - 5 区に位置し、主軸は N - 41° - E である。掘込の平面プランは楕円形に近い不整形で、規模は長軸 103cm、短軸 86cm、深さは最深部で 37cm を測る。埋土は焼土炭化物を少量含む茶褐色土である。

遺物の出土はなかった。

13号土坑（第 8 図）

F - 5 区に位置し、主軸は E - 28° - N である。掘込の平面プランは楕円形で、長軸 80cm、短軸 55cm、深さは最深部で 20cm を測る。埋土は焼土と炭化物を少量含む茶褐色土である。

遺物の出土はなかった。

14号土坑（第 8 図）

F - 5 区に位置し、主軸は N - 15° - W である。掘込の平面プランは不整形で、長軸 135cm、短軸 96cm、深さは最深部で 34cm を測る。褐色土、下層は礫を多く含み焼土と炭化物を含まない黄褐色土である。

出土遺物は、須恵器の小片が 2 点出土したが、実測にたえうるものではなかった。

15号土坑（第 8 図）

F - 5 区に位置し、主軸は E - 28° - N である。掘込の平面プランは小型の楕円形で、長軸 73cm、短軸 55cm、深さは最深部で 57cm を測る。埋土は礫混じりの暗褐色土である。

遺物の出土はなかった。

16号土坑（第8図）

G-5区に位置し、主軸はN-44°-Eである。掘込の平面プランは大型の長楕円形で、長軸156cm、短軸58cm、深さは最深部で45cmを測る。埋土は礫を多量に含む黒褐色土である。

出土遺物は、瓦器の小片が1点、土師器片が数点出土したが、実測にたえうるものではなかった。

17号土坑（第9図）

G-5区～6区に至る場所に位置し、主軸はN-37°-Eである。掘込の平面プランは大型の隅丸長方形で、両端にピット状の掘込をもつ。規模は、長軸171cm、短軸55cm、深さは最深部で60cmを測る。埋土は焼土と炭化物を含む暗褐色土であり、土坑とピットとの違いはなかった。

遺物の出土はなかった。

18号土坑（第9図）

G-5区の東際に位置し、主軸はN-46°-Eである。掘込の平面プランは楕円形で、長軸136cm、短軸90cm、深さは最深部で54cmを測る。埋土は礫を多く含む黒褐色土である。

出土遺物は、土師器片が数点出土したが、実測にたえうるものではなかった。

19号土坑（第9図）

G-5区に位置し、主軸はN-35°-Wである。掘込の平面プランは楕円形で、長軸105cm、短軸74cm、深さは最深部で52cmを測る。土坑の底には2個の大型の礫が落ち込んでいた。埋土は礫を多く含む暗褐色土である。

遺物の出土はなかった。

20号土坑（第9図）

G-4区～一部G-5区にかかる場所に位置し、主軸はE-20°-Nである。掘込の平面プランは円形に近い隅丸方形で、長軸89cm、短軸85cm、深さは最深部で25cmを測る。埋土は焼土と炭化物を含む茶褐色土である。

遺物の出土はなかった。

21号土坑（第9図）

F-5区に位置し、主軸はN-4°-Eである。掘込の平面プランは不整形で、長軸104cm、短軸71cm、深さは最深部で56cmを測る。埋土は2層に分かれ、上層は暗褐色土、下層は暗茶褐色土、さらに柱の痕跡と思われるものが存在し、その痕跡は炭化物であった。

遺物の出土はなかった。

22号土坑（第9図）

E-3区に位置し、主軸はN-38°-Eである。掘込の平面プランは楕円形に近い隅丸長方形で、両端にさらの掘込をもつ。規模は長軸110cm、短軸83cm、深さは最深部で39cmを測る。埋土は暗褐色土である。

遺物の出土はなかった。

23号土坑（第10図）

E-2区～E-3区にかけて位置し、主軸はW-15°-Nである。掘込の平面プランは長楕円形で、両端に掘込をもつ。規模は長軸167cm、短軸61cm、深さは最深部で38cmを測る。埋土は2層に分かれ、上層は暗褐色土、下層は黒褐色土である。

遺物は上層の暗褐色土中から平瓦片が1点出土したが、実測にたえうるものではなかった。

24号土坑（第10図）

E-3区に位置し、主軸はE-29°-Nである。掘込の平面プランは楕円形で、長軸75cm、短軸60cm、深さは最深部で26cmを測る。埋土は2層に分かれ、上層は小型の礫を少量含む黄褐色土、下層は炭化物を含む

黒褐色土である。

遺物の出土はなかった。

25号土坑（第10図）

E-2区から一部E-3区にかかる場所に位置し、主軸はN-16°-Wである。掘込の平面プランは楕円形で、長軸109cm、短軸80cm、深さは最深部で45cmを測る。埋土は3層に分かれ、上層は礫を含む黄褐色土中層は小型の礫を含む黒褐色土、下層は暗黄褐色土である。

遺物は土師器片が数点出土したが、実測にたえうるものではなかった。

26号土坑（第10図）

E-2区からE-3区にかかる場所に位置し、主軸はE-44°-Nである。掘込の平面プランは楕円形で長軸95cm、短軸70cm、深さは最深部で34cmを測る。埋土は礫を含む暗黒褐色土である。

土坑の上面から瓦片が1点出土した。

27号土坑（第10図）

E-2区に位置し、主軸はN-4°-Wである。掘込の平面プランは楕円形で長軸91cm、短軸61cm、深さは最深部で30cmを測る。埋土は2層に分かれ、上層は黄褐色土、下層は暗褐色土である。

遺物は土師器片が数点出土したが、実測にたえうるものではなかった。

28号土坑（第10図）

E-3区に位置し、主軸はN-30°-Eである。掘込の平面プランは不整形で、皿状に掘り込まれており長軸85cm、短軸56cm、深さは最深部で13cmを測る。埋土は暗黄褐色土である。

遺物の出土はなかった。

29号土坑（第10図）

G-5区に位置し、主軸はW-18°-Nである。掘込の平面プランは楕円形で2段掘りになっており、南側は一部攪乱により壊されている。規模は長軸83cm、短軸70cm、深さは最深部で37cmを測る。埋土は焼土と炭化物を含む暗褐色土である。

遺物の出土はなかった。

30号土坑（第10図）

G-7区に位置し、主軸はN-12°-Eである。掘込の平面プランはほぼ円形で、規模は長軸65cm、短軸64cm、深さは最深部で38cmを測る。埋土は礫混じりの暗褐色土である。

遺物の出土はなかった。

31号土坑（第11図）

G-7区に位置し、主軸はW-36°-Nである。掘込の平面プランはほぼ方形で、規模は長軸50cm、短軸48cm、深さは最深部で21cmを測る。土坑のプランから土壙墓の可能性もあるが、副葬品や木棺の痕跡等が確認できなかったので、ここでは土坑としてとりあげた。埋土は礫混じりの暗褐色土である。

遺物の出土はなかった。

32号土坑（第11図）

F-6区に位置し、主軸はW-33°-Nである。斜面に掘り込まれており、その平面プランは楕円形で、規模は長軸111cm、短軸74cm、深さは最深部で82cmを測る。埋土は礫混じりの暗黄褐色土である。

遺物の出土はなかった。

33号土坑（第11図）

F-6区に位置し、主軸はN-31°-Wである。斜面に掘り込まれており、その平面プランは長楕円形で規模は長軸142cm、短軸73cm、深さは最深部で12cmを測る。埋土は礫混じりの暗黄褐色土である。

遺物の出土はなかった。

34号土坑（第11図）

D－5区からD－6区に一部かかる場所に位置し、主軸はN－36°－Eである。斜面にほぼ垂直に掘り込まれておりその平面プランは円形で規模は長軸41cm、短軸も41cm、深さは最深部で70cmを測る。土壙墓の可能性も高いが、副葬品や木棺の痕跡等が確認できなかつたので土坑として取り扱つた。埋土は黄褐色土である。

遺物の出土はなかった。

35号土坑（第11図）

F－8区からG－8区に一部かかる場所に位置し、主軸はN－36°－Eである。斜面にほぼ垂直に掘り込まれておりその平面プランはほぼ円形で規模は長軸71cm、短軸66cm、深さは最深部で50cmを測る。土壙墓の可能性も高いが、副葬品や木棺の痕跡等が確認できなかつたので土坑として取り扱つた。埋土は礫混じりの暗褐色土である。

遺物の出土はなかった。

36号土坑（第11図）

H－8区に位置し、主軸はN－20°－Eである。斜面に掘り込まれておりその平面プランは橢円形で、規模は長軸112cm、短軸98cm、深さは最深部で43cmを測る。埋土は礫混じりの暗褐色土である。

遺物の出土はなかった。

37号土坑（第11図）

G－8区に位置し、主軸はW－23°－Nである。ほぼ垂直に掘り込まれており、その平面プランは長方形で規模は長軸103cm、短軸80cm、深さは最深部で38cmを測る。埋土は礫混じりの暗褐色土である。

遺物の出土はなかった。

38号土坑（第12図）

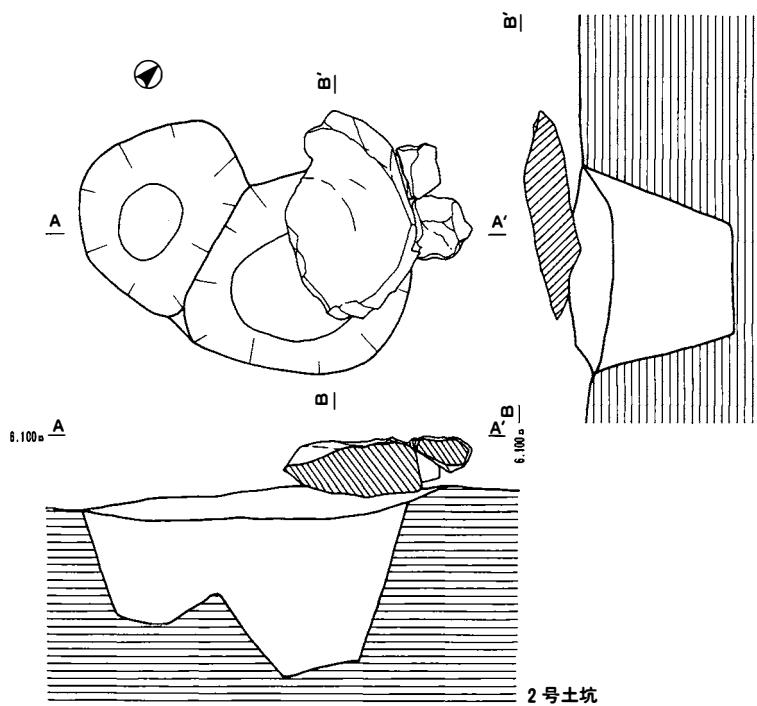
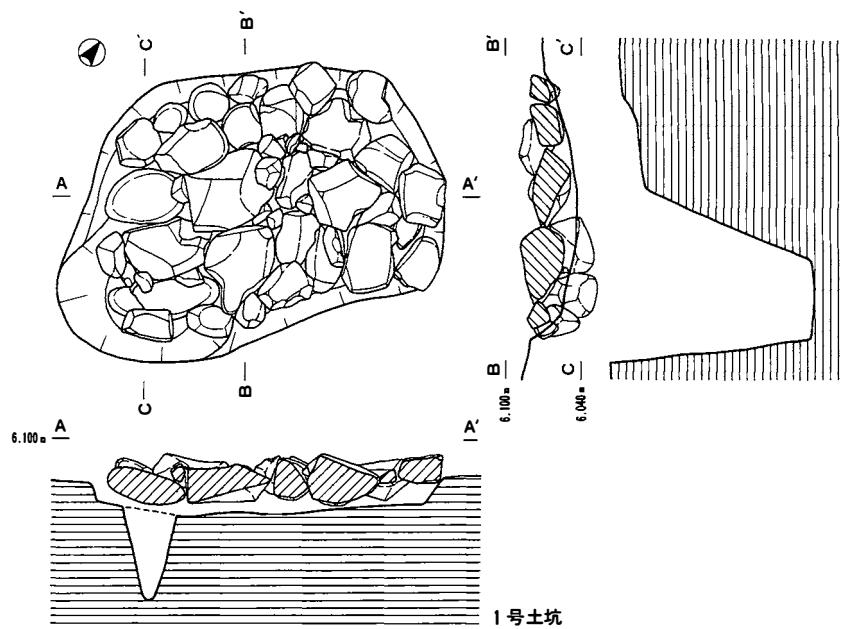
F－8区に位置し、主軸はN－14°－Wである。ほぼ垂直に掘り込まれており、その平面プランは隅丸長方形で、規模は長軸96cm、短軸64cm、深さは最深部で46cmを測る。埋土は礫混じりの暗褐色土である。

遺物の出土はなかった。

39号土坑（第12図）

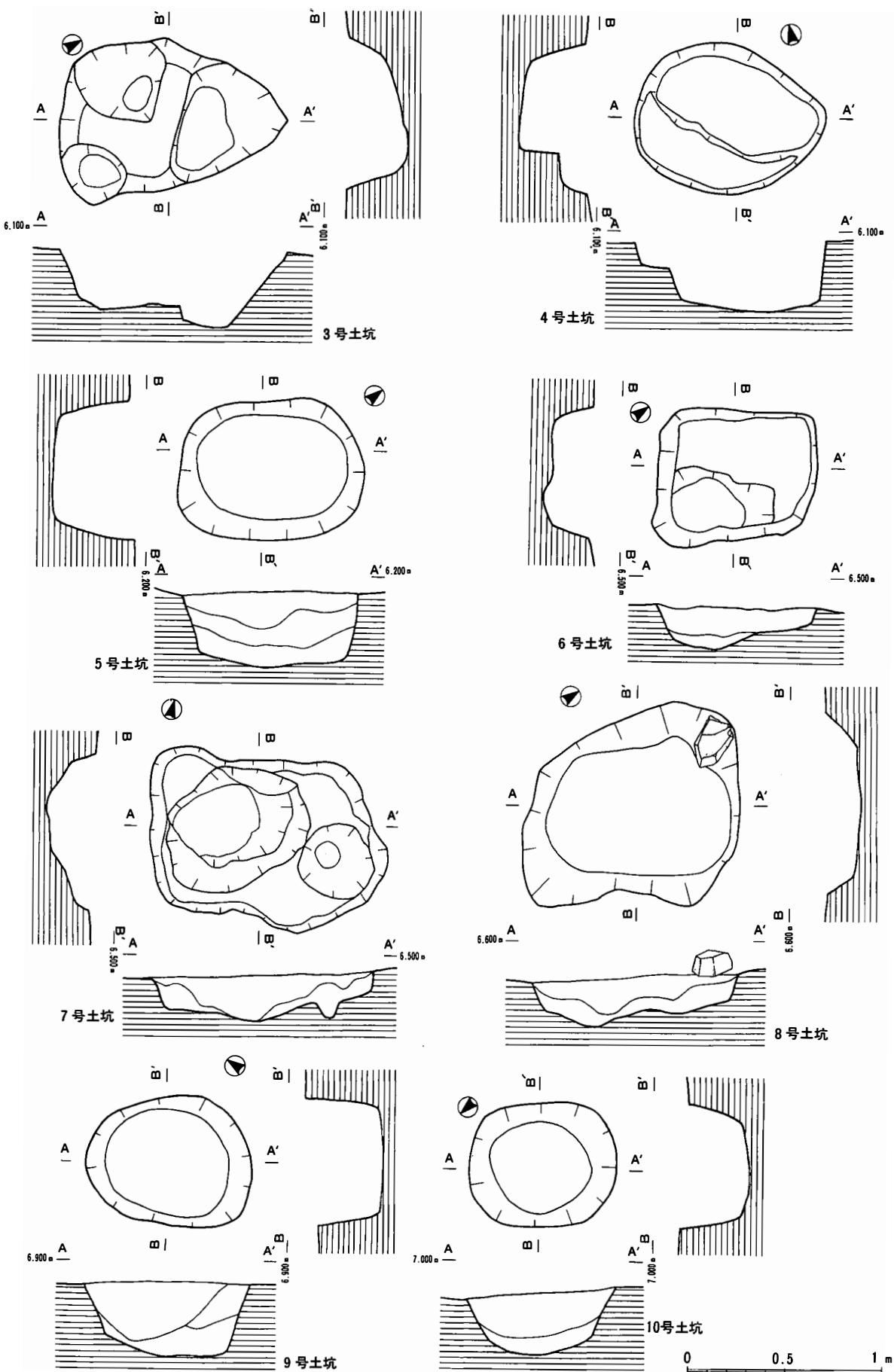
F－8区に位置し、主軸はN－17°－Eである。ほぼ垂直に掘り込まれており、その平面プランは隅丸方形で、規模は長軸77cm、短軸75cm、深さは最深部で62cmを測る。埋土は礫混じりの暗褐色土である。

遺物の出土はなかった。

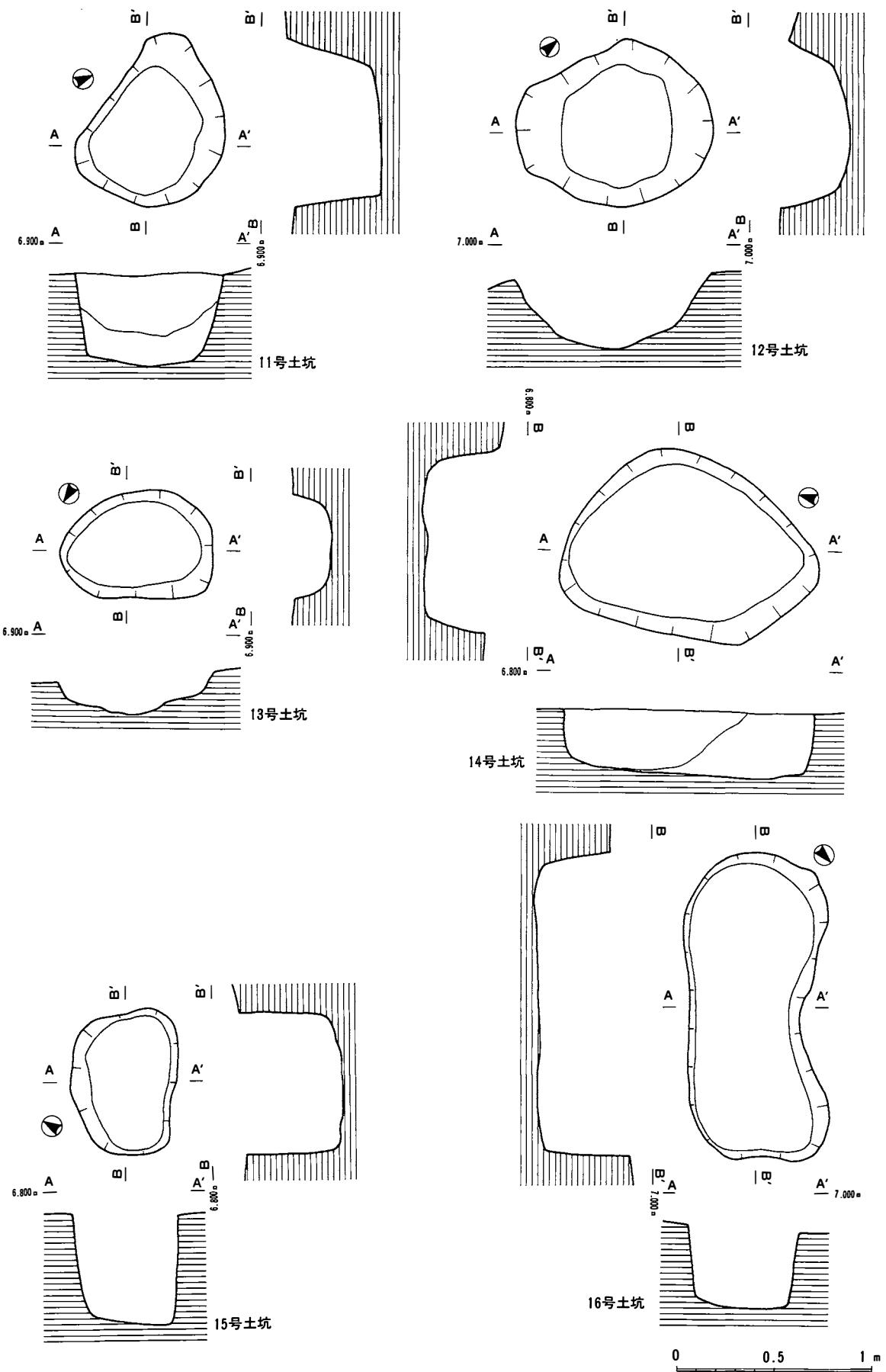


0 0.25 0.5 m

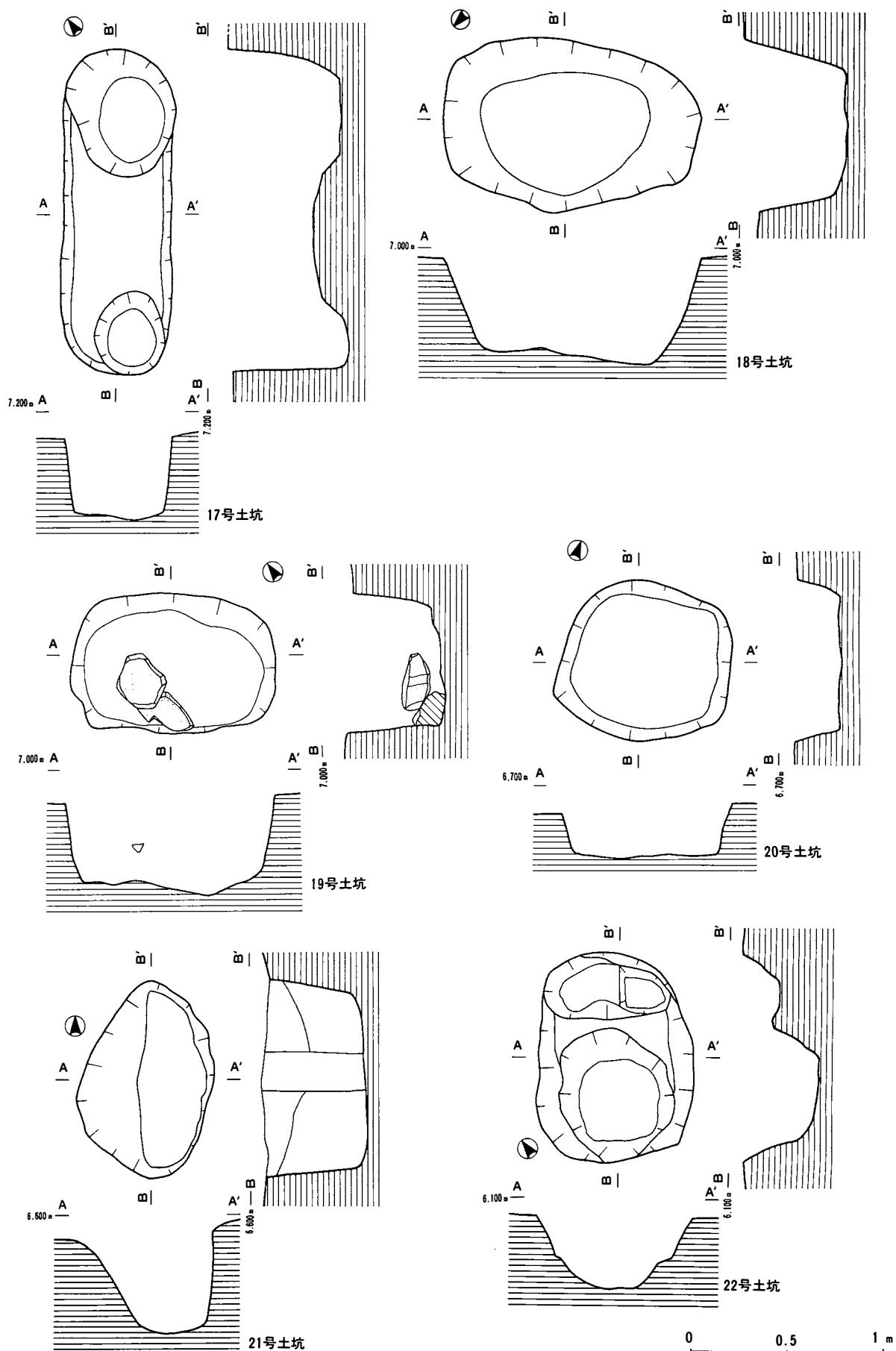
第6図 土坑実測図(1)



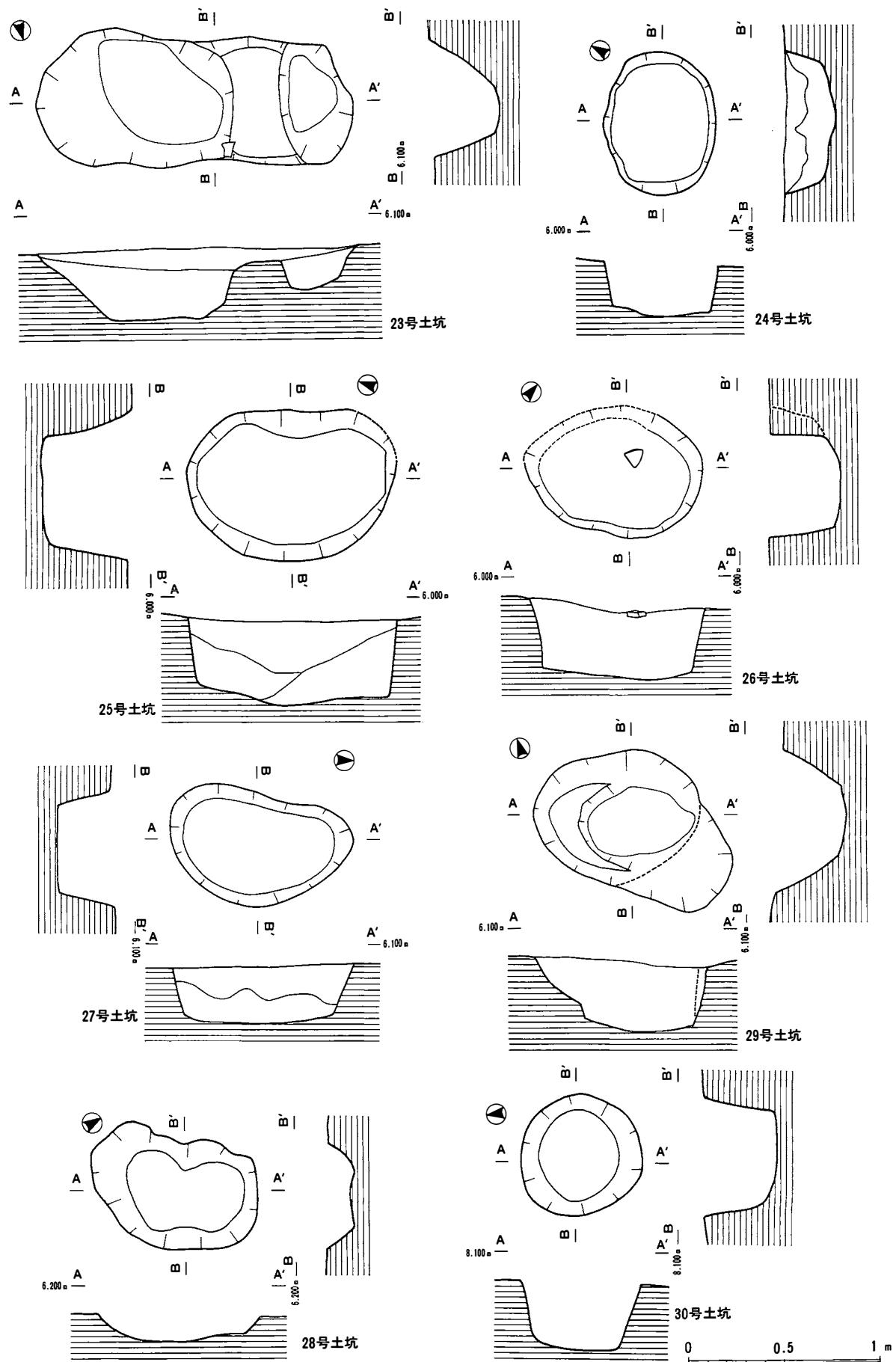
第7図 土坑実測図(2)



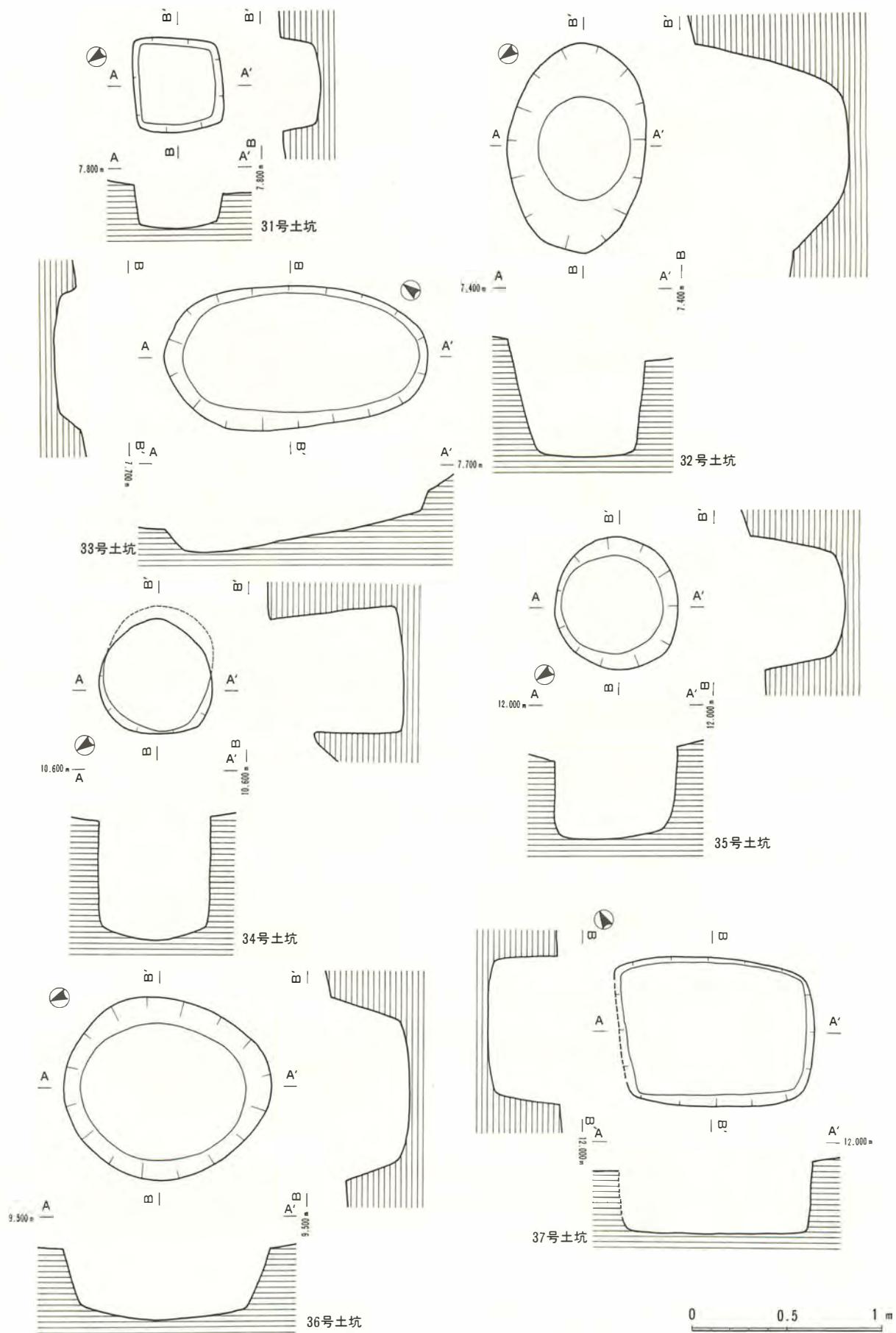
第8図 土坑実測図(3)



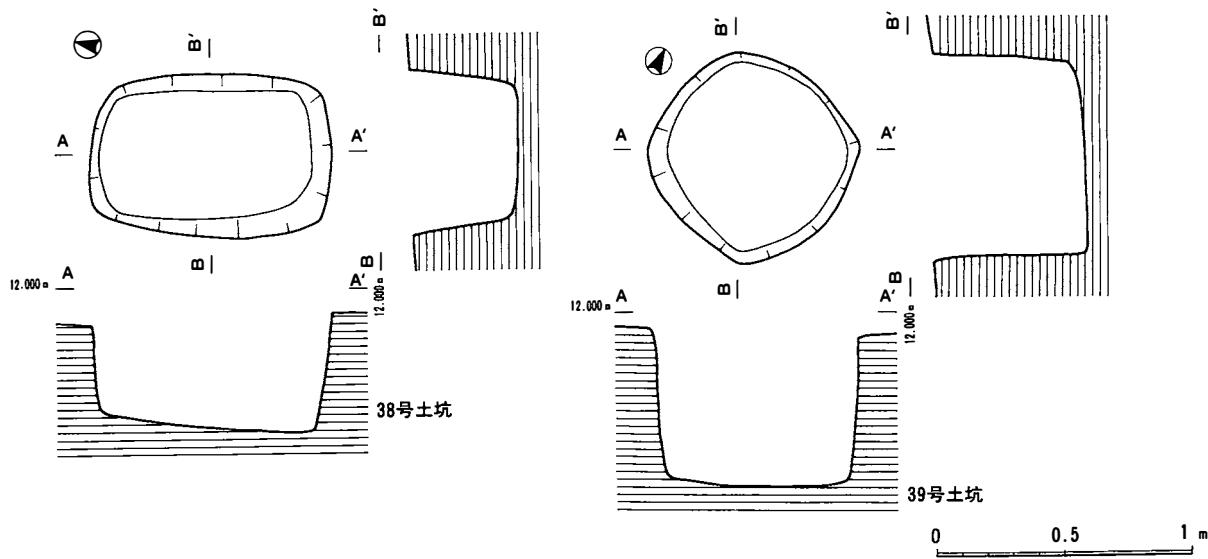
第9図 土坑実測図(4)



第10図 土坑実測図(5)



第11図 土坑実測図(6)



第12図 土坑実測図(7)

2 土壙墓

1号土壙墓（第13図）

D-5区に位置し、主軸はE-10°-Nである。土壙の平面プランは山の斜面で確認されたため、図面上では横長の平行四辺形を呈しているが、もともとは長方形であったと思われる、その規模は長軸125cm、短軸65cm深さは30~40cmを測る。人骨の頭部は掘り下げの際壊されたが、他はほぼ残っていた。埋葬の形態は膝をやや曲げた状態で頭部を西に向かって横たわるような姿勢であった。木棺の痕跡や鉄釘等は確認できず、おそらく直接埋葬されたものであろう。副葬品の出土もなかった。

2号土壙墓（第13図）

D-6区~E-6区にかけての場所に位置し、主軸はW-9°-Nである。土壙の平面プランは隅丸方形で、その規模は一辺が約72cm、深さは斜面に掘られているため18~91cmと差が大きい。埋葬の形態は西向きの屈葬で、人骨のほぼ全部が残存していた。墓壙からは木片及び鉄釘が多数出土したことから、木棺墓であることはまちがいない。副葬品の出土はなかった。

3号土壙墓（第13図）

E-6区に位置し、主軸はW-17°-Nである。土壙の平面プランは梢円形で、規模は長軸81cm、短軸57cmで、斜面に二段に掘り込まれており、その最深部は31cmを測る。埋葬の形態は土葬の後再葬されており、縦45cm、横20cmの木棺にきれいに納められていた。木片及び鉄釘も多数出土している。副葬品としてプラスチック製のかんざしが人骨の上に納められていた。

4号土壙墓（第13図）

E-6区に位置し、主軸はN-3°-Eである。土壙の平面プランは隅丸長方形で、規模は一辺が長軸118cm、短軸87cm、深さは斜面のため20~55cmである。埋葬の形態は西向きの屈葬で、人骨のほぼ全部が残存していた。鉄釘が出土していることから方形の木棺を使用しているものとおもわれる。副葬品の出土はなかった。

5号土壙墓（第13図）

E-6区に位置し、主軸はN-32°-Wである。土壙の平面プランは方形で、規模は一辺が約70cm、深さは斜面のため21~49cmである。埋葬の形態は西向きの屈葬で、人骨のほぼ全部が残存していた。鉄釘及び木片の出土はなかった。副葬品の出土もなかった。

6号土壙墓（第13図）

E-6区に位置し、主軸はE-37°-Nである。土壙の平面プランは隅丸の方形で、規模は一辺が約88cm深さは斜面のため20~65cmである。埋葬の形態は西向きの屈葬で、人骨のほぼ全部が残存していた。鉄釘及び木片が出土していることから、方形の木棺墓であることがわかる。副葬品の出土はなかった。

7号土壙墓（第13図）

D-5区に位置し、主軸はN-45°-Eである。土壙の平面プランは円形で、規模は北東部が攪乱を受けているが直径が約53cmと推定でき、深さは斜面のため2~40cmと差が大きい。埋葬の形態は人骨残存がわずかで断定はできないが、鉄釘が出土していることから、円形の木棺を使用した屈葬であるとおもわれる。副葬品として1銭銅貨が1枚出土した。

8号土壙墓（第14図）

H-7区に位置し、主軸はW-30°-Nである。土壙の平面プランは円形に近い隅丸方形で、2段に掘られており、その規模は直径が約81cmである。墓壙からはわずかに歯が1本出土しただけで埋葬の形態は不明でおそらく再葬された後の土壙墓であろうとおもわれる。

9号土壙墓（第14図）

G-7区に位置し、主軸はW-30°-Nである。土壙の平面プランは隅丸長方形で、その規模は長軸93cm短軸78cm、深さは57~77cmである。埋葬の形態は西向の屈葬で、人骨のほぼ全部が残存していた。木片や鉄釘等は出土しなかったが、副葬品として1銭銅貨が1枚出土したが、その年号は鋳のため不明である。

10号土壙墓（第14図）

G-7区に位置し、主軸はN-27°-Eである。土壙の平面プランは隅丸方形で、その規模は長軸97cm、短軸75cm、深さは最深部で70cmで、埋葬の形態は西向の屈葬と考えられる。また一辺が42cmの方形の木棺の痕跡が明確に確認できた。人骨の残存状態は良好ではなかったが、被葬者は学生帽子のつばが出土したことから少年であろうとおもわれる。副葬品としては寛永通宝が1枚と年号不明のアルミ硬貨が1枚出土した。

11号土壙墓（第14図）

G-7区に位置し、主軸はW-22°-Nである。11号土壙墓は納骨堂建設やその解体時にかなりの攪乱を受けており、人骨及び副葬品の土師器が散乱した状態で確認された。土壙の平面プランは長楕円形で、その規模は推定で長軸117cm短軸52cm、深さは最深部で18cmである。埋葬の形態は不明である。副葬品としては土師器の壊が8個体分出土した。

(1)出土遺物（第14図 6~13）

6は土師器の壊である。底部は糸切りで、指紋状の渦巻きが明確に残る。内底部はナデを施し、ほぼ平らである。体部の内外面は横ナデを施す。体部は直線的にのび、口唇部はとがる。法量は口径が13.0cm、底径7.0cm、器高4.1cmである。胎土はひじょうにきめ細やかで、色調は橙色、焼成は良好である。

7は土師器の壊である。底部は糸切りで、指紋状の渦巻きが明確に残る。形態はややゆがみがみられ、内底部はナデを施しほぼ平らである。体部の内外面は横ナデを施す。体部は直線的にのび、口唇部は丸みをおびる。法量は口径が13.2cm、底径7.2cm、器高4.0cmである。胎土は微砂粒を含み、色調は橙色、焼成は良好である。

8は土師器の壊である。底部は糸切りで、指紋状の渦巻きが明確に残る。内底部はナデを施し、ほぼ平らである。体部の内外面は横ナデを施す。体部はやや外反してのび、口唇部は丸みをおびる。法量は口径が11.5cm、底径6.3cm、器高3.0cmである。胎土は微砂粒を少量含み、色調はにぶい橙色、焼成はやや良である。

9は土師器の壊である。底部は糸切りで、指紋状の渦巻きが明確に残る。内底部はナデを施し、ほぼ平らである。体部の内外面は横ナデを施す。体部はやや外反してのび、口唇部はややとがり、法量は口径が9.9cm、

底径4.0cm、器高2.8cmである。胎土は砂粒を含み、色調は橙色、焼成はやや良である。

10は土師器の小型の壺である。底部は糸切りで、指紋状の渦巻きがわずかに残る。内底部はナデを施し、ほぼ平らで、内底部はナデを施しほぼ平らである。体部の内外面は横ナデを施す。底部から体部にかけてわずかに段をもち、体部は直線的にのび、口唇部はややとがる。法量は口径が6.8cm、底径3.4cm、器高2.5cmである。胎土は砂粒を含み、色調は橙色、焼成はやや良である。

11は土師器の小型の壺である。底部は糸切りで、指紋状の渦巻きが残る。内底部はナデを施し、ほぼ平らである。体部の内外面は横ナデを施し、やや凹凸がみられる。体部はやや内湾してのび、口唇部はややとがる。法量は口径が7.0cm、底径3.8cm、器高2.2~2.7cmと傾きがみられる。胎土は微砂粒を少量含み、色調は橙色、焼成はやや良である。

12は土師器の小型の壺である。底部は糸切りで、指紋状の渦巻きがわずかに残る。内底部はナデを施し、やや凹凸をおびる。体部の内外面は横ナデを施している。体部はわずかに内湾してのび、口唇部はややとがる。法量は口径が7.3cm、底径3.7cm、器高2.5cmである。胎土は微砂粒を少量含み、色調は橙色、焼成はやや良である。

13は土師器の小型の壺である。底部は糸切りで、指紋状の渦巻きが明確に残る。内底部はナデを施しやや凹凸をおびる。体部の内外面は横ナデを施している。体部はわずかに内湾してのび、口唇部はややとがる。法量は口径が7.1cm、底径3.4cm、器高2.4cmである。胎土は微砂粒を少量含み、色調は橙色、焼成はやや良である。

12号土壙墓（第15図）

G-6区に位置し、主軸はN-42°-Eである。土壙の平面プランは楕円形で、その規模は長軸71cm短軸67cm、深さは最深部で80cmで、ほぼ垂直に掘り込まれていた。人骨の出土はなく、埋葬形態は不明である。副葬品としては明治10年製の2銭銅貨が1枚出土した。

13号土壙墓（第15図）

G-6区に位置し、主軸はW-26°-Nである。土壙の平面プランは長楕円形で、その規模は長軸100cm短軸80cm、深さは最深部で72cmで、ほぼ垂直にほりこまれていた。人骨の出土はなく、埋葬形態は不明で副葬品の出土はなかったが、鉄片がわずかに出土した。

14号土壙墓（第15図）

G-6区に位置し、主軸はN-24°-Eである。土壙の平面プランは円形で、その規模は直径が83cm、深さは最深部で80cmで、ほぼ垂直に掘り込まれていた。人骨がわずかに残存するのみで、その埋葬形態は不明である。鉄釘が多量に出土した。土壙の平面プランからみて、円形の木棺を使用したものとおもわれる。副葬品として、アルミ硬貨が7枚出土し、そのうちの1枚は昭和16年製の5銭硬貨であった。

15号土壙墓（第15図）

F-6区に位置し、主軸はW-17°-Nである。土壙の平面プランは楕円形で斜面に掘られており、その規模は長軸98cm、短軸81cm、深さは最深部で57cmで、ほぼ垂直に掘り込まれていた。人骨の出土はなく、埋葬形態は不明である。鉄釘がわずかに出土し、副葬品はなかった。

16号土壙墓（第15図）

F-6区に位置し、主軸はN-16°-Eである。土壙の平面プランは円形にちかく、斜面にほぼ垂直に掘られており、その規模は長軸78cm、短軸74cm、深さは最深部で68cmであった。人骨の出土はなく、その埋葬形態も不明である。副葬品として制作年代等不明の古銭が1枚出土した。

17号土壙墓（第15図）

G-7区に位置し、主軸はN-33°-Eである。土壙の上面の平面プランは不整形で、中層からは隅丸長

方形の木棺の痕跡が現れた。木棺の痕跡の規模は、長軸73cm、短軸68cm、深さは最深部で23cm残存していた。埋葬形態は屈葬であろう。人骨は頭骨や肋骨、大腿骨の一部が残存していた。また鉄釘も多数出土したことから、方形の木棺墓を使用したものとおもわれる。副葬品として、大正13年製の硬貨を含む計5枚の古銭が出土した。

18号土壙墓（第16図）

F-5区に位置し、主軸はN-44°-Wである。土壙の平面プランは楕円形で、北東部に一部攪乱をうけている。土壙の規模は長軸90cm、短軸83cm、深さは最深部で28cmであった。人骨の出土はなく、その埋葬形態は不明である。埋土中から鉄釘が少量出土した。副葬品はなかった。

19号土壙墓（第16図）

G-7区に位置し、主軸はN-42°-Eである。土壙の平面プランは長方形で、その規模は長軸156cm、短軸は推定で65cm、深さは最深部で30cmであった。人骨は広範囲に散乱しており、その埋葬形態は不明だが土壙のプラン及び規模から伸展葬の可能性が高い。副葬品の出土はなかった。

20号土壙墓（第16図）

F-6区に位置し、主軸はN-28°-Eである。土壙の平面プランは隅丸の長方形で、その規模は長軸83cm、短軸74cm、深さは最深部で80cmであった。また土壙の中位から方形の木棺の痕跡が確認でき、その一辺は45cmであった。人骨は頭骨と大腿骨が残存していた。また鉄釘も確認され、その埋葬形態は屈葬である。副葬品として2枚の制作年代等不明の古銭が出土した。

21号土壙墓（第16図）

H-4区に位置し、主軸はN-35°-Eである。この位置は残存していた堂宇の南隣にあたる。つい最近まで住宅があり、一部攪乱されていた。埋葬形態は伸展葬で、頭部は北東を向いていた。人骨の腰部、膝部そして足首の部分が住宅の台所の排水管の設置の際に消失している。土壙の掘込ラインは確認できなかった。副葬品の出土もなかった。

22号土壙墓（第16図）

F-7区に位置し、主軸は不明である。人骨の一部が集中しているのみで、土壙の掘込ラインや埋葬形態等は不明である。副葬品もなかった。

23号土壙墓（第16図）

H-7区に位置し、主軸はN-34°-Eである。土壙の平面プランは隅丸の長方形で、その規模は長軸77cm、短軸62cmである。土壙は2段掘りになっており、下方は木棺の痕跡であろうか、円形のプランになっていた。人骨の出土はなく、鉄釘の出土もなかったが規模及びプラン等から、円形の木棺墓であったろうとおもわれる。副葬品の出土はなかった。

3 掘立柱建物跡

今回の調査は、寺院跡の調査ということで、ある程度の建物跡の検出を予想していたが、高速道路の路線が山際であったため、建物跡の検出は調査当初は皆無であった。現存していた堂宇の移転が、地域の共有地であったり移転先の未決定のため、調査区の北西側の調査は平成8年度になってからであった。また、路線のみの調査であるということと、前にも述べたが、住宅建設及び粗大ゴミの埋め戻し等で、調査区が大幅に縮小されたこともあり、建物跡の検出は3棟だけであった。

1号掘立柱建物跡（第17図）

現存していた堂宇の直下で確認できた建物跡で、H-3区からH-4区にかけて位置し、1間×3間でN

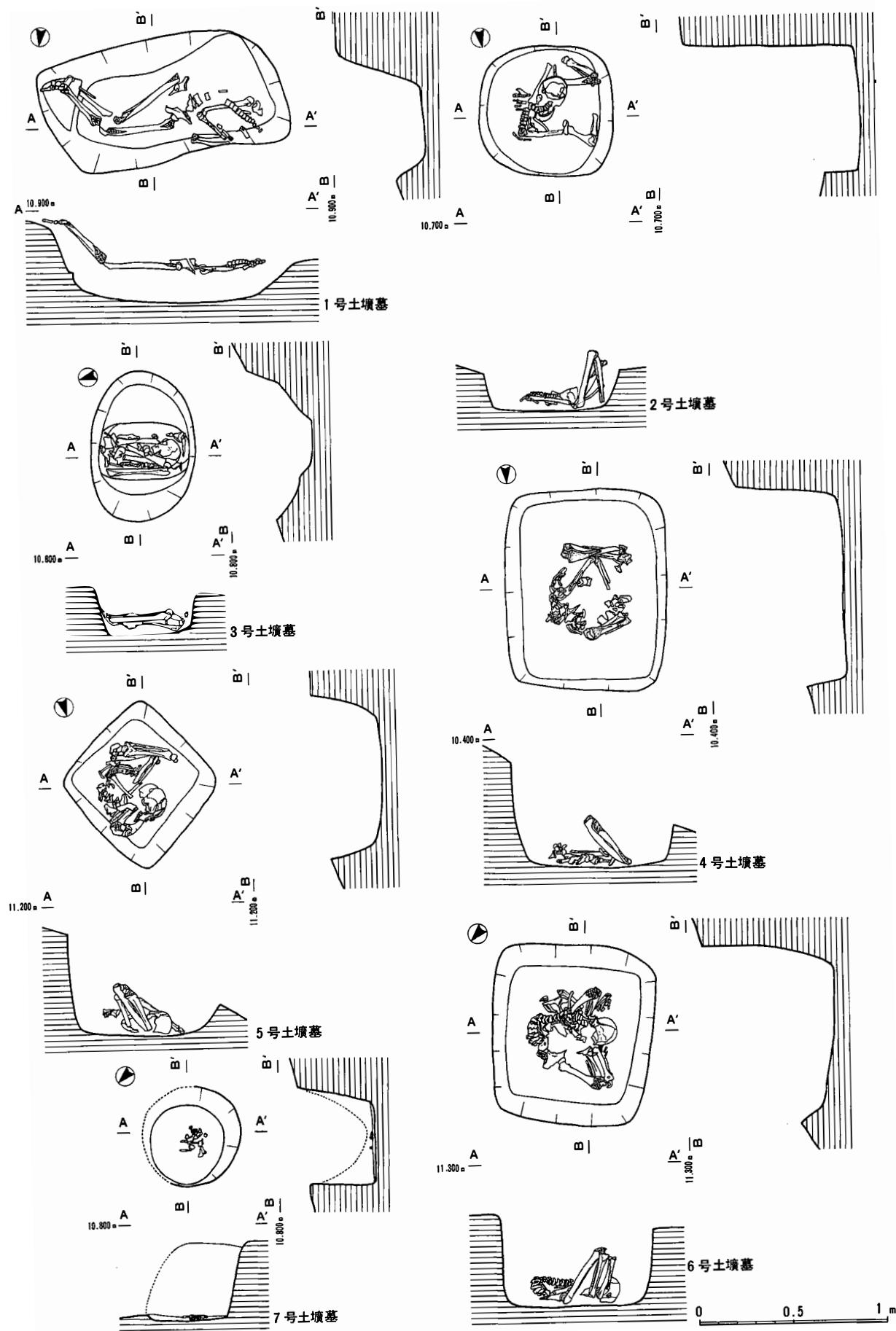
$-45^{\circ}-E$ に主軸をもつ。北東側の桁行は4.0m、南西側の桁行は3.95mである。北西側の梁行は6.8m、南東側の梁行は7.0mである。柱列はほぼ一直線に並び、柱間は北西側で北東側から2.0m、2.0m、2.0m、北東側で北西より2.2m、2.0m、2.0mである。柱穴の平面形は円形か楕円形で、それぞれに柱の痕跡が確認できた。柱の痕跡はスクリーントーンで示した。また柱穴の掘込の深さは15cm～65cmである。

2号掘建柱建物跡（第17図）

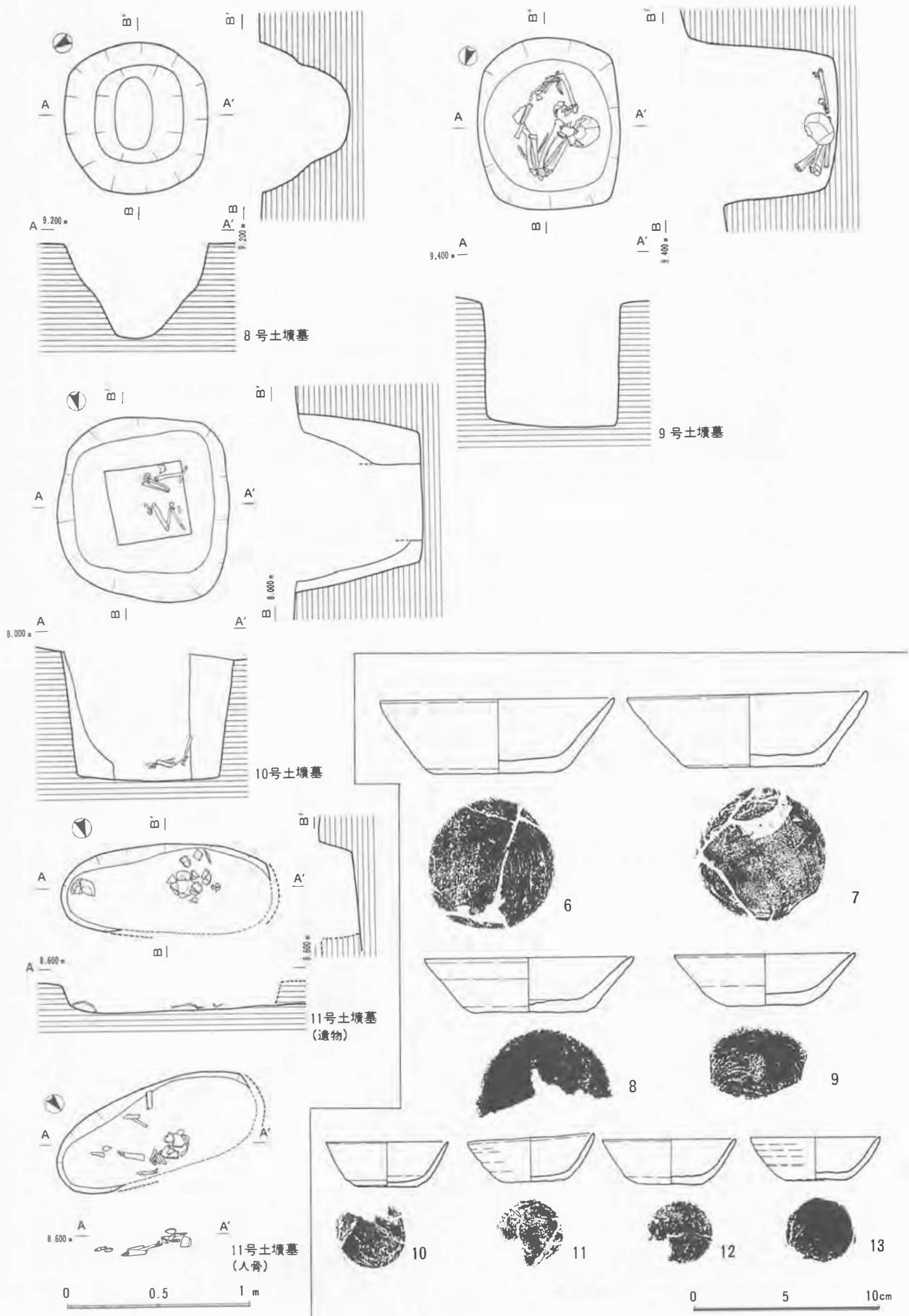
1号掘建柱建物跡のすぐ北東側H-4区からI-4区に位置し、 $N-45^{\circ}-E$ に主軸をもつ。桁の部分の柱列が確認でき、梁行の部分は攪乱のため検出できなかったが、1号掘建柱建物跡と同等に北東に延びるものとおもわれる。南西側の桁行は2間で3.4mで、柱間は北西側から1.7m、1.7m、である。柱穴の平面形は円形か楕円形で、それぞれに柱の痕跡が確認できた。柱穴の掘込の深さは40cm～64cmである。

3号掘建柱建物跡（第17図）

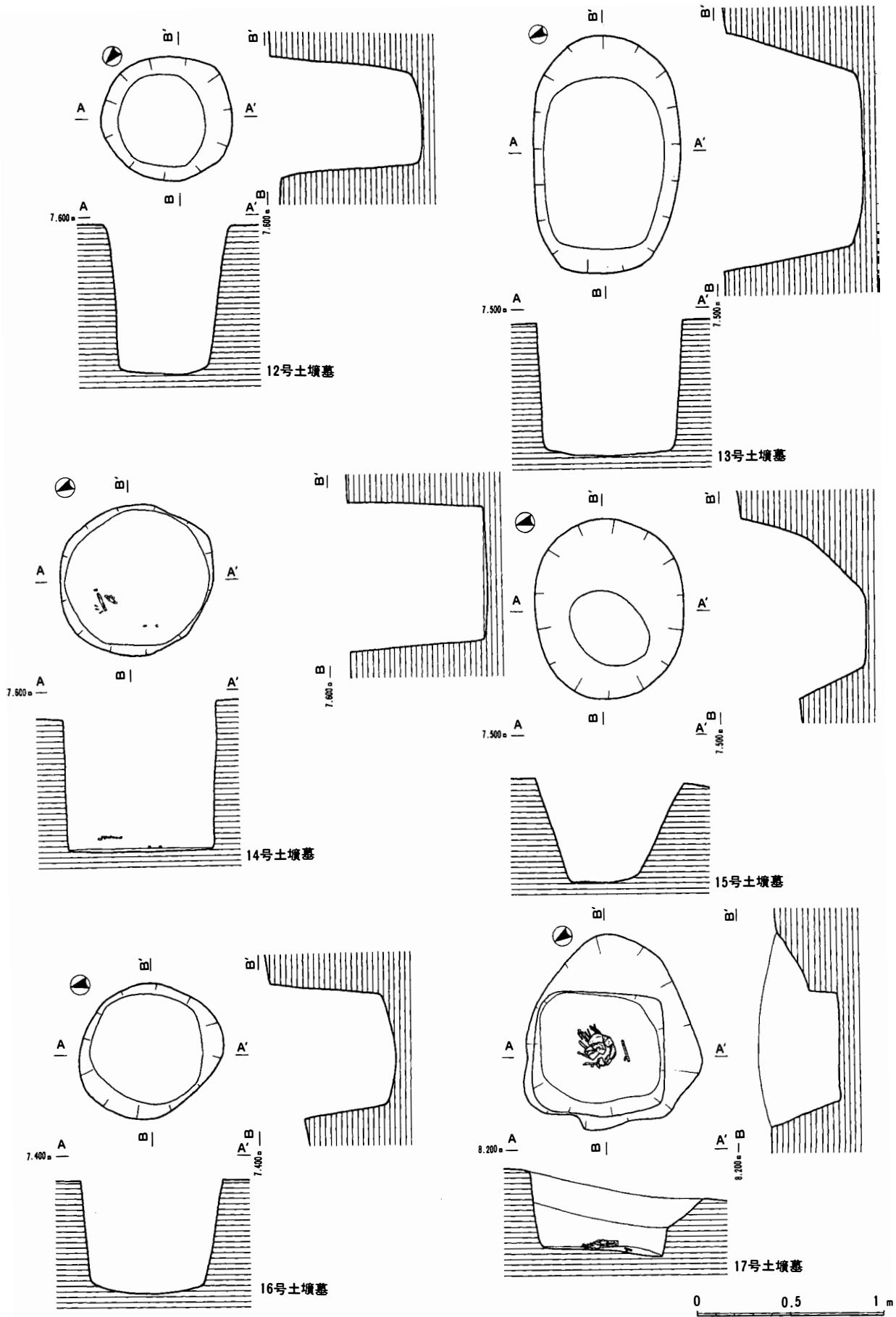
1号掘建柱建物跡のすぐ南西側H-3区からH-4区に位置し、 $N-45^{\circ}-E$ に主軸をもつ。桁の部分の柱列が確認でき、梁行の部分は攪乱のため検出できなかったが、1号掘建柱建物跡と同等に南西に延びるものとおもわれる。南西側の桁行は3間の3.5mで、柱間は北西側から1.3m、1.2m、1.1mである。柱穴の平面形は円形か楕円形で、それぞれに柱の痕跡が確認できた。柱穴の掘込の深さは39cm～50cmである。



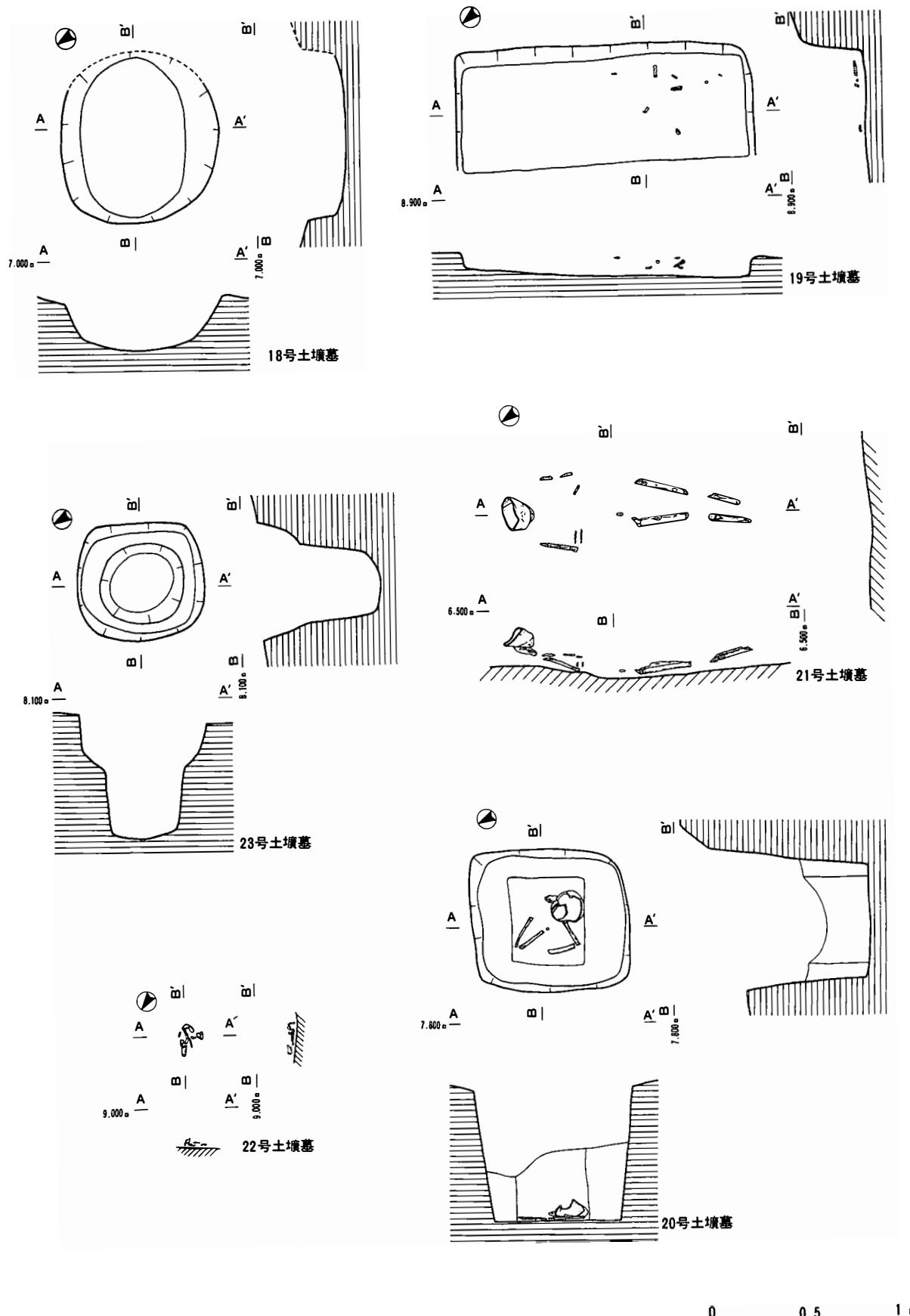
第13図 土壤墓実測図(1)



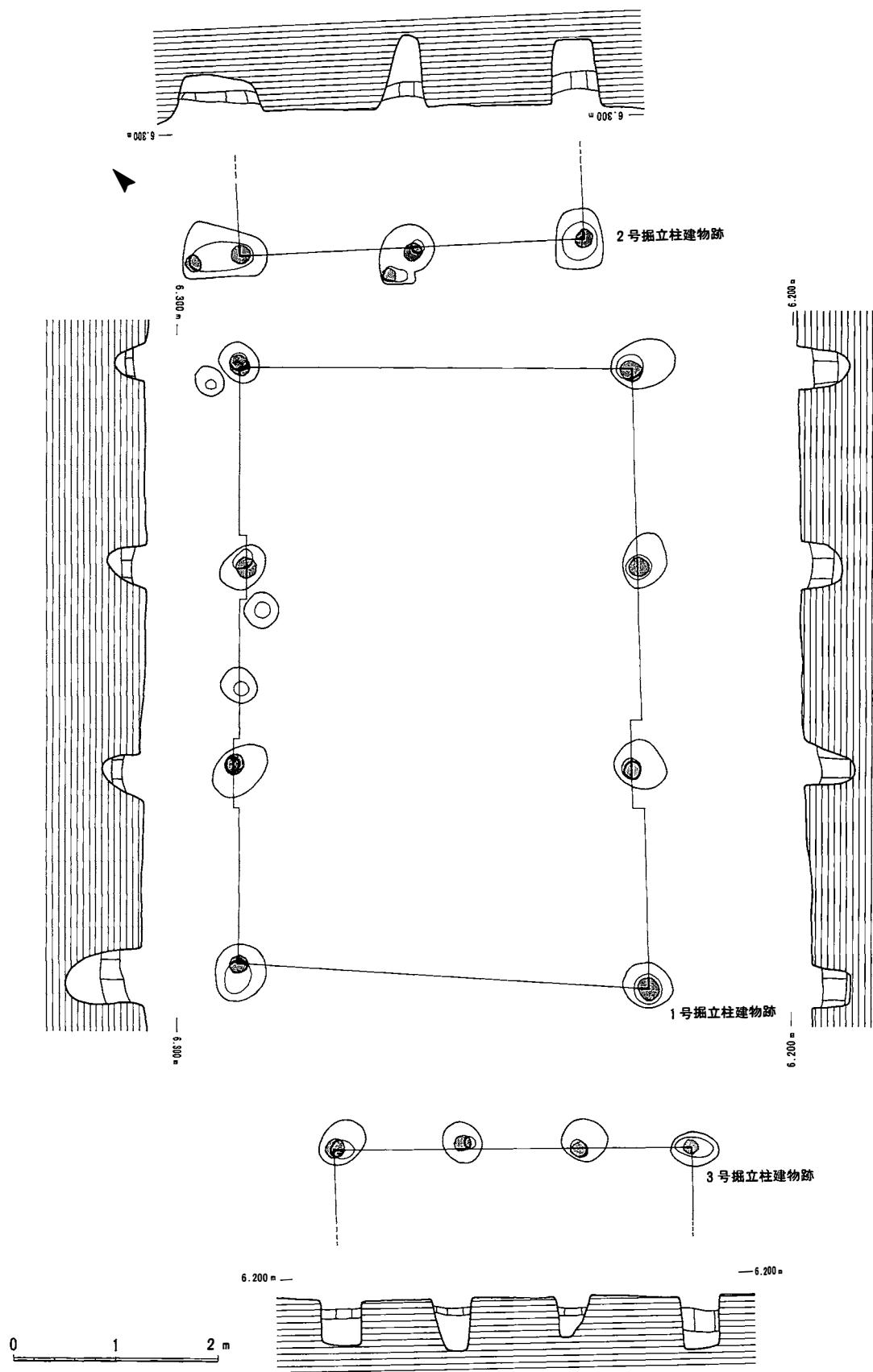
第14図 土壇墓実測図(2)



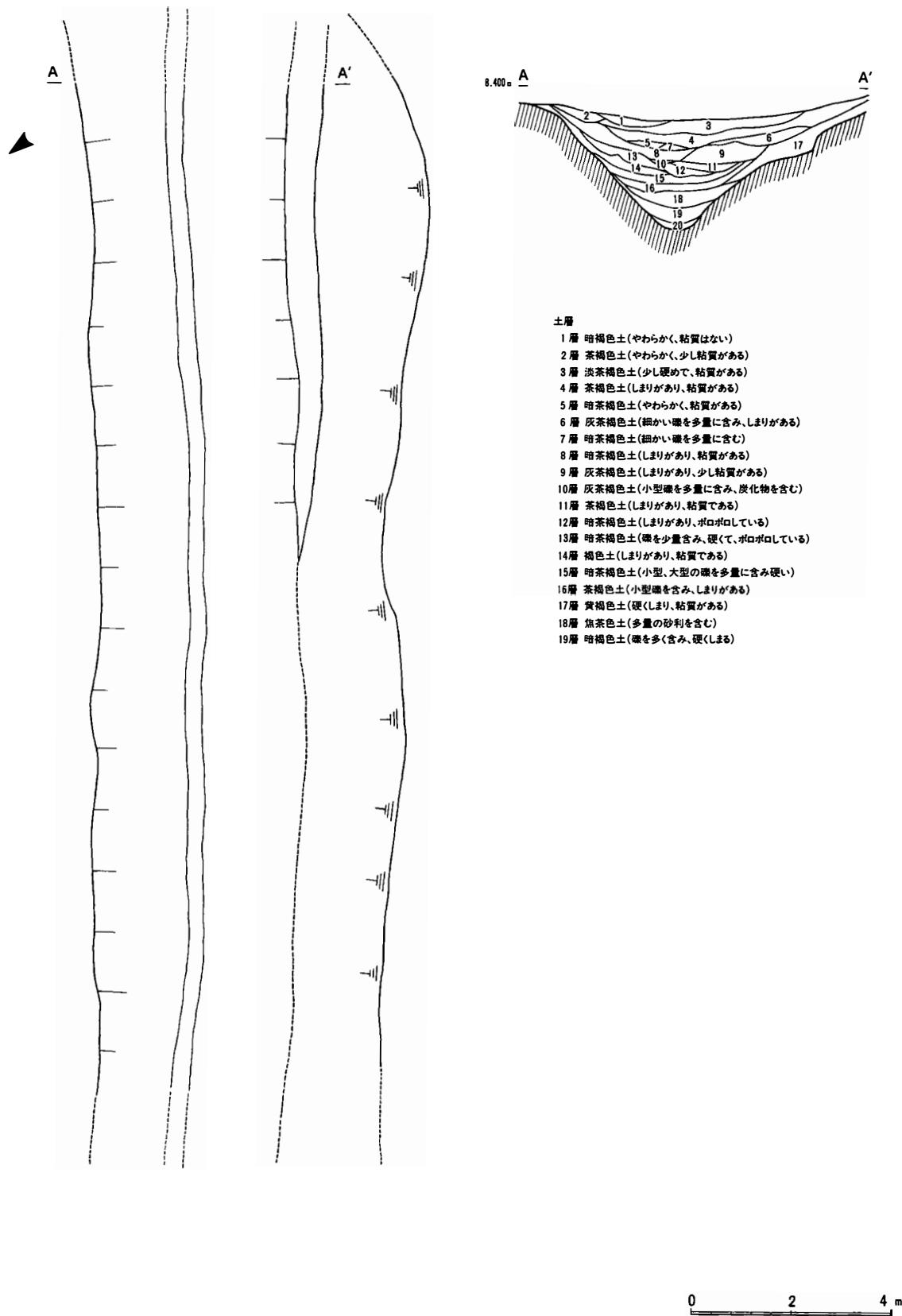
第15図 土壌墓実測図(3)



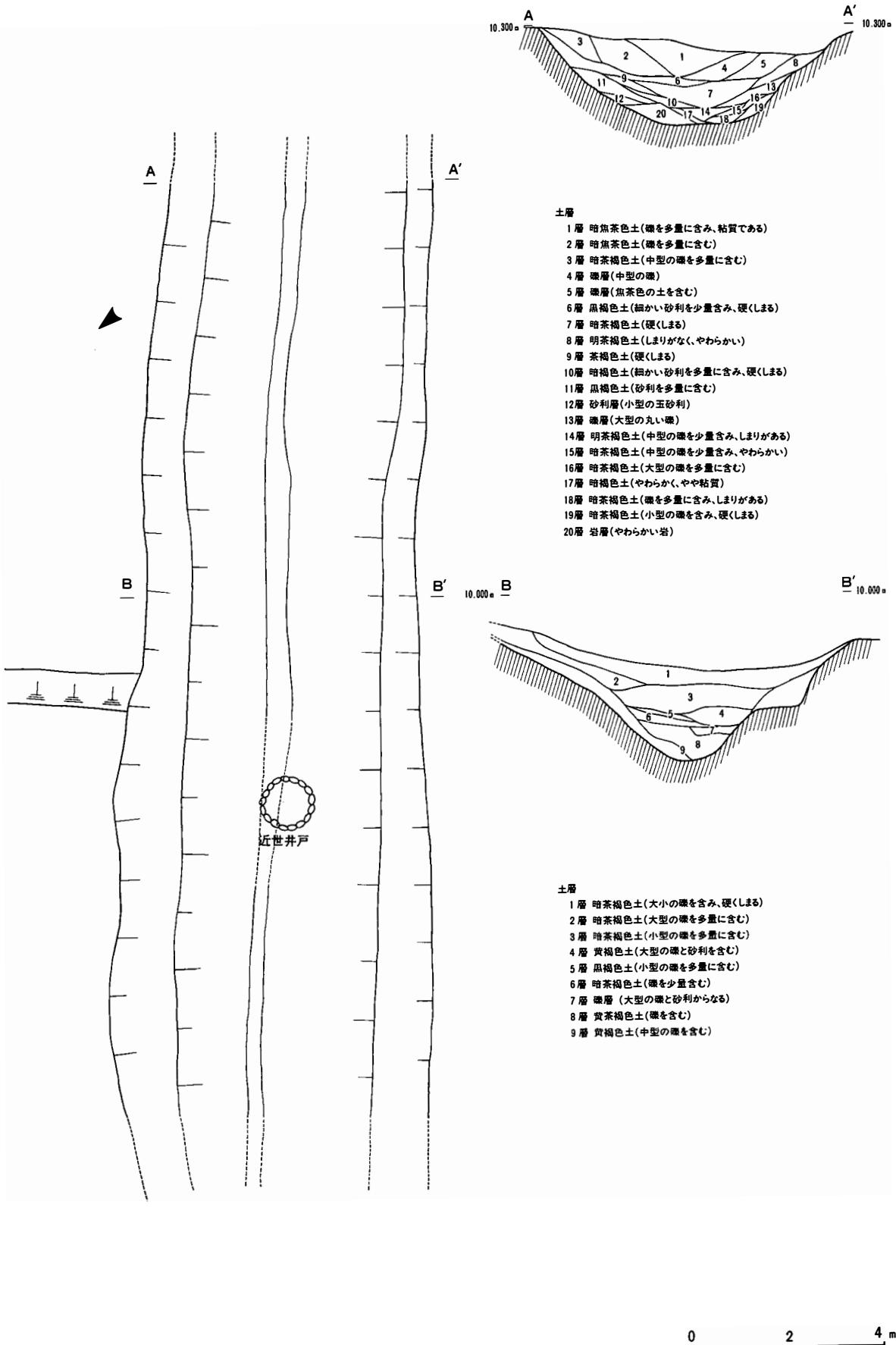
第16図 土壌墓実測図(4)



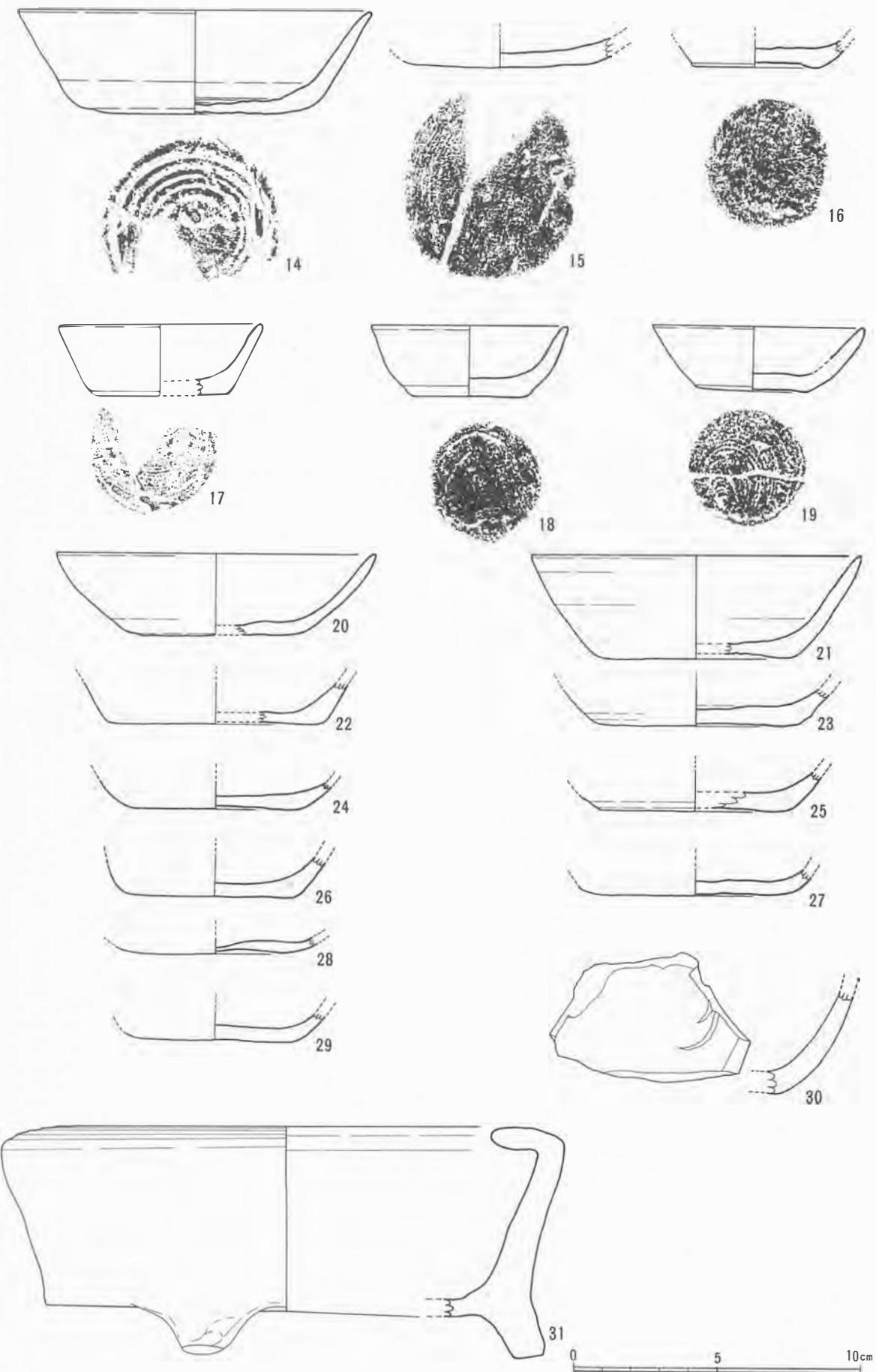
第17図 掘立柱建物跡実測図



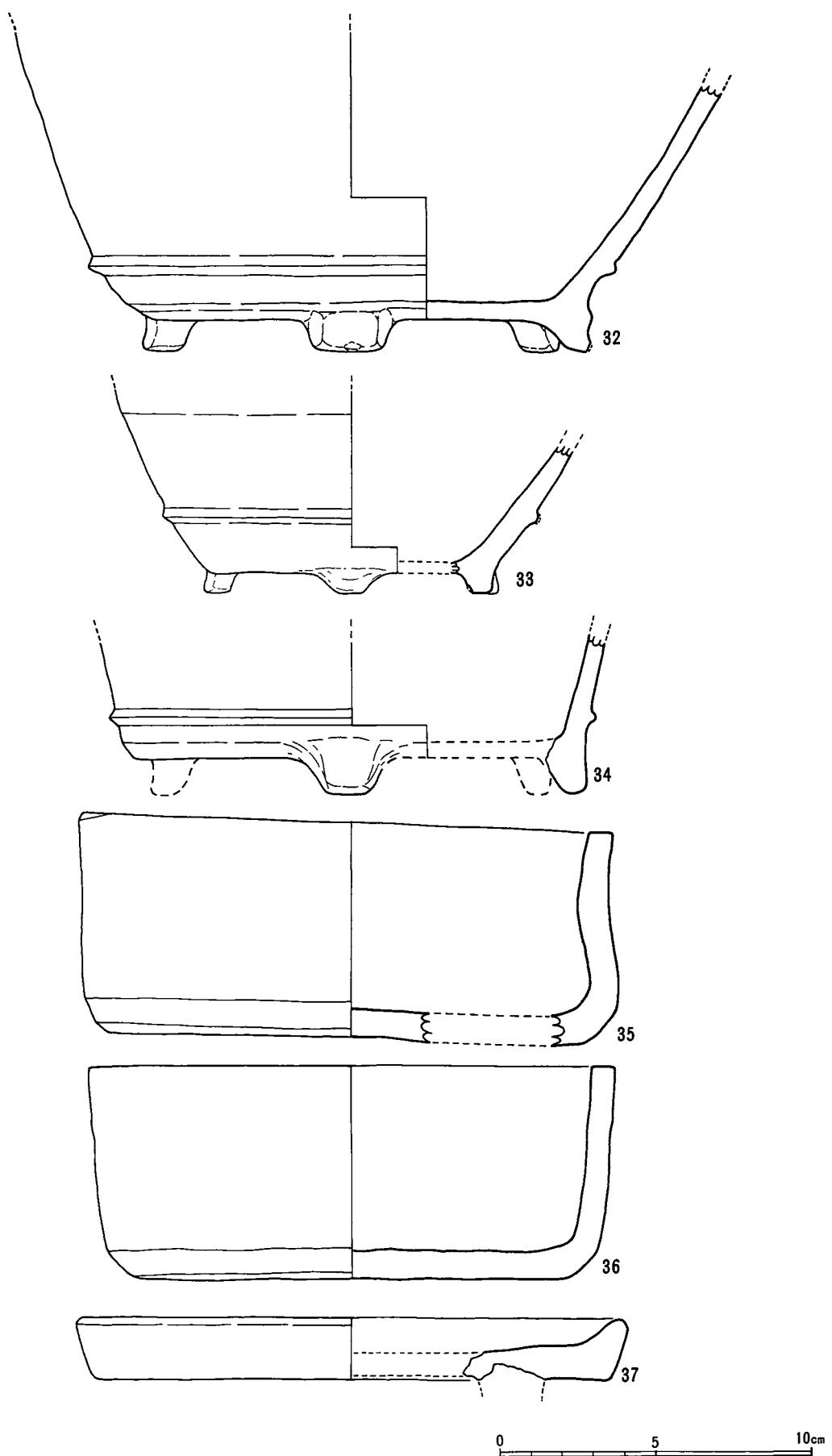
第18図 1号堀実測図



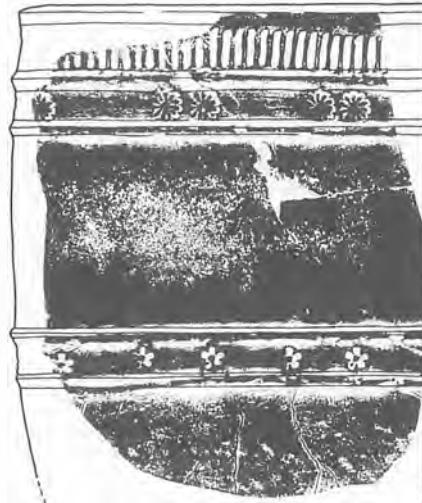
第19図 2号堀実測図



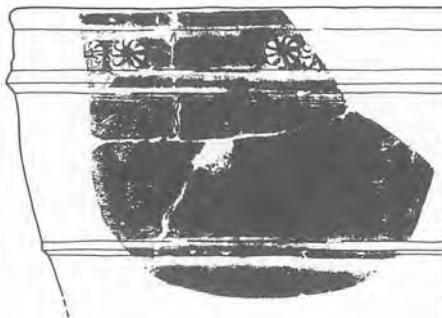
第20図 1号堀出土遺物実測図(1)



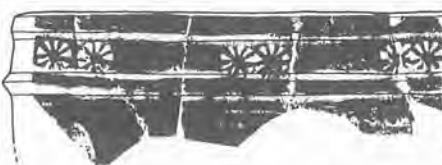
第21図 1号堀出土遺物実測図(2)



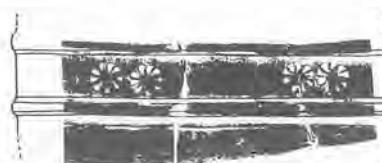
38



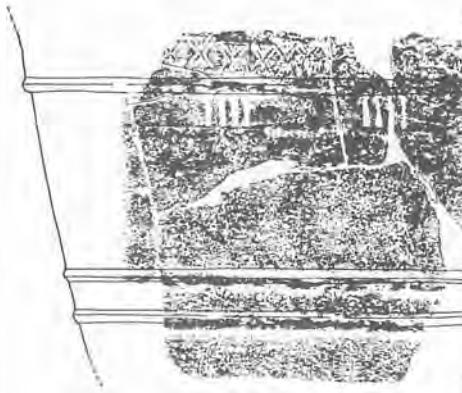
39



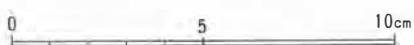
40



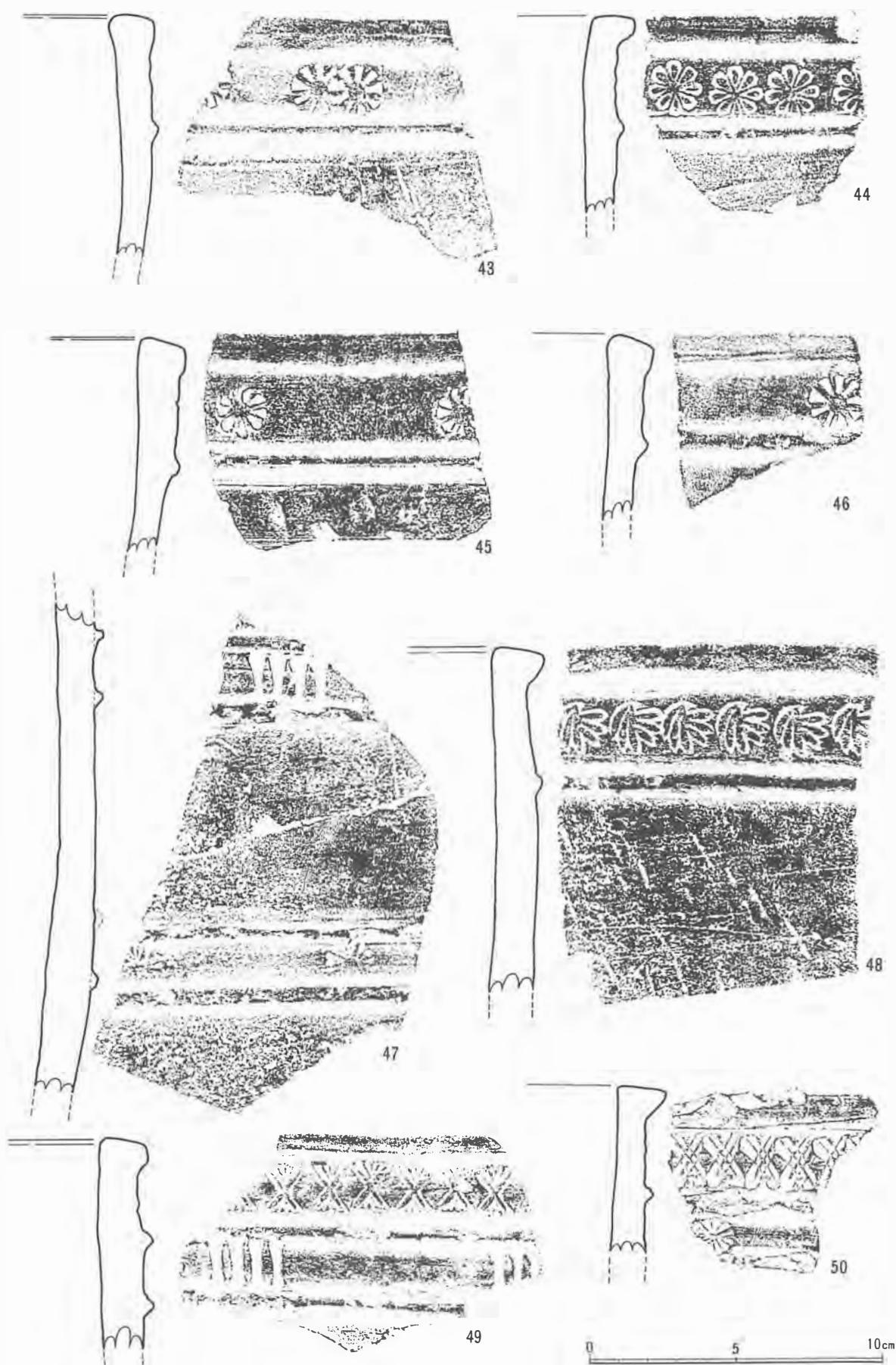
41



42

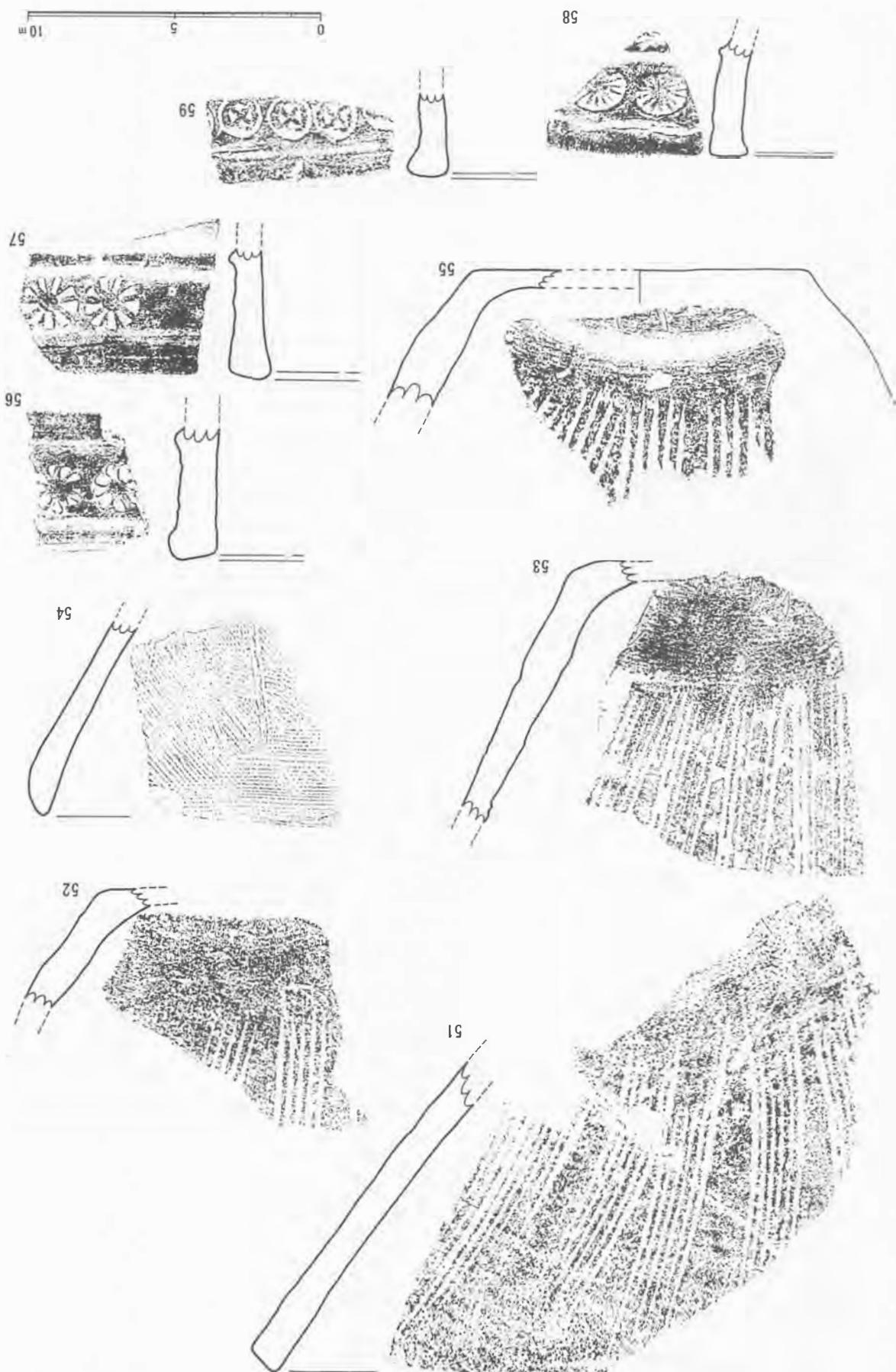


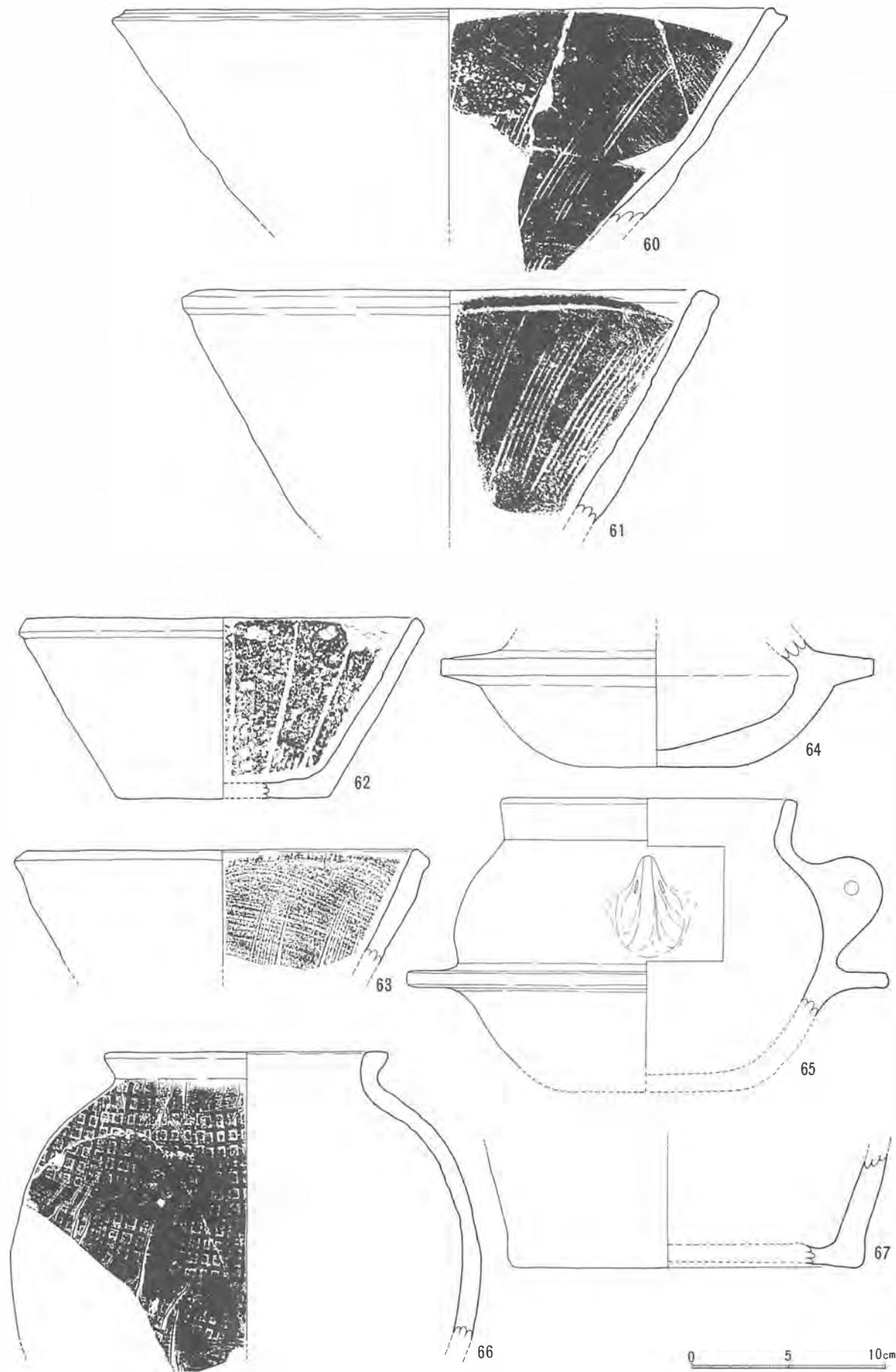
第22図 1号堀出土遺物実測図(3)



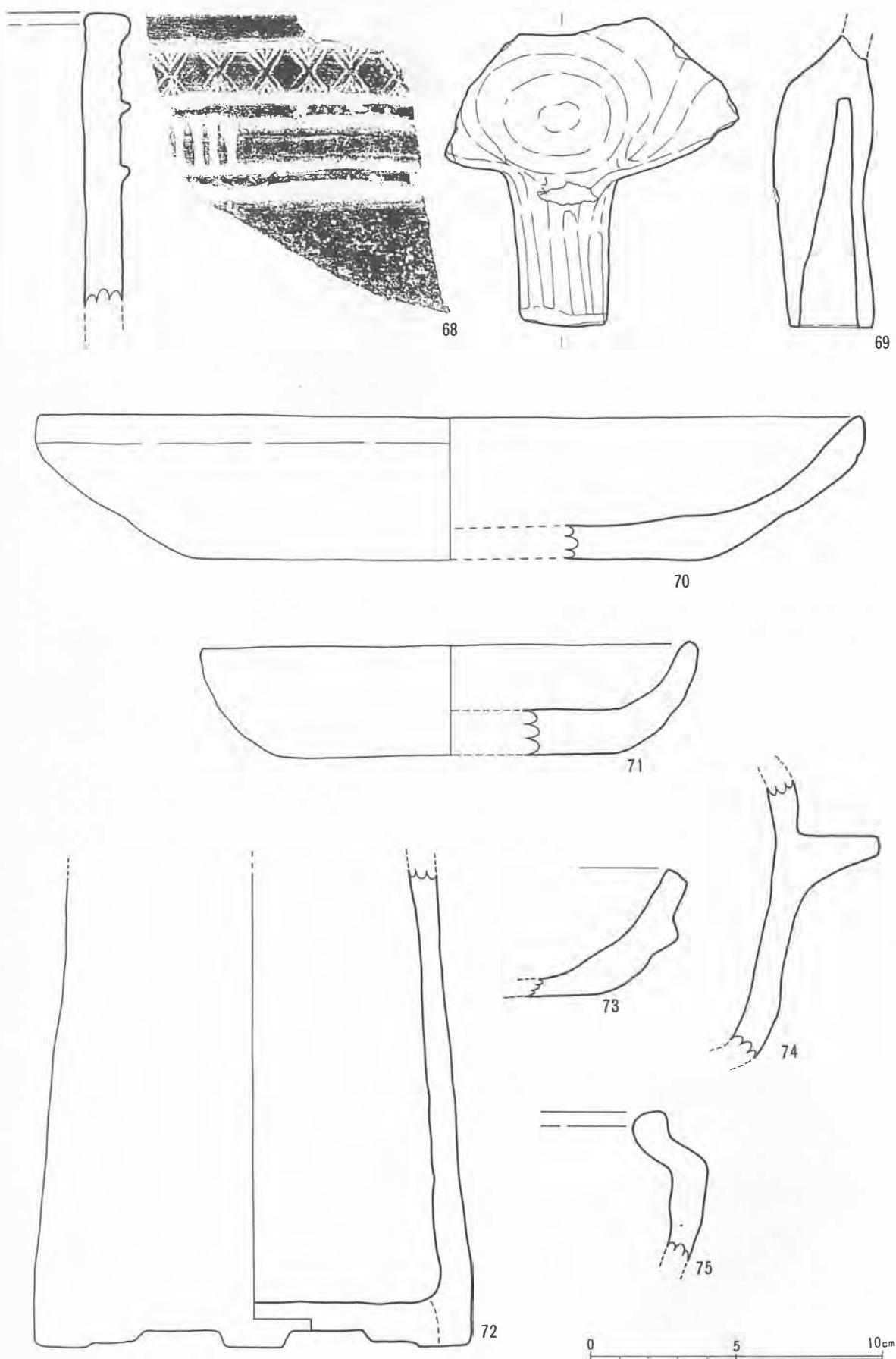
第23図 1号堀出土遺物実測図(4)

第24图 1号堆积出土遗物复原图(5)

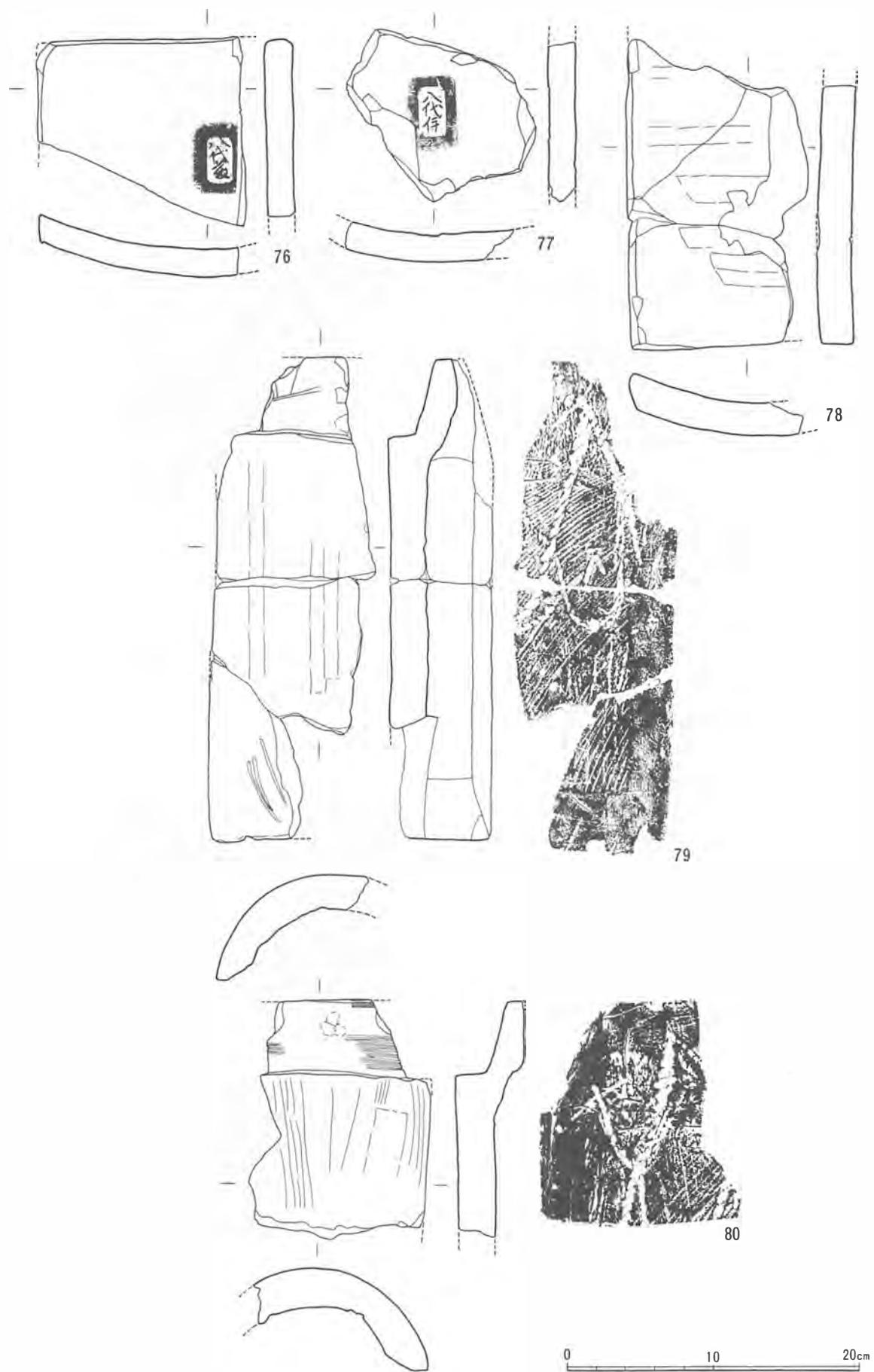




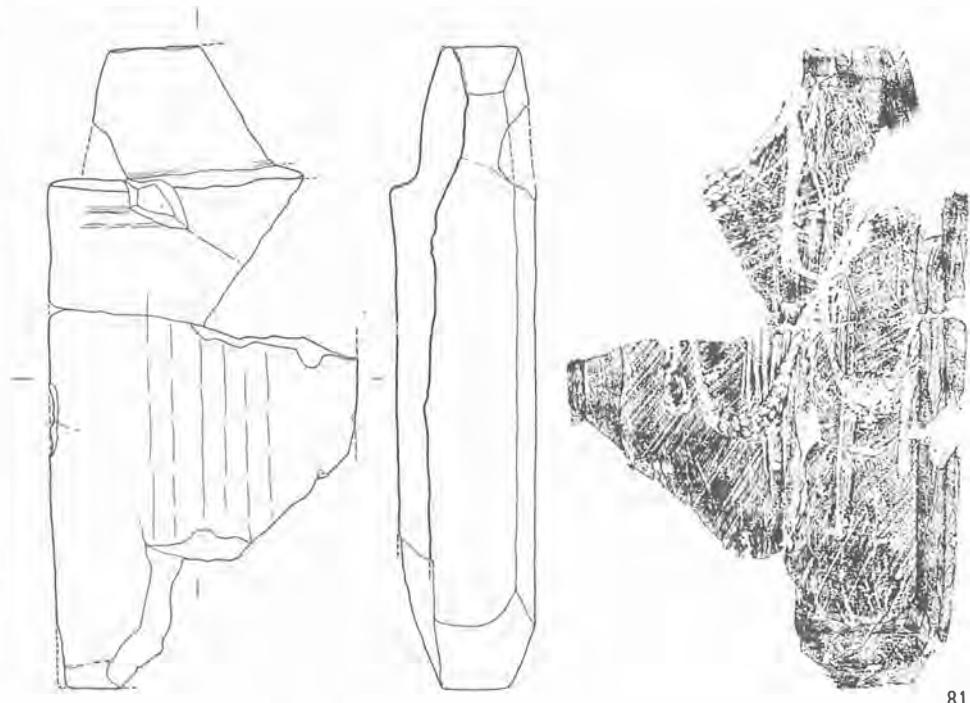
第25図 1号堀出土遺物実測図(6)



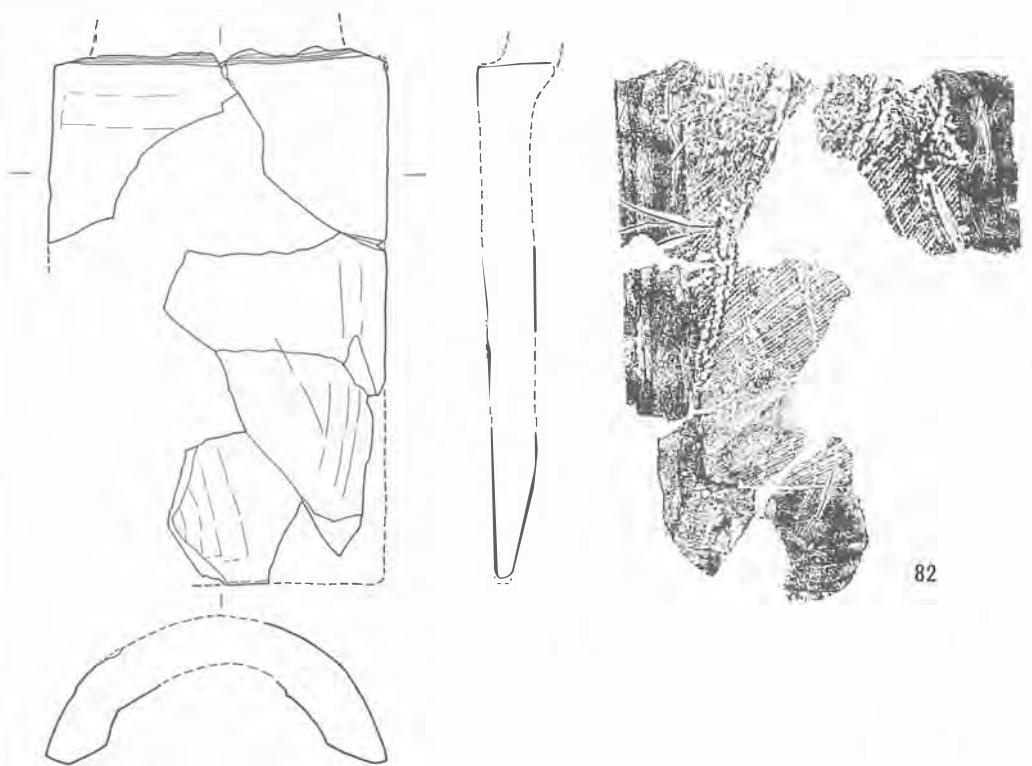
第26図 1号堀出土遺物実測図(7)



第27図 1号墳出土遺物実測図(8)



81

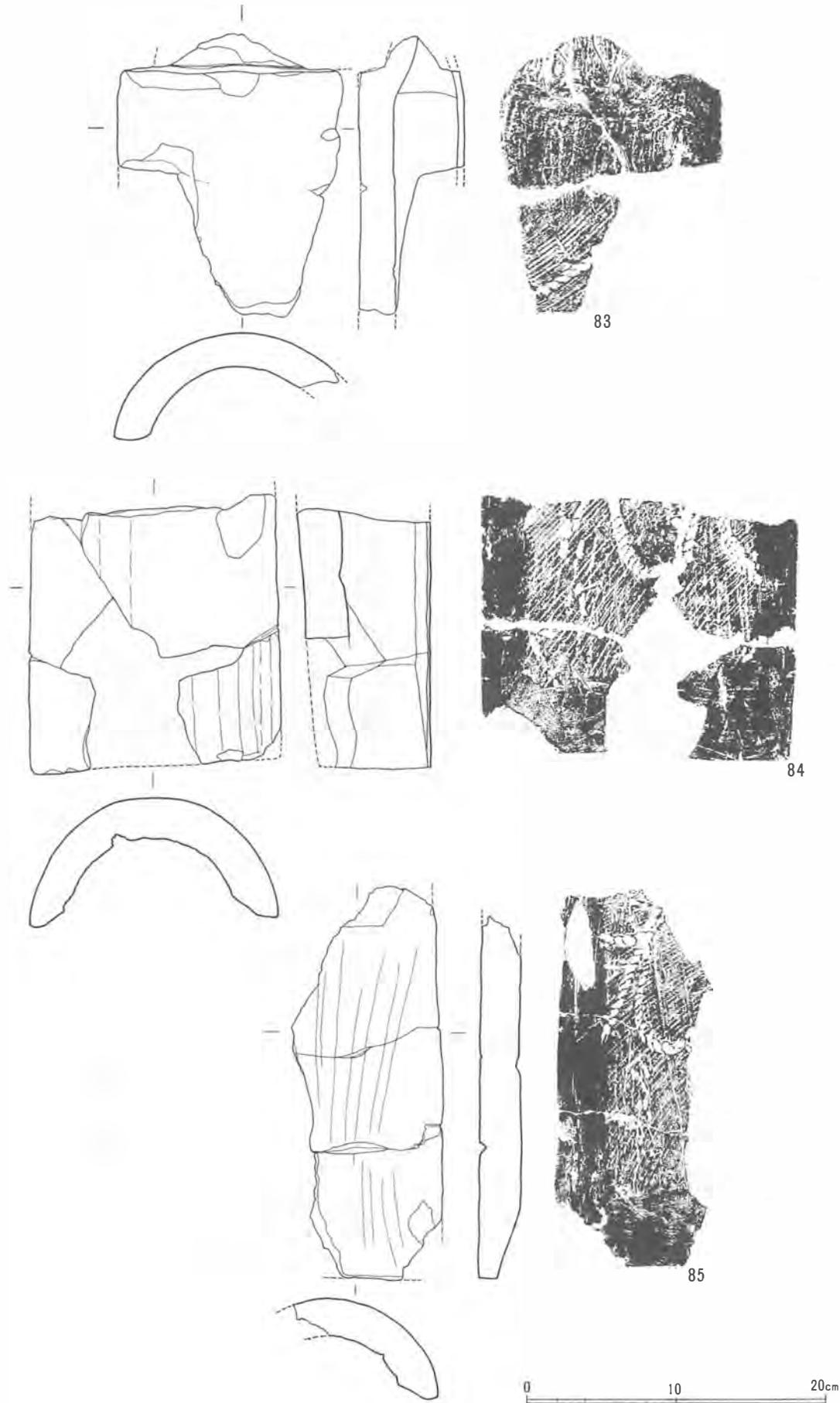


82

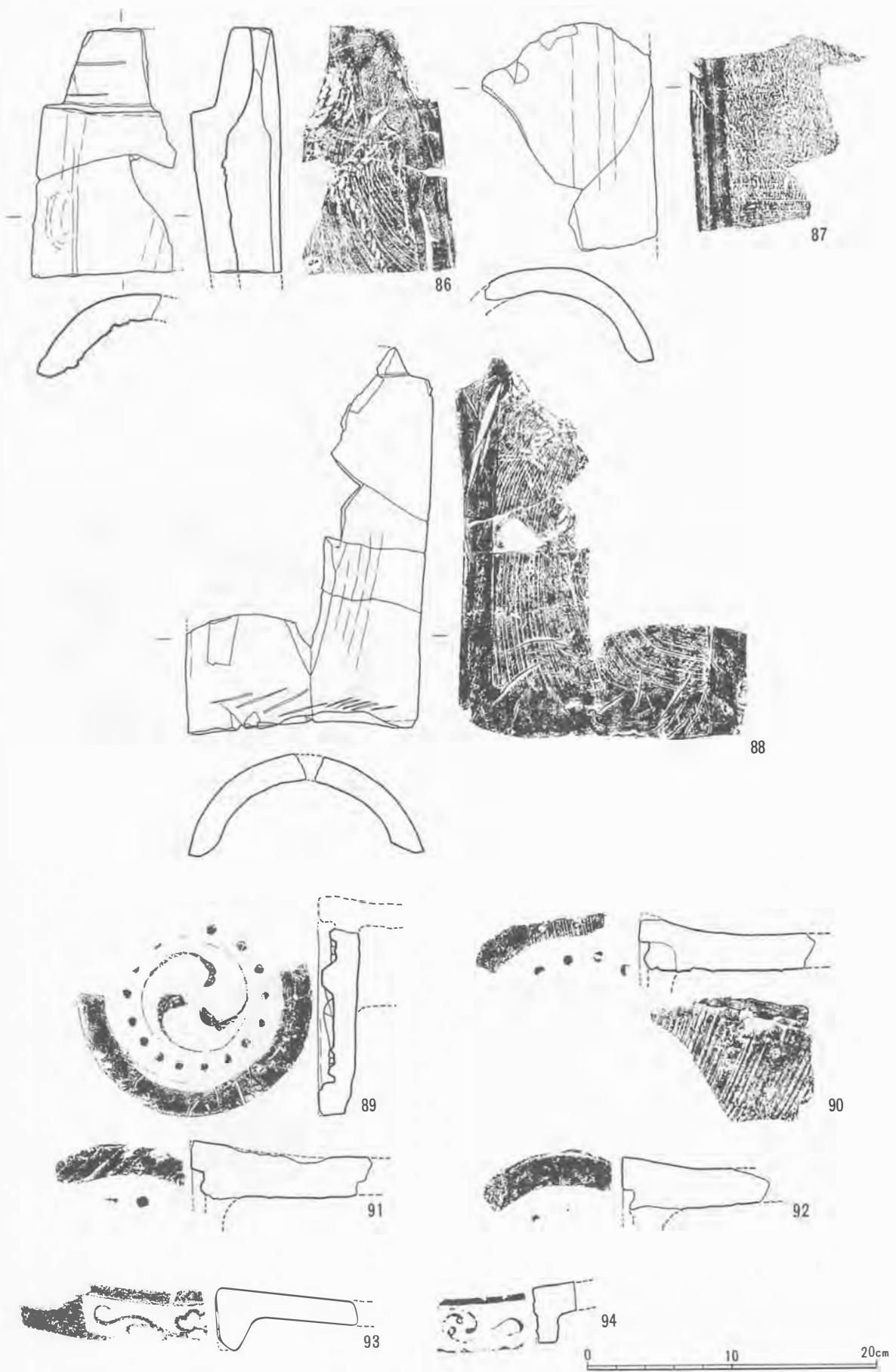


0 10 20cm

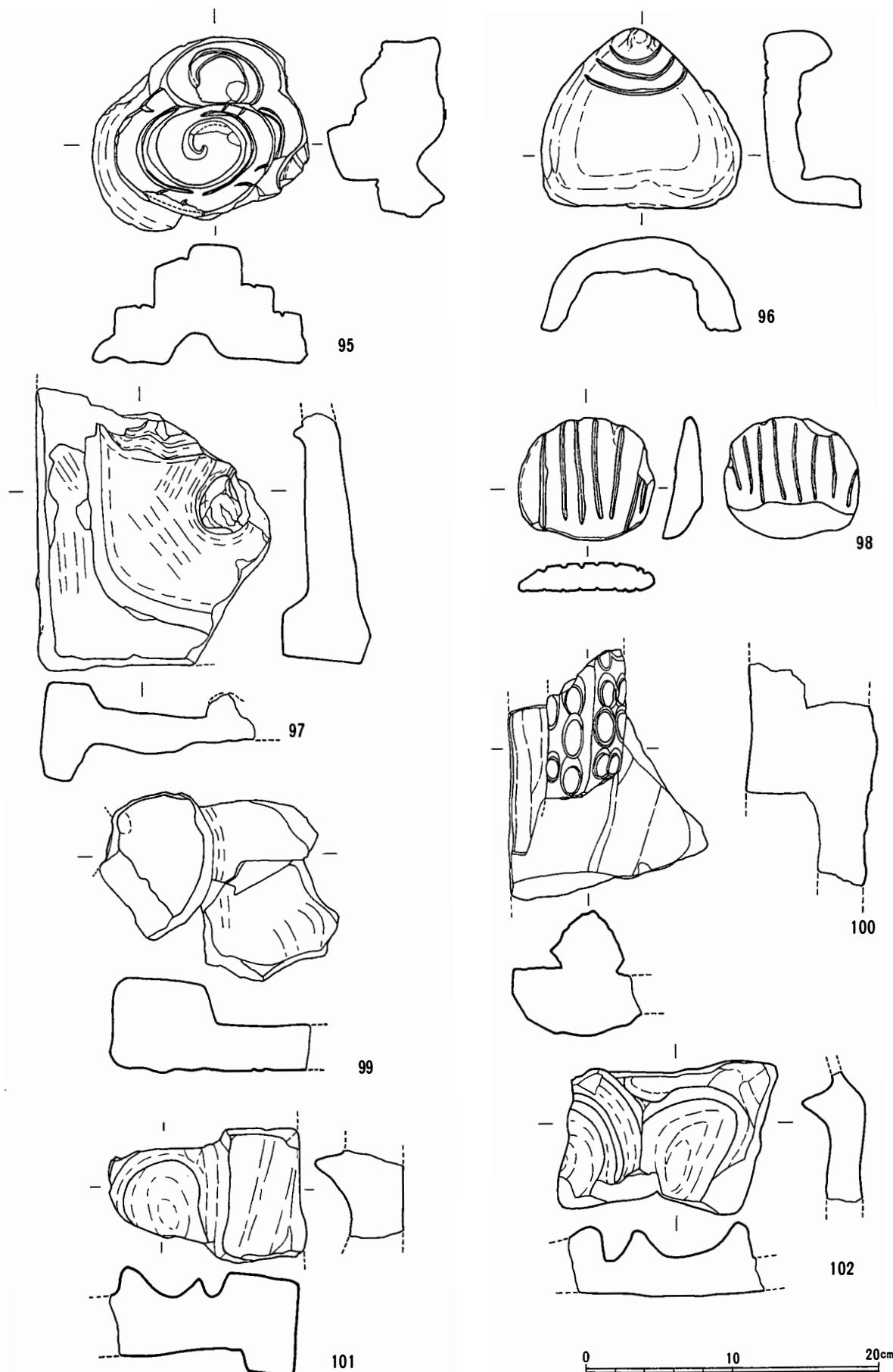
第28図 1号堀出土遺物実測図(9)



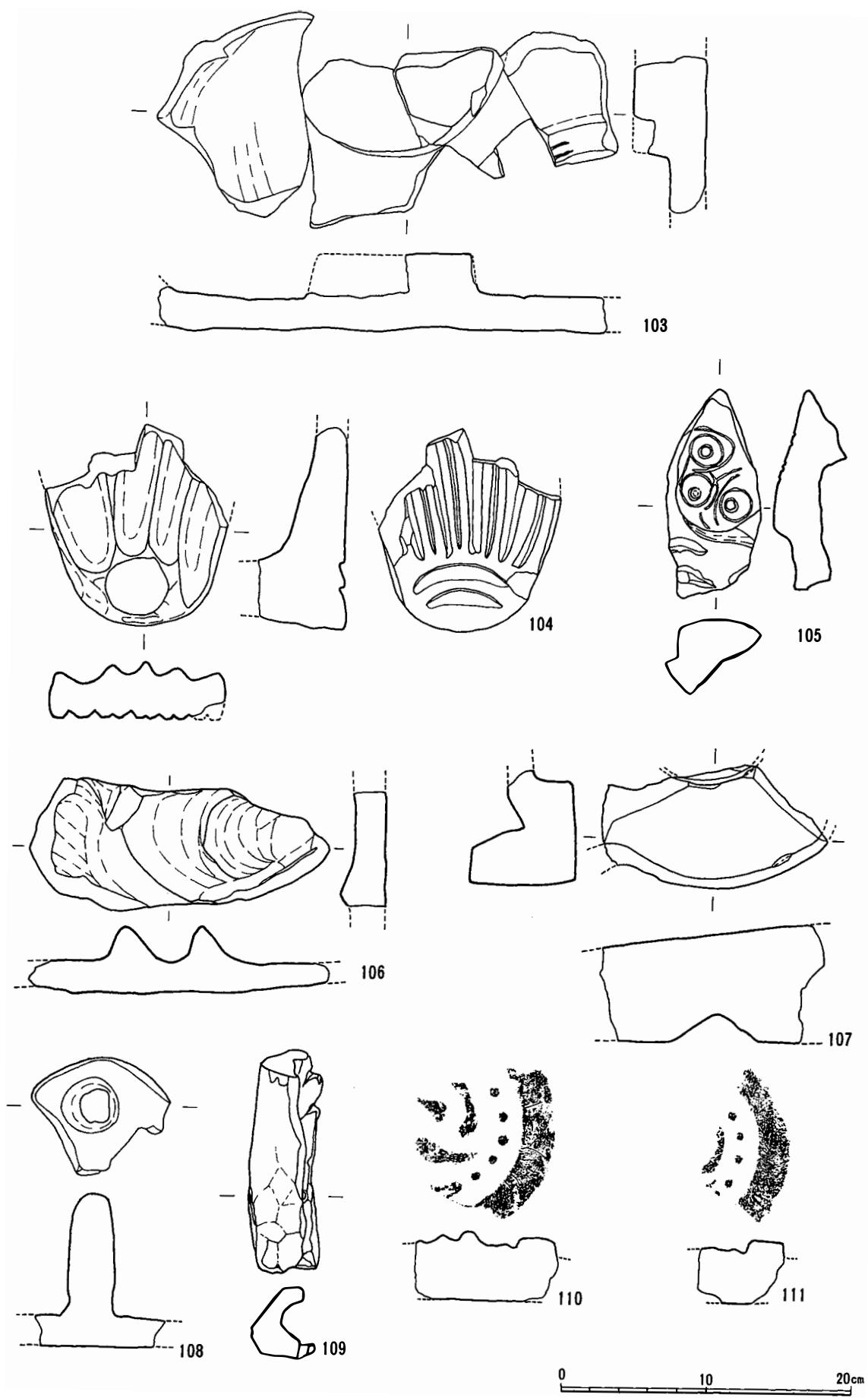
第29図 1号堀出土遺物実測図(10)



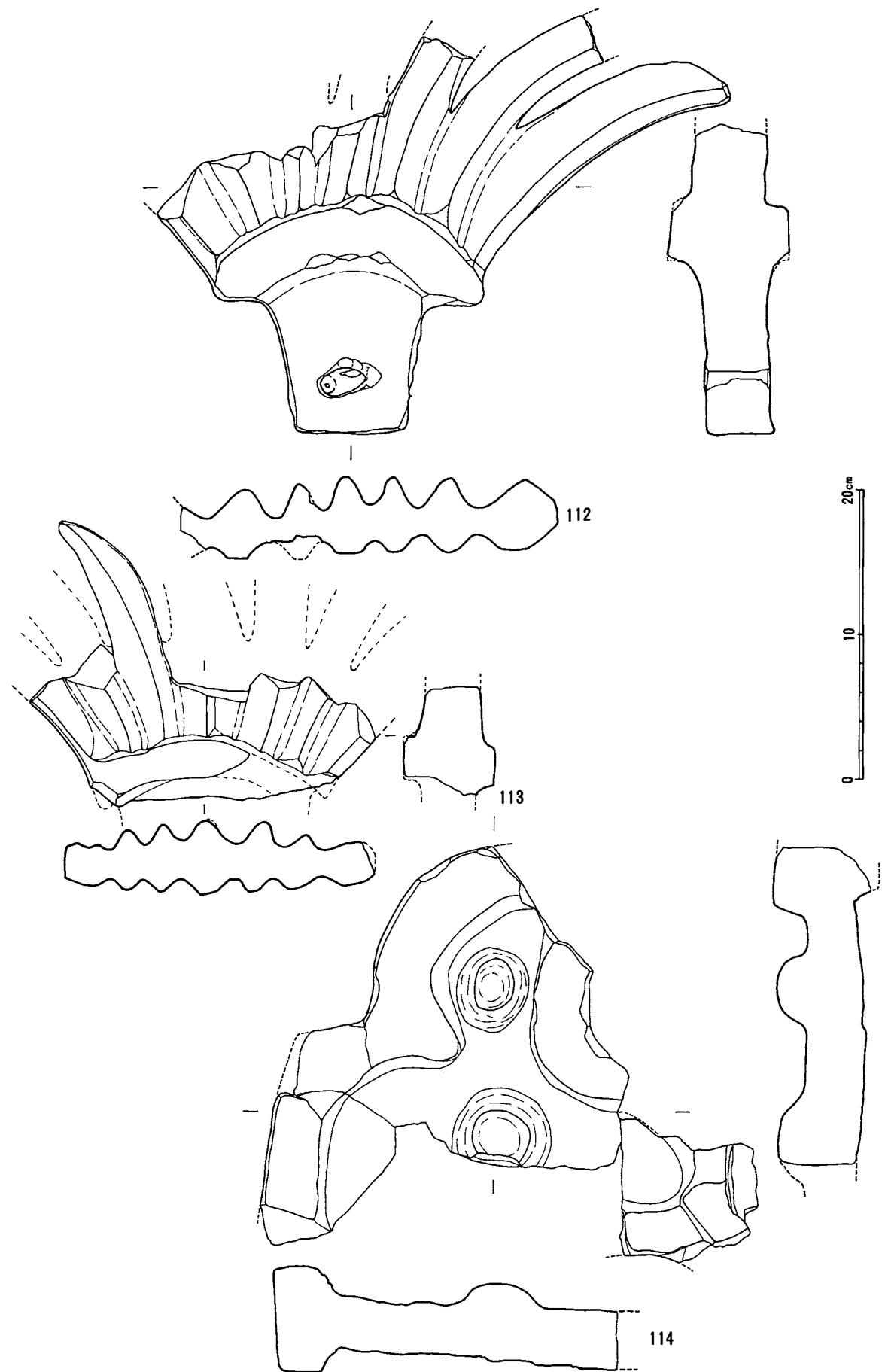
第30図 1号堀出土遺物実測図(11)



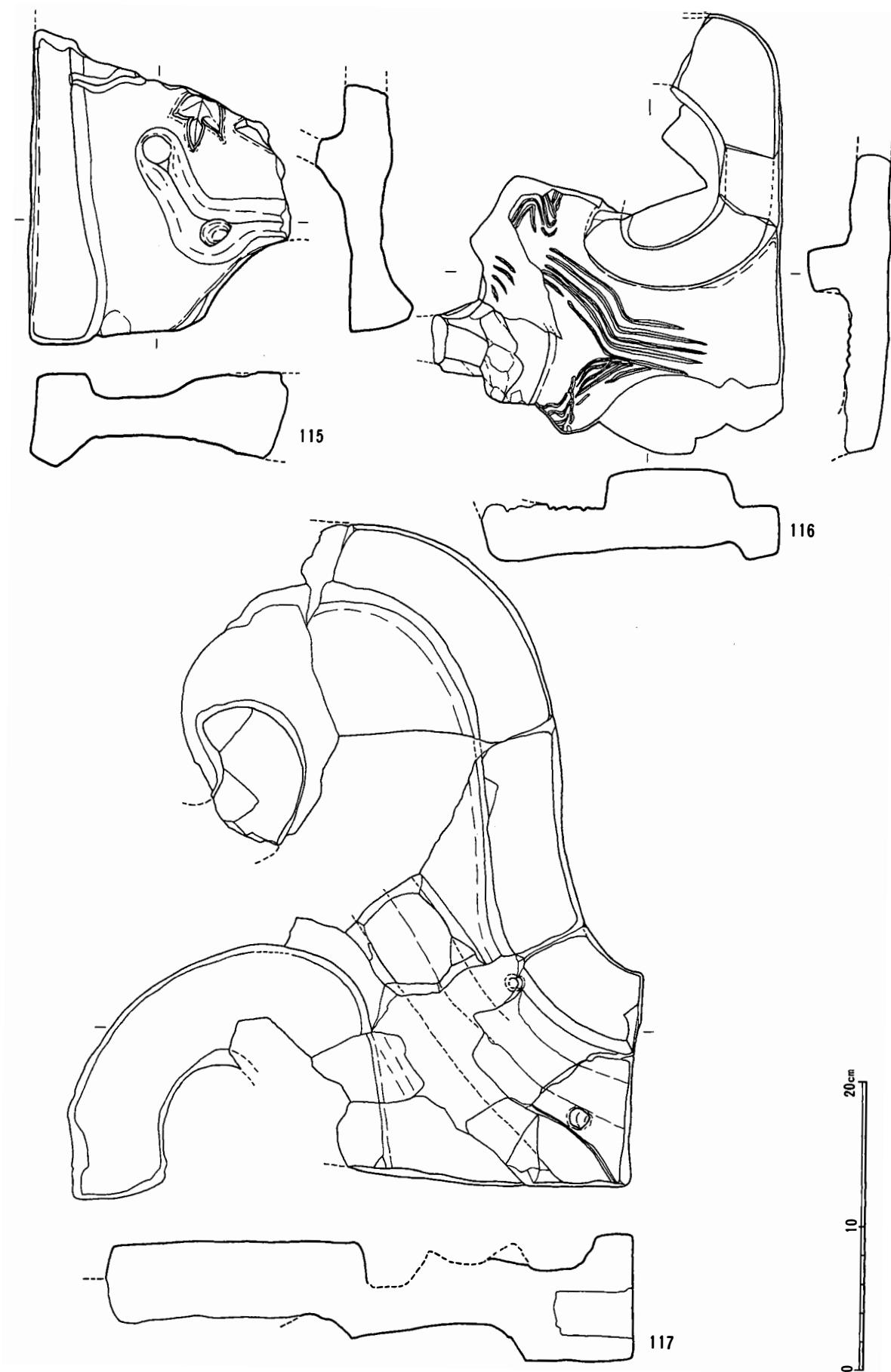
第31図 1号堀出土遺物実測図(12)



第32図 1号堀出土遺物実測図(13)



第33図 1号堀出土遺物実測図(14)



第34図 1号塚出土遺物実測図(15)

第2表 1号堀出土遺物観察表(1)

No	種別	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
14	土師器	壺	口径-(12.5cm) 底径-(8.0cm) 器高-3.0cm	口縁部はやや外反し、口唇部 は丸みを持つ 底部から体部にかけて段を持 つ	底部はへら切り	胎土-微砂粒を含 む 焼成-不良 色調-にぶい橙色	1号堀 一括
15	土師器	壺	口径-不明 底径-7.2cm 器高-不明	底部はほぼ平ら 底部のみ残存	底部は糸切り、内面底部はナデ	胎土-微砂粒を含 む 焼成-不良 色調-にぶい橙色	1号堀 下層
16	土師器	壺	口径-不明 底径-4.5cm 器高-不明	底部中央はくぼむ 底部のみ残存	底部は糸切りか、内面底部はナデ	胎土-微砂粒を含 む 焼成-やや良 色調-浅黄橙色	1号堀 下層
17	土師器	壺	口径-不明 底径-4.5cm 器高-不明	口縁部はやや外反し、口唇部 は丸みを持つ 底部はほぼ平ら 底部から体部にかけて段を持 つ	底部は糸切り、内面底部はナデ	胎土-微砂粒を含 む 焼成-良 色調-橙色	1号堀 下層
18	土師器	壺	口径-7.0cm 底径-4.2cm 器高-2.5cm	口縁部はやや外反し、口唇部 は丸みを持つ 底部はほぼ平ら 底部から体部にかけて段を持 つ	底部は糸切り、体部内外面及び内面底部はナデ	胎土-砂粒を含む 焼成-やや良 色調-橙色	1号堀 下層
19	土師器	壺	口径-7.5cm 底径-4.0cm 器高-2.3cm	口縁部はやや内湾し、口唇部 は丸みを持つ 底部はややくぼみ 底部から体部にかけて段を持 つ	底部は糸切り、体部内外面及び内面底部はナデ	胎土-微砂粒を含 む 焼成-やや良 色調-橙色	1号堀 下層
20	土師器	壺	口径-(11.2cm) 底径-(4.0cm) 器高-2.9cm	口縁部はやや内湾し、口唇部 はとがる 底部は平ら、内面底はくぼむ 底部から体部にかけて段を持 つ	磨耗等がひどく、調整等は不明	胎土-密 焼成-不良 色調-にぶい橙色	1号堀 一括
21	土師器	壺	口径-(11.6cm) 底径-(6.8cm) 器高-3.6cm	口縁部は直線的にのび、口唇 部は丸みをおびる 底部は中央はくぼむ 内面底はほぼ平ら	磨耗等がひどく、調整等は不明	胎土-微砂粒を少 量含む 焼成-不良 色調-橙色	1号堀 下層
22	土師器	壺	口径-不明 底径-(7.9cm) 器高-不明	底部から体部にかけてのみ残 存 底部中央はやくぼむ 内面底はほぼ平ら	底部は糸切り、内外面はナデ	胎土-砂粒を含む 焼成-やや良 色調-にぶい橙色	1号堀 一括
23	土師器	壺	口径-不明 底径-7.0cm 器高-不明	底部のみ残存 底部中央はやくぼむ 内面底もやくぼむ	磨耗等がひどく、調整等は不明	胎土-微砂粒を含 む 焼成-不良 色調-にぶい黄橙	1号堀 一括
24	土師器	壺	口径-不明 底径-6.0cm 器高-不明	底部のみ残存 底部中央はやくぼむ 底部から体部にかけてはゆる やか	磨耗等がひどく、調整等は不明	胎土-微砂粒を含 む 焼成-不良 色調-にぶい橙色	1号堀 一括
25	土師器	壺	口径-不明 底径-6.6cm 器高-不明	底部のみ残存 底部中央はやくぼむ 底部から体部にかけて段を持 つ	磨耗等がひどく、調整等は不明	胎土-密 焼成-不良 色調-浅黄色	1号堀 一括
26	土師器	壺	口径-不明 底径-6.6cm 器高-不明	底部のみ残存 底部はほぼ平ら 底部から体部にかけてはゆる やか	磨耗等がひどく、調整等は不明	胎土-微砂粒を含 む 焼成-不良 色調-にぶい橙色	1号堀 下層
27	土師器	壺	口径-不明 底径-6.3cm 器高-不明	底部のみ残存 底部はほぼ平ら 底部から体部にかけてはゆる やか	磨耗等がひどく、調整等は不明	胎土-砂粒を少量 含む 焼成-不良 色調-にぶい橙色	1号堀 一括
28	土師器	壺?	口径-不明 底径-5.2cm 器高-不明	底部のみ残存 底部中央は薄くなる 底部から体部にかけてはゆる やか	磨耗等がひどく、調整等は不明	胎土-密 焼成-不良 色調-橙色	1号堀 一括
29	土師器	壺	口径-不明 底径-5.7cm 器高-不明	底部のみ残存 底部中央はややもりあがる 底部から体部にかけてはゆる やか	磨耗等がひどく、調整等は不明	胎土-微砂粒を少 量含む 焼成-不良 色調-浅黄色	1号堀 一括
30	青磁	碗	法量不明	高台部から体部にかけて残存	内面に文様を持つが、文様形態は不明	胎土-密 焼成-良 色調 胎土-灰白色 釉-オリーブ黄	1号堀 中層

第3表 1号堀出土遺物観察表(2)

No	種別	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
31	陶器	火鉢	内口径-14.5cm 外口径-19.9cm 底径-(16.9cm) 器高-8.2cm	口縁部は鋭く内側に折れる 全体的に歪んでおり、平面形 は梢円形を呈する 脚は2個残存するが、3個あ ったと推定される	脚ははりつけ、ナデ、釉を施す	胎土-密 焼成-良 色調 胎土-弁柄色 釉-オリーブ茶	1号堀 一括
32	瓦器	火舎	口径-不明 底径-34.4cm 器高-不明	大型の火舎で体部上位は欠損 3個の脚を持ち、その高さは 約2cm 体部の下位に1本の突帯を持つ	脚ははりつけ、全面に丁寧なナデを施す	胎土-密 焼成-良 色調-にぶい黄橙 色	1号堀 下層
33	瓦器	火舎	口径-不明 底径-18.2cm 器高-不明	大型の火舎で体部上位は欠損 3個の脚を持ち、その高さは 約1.3cm 体部の下位に1本の突帯を持つ	脚ははりつけ 全面に丁寧なナデを施す	胎土-密 焼成-良 色調 内面-にぶい黄 橙色 外面-灰褐色	1号堀 下層
34	瓦器	火舎	口径-不明 底径-28.8cm 器高-不明	大型の火舎で体部上位は欠損 3個の脚を持ち、その高さは 約2.4cm 体部の下位に1本の突帯を持つ	脚ははりつけ 外面はミガキ、内面はナデ	胎土-砂粒を含む 焼成-やや良 色調-橙色	1号堀 一括
35	瓦器	鉢	口径-(34.8cm) 底径-(14.2cm) 器高-30.5cm	大型の鉢で平面形態は梢円形 を呈する 口唇部は平らで水平、体部下 位がややふくらむ	外面はミガキ、内面はナデ	胎土-密 焼成-やや良 色調-黒灰色	1号堀 一括
36	瓦器	鉢	口径-(34.4cm) 底径-(28.0cm) 器高-13.9cm	大型の鉢で体部はほぼ垂直に 立ち上がる 口唇部は平らで水平、底部は 平ら	体部の内外面及び口唇部と底部から体部にかけ ての部分はヘラケズリ 内面底部はナデ及び押圧	胎土-密 焼成-やや良 色調-灰色	1号堀 下層
37	瓦器	盤?	口径-(35.4cm) 底径-(33.3cm) 器高-40cm (脚を除く)	大型の器で浅く、口縁部は丸 みをおびる 底部には脚の痕跡がみられる がその個数は不明	体部の内外面及び口唇部と底部から体部にかけ ての部分はヘラケズリ 内面底部はナデ及び押圧	胎土-密 焼成-やや良 色調-灰色	1号堀 下層
38	瓦器	火舎	口径-(43.4cm) 底径-不明 器高-不明	大型の火舎で形態は長胴、口 縁部よりやや下位に最大径を 持つ 体部の上位に2条、中位に2 条の突帯を持つ	全面にわたりナデ調整を施す 口縁部と上位突帯の間に縱方向に連続した棒状 のスタンプを、上位の突帯の間に2個セットの 菊花文のスタンプ、中位の突帯の間に等間隔に 1個ずつの菊花文のスタンプを施す	胎土-微砂粒を含 む 焼成-やや良 色調-灰褐色	1号堀 下層
39	瓦器	火舎	口径-(43.4cm) 底径-不明 器高-不明	大型の火舎で形態は丸みをお び、口縁部よりやや下位に最 大径を持つ 体部の上位に1条、中位に1 条の突帯を持つ	全面にわたりナデ調整を施し、内面には煤が付 着している。口縁部と上位の突帯の間に2個セ ットの菊花文のスタンプを施す	胎土-微砂粒を含 む 焼成-やや良 色調-にぶい黄橙 色	1号堀 下層
40	瓦器	火舎	口径-(45.6cm) 底径-不明 器高-不明	大型の火舎で口縁部が残存形 態は丸みをおび口縁部よりや や下位に最大径を持つ体部の 上位に1条の突帯を持つ	全面にわたりナデ調整を施し、口縁部と上位の 突帯の間に2個セットの菊花文のスタンプを施す	胎土-密 焼成-不良 色調-灰白色	1号堀 下層
41	瓦器	火舎	胴径-(39.2cm) 底径-不明 器高-不明	大型の火舎で体部が残存体部 に2条の突帯を持つ	丁寧なナデ調整を施し、突帯の間に2個セ ットの菊花文のスタンプを施す	胎土-密 焼成-良 色調-灰褐色	1号堀 下層
42	瓦器	火舎	口径-不明 底径-不明 器高-不明	大型の火舎で底部および口縁 部を欠損する 体部は下位より上位にかけて やや内窪しながら立ち上がる 体部中位および下位2条の突 帯を持つ	全面にわたりナデ調整を施し、上位の突帯の上 部に×の連続スタンプ、その下位に4本セ ットの棒状のスタンプ、下部の2本の突帯の間に菊 花文のスタンプを施す	胎土-砂粒を含む 焼成-やや良 色調-にぶい橙色	1号堀 下層
43	瓦器	火舎	法量不明	口縁部の破片 口縁部の下位に1条の突帯を 持つ	ナデ調整を施し、口縁部と突帯の間に2個セ ットの菊花文のスタンプを施す	胎土-微砂粒を含 む 焼成-良 色調-にぶい橙色	1号堀 下層
44	瓦器	火舎	法量不明	口縁部の破片 口縁部の下位に1条の突帯を 持つ	ナデ調整を施し、口縁部と突帯の間に連続の菊 花文のスタンプを施す	胎土-砂粒を含む 焼成-良 色調-にぶい橙色	1号堀 下層
45	瓦器	火舎	法量不明	口縁部の破片、口縁部の下位 に1条の突帯を持つ	ナデ調整を施し、口縁部と突帯の間に菊花文の スタンプを施す、色調はにぶい黄橙色	胎土-砂粒を含む 焼成-良	1号堀 下層
46	瓦器	火舎	法量不明	口縁部の破片 口縁部の下位に1条の突帯を 持つ	ナデ調整を施し、口縁部と突帯の間に連続の菊 花文のスタンプを施す	胎土-砂粒を含む 焼成-良 色調-灰白色	1号堀 下層
47	瓦器	火舎	法量不明	体部の破片 上位に2条の突帯、下位にも 2条の突帯を持つ	ナデ調整を施し、上位の突帯の間に4本セ ットの棒状のスタンプを、下位の突帯の間には菊 花文のスタンプを施す	胎土-砂粒を含む 焼成-良 色調-黒褐色	1号堀 下層

第4表 1号堀出土遺物観察表(3)

No	種別	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
48	瓦器	火舍	法量不明	口縁部から体部の破片 上位に1条の突帯を持つ	ナデ調整を施し、口縁部と上位の突帯の間に笹文の連続したスタンプを施す	胎土-砂粒を含む 焼成-良 色調-にぶい黄橙	1号堀下層
49	瓦器	火舍	法量不明	口縁部から体部の破片 上位に2条の突帯を持つ	ナデ調整を施し、口縁部と上位の突帯の間に連続したX状のスタンプを、突帯の間には4本セットの棒状のスタンプを施す	胎土-微砂粒を含む 焼成-良 色調-褐灰色	1号堀下層
50	瓦器	火舍	法量不明	口縁部から体部の破片 上位に2条の突帯を持つ	ナデ調整を施し、口縁部と上位の突帯の間に連続したX状のスタンプを、突帯の間には菊花文のスタンプを施す	胎土-微砂粒を含む 焼成-良 色調-にぶい橙色	1号堀下層
51	瓦器	すり鉢	法量不明	口縁部から体部の破片 体部はわずかに内湾しながら開く	内面はナデ調整の後6本セットの沈線を下から右上方に向かって施す 外面は指頭による押圧およびナデを施す	胎土-密 焼成-良 色調-にぶい橙色	1号堀下層
52	瓦器	すり鉢	法量不明	底部から体部にかけての破片	内面はナデ調整の後5本セットの沈線を下から右上方に向かって施す 外面は指頭による押圧である	胎土-密 焼成-やや良 色調-褐灰色	1号堀一括
53	瓦器	すり鉢	法量不明	底部から体部にかけての破片 体部はほぼ直線的に開く	内面はナデ調整の後6本セットの沈線を下から上方に向かって施す 外面は指頭による押圧である 外面は指頭による粗い押圧である	胎土-密 焼成-やや良 色調-内面-黒褐色 外面-にぶい黄橙	1号堀一括
54	瓦器	すり鉢	法量不明	口縁部から体部にかけての破片 口縁部は内湾し尖り気味	内面はハケ目調整の後細い5本セットの沈線を下から上方に向かって施す 外面はナデによる調整を施す	胎土-密 焼成-良 色調-灰色	1号堀一括
55	瓦器	すり鉢	底径-11.8cm 他不明	底部から体部にかけての破片で、底部は薄く、体部は急に厚みを増す	内面は太い5本セットの沈線を下から上方に向かって施す 外面は押圧とナデによる調整を施す	胎土-密 焼成-やや良 色調-黄灰色	1号堀下層
56	瓦器	火舍	法量不明	口縁部から体部の破片 上位に1条の突帯を持つ	ナデ調整を施し、口縁部と上位の突帯の間に連続もしくは2個セットの菊花文のスタンプを施し、内面に煤が付着する	胎土-砂粒を含む 焼成-良 色調-黄灰色	1号堀下層
57	瓦器	火舍	法量不明	口縁部から体部の破片上位に1条の突帯を持つ	ナデ調整を施し、口縁部と上位の突帯の間に2個セットの菊花文のスタンプを施す	胎土-砂粒を含む 焼成-良 色調-灰白色	1号堀中層
58	瓦器	火舍	法量不明	口縁部から体部の破片上位に1条の突帯を持つ	ナデ調整を施し、口縁部と上位の突帯の間に2個セットもしくは連続の菊花文のスタンプを施す	胎土-砂粒を含む 焼成-良 色調-黄灰色	1号堀一括
59	瓦器	火舍	法量不明	口縁部から体部の破片	ナデ調整を施し、口縁部の下位に連続のXのスタンプを施す	胎土-砂粒を含む 焼成-良 色調-にぶい黄橙	1号堀下層
60	瓦器	すり鉢	口径-(35.4cm) 底径-不明 器高-不明	体部はわずかに内湾しながら立ち上がり、厚さは不均一 口唇部の中央がくぼむ	内面は斜め方向のナデ調整の後7本セットの沈線を下から上方に向かって施す 外面はナデ及び指頭による押圧である	胎土-密 焼成-良 色調-灰色	1号堀下層
61	瓦器	すり鉢	口径-(28.4cm) 底径-不明 器高-不明	体部はわずかに内湾しながら立ち上がり、厚さは不均一 口唇部の中央がややくぼむ	内面はナデ調整の後6本セットの沈線を下から右上方に向かって施す 外面はナデ及び指頭による押圧である	胎土-密 焼成-やや良 色調-灰白色	1号堀下層
62	瓦器	すり鉢	口径-20.6cm 底径-11.0cm 器高-9.4cm	体部はほぼ直線的に開き、底部は平らである 口唇部は内面によりやや尖る	内面は剥離がひどく、沈線の数は不明であるが1本の太い沈線が等間隔で確認できる 外面はナデ及び指頭による押圧である	胎土-密 焼成-やや良 色調-灰白色	1号堀上層
63	瓦器	すり鉢	口径-(22.0cm) 底径-不明 器高-不明	体部はほぼ直線的に開き、厚さは不均一である 口唇部は平である	内面は工具による波状のナデの後、6本セットの沈線を施す、外面はナデ調整である	胎土-砂粒を含む 焼成-良 色調-にぶい褐色	1号堀一括
64	瓦器	羽釜	口径-不明 底径-(8.2cm) 器高-不明	器形は全体に偏平で、厚い錫はほぼ水平につく 底部はほぼ平らである	外面はヘラけずり、内面は粗いナデを施す	胎土-密 焼成-良 色調-にぶい赤褐色	1号堀一括
65	瓦器	羽釜	口径-(15.6cm) 底径-不明 器高-(10.3cm)	器形は全体に丸みをおび、錫はほぼ水平につく 底部はほぼ平らであろう	外面は丁寧なナデ、胴部内面は多方向の粗いナデ、底部付近には煤が付着する。	胎土-砂粒を含む 焼成-良 色調-黒灰 錫下は茶褐色	1号堀下層
66	瓦器	壺	口径-(15.0cm) 底径-不明 胴最大幅-(24.8cm)	形態は球形で、口縁部は短く外反する 底部は欠損	外面は格子目のタタキ、内面は丁寧な横ナデ	胎土-密 焼成-不良 色調-にぶい橙色	1号堀下層
67	瓦器	鉢?	口径-不明 底径-22.2cm 器高-不明	底部から体部にかけてが残存 底部はややくぼむ	底部ははりつけ、体部は押圧及びナデ調整	胎土-密 焼成-良 色調-黄灰色	1号堀下層
68	瓦器	火舍	口径-不明 底径-不明 器高-不明	口縁部から体部にかけての破片、体部上位に2条の突帯を持つ	口縁部と突帯の間はXの連続したスタンプ、突帯の間には4本セットの棒状のスタンプ 内外面はナデ調整を施す	胎土-密 焼成-良 色調-褐灰色	1号堀下層

第5表 1号堀出土遺物観察表(4)

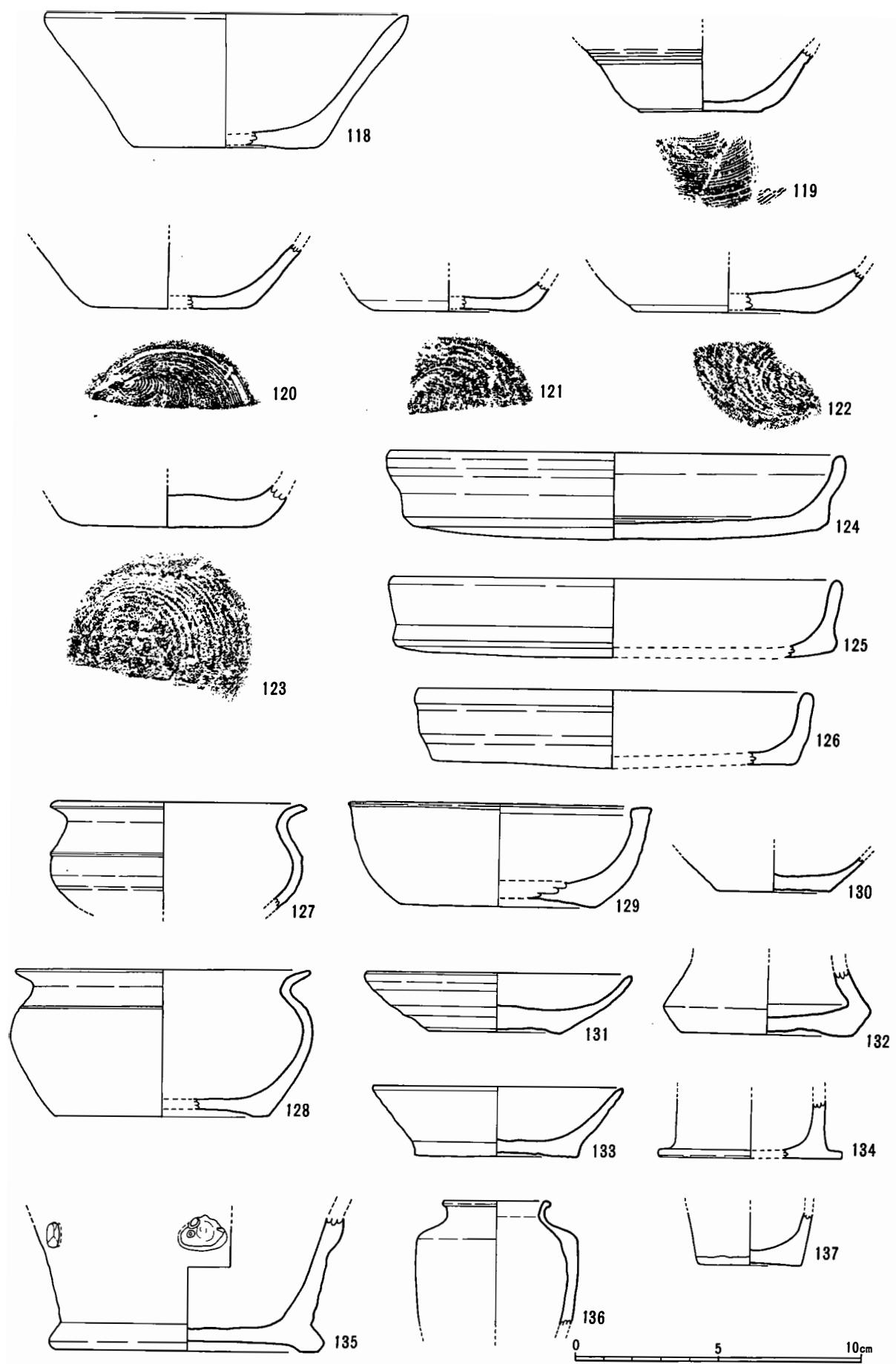
No	種別	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
69	瓦器	杓子	把手径-3.0cm 孔径-2.0cm	柄差しみ部が残存 柄差しみ孔は先細り	柄差しみ部分はケズリ、杓部分はナデ	胎土-砂粒を含む 焼成-良 色調-褐色	1号堀一括
70	瓦器	浅鉢	口径-(28.6cm) 底径-(17.6cm) 器高-5.0cm	底部は平ら、口縁部はゆるやかに内湾して立ち上がり、口唇部はとがる 体部の厚さは不均一	器面全体にナデ調整を施す	胎土-微砂粒を含む 焼成-良 色調-褐色	1号堀上層
71	瓦器	浅鉢	口径-(17.5cm) 底径-(11.8cm) 器高-3.8cm	底部は平ら、口縁部はゆるやかに内湾して立ち上がり、口唇部は丸みをおびる 口縁部に比べ底部は厚い	器面全体にナデ調整を施す	胎土-密 焼成-良 色調-灰色	1号堀下層
72	瓦器	不明	口径-不明 底径-(15.1cm) 器高-不明	胴径は上部にいくにしたがい短くなる 底部には4ヶ所に2段の脚を持つ	器面全体に丁寧なナデ調整を施す	胎土-密 焼成-良 色調-浅黄色	1号堀下層
73	瓦器	火舍	口径-不明 底径-不明 器高-不明	底部には脚をもち、すぐ上位に突帯を持つ 体部から底部にかけて内面の部分が厚くなる	器面全体に丁寧なナデ調整を施す	胎土-密 焼成-良 色調-黄灰色	1号堀下層
74	瓦器	羽釜	口径-不明 底径-不明 器高-不明	底部は平らと推定される 底部より鍔までの体部は直線的	鍔より下位には煤が付着 内面は強いナデ、外面は丁寧なナデ調整	胎土-砂粒を含む 焼成-良 色調-灰黄褐色 内面は褐色	1号堀中層
75	瓦器	壺	口径-不明 底径-不明 器高-不明	口縁部は丸く短く外反する 肩部は角張る	全体的に丁寧なナデ	胎土-密 焼成-良 色調-黒灰色	1号堀下層
76	瓦	平瓦	縱幅-不明 横幅-不明 厚さ-1.9cm前後	厚さは中央部がわずかに厚い 側辺は垂直 凹面に「八代藤」の刻印	凹凸面及び側面は丁寧なナデ	胎土-密 焼成-良 色調-黒灰色	1号堀一括
77	瓦	平瓦	縱幅-不明 横幅-不明 厚さ-1.8cm	厚さはほぼ均一 側辺は垂直 凹面に「八代伊」の刻印	凹凸面は丁寧なナデ	胎土-密 焼成-良 色調-灰色	1号堀一括
78	瓦	平瓦	縱幅-不明 横幅-不明 厚さ-2.3cm	厚さはほぼ均一 側辺は垂直	凹凸面は丁寧なヘラによるナデ	胎土-密 焼成-良 色調-褐色	1号堀一括
79	瓦	丸瓦	全長-33.4cm 幅-不明 玉縁長-5.2cm 高さ-(7.2cm)	縦長	凹面は糸切り、紐の痕跡 凸面はヘラによるナデ	胎土-密 焼成-やや良 色調-暗灰色	1号堀一括
80	瓦	丸瓦	全長-不明 幅-不明 玉縁長-6.1cm 高さ-(7.0cm)		凹面は糸切り、紐の痕跡 凸面はヘラによるナデ 玉縁部は丁寧な横ナデ	胎土-密 焼成-やや良 色調-暗灰色	1号堀一括
81	瓦	丸瓦	全長-33.5cm 幅-16.2cm 玉縁長-6.5cm 高さ-7.5cm	大型	凹面は糸切り、紐の痕跡 凸面はヘラによる縦方向のナデ 玉縁部は丁寧な横ナデ	胎土-密 焼成-良 色調-黄灰色	1号堀一括
82	瓦	丸瓦	全長-不明 幅-17.8cm 玉縁長-不明 高さ-7.8cm	玉縁部は欠損 大型	凹面は糸切り、紐の痕跡 凸面はヘラによる多方向のナデ	胎土-密 焼成-良 色調-暗灰色	1号堀一括
83	瓦	丸瓦	全長-不明 幅-不明 玉縁長-不明 高さ-(7.2cm)	玉縁部及び下位を欠損	凹面は糸切り、紐の痕跡 凸面はヘラによる斜め方向のナデ	胎土-密 焼成-不良 色調-暗灰色	1号堀一括
84	瓦	丸瓦	全長-不明 幅-16.9cm 玉縁長-不明 高さ-8.8cm	上位及び玉縁部は欠損 ひじょうに厚い、歪みがはげしい	凹面は糸切り、紐の痕跡 凸面はヘラによる多方向のナデ	胎土-密 焼成-良 色調-暗灰色	1号堀一括
85	瓦	丸瓦	全長-不明 幅-不明 玉縁長-不明 高さ-(6.8cm)	体部の2分の1残存	凹面は糸切り、紐の痕跡 凸面はヘラによる多方向のナデ	胎土-密 焼成-良 色調-青灰色	1号堀一括
86	瓦	丸瓦	全長-不明 幅-不明 玉縁長-5.3cm 高さ-(6.2cm)	上位約4分の1残存 歪みがはげしい	凹面は糸切り、紐の痕跡 凸面はヘラによる多方向のナデ	胎土-密 焼成-良 色調-青灰色	1号堀一括
87	瓦	丸瓦	全長-不明 幅-不明 玉縁長-不明 高さ-(6.6cm)		凹面は鉄線引き、粗い疊表状の痕跡 凸面はヘラによる多方向のナデ	胎土-密 焼成-良 色調-黄灰色	1号堀一括

第6表 1号堀出土遺物観察表(5)

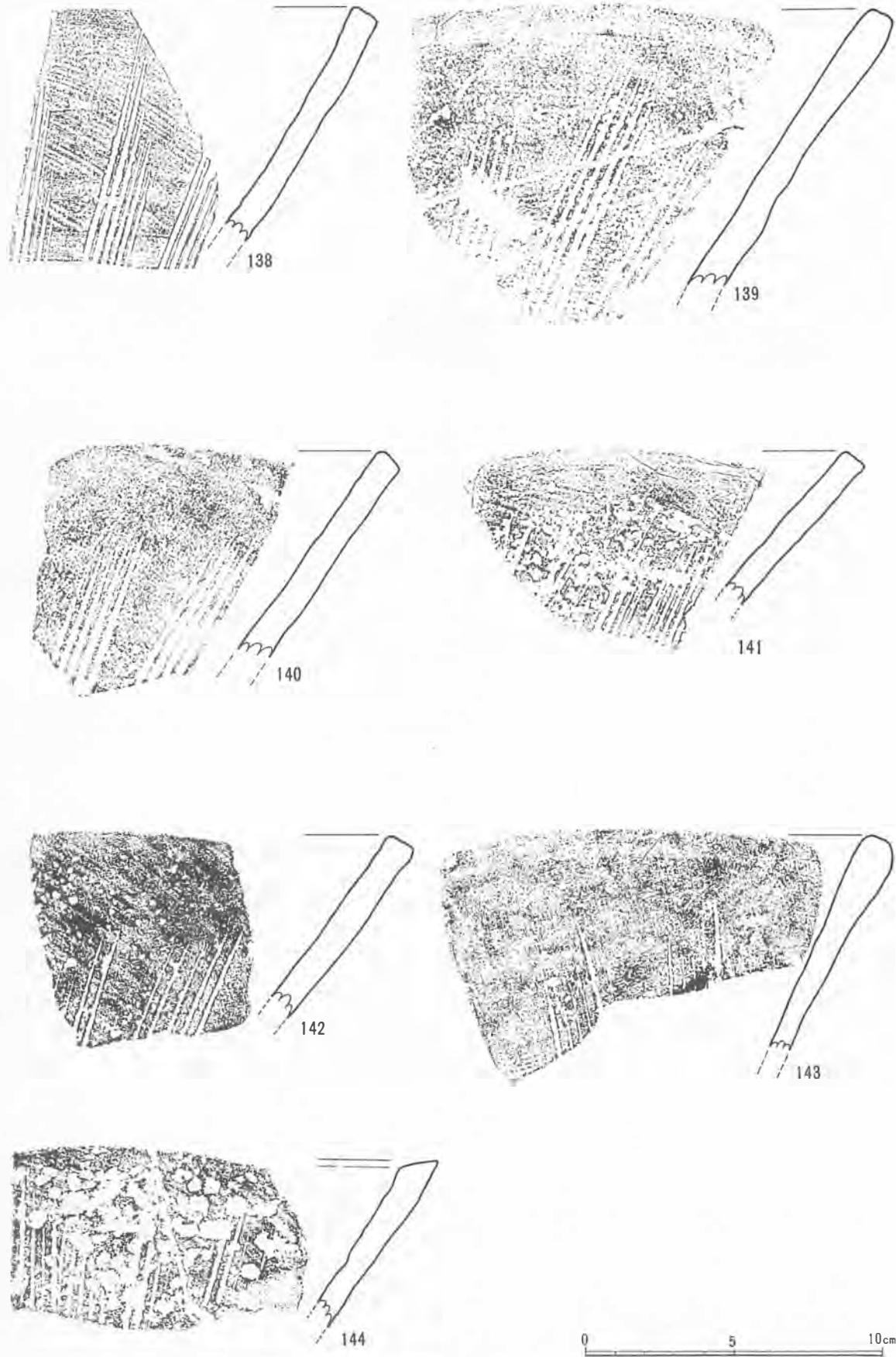
No	種別	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
88	瓦	丸瓦	全長－不明 幅－不明 玉縁長－不明 高さ－(7.9cm)	歪みがはげしい	凹面は糸切り、紐の痕跡 凸面はヘラによる多方向のナデ	胎土－砂粒を含む 焼成－良 色調－青灰色	1号堀 一括
89	瓦	軒丸瓦	瓦当径－15.7cm	歪みがはげしい	瓦当面の文様は三ツ巴(左) 珠文数は16個で、径は約1.0cm、巴の頭はやや角張り、尾は長くのび、次に接する	胎土－密 焼成－良 色調－黄灰色	1号堀 一括
90	瓦	軒丸瓦	厚さ－約2.5cm		瓦当面の文様は三ツ巴 珠文数は不明で、外面はヘラによるナデ、内面は糸切り、瓦当面は丁寧なナデ	胎土－密 焼成－良 色調－黒灰色	1号堀 一括
91	瓦	軒丸瓦	厚さ－約2.6cm		瓦当面の文様は三ツ巴 珠文数は不明で、外面はヘラによるナデ、内面は糸切り、瓦当面は丁寧なナデ	胎土－密 焼成－やや良 色調－黒灰色	1号堀 一括
92	瓦	軒丸瓦	厚さ－約2.5cm		瓦当面の文様は三ツ巴 珠文数は不明で、外面はヘラによるナデ	胎土－密 焼成－やや良 色調－黒灰色	1号堀 一括
93	瓦	軒平瓦	全長－不明 幅－不明 厚さ－2.5cm 垂の長さ－ (4.3cm)	瓦当面の文様は均整唐草文、 中心飾りは松、唐草は2転、 垂はほぼ垂直	瓦当面はナデによる調整、凹面は横方向のヘラ によるナデ、凸面は丁寧なナデ	胎土－密 焼成－不良 色調－灰白色	1号堀 一括
94	瓦	軒平瓦	全長－不明 幅－不明 厚さ－2.0cm 垂の長さ－ (4.0cm)	瓦当面の文様は均整唐草文、 中心飾りは三ツ巴、唐草の転回は不明、垂はやせりだす	瓦当面の接合はナデ、凹面は横方向のナデ、凸 面の調整は不明	胎土－密 焼成－良 色調－黒灰色	1号堀 一括
95	瓦	鬼瓦	法量不明	鬼瓦？の飾りの部分で、雲珠 を表現したものか	表面は丁寧なナデを施す 接合面には多数の沈線をもつ	胎土－密 焼成－良 色調－黒灰色	1号堀 一括
96	瓦	鬼瓦	法量不明	鬼瓦？の飾りの部分 三角形を呈し、内部は空洞、 図の底は接合面	表面は丁寧なナデを施し、上位に3条の沈線を もつ	胎土－密 焼成－良 色調－黒灰色	1号堀 一括
97	瓦	鬼瓦	法量不明	鬼瓦？の一部か 側面は厚くなる	表面及び表面は丁寧なナデによって仕上げる裏 面は粗い調整である	胎土－密 焼成－良 色調－暗灰色	1号堀 一括
98	瓦	鰐	法量不明	鰐のひれの部分で、平面ブラン は梢円形を呈し、両面に沈 線を施し、ひれを表現してい る	両面に沈線を施し、ひれを表現している調整は 丁寧なナデで、裏面に接合面をもつ	胎土－密 焼成－良 色調－暗灰色	1号堀 一括
99	瓦	鬼瓦	法量不明	形態及び部位等不明	表面はヘラによる丁寧なナデ調整	胎土－密 焼成－やや良 色調－暗灰色	1号堀 一括
100	瓦	鬼瓦	法量不明	形態及び部位等不明 龍の鱗を表現したものか	鱗は管状の工具で施文する その他は丁寧なナデ、飾りは接合	胎土－密 焼成－やや良 色調－灰色	1号堀 一括
101	瓦	鬼瓦	法量不明	形態及び部位等不明 裏面内部は薄くなる	表面は丁寧なナデ、飾りは接合	胎土－密 焼成－やや良 色調－灰色	1号堀 一括
102	瓦	鬼瓦	法量不明	形態及び部位等不明	表面は丁寧なナデ、飾りは接合	胎土－密 焼成－やや良 色調－灰色	1号堀 一括
103	瓦	鬼瓦	法量不明	形態及び部位等不明 板状の瓦に円盤状の飾りをの せる	表面は丁寧なナデ、飾りは接合	胎土－密 焼成－やや良 色調－暗灰色	1号堀 一括
104	瓦	鰐	法量不明	鰐のひれの部分か、先端部は 欠損 表裏面とも稜線をもつ	表面は丁寧なナデで、5本のひれを表現する	胎土－密 焼成－やや良 色調－灰色	1号堀 一括
105	瓦	鬼瓦	法量不明	形態及び部位等不明	二重の円と曲線を沈線で表現する 表面は丁寧なナデと押圧で調整する	胎土－密 焼成－やや良 色調－暗灰色	1号堀 一括
106	瓦	鬼瓦	法量不明	形態及び部位等不明 薄い板に2状の稜曲線を表現 する	表面は丁寧なナデ沈線で表現し、裏面は粗い多 方向のナデで調整する	胎土－密 焼成－やや良 色調－暗灰色	1号堀 一括
107	瓦	鬼瓦	法量不明	形態及び部位等不明 ひじょうに厚い	表面は丁寧なナデ沈線で表現し、裏面は粗い多 方向のナデで調整する	胎土－密 焼成－良 色調－暗灰色	1号堀 一括
108	瓦	鬼瓦	法量不明	形態及び部位等不明 薄い板に棒状の飾りが突出す る	表面及び側面は丁寧なナデ、裏面は粗いナデ	胎土－密 焼成－不良 色調－暗灰色	1号堀 一括

第7表 1号堀出土遺物観察表(6)

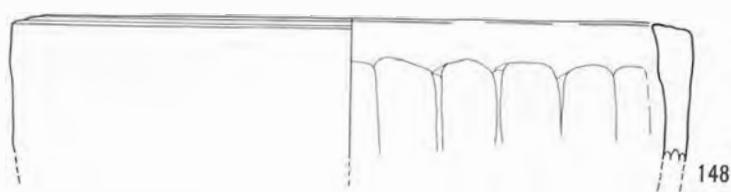
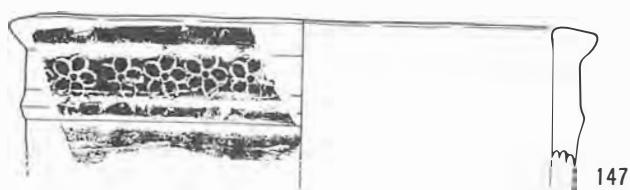
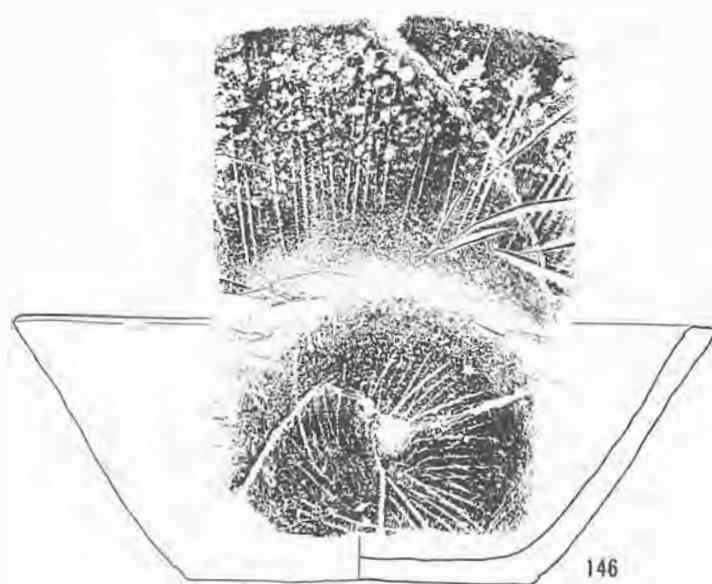
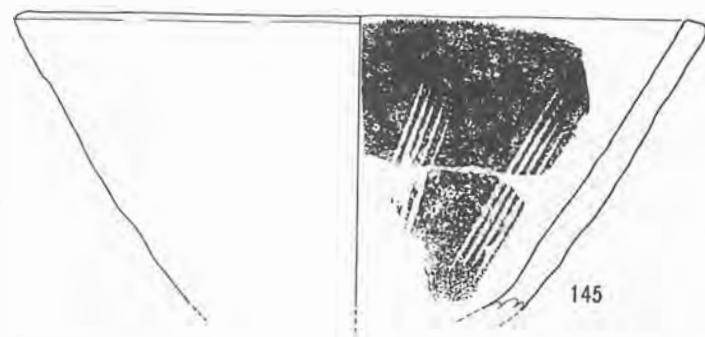
No	種別	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
109	瓦	鬼瓦	法量不明	形態及び部位等不明 1枚の板を折り曲げたような形態をもち、下方には釘孔が1個ある	表面はヘラ状の工具でケズリを施す 釘孔の径は約0.9cmである	胎土-密 焼成-やや不良 色調-暗灰色	1号堀一括
110	瓦	鬼瓦	法量不明	鬼瓦の飾りの一部で、厚い形態は円形の巴(左)、珠文数は不明 全体の形態は不明	表面はナデ調整、裏面もナデ調整	胎土-砂粒を含む 焼成-不良 色調-にぶい橙色	1号堀一括
111	瓦	鬼瓦	法量不明	鬼瓦の飾りの一部で、厚い形態は円形の巴(左)、珠文数は不明 全体の形態は不明	表面はナデ調整、裏面もナデ調整	胎土-砂粒を含む 焼成-不良 色調-にぶい黄橙	1号堀一括
112	瓦	鰐	ほぞ長-11.2cm	鰐の尾の部分で、7本のひれは扇状に大きく開く 基部にはほぞを持ち、固定のための孔を持つ	丁寧なナデによる調整	胎土-砂粒を含む 焼成-良 色調-灰色	1号堀下層
113	瓦	鰐	法量不明	鰐の尾の部分で、先端部及びほぞの部分は欠損、7本のひれは扇状に大きく開く	丁寧なナデによる調整	胎土-砂粒を含む 焼成-やや良 色調-灰色	1号堀下層
114	瓦	鬼瓦	法量不明	ひじょうに大型で厚く半球形の突起を持つ ひれは扇状に大きく開く	丁寧なナデによる調整、裏面は粗い押圧とナデ飾りはすべて張り付けてナデによる接合	胎土-密 焼成-良 色調-黒灰色	1号堀下層
115	瓦	鬼瓦	法量不明	ひじょうに大型で厚く、笠状の飾りを持つ 中央部は厚くなる	丁寧なナデによる調整、裏面は粗い押圧とナデ飾りはすべて張り付けてナデによる接合	胎土-密 焼成-やや良 色調-黒灰色	1号堀下層
116	瓦	鬼瓦	法量不明	ひじょうに大型で、渦状の飾りや突起を持ち、5本セットの沈線で文様を描く	丁寧なナデによる調整、裏面は粗い押圧とナデ飾りはすべて張り付けてナデによる接合	胎土-密 焼成-やや良 色調-灰色	1号堀下層
117	瓦	鬼瓦	法量不明	ひじょうに大型で厚く、渦状の飾りを持ち、右端下方にはほぞ孔をもち、釘孔が2箇所確認できる	丁寧なナデによる調整、裏面は粗い押圧とナデ飾りはすべて張り付けてナデによる接合	胎土-密 焼成-やや良 色調-灰色	1号堀下層



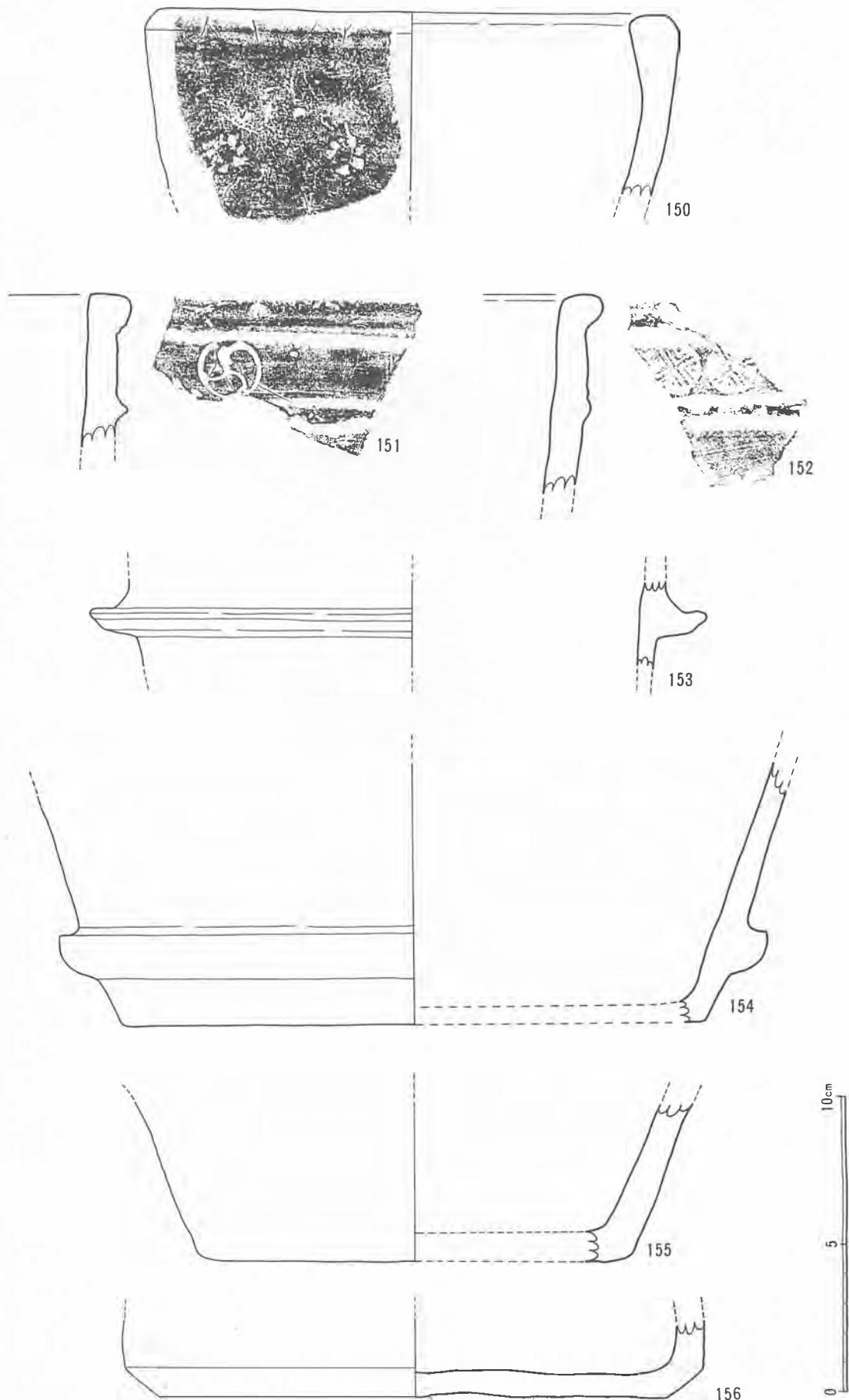
第35図 2号堀出土遺物実測図(1)



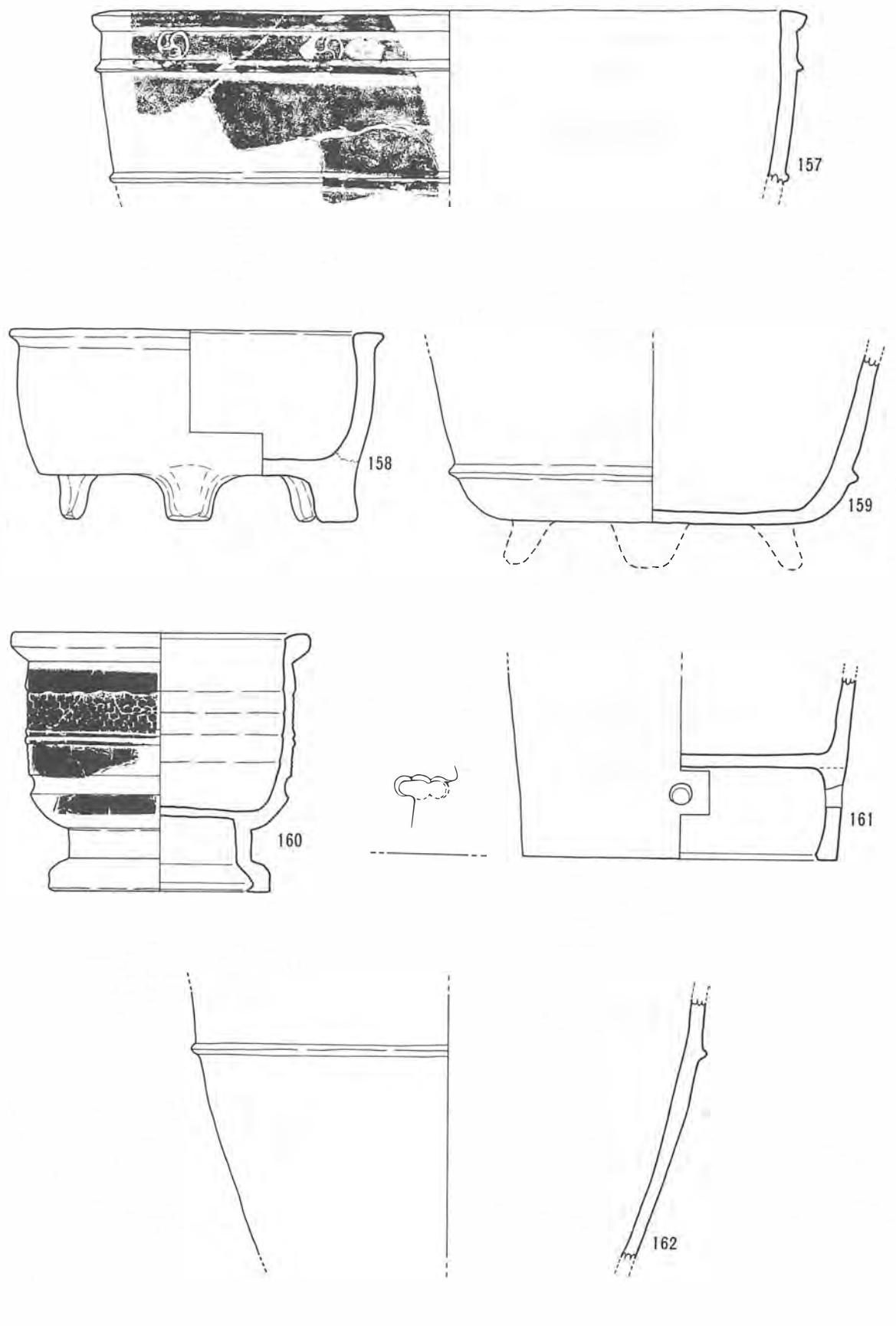
第36図 2号堀出土遺物実測図(2)



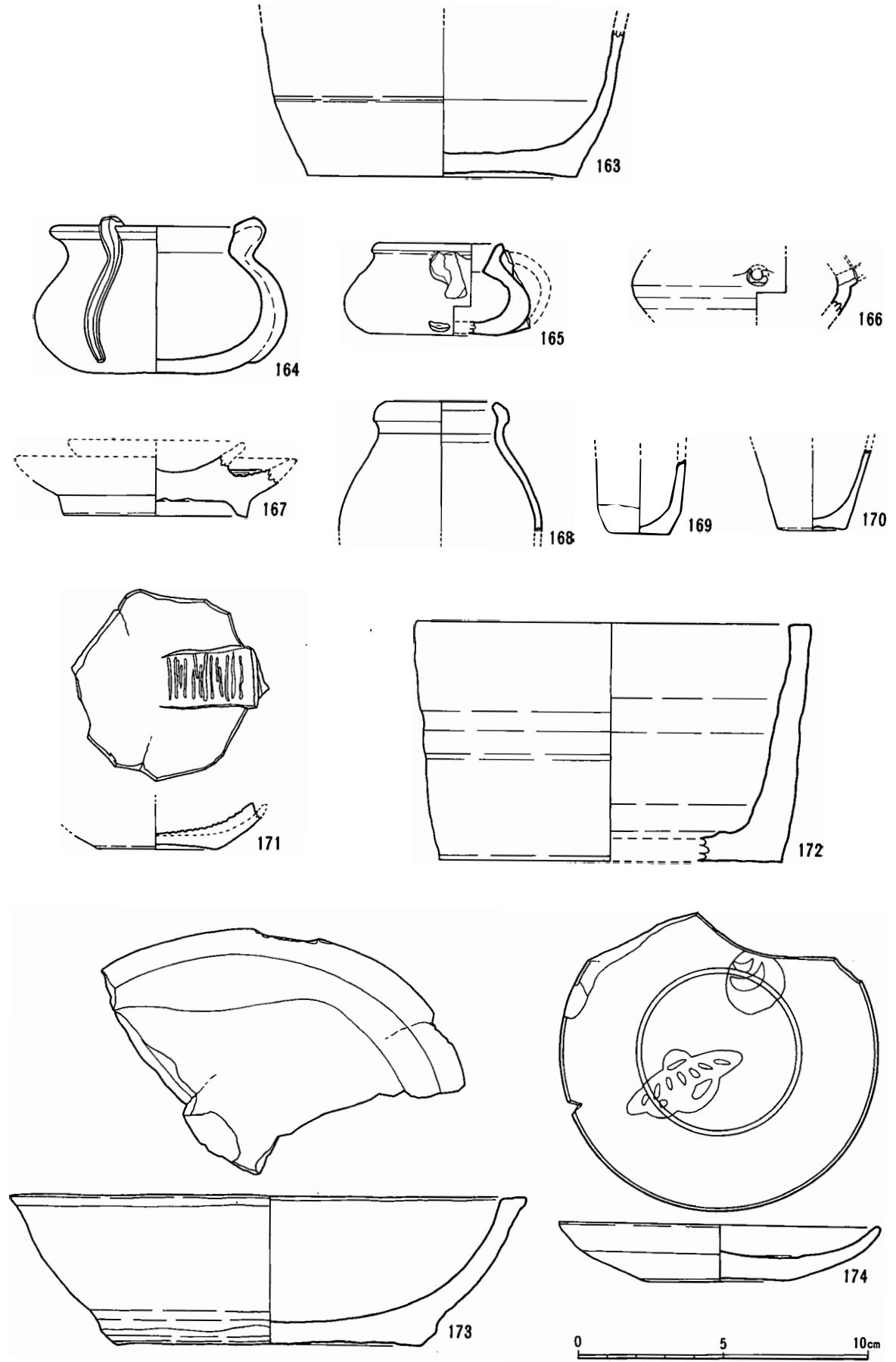
第37図 2号堀出土遺物実測図(3)



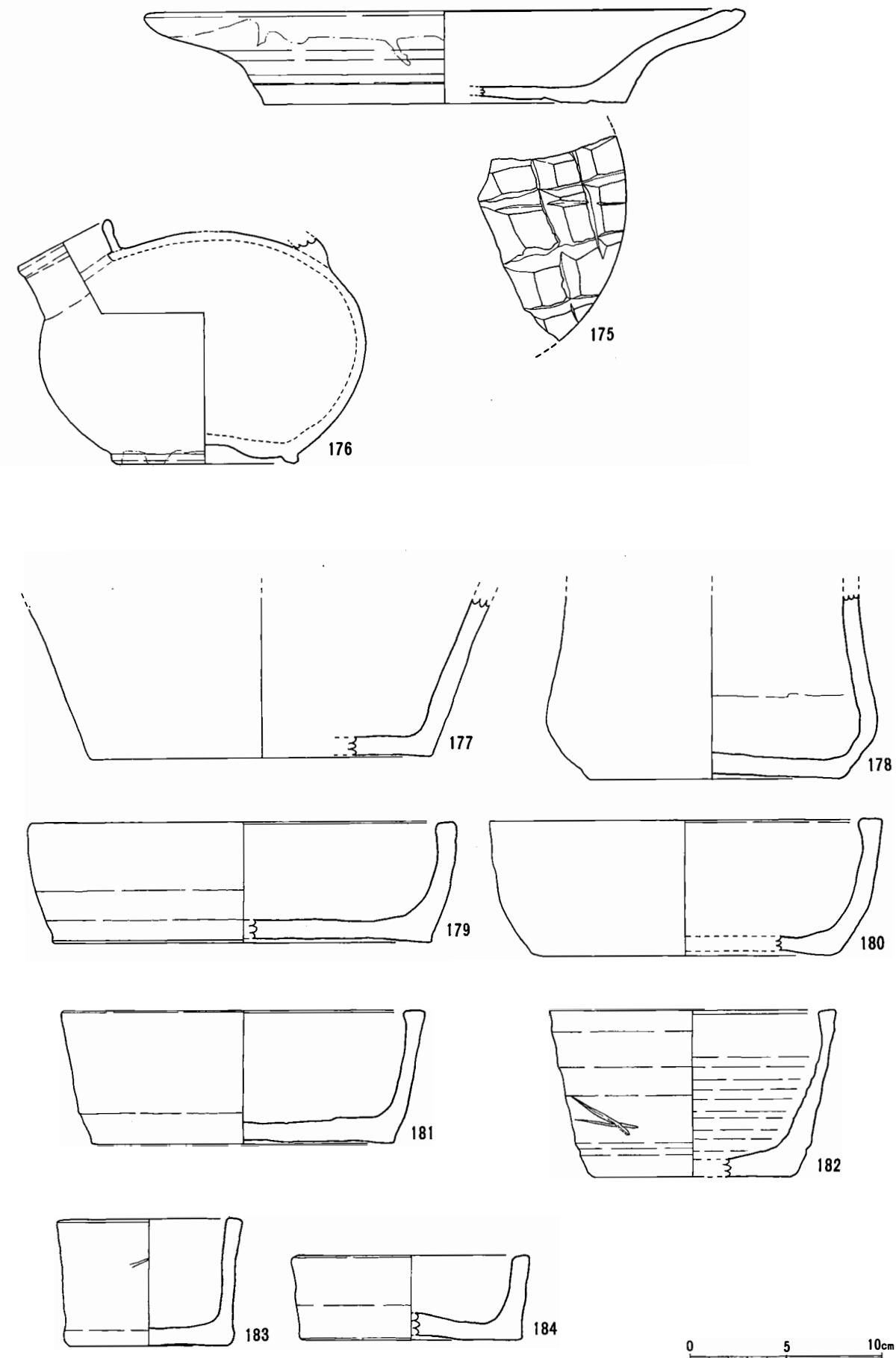
第38図 2号堀出土遺物実測図(4)



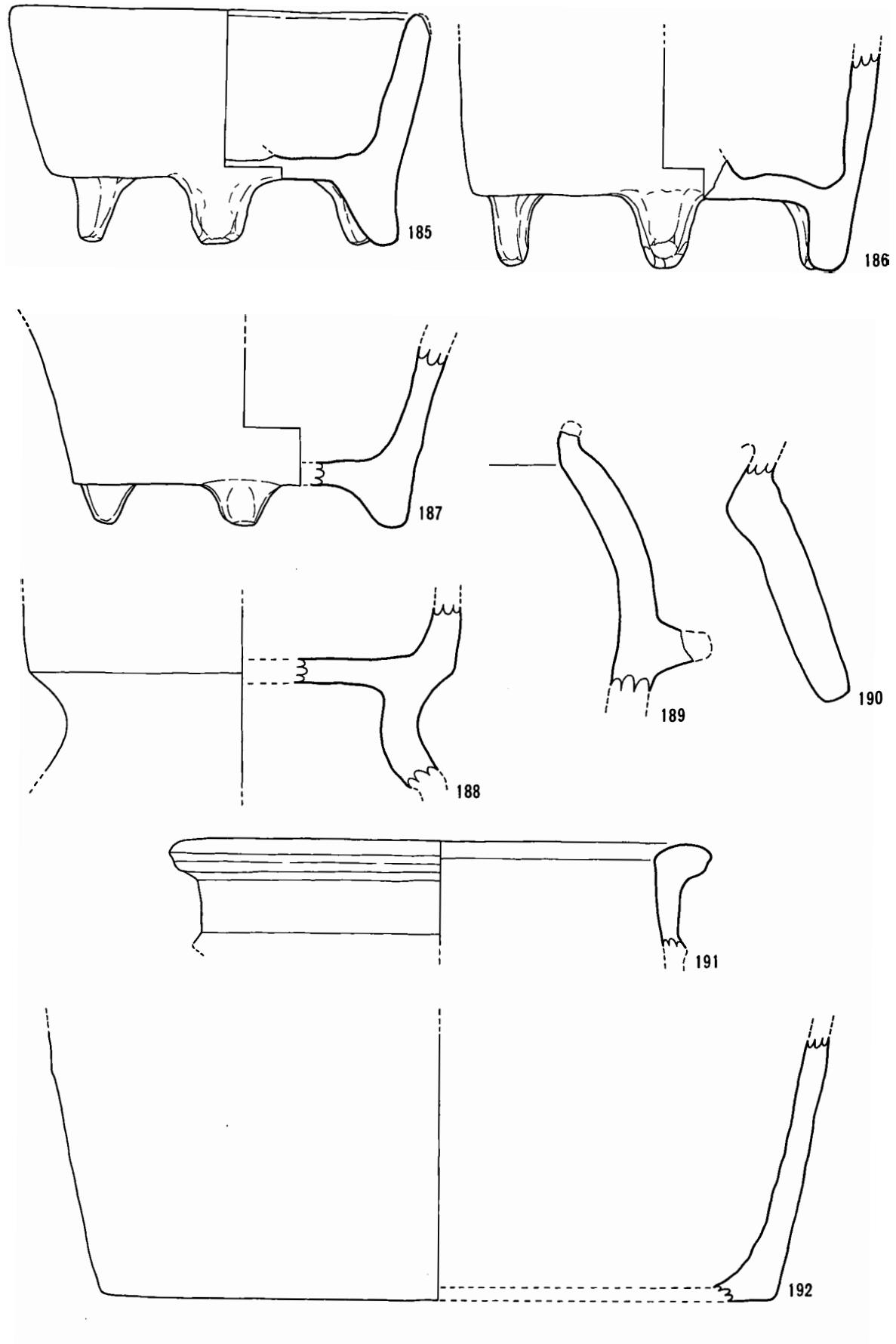
第39図 2号堀出土遺物実測図(5)



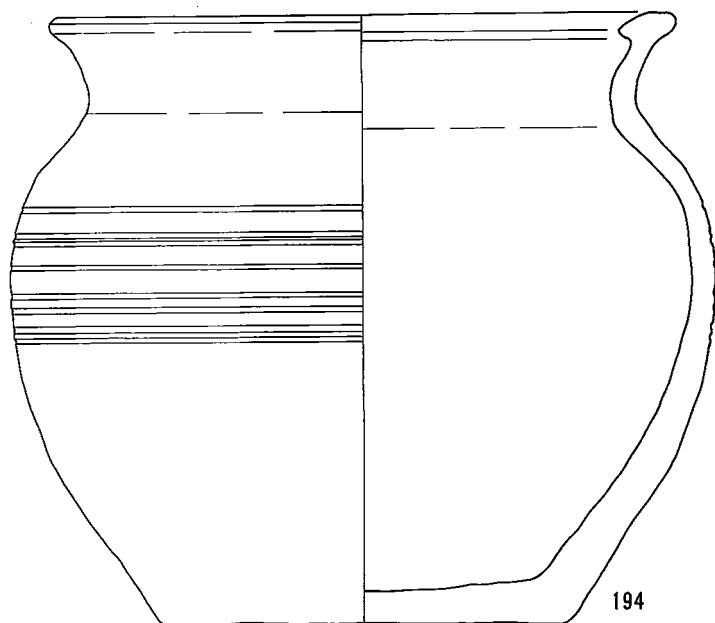
第40図 2号堀出土遺物実測図(6)



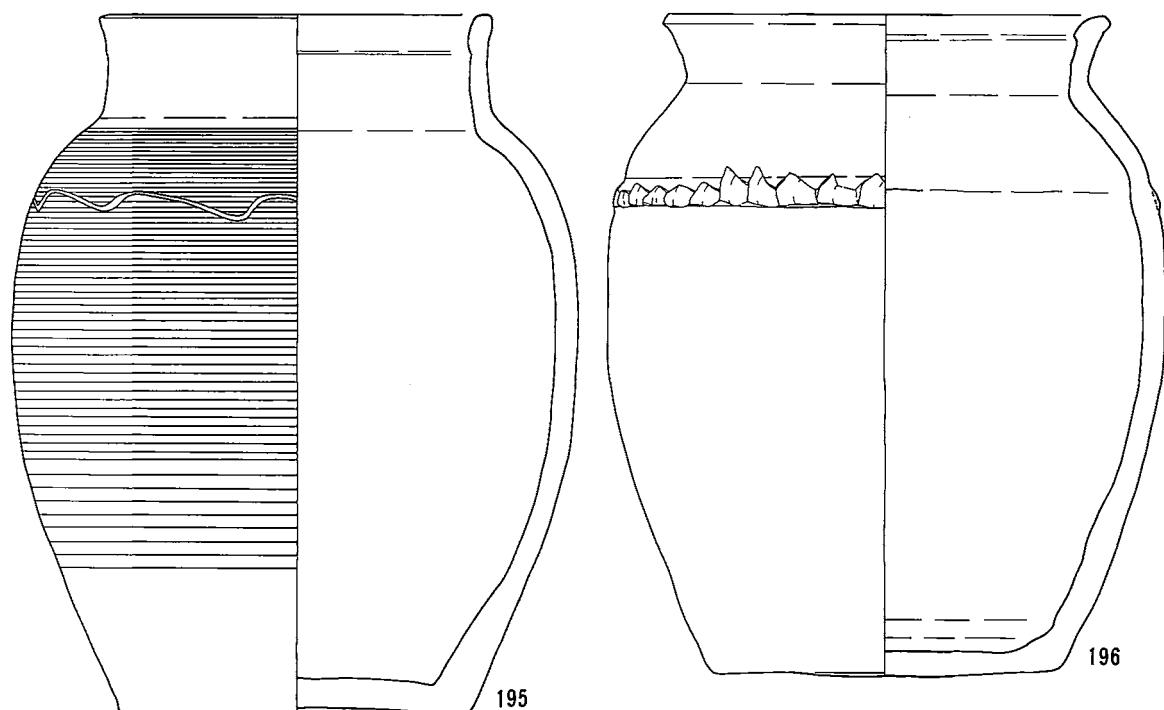
第41図 2号堀出土遺物実測図(7)



第42図 2号堀出土遺物実測図(8)

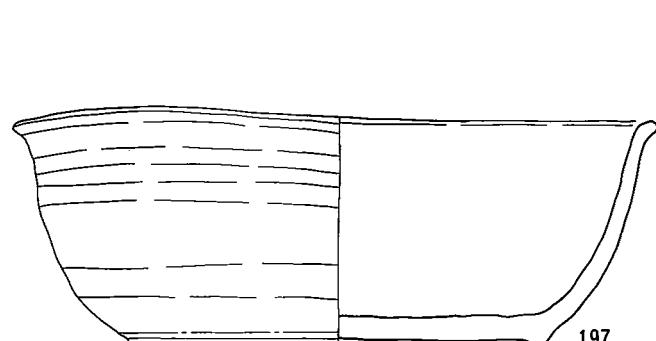


194

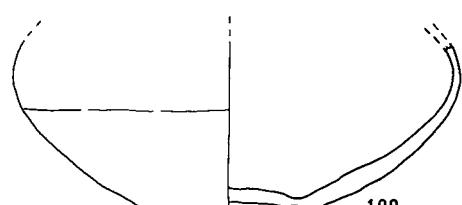


195

196



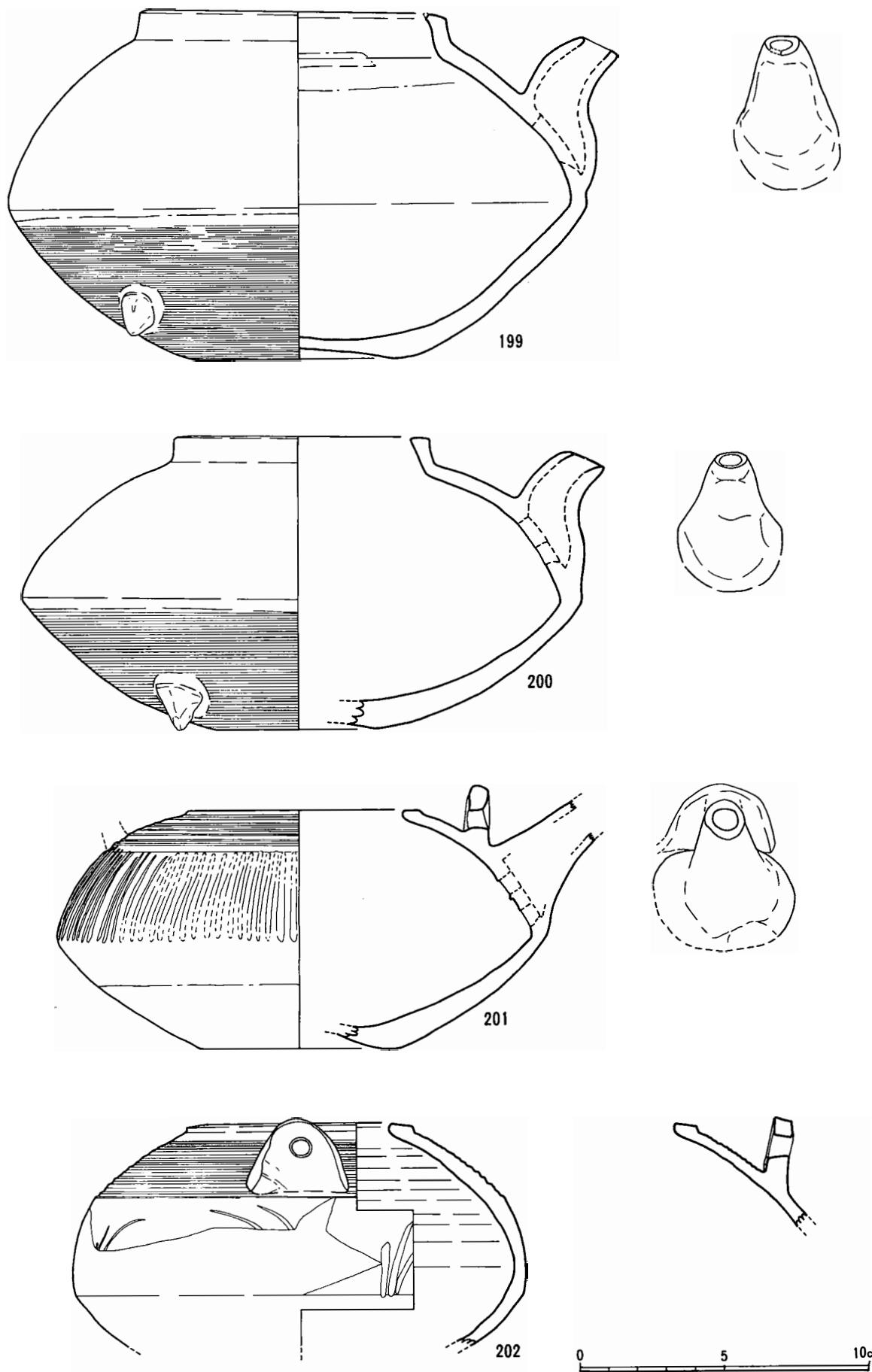
197



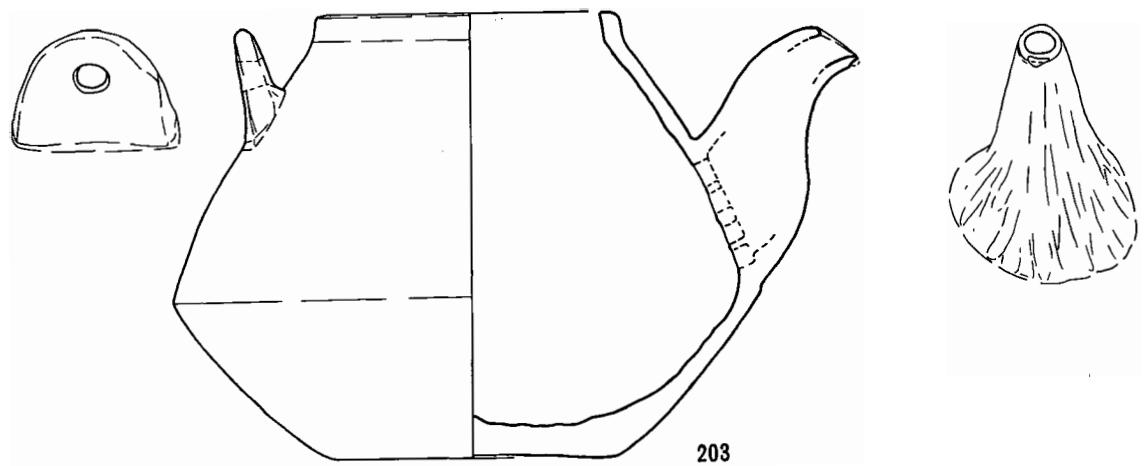
198

0 5 10 cm

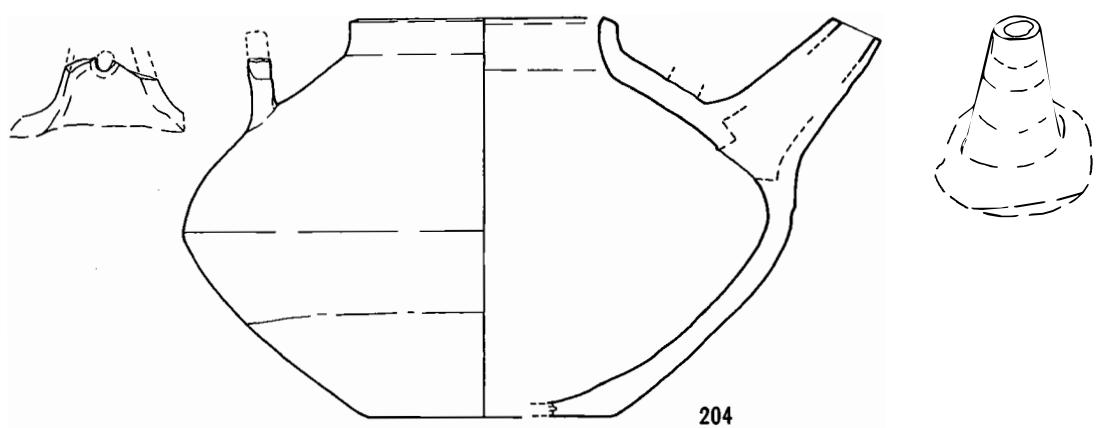
第43図 2号堀出土遺物実測図(9)



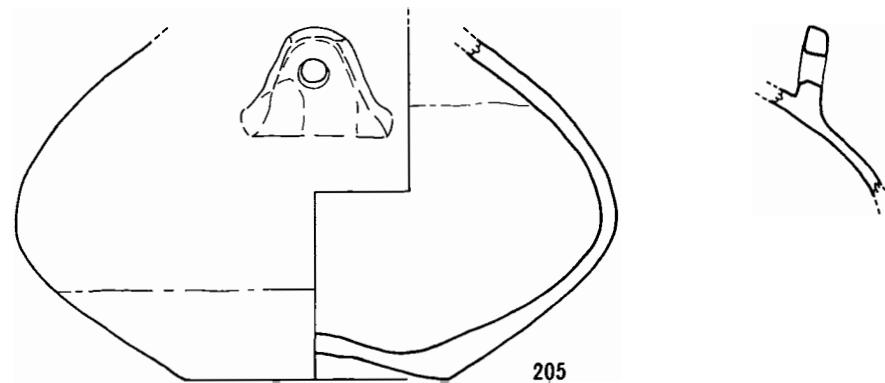
第44図 2号堀出土遺物実測図(10)



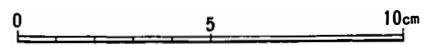
203



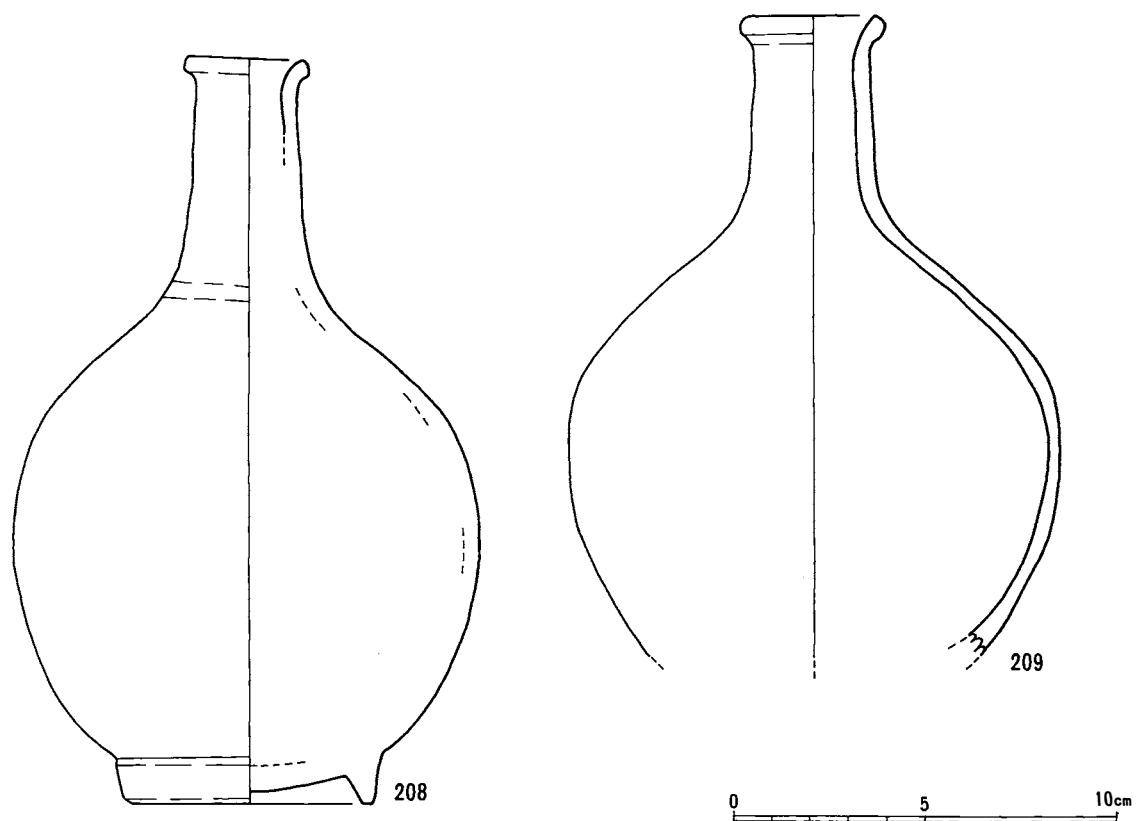
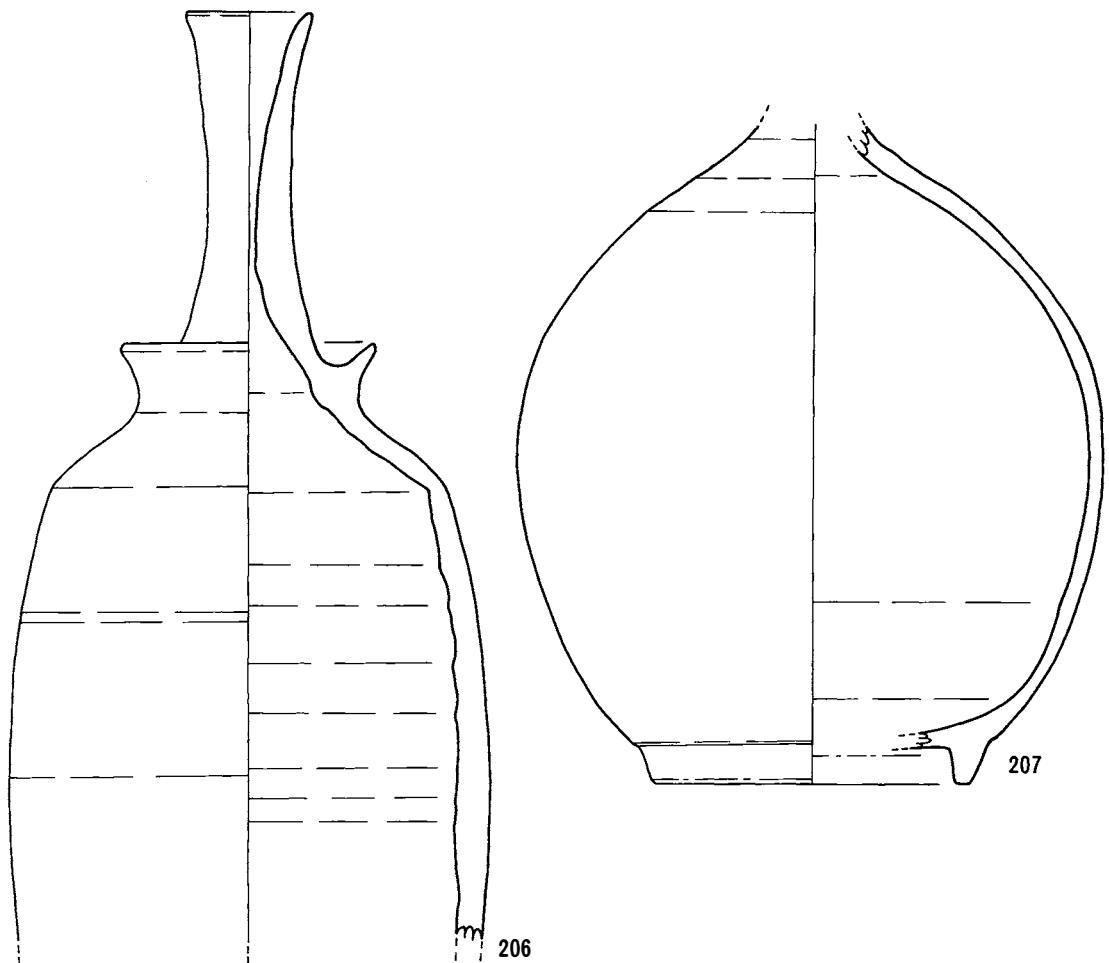
204



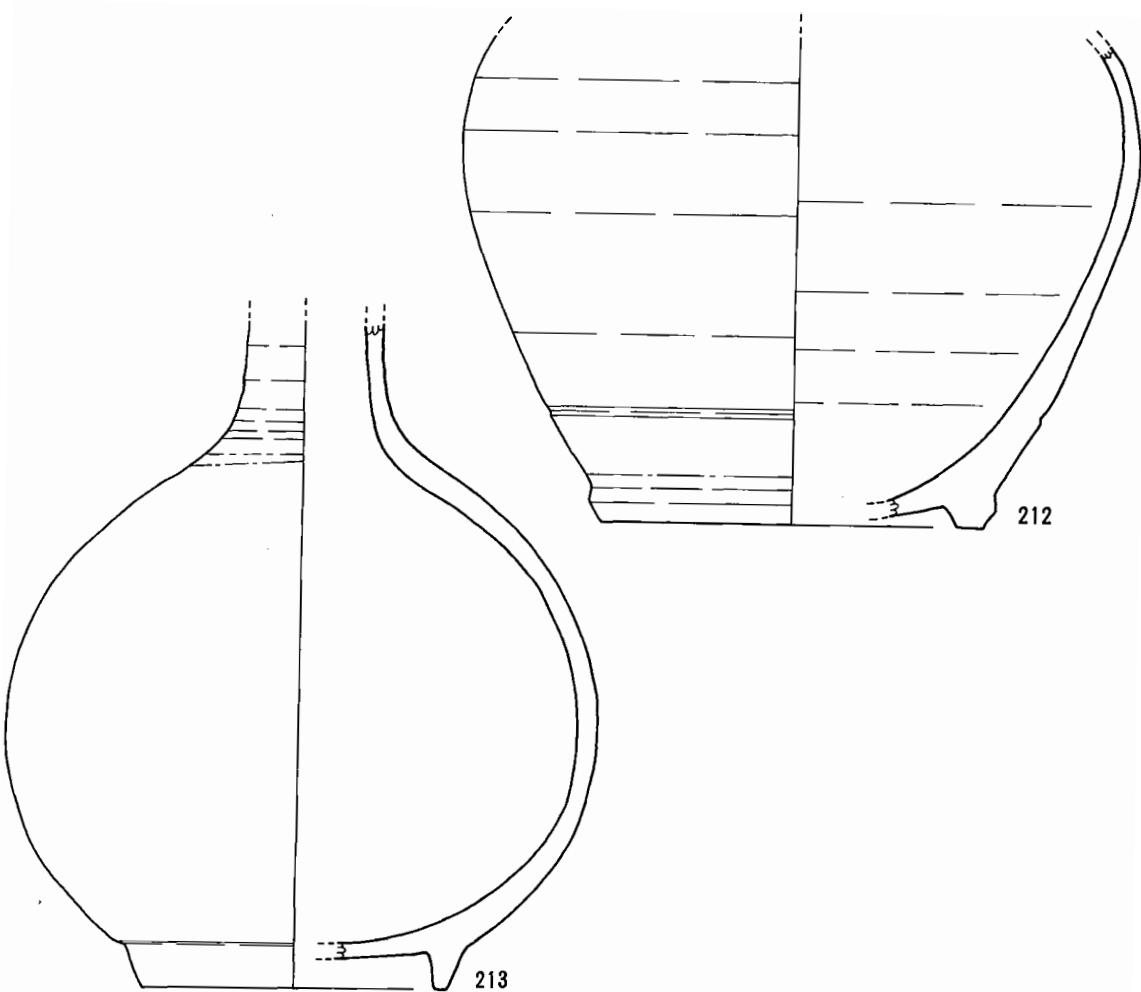
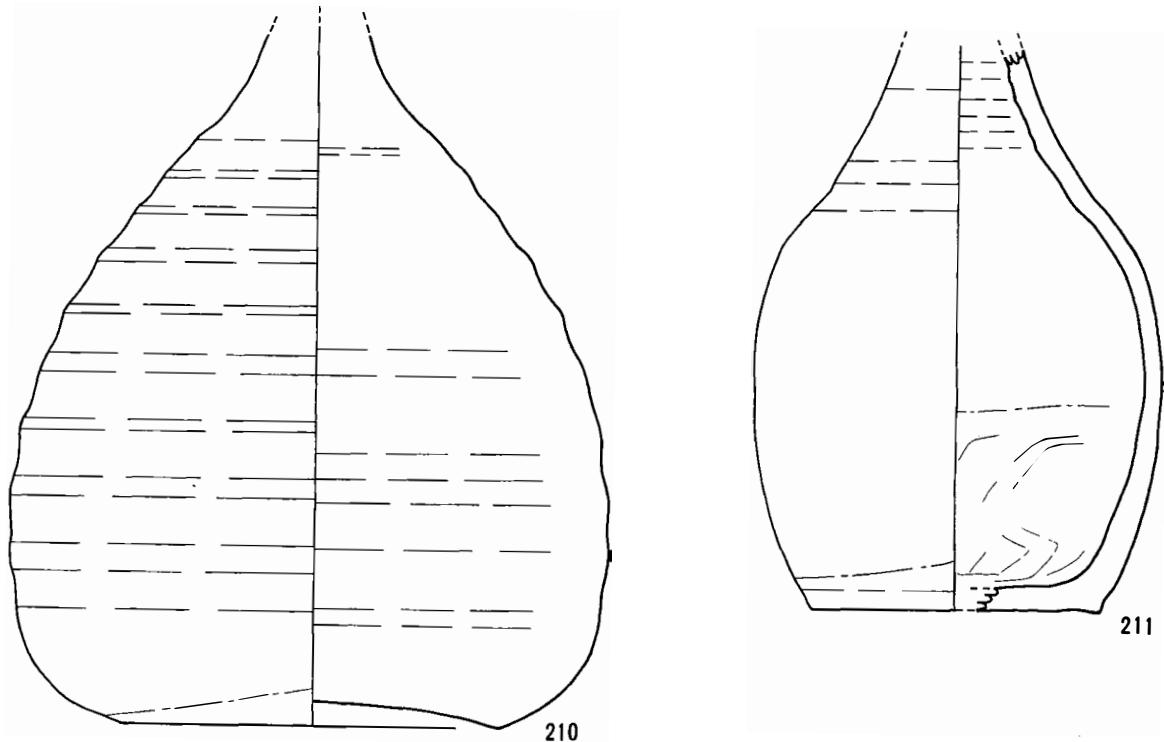
205



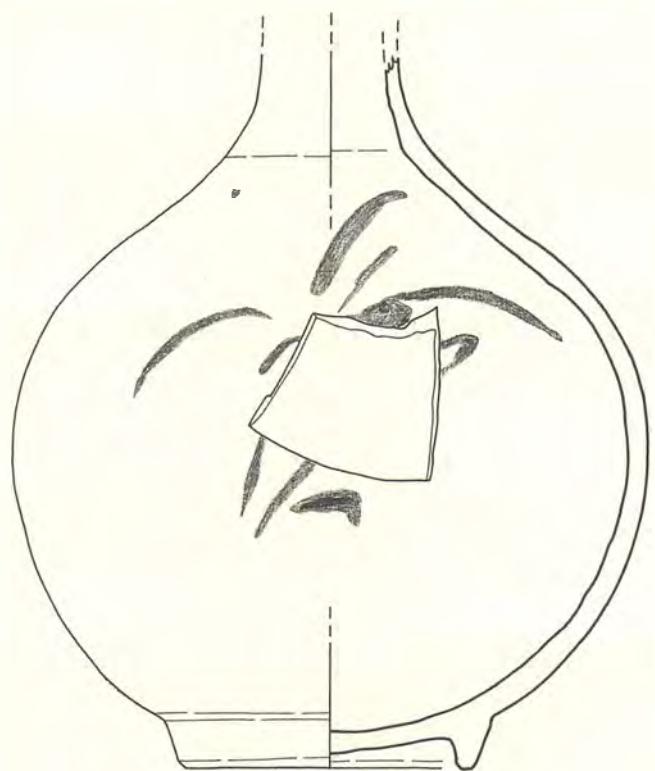
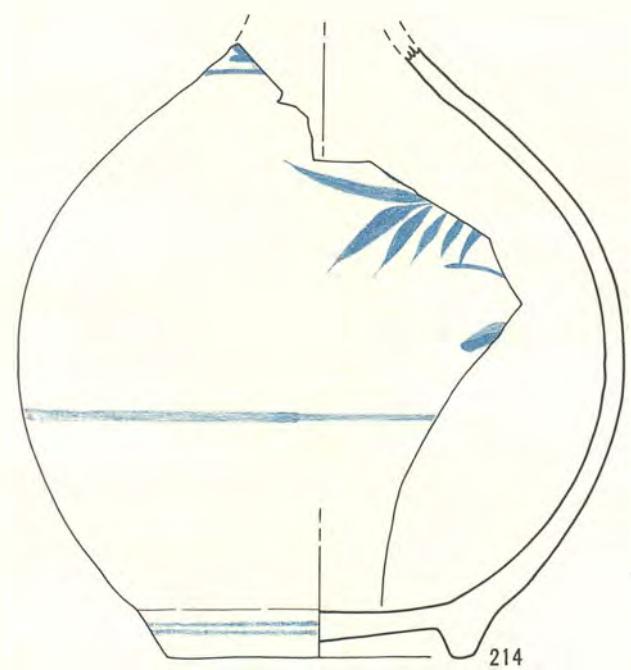
第45図 2号堀出土遺物実測図(1)



第46図 2号堀出土遺物実測図(12)



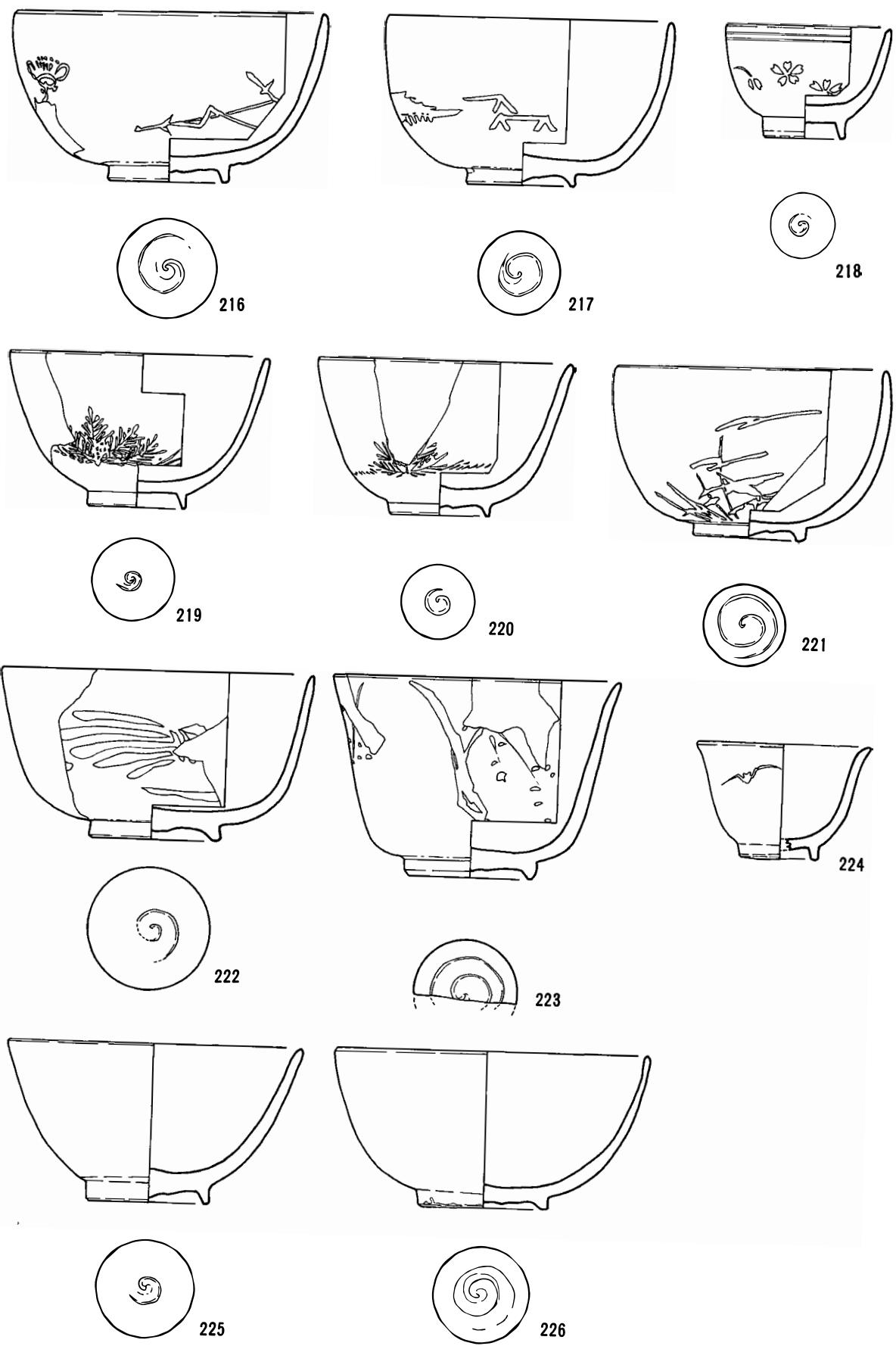
第47図 2号墳出土遺物実測図(13)



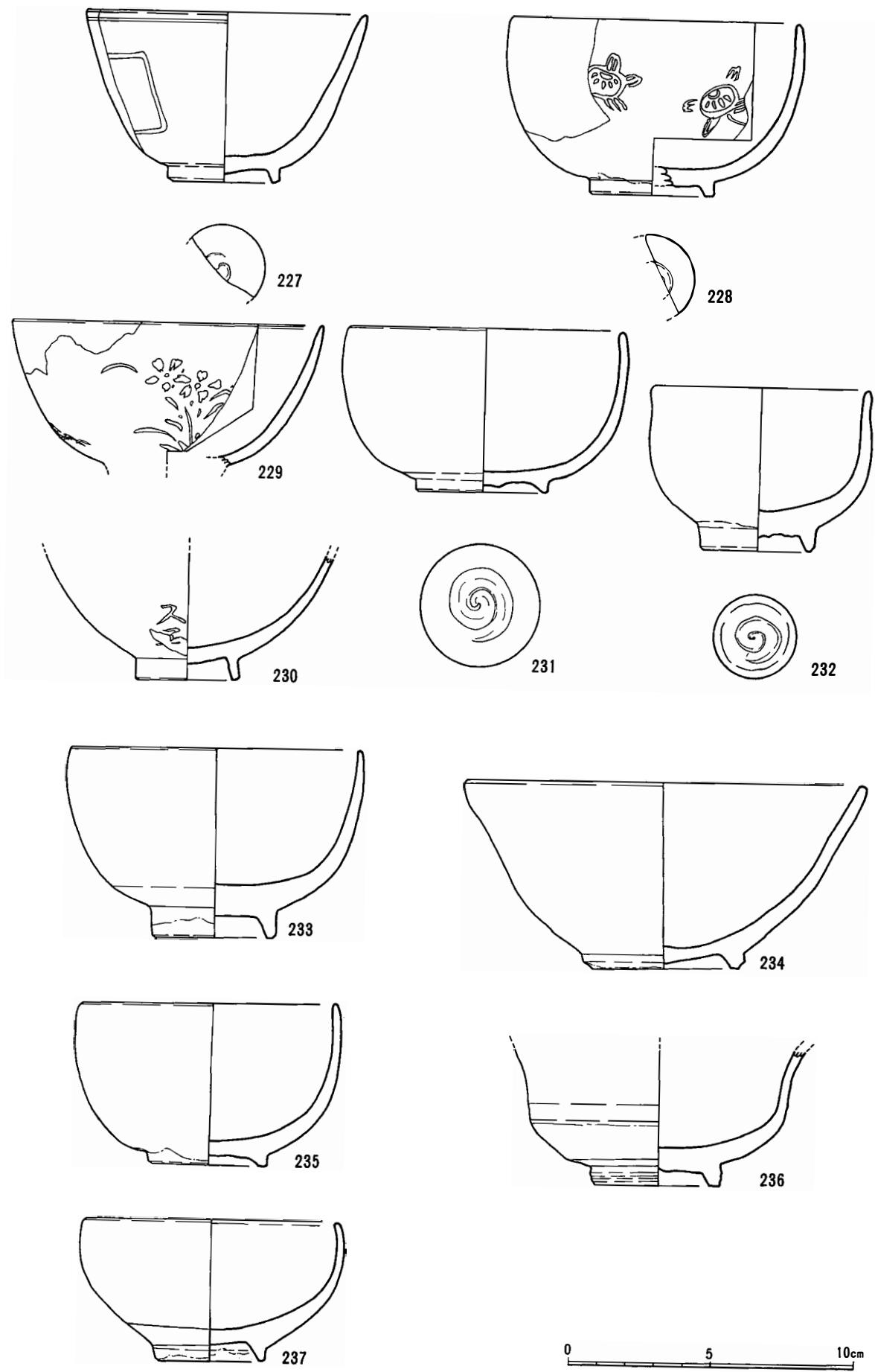
215

0 5 10cm

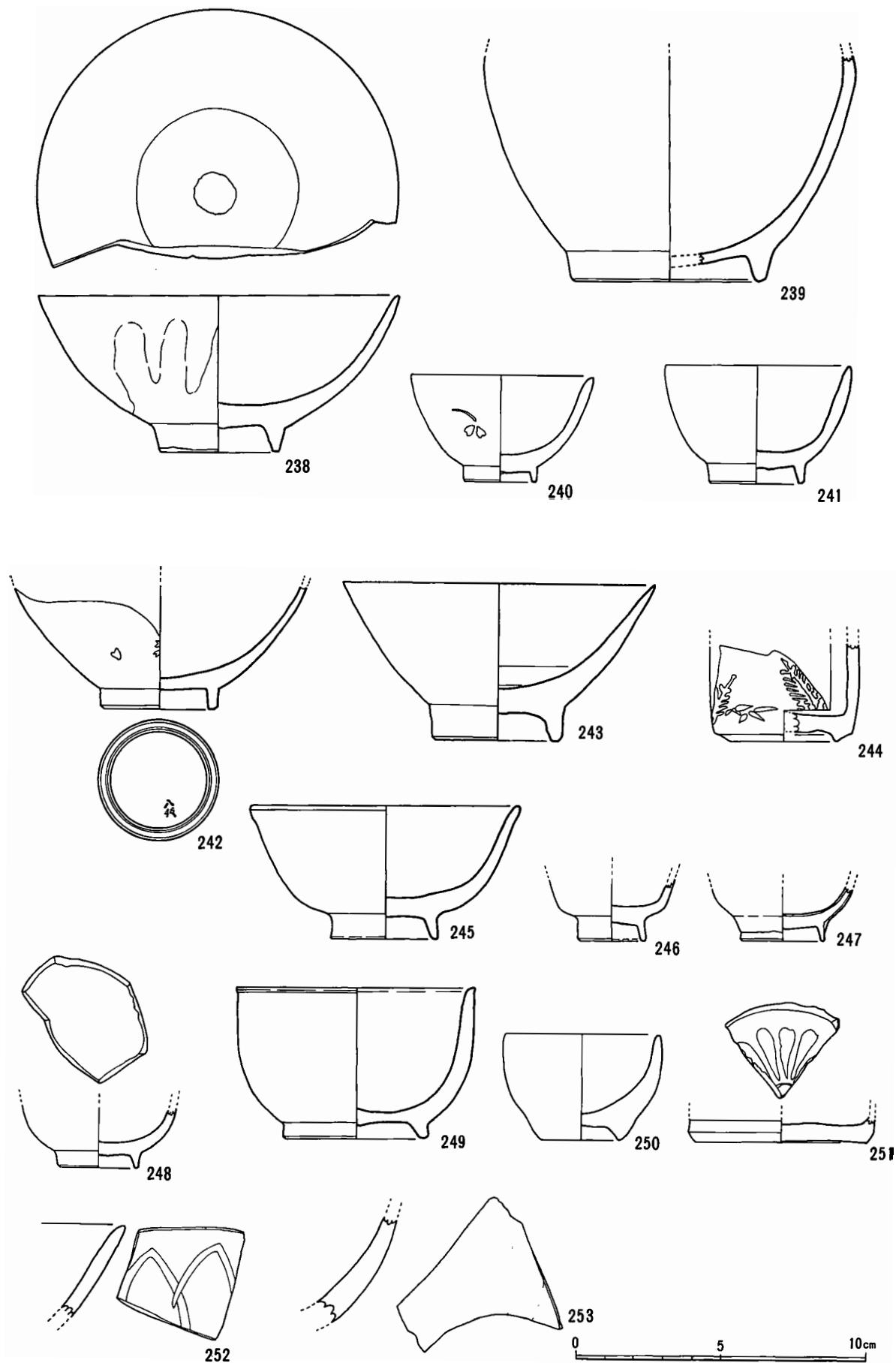
第48図 2号堀出土遺物実測図(14)



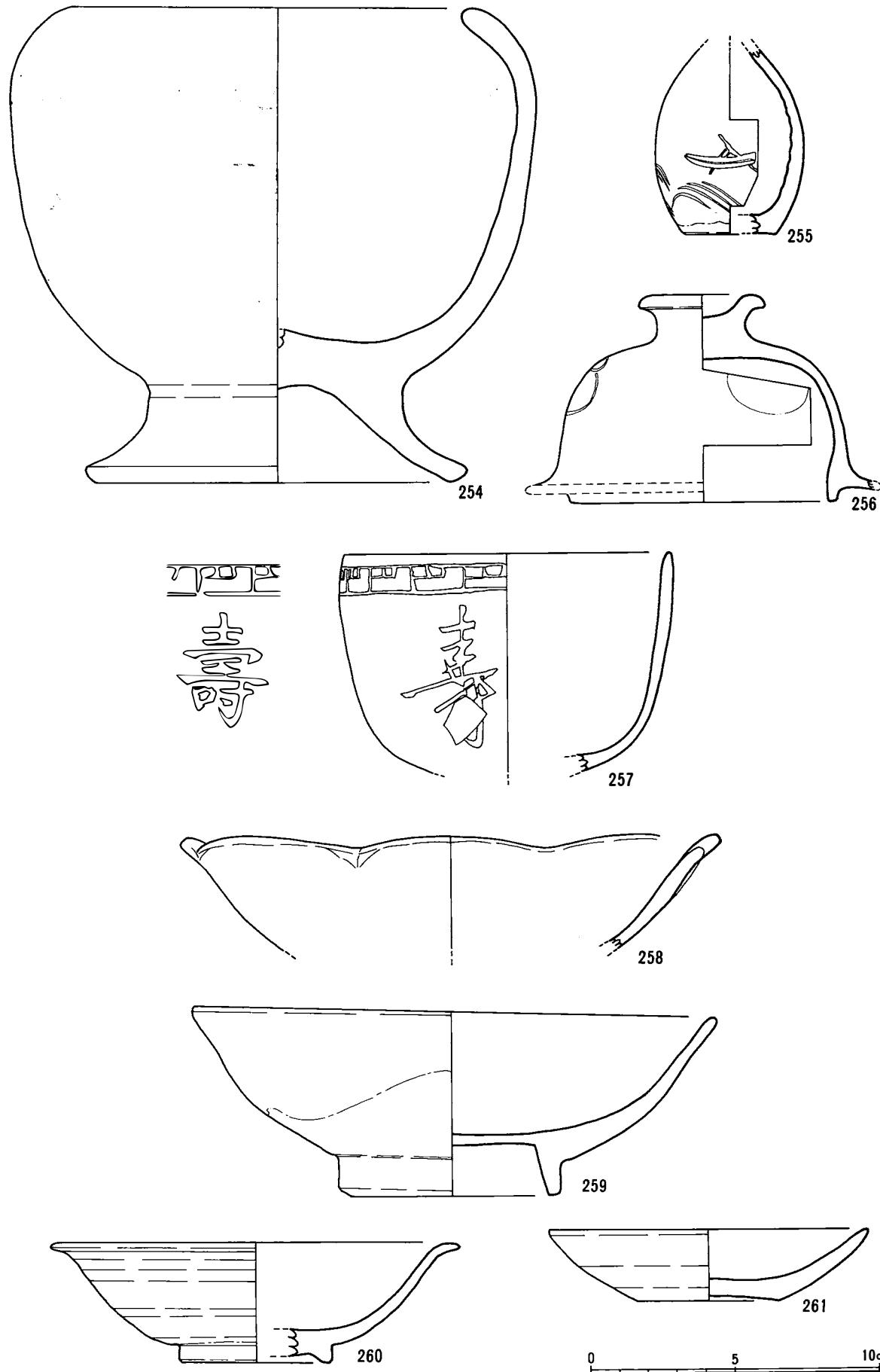
第49図 2号墳出土遺物実測図(15)



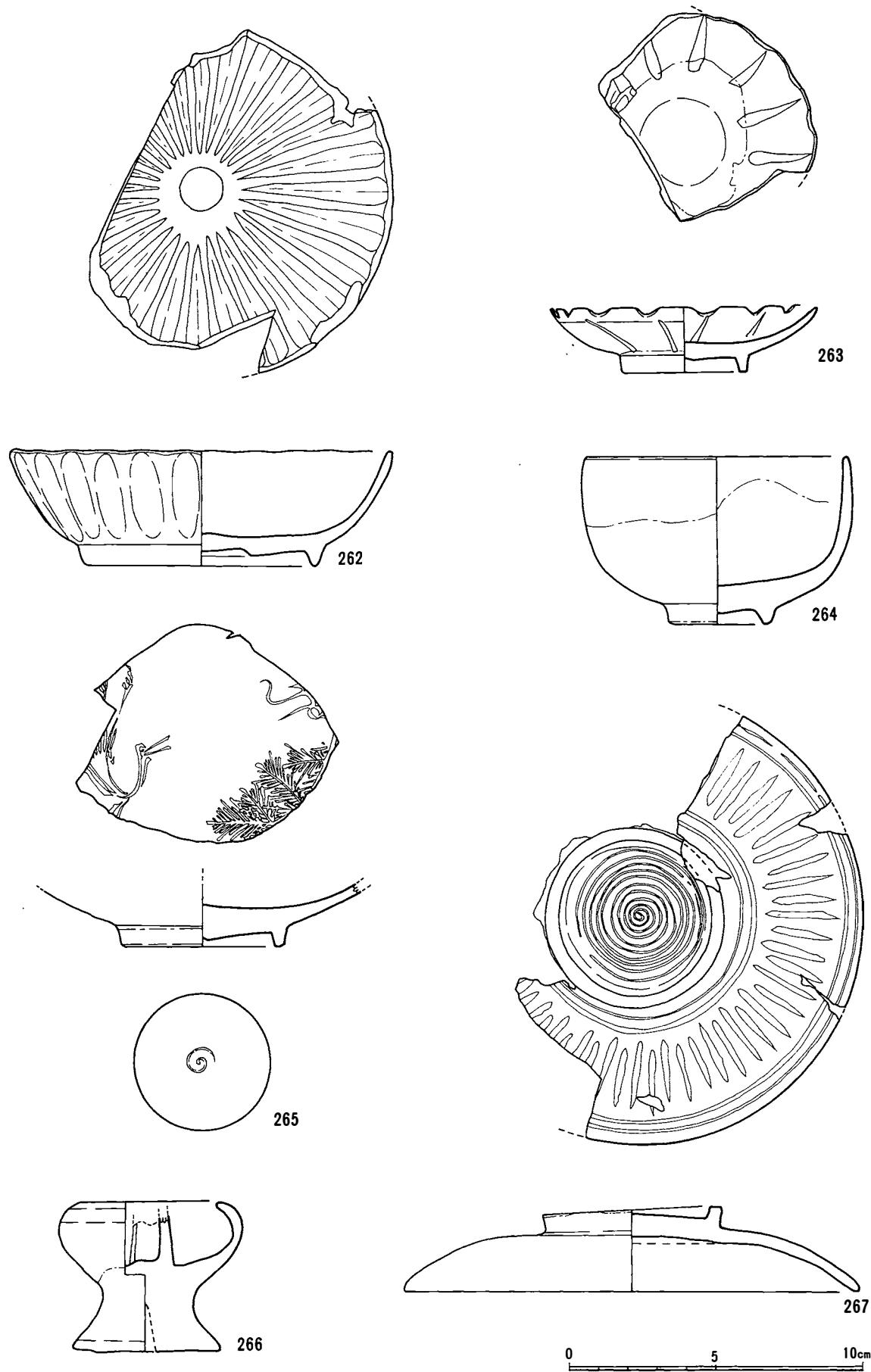
第50図 2号塚出土遺物実測図(16)



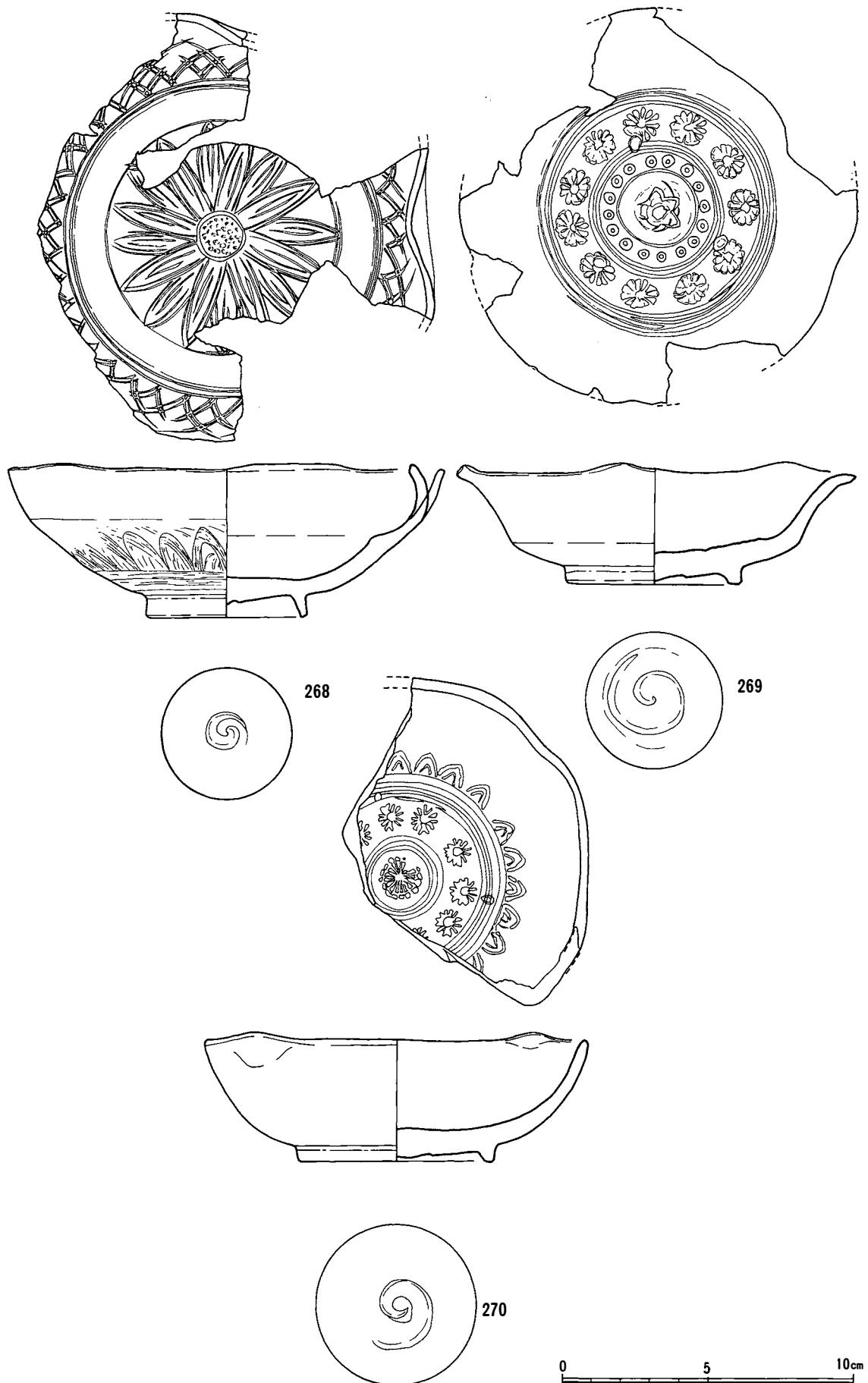
第51図 2号塚出土遺物実測図(17)



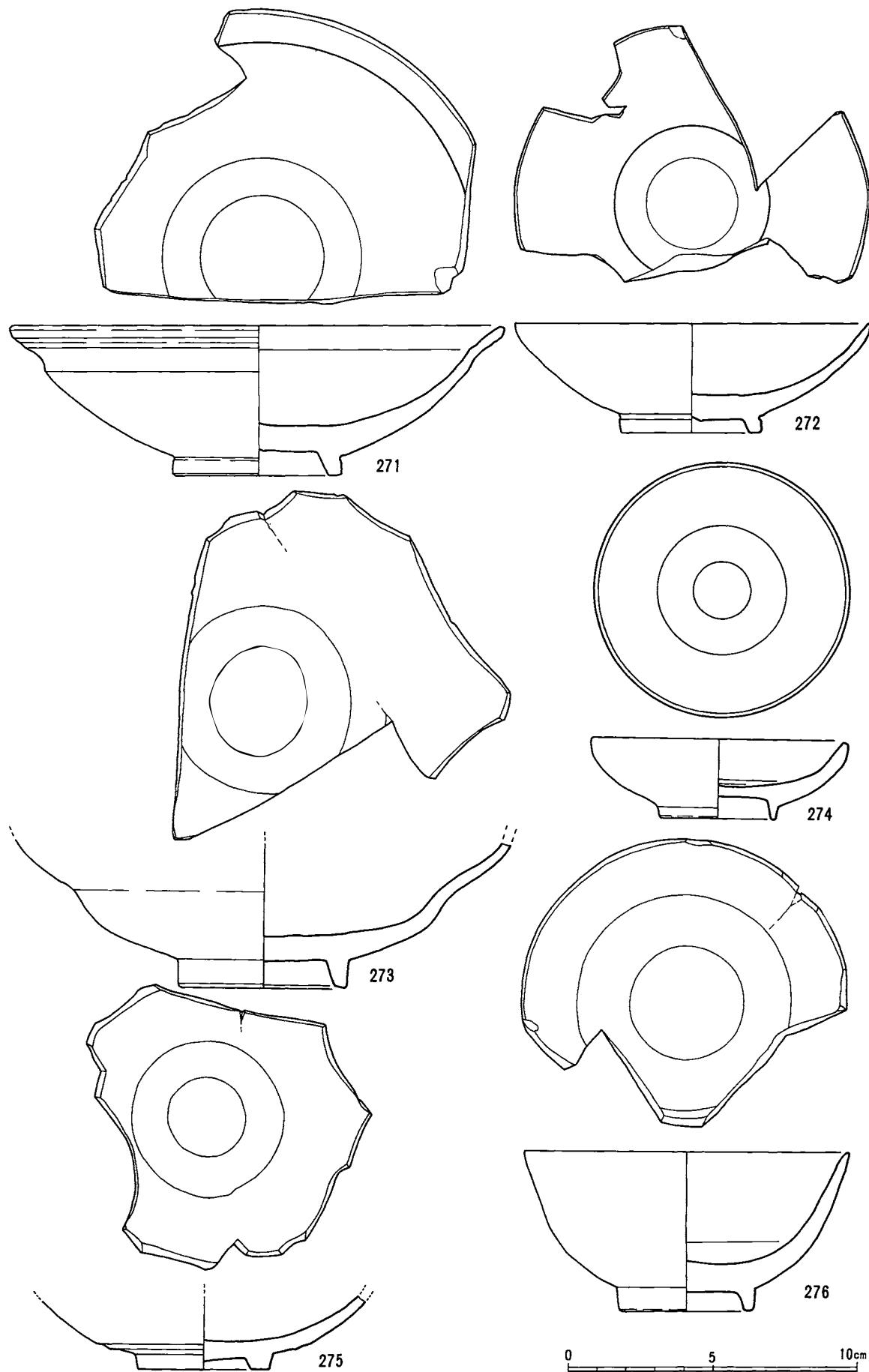
第52図 2号堀出土遺物実測図(18)



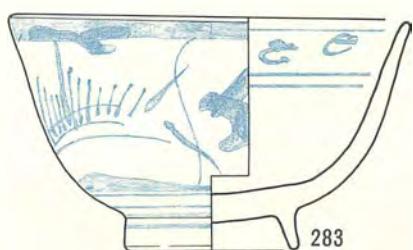
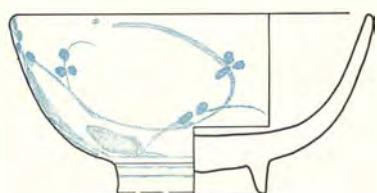
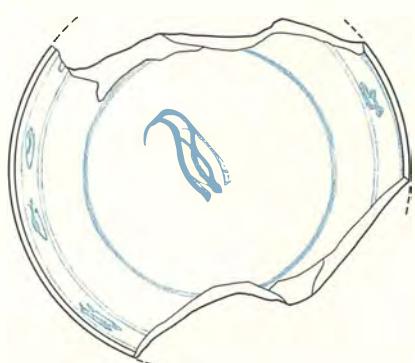
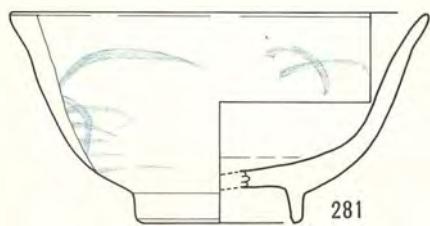
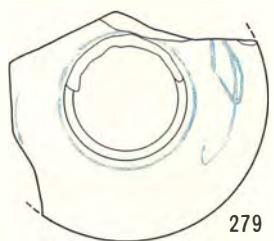
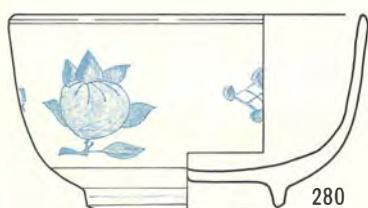
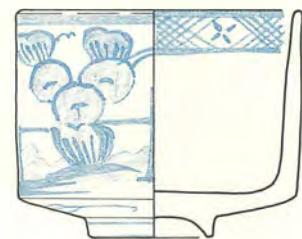
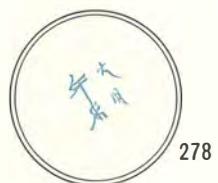
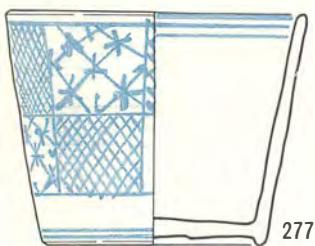
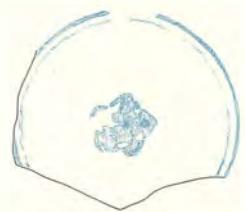
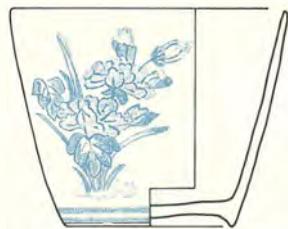
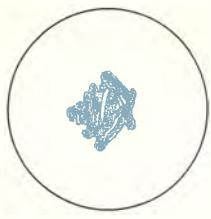
第53図 2号墳出土遺物実測図(19)



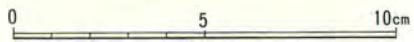
第54図 2号塚出土遺物実測図(20)



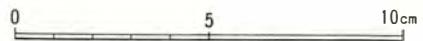
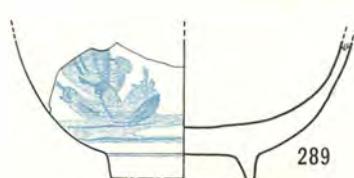
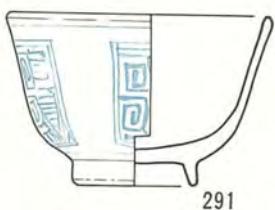
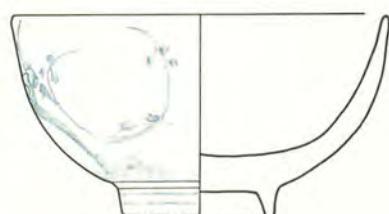
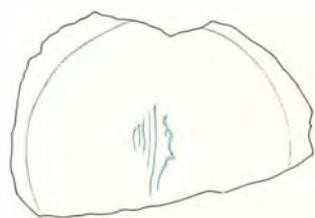
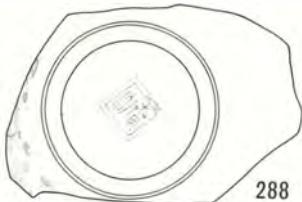
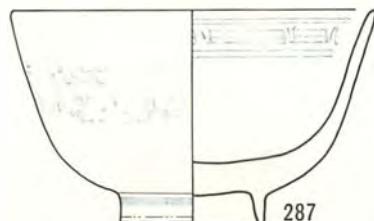
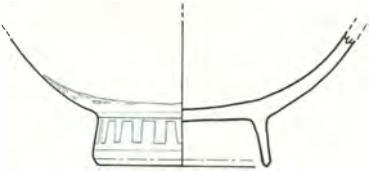
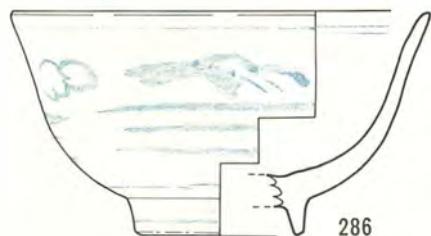
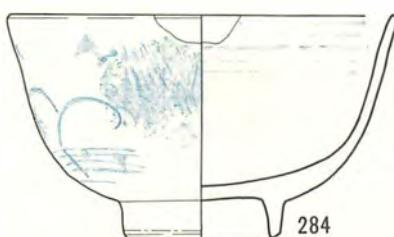
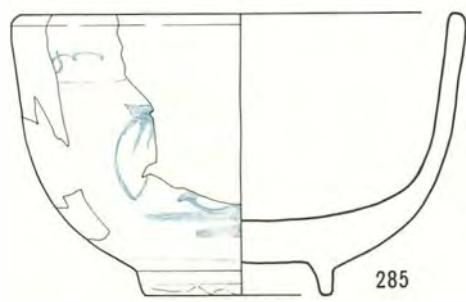
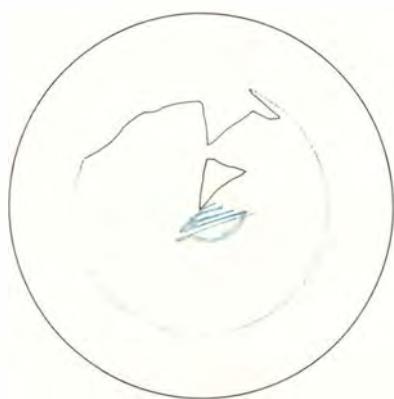
第55図 2号堀出土遺物実測図(2)



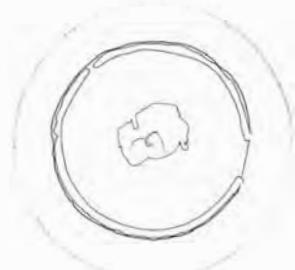
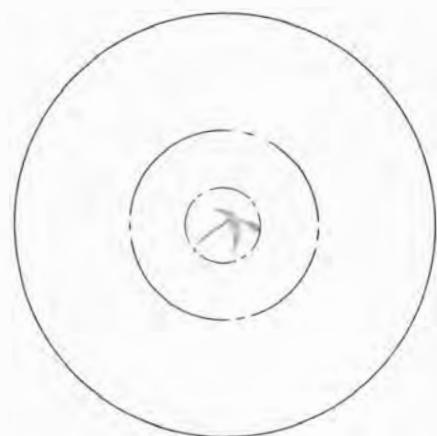
282



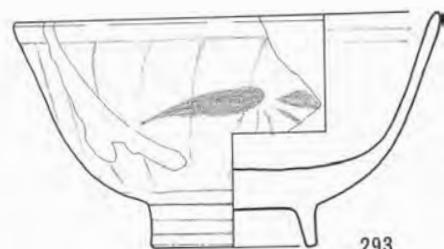
第56図 2号堀出土遺物実測図(2)



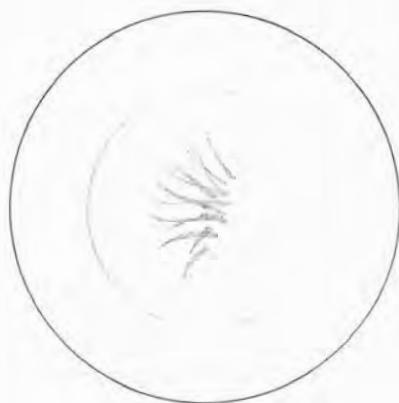
第57図 2号堀出土遺物実測図(23)



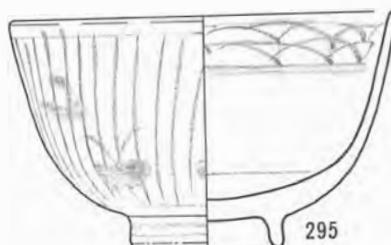
292



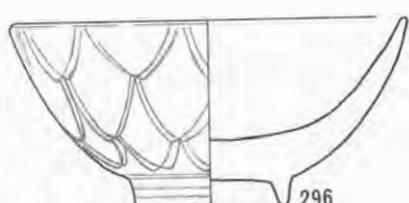
293



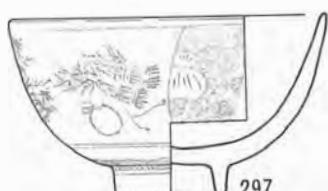
294



295



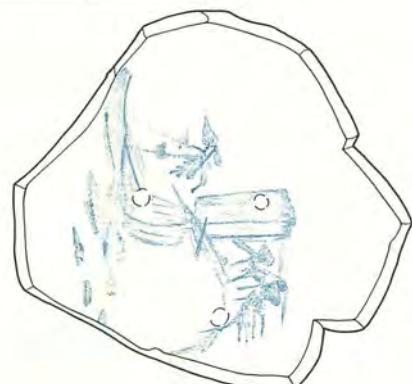
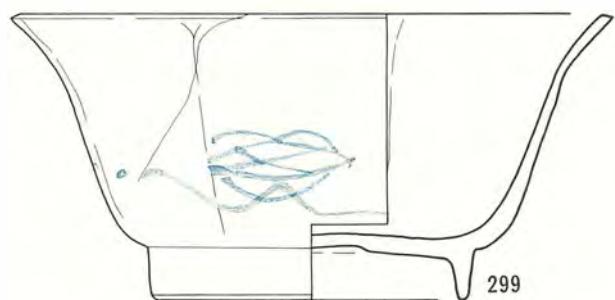
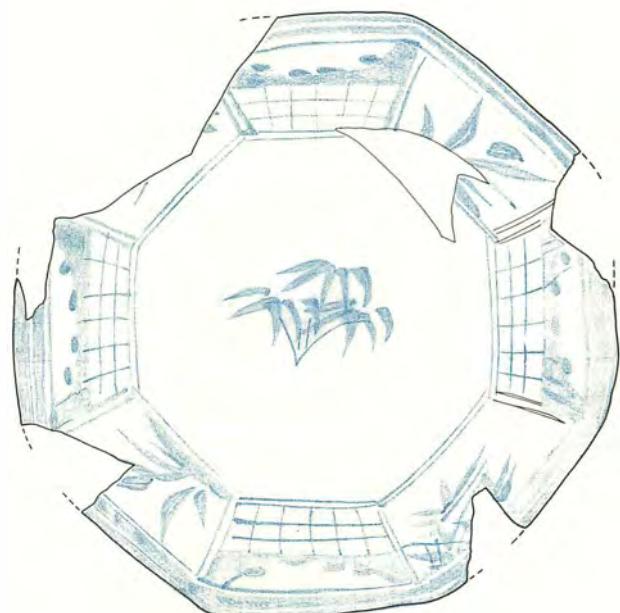
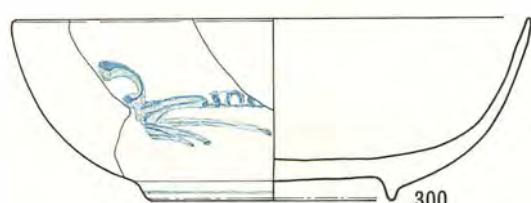
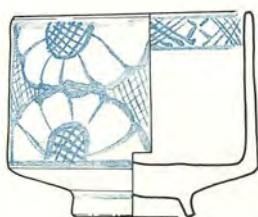
296



297

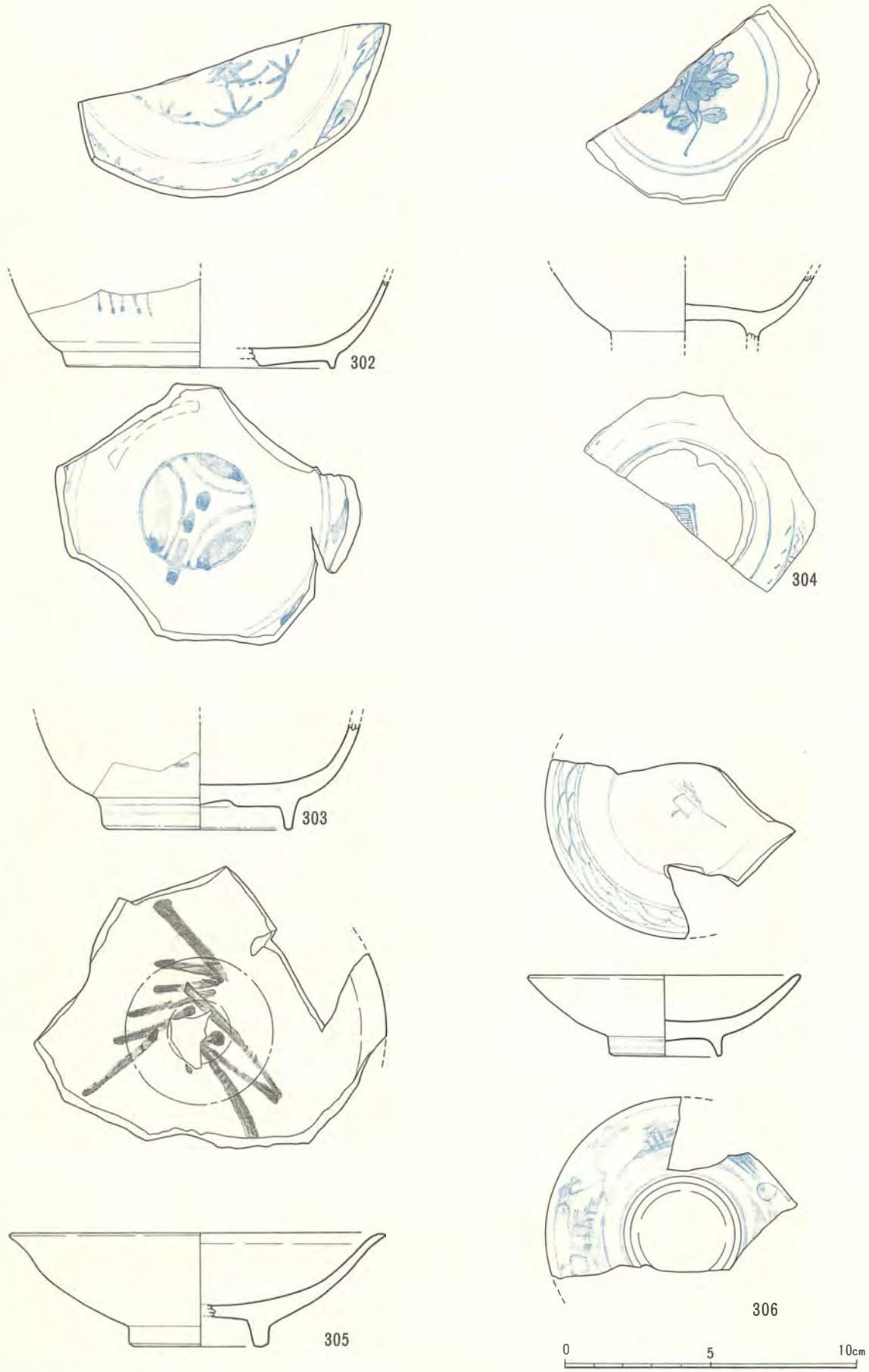
0 5 10 cm

第58図 2号堀出土遺物実測図(2)

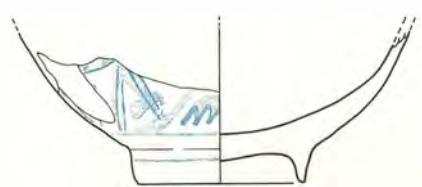


0 5 10cm

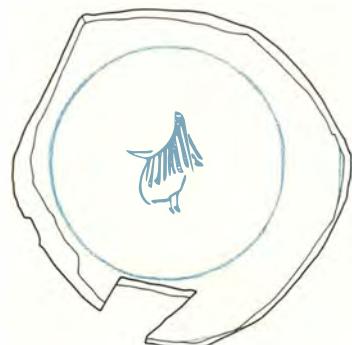
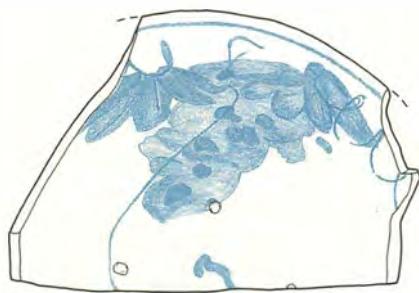
第59図 2号堀出土遺物実測図(25)



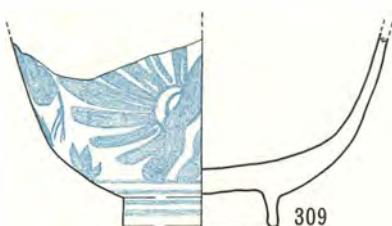
第60図 2号堀出土遺物実測図(26)



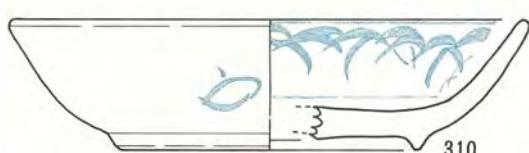
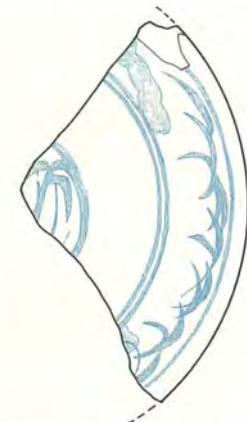
307



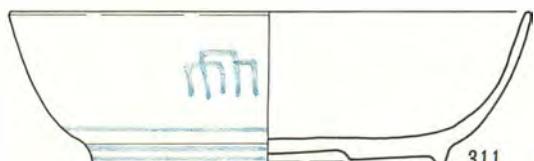
308



309



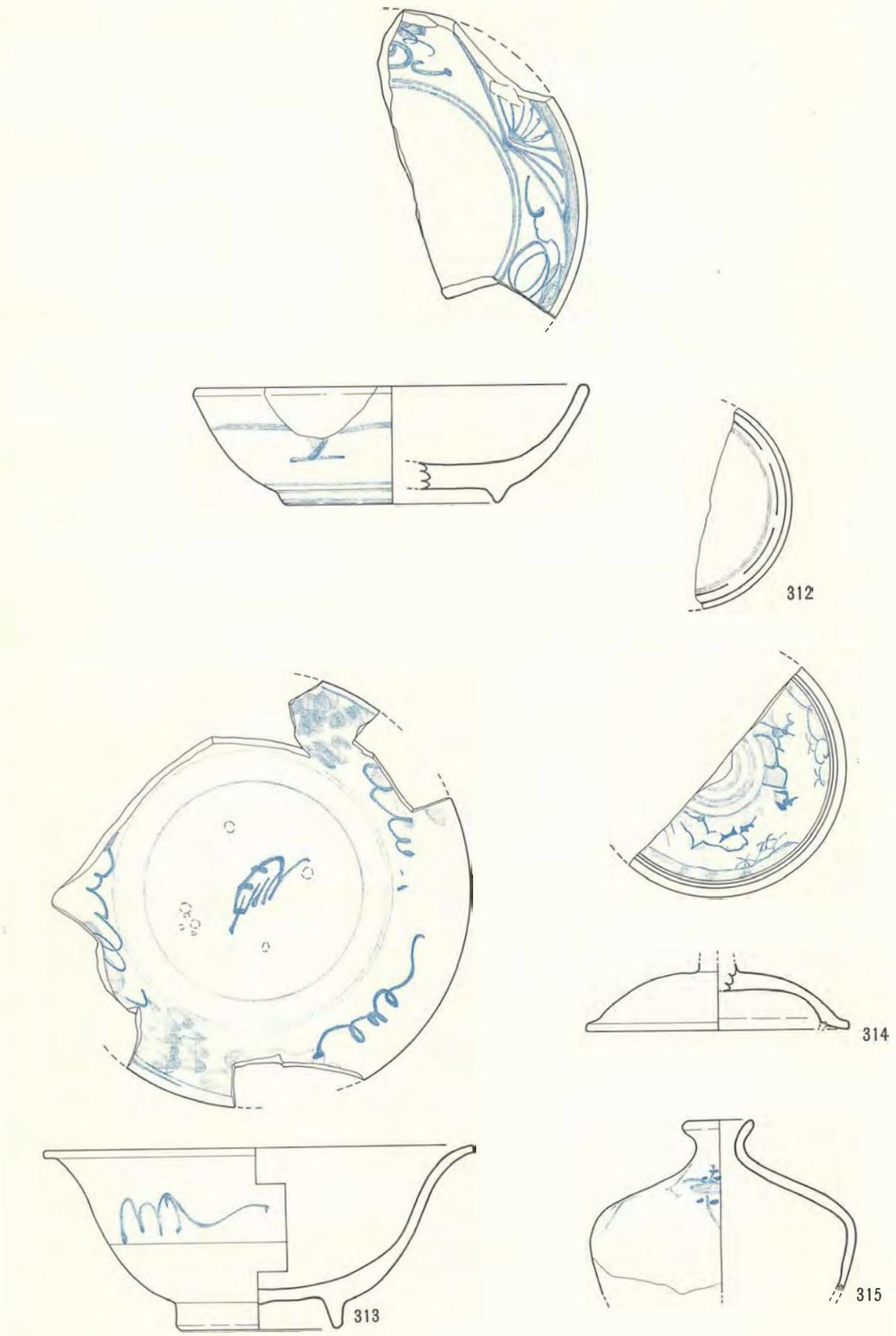
310



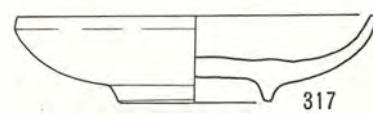
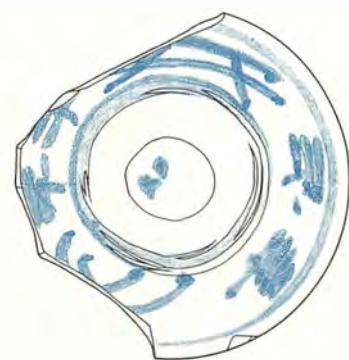
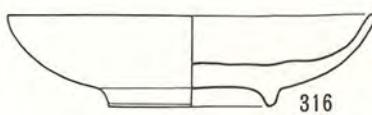
311

0 5 10cm

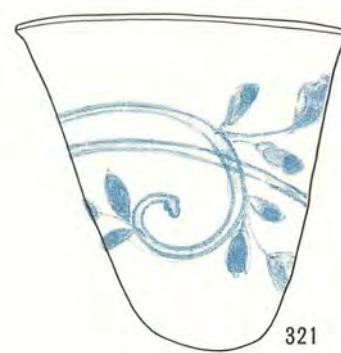
第61図 2号堀出土遺物実測図(2)



第62図 2号堀出土遺物実測図(28)



10cm

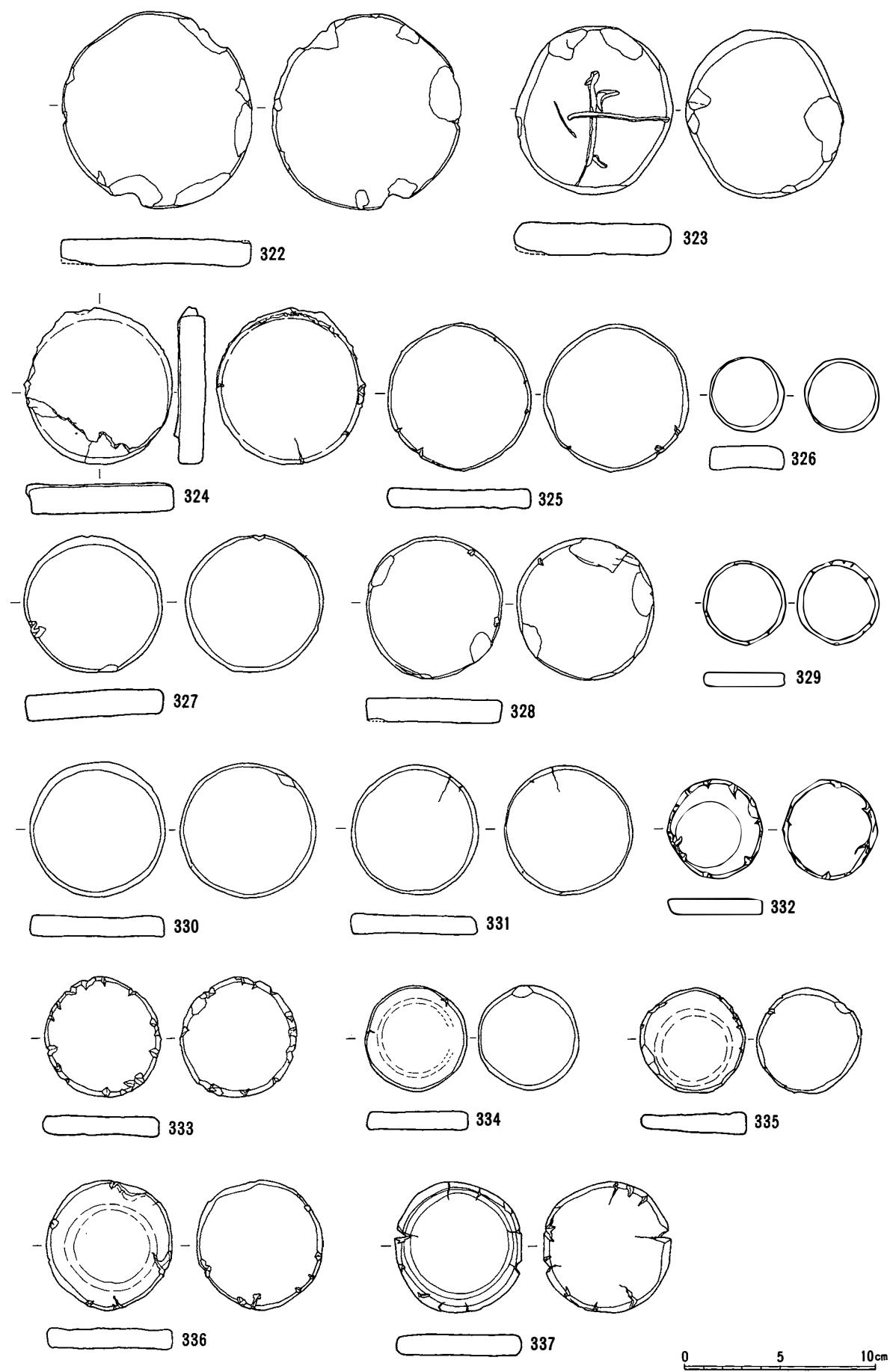


321

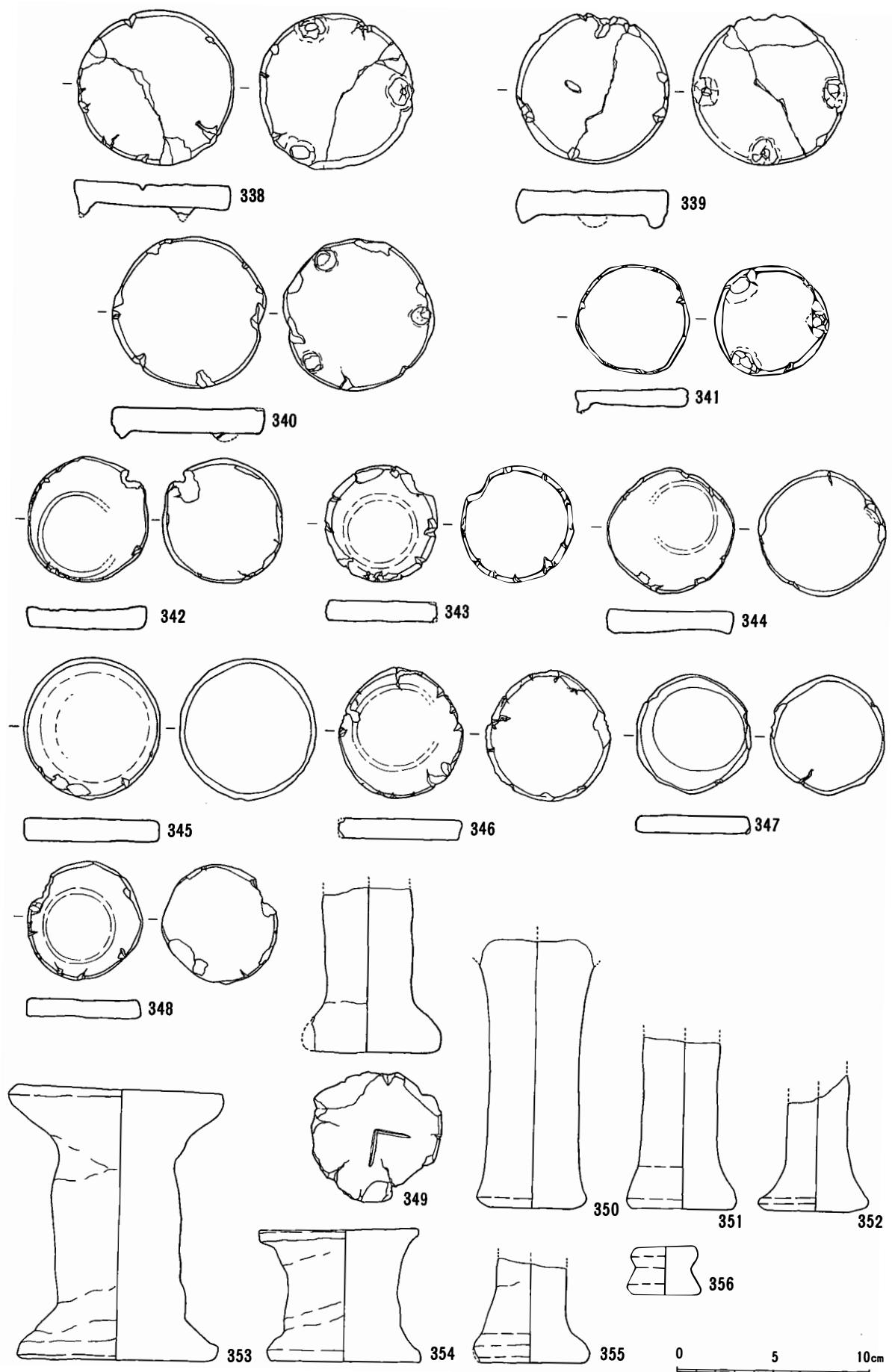
5

0

第63図 2号塚出土遺物実測図(29)



第64図 2号堀出土遺物実測図(3)



第65図 2号堀出土遺物実測図(3)

第8表 2号堀出土遺物観察表(1)

No	種別	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
118	土師器	壺	口径-(12.9cm) 底径-(6.7cm) 器高-4.8cm	底部は中央がややくぼむ 口縁部はやや外反してのび、口唇部は丸みをおびる	内外面はナデによる調整 底部は糸切りかへラ切りかは表面の剥離がひどく不明	胎土-砂粒を含む 焼成-不良 色調-橙色	2号堀中層
119	土師器	壺	口径-不明 底径-4.3cm 器高-不明	底部は平らで、底部から体部にかけて段を持つ 口縁部は外反してのびる	内外面はナデによる調整 底部は糸切り 外面の上位には、ろくろによる条痕がのこる	胎土-微砂粒を少量含む 焼成-良 色調-橙色	2号堀中下層
120	土師器	壺	口径-不明 底径-(5.6cm) 器高-不明	底部は平ら 口縁部はほぼ直線的にのびる	内外面はナデによる調整 底部は糸切り	胎土-砂粒を少量含む 焼成-やや良 色調-橙色	2号堀中下層
121	土師器	壺	口径-不明 底径-(5.5cm) 器高-不明	底部中央がわずかにくぼむ 口縁部はやや内湾気味に立ち上がるとおもわれる	内外面はナデによる調整 底部は糸切り	胎土-微砂粒を少量含む 焼成-不良 色調-橙色	2号堀中下層
122	土師器	壺	口径-不明 底径-(6.3cm) 器高-不明	底部中央がわずかにくぼむ 底部から体部にかけて段を持ち、口縁部はやや内湾気味に立ち上がるとおもわれる	内外面はナデによる調整 底部は糸切りか? 磨耗がひどく不明	胎土-微砂粒を少量含む 焼成-不良 色調-橙色	2号堀中下層
123	土師器	壺	口径-不明 底径-(6.4cm) 器高-不明	底部は平ら 内面底中央は一段盛り上がる 口縁部はやや内湾気味に立ち上がるとおもわれる	内外面はナデによる調整 底部は糸切りか? 全体に磨耗がはげしい	胎土-砂粒を少量含む 焼成-不良 色調-橙色	2号堀上層
124	瓦器	盤	口径-16.0cm 底径-14.4cm 器高-3.1cm	底部は丸みをおびる 口縁部は内湾し、口唇部は丸みをおび、底部から体部にかけて面取りを施す	内外面は丁寧なナデ仕上げ、底部はナデ、口縁部外面には煤が付着する 窯道具の可能性あり	胎土-微砂粒を多く含む 焼成-良 色調-にぶい黄橙	2号堀上層
125	瓦器	盤	口径-(15.8cm) 底径-(15.6cm) 器高-(2.8cm)	底部は丸みをおびる 口縁部はほぼ直立し、口唇部は丸みをおび、底部から体部にかけて面取りを施す	内外面は丁寧なナデ仕上げ、底部は粗いナデ、口縁部外面及び内面底には煤が付着する 窯道具の可能性あり	胎土-砂粒を含む 焼成-良 色調-浅黄色	2号堀上層
126	瓦器	盤	口径-(13.8cm) 底径-(13.0cm) 器高-(2.8cm)	底部は丸みをおびる 口縁部はほぼ直行し、口唇部は丸みをおびる	内外面は丁寧なナデ仕上げ、底部は無調整、口縁部外面から底部にかけて煤が付着する 窯道具の可能性あり	胎土-微砂粒を含む 焼成-良 色調-にぶい橙色	2号堀一括
127	陶器	小壺	口径-(9.1cm) 底径-不明 器高-不明	口縁部は大きく外反する 体部最大径を上位にもつ 肩部に1条の細い突帯を持つ	内外面は丁寧なナデ仕上げ	胎土-微砂粒を含む 焼成-良 色調-にぶい黄褐	2号堀上層
128	陶器	小壺	口径-10.4cm 底径-7.7cm 器高-5.2cm	口縁部は大きく外反する 胴部最大径を上位に持つ 肩部に1条の細い突帯を持つ 底部中央はややくぼむ	内外面は丁寧なナデ仕上げ 外面及び底部は酸化による自然釉	胎土-微砂粒を含む 焼成-良 色調 胎土-赤褐色 釉-灰褐色	2号堀上層
129	窯道具	チャツ	口径-(10.8cm) 底径-7.0cm 器高-3.6cm	体部は大きく内湾して立ち上がり、底部はくぼむ 口縁部はほぼ平ら 全体的にゆがみがはげしい	内外面及び口縁部はナデによる仕上げ 全面に酸化による自然釉	胎土-密 焼成-良 色調 胎土-黒灰色 釉-灰褐色	2号堀上層
130	窯道具	チャツ	口径-不明 底径-4.0cm 器高-不明	底部は平ら 口縁部は薄く、ゆるやかに開く	底部は糸切り 内外面はナデ調整 内面は施釉	胎土-密 焼成-良 色調 胎土-黒灰色 釉-灰褐色	2号堀一括
131	窯道具	チャツ	口径-9.6cm 底径-4.6cm 器高-2.1cm	底部は平ら 口縁部は薄く、ゆるやかに開き、粗いナデによる稜線を持つ	底部は糸切り 内外面はろくろを利用した粗いナデ 全面に自然釉	胎土-砂粒を含む 焼成-良 色調 胎土-黒灰色 釉-茶褐色	2号堀上層
132	陶器	不明	口径-不明 底径-6.2cm 器高-不明	底部の中央はくぼみ、底部から胴部にかけては面取りを施し、鋭く屈曲して外反しながら立ち上がる ややゆがみを持つ	底部はナデ及び粗い押圧 内外面及び底部に施釉、底部の一部は釉がはげ落ちる	胎土-密 焼成-良 色調 胎土-暗灰色 釉-オリーブ黄	2号堀上層
133	窯道具	チャツ	口径-(9.6cm) 底径-5.9cm 器高-2.5cm	底部の中央はくぼみ、底部から胴部にかけてはほぼ直角に屈曲し、口縁部は直線的に開く	底部は糸切り 内外面はろくろの回転を利用した丁寧なナデ 全面に酸化による自然釉	胎土-密 焼成-良 色調 胎土-暗灰色 釉-灰赤色	2号堀上層

第9表 2号堀出土遺物観察表(2)

No	種別	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
134	陶器	不明	口径-不明 底径-6.5cm 器高-不明	底部は平らで、体部の立ち上がりはほぼ垂直	内外面及び底部は、丁寧なナデ 体部は底部に張りつけ 全面に施釉	胎土-密 焼成-良 色調 胎土-黒灰色 釉-暗赤褐色	2号堀上層
135	磁器	鉢?	口径-不明 底径-9.4cm 器高-不明	底部は蛇ノ目高台状で、体部よりせりだす 体部下位に5個の突起を有する 外面は細かい凹凸を有する	内面はナデで漆を塗る 底部は丁寧なミガキをかける 外面及び底部には釉を施し、外面の凹部には漆が観察できる	胎土-密 焼成-良 色調-内面は黒 胎土-浅黄色 釉-暗オリーブ	2号堀上層
136	陶器	小壺	口径-3.8cm 底径-不明 器高-不明	体部はゆるやかに立ち上がり 肩が張る 頸部は縮まり、口縁部は大きく外反する	内外面はナデ調整、釉を施す	胎土-砂粒を含む 焼成-良 色調 胎土-茶灰色 釉-赤褐色	2号堀上層
137	陶器	猪口	口径-不明 底径-3.8cm 器高-不明	底部は平らで、中央はわずかにくぼむ 体部は直線的に立ち上がる	内外面には施釉、底部から体部にかけての部分は無施釉	胎土-密 焼成-良 色調-胎土は赤褐色と浅黄色の混合 釉-灰オリーブ	2号堀上層
138	瓦器	すり鉢	法量不明	体部から口縁部にかけての破片で、体部はやや内湾気味に立ち上がる	外面は押圧及びナデによる調整、内面はナデによる調整 6本セットの沈線を下から上へかきあげる	胎土-密 焼成-良 色調-灰色	2号堀下層
139	瓦器	すり鉢	法量不明	体部から口縁部にかけての破片で、体部はほぼ直線的に開き、厚みは不均一である	外面は押圧及びナデによる調整、内面はナデによる調整 5本セットの沈線を下から上へかきあげる	胎土-密 焼成-良 色調-灰黄色	2号堀下層
140	瓦器	すり鉢	法量不明	体部から口縁部にかけての破片で、体部はほぼ直線的に開き、口唇部に面取りを施す	外面は押圧及びナデによる調整、内面はナデによる調整 5本セットの沈線を下から上へかきあげる	胎土-密 焼成-良 色調-にぶい橙色	2号堀中下層
141	瓦器	すり鉢	法量不明	体部から口縁部にかけての破片で、体部はほぼ直線的に開き、薄い	内外面はナデによる調整 5本セットの沈線を下から上へかきあげる 内面の表面剥離がはげし	胎土-砂粒を含む 焼成-やや良 色調-灰黄色	2号堀上層
142	瓦器	すり鉢	法量不明	体部から口縁部にかけての破片で、体部はわずかに内湾して開く	外面はナデによる調整、内面は斜め方向のナデ 5本セットの沈線を下から上へかきあげる	胎土-砂粒を含む 焼成-良 色調-灰黄色	2号堀上層
143	瓦器	すり鉢	法量不明	体部から口縁部にかけての破片で、体部はやや外反し、口唇部にいくにしたがい厚くなり、口唇部は丸みをおびる	外面は押圧、ナデによる調整、内面は横方向のナデによる調整 5本セットの沈線を下から上へかきあげる	胎土-密 焼成-良 色調-灰色	2号堀下層
144	瓦器	すり鉢	法量不明	体部から口縁部にかけての破片で、体部は直線的に開き、口唇部はわずかに内傾し、水平である 内面は表面剥離がはげしい	外面はナデによる調整、内面は斜め方向のナデによる調整 5本セットの沈線を下から上へかきあげる	胎土-密 焼成-不良 色調-黄灰色	2号堀上層
145	瓦器	すり鉢	口径-(27.6cm) 底径-不明 器高-不明	体部はほぼ直線的に開く 厚さは不均一である 口唇部には浅いくぼみがめぐる	外面は押圧及びナデによる調整、内面もナデによる調整 5本セットの沈線を下から上へかきあげ、その間隔は広い	胎土-密 焼成-良 色調-にぶい橙色	2号堀中下層
146	瓦器	すり鉢	口径-(27.8cm) 底径-(14.0cm) 器高-10.4cm	体部はほぼ直線的に開き、厚さは不均一である 口唇部は水平で浅いくぼみがめぐる	外面は押圧及びナデによる調整、内面もナデによる調整 6本セットの沈線を下から上へかきあげ、内面底部にも渦巻状沈線を施す	胎土-密 焼成-良 色調-にぶい黄橙色	2号堀上層
147	瓦器	火舎	口径-(11.7cm) 底径-不明 器高-不明	口縁部から体部にかけての破片 上位に1条の突帯を持つ	内外面とも横ナデによる調整 口縁部と上位の突帯の間に連続した花文のスタンプを施す	胎土-密 焼成-良 色調-黄灰色	2号堀上層
148	瓦器	火舎	口径-(23.4cm) 底径-不明 器高-不明	口縁部から体部にかけての破片で、口唇部はやや外下がりで、中央部がややくぼむ 内面には煤が付着している	外面の口縁部は丁寧な横ナデ、下位は粗い横ナデによる調整 内面の上部は横ナデ、その下位は押圧により連弁状の文様を表す	胎土-砂粒を含む 焼成-良 色調-黄灰色 内面は黒褐色	2号堀上層
149	瓦器	鉢	口径-不明 底径-(23.4cm) 器高-不明	底部はほぼ平らである 体部は垂直に立ち上がる	内外面ともナデによる調整	胎土-密 焼成-良 色調-にぶい赤褐色	2号堀上層
150	瓦器	火舎	口径-(17.6cm) 底径-不明 器高-不明	口縁部は内湾し、全体に丸みをおび、口唇部は厚く丸みをおびる	内外面とも丁寧な横ナデ仕上げ 胴部に菊花文のスタンプを施す	胎土-密 焼成-良 色調-褐灰色	2号堀上層
151	瓦器	火舎	口径-不明 底径-不明 器高-不明	口縁部から胴部にかけての破片 体部上位に1条の突帯を持つ	内外面とも横ナデ仕上げ 口縁部と突帯の間に三ツ巴のスタンプを施す	胎土-密 焼成-良 色調-淡黄色	2号堀上層

第10表 2号堀出土遺物観察表(3)

No	種別	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
152	瓦器	火舍	口径-不明 底径-不明 器高-不明	口縁部から体部にかけての破片 体部上位に1条の突帯を持つ	内外面とも横ナデ調整 口縁部と突帯の間に※状のスタンプを施す	胎土-密 焼成-良 色調-にぶい橙色	2号堀上層
153	瓦器	羽釜	銚径-(21.2cm)	銚の部分のみの破片 銚は先端部がやや上向く	内外面とも横ナデ調整	胎土-密 焼成-良 色調-灰色	2号堀上層
154	瓦器	火舍?	口径-不明 底径-(20.0cm) 器高-不明	底部は平らで、体部は直線的で開き気味に立ち上がる 体部下位に突帯を持つ	内外面とも横ナデ調整	胎土-砂粒を含む 焼成-良 色調-にぶい黄橙	2号堀上層
155	瓦器	鉢	口径-不明 底径-(20.0cm) 器高-不明	底部は平らで、体部は直線的に開く	内外面とも横ナデ調整	胎土-密 焼成-やや良 色調-黄灰色	2号堀中下層
156	瓦器	鉢	口径-不明 底径-(17.4cm) 器高-不明	底部は平らで、体部は垂直に立ち上がる 底部から体部にかけて面取りを施す	内外面ともナデ調整	胎土-密 焼成-やや良 色調-明赤褐色 内面は赤灰色	2号堀上層
157	瓦器	火舍	口径-(49.0cm) 底径-不明 器高-不明	体部は内湾して口縁部に至る 口縁部の断面形は三角形を呈する 体部中央と上位に突帯を持つ	内外面ともナデ調整 口縁部と上位突帯の間に三ツ巴文のスタンプを施す	胎土-密 焼成-やや良 色調-浅黄色	2号堀上層
158	瓦器	火舍	口径-26.8cm 底径-20.5cm 器高-13.0cm 脚高-3.1cm	底部は平らで、3個の脚を有する 体部はやや膨らみを持ち、口唇部は水平である	内外面とも丁寧なナデ調整 体部を底部に接合する	胎土-密 焼成-良 色調-黒灰色	2号堀上層
159	瓦器	火舍	口径-不明 底径-(19.0cm) 器高-不明 脚高-不明	底部は平ら、脚の痕跡を持つ 3個の脚が推定できる 体部下位には突帯を持ち、内湾気味に立ち上がる	外面はケズリの後にナデ調整、内面はナデ調整 突帯及び脚は張り付け	胎土-密 焼成-やや良 色調-浅黄橙色	2号堀上層
160	瓦器	火舍	口径-30.3cm 高台径-20.5cm 器高-17.8cm 高台高-4.3cm	二重の高台を持つ 体部はゆるやかに立ち上がり 口縁部は外に迫り出し、丸みを持つ 体部中央に二重の丸い突帯を下位には半円径の凹線を持つ	全面が非常に丁寧なミガキで仕上げられており 体部の突帯上位にはひょうに細かい三重円文のスタンプを、下位には雷文のスタンプを連続し施す	胎土-密 焼成-良 色調-褐灰色	2号堀上層
161	瓦器	火舍	口径-不明 底径-21.5cm 器高-不明 高台高-6.4cm	高台部と体部は直線 高台部の4ヶ所に透かし孔を持つ。透かし孔は対角に1個づつ、もう一つの対角に3個の円である	内外面は丁寧なナデ調整、内面底部及び高台上面は多方向のナデ調整	胎土-密 焼成-良 色調-褐灰色	2号堀上層
162	瓦器	甕	突帯径-35.4cm 底径-不明 器高-不明	形態は長胴で、1条の突帯を持つ	外面はヘラケズリの後、ナデ調整 内面はナデ調整	胎土-密 焼成-やや良 色調-浅黄橙色	2号堀上層
163	陶器	鉢	口径-不明 底径-(9.6cm) 器高-不明	底部は平らで、中央部がわずかにくぼむ 体部は薄く、やや内湾して立ち上がる	内外面はろくろナデ 底部は糸切り 外面は自然釉	胎土-密 焼成-良 色調-胎土-黒灰色 釉-灰褐色	2号堀上層
164	陶器	線香立	口径-7.4cm 底径-5.9cm 器高-5.1cm 5.4cm	底部は平底、体部は丸みをおび、口縁部は外反して開く 3ヶ所に綫の飾り突帯がつく 内面上位に煤が付着する	全体に丁寧なナデ調整 突帯ははりつけで、ヘラ調整	胎土-密 焼成-良 色調-浅黄橙色	2号堀中下層
165	陶器	水注	口径-4.9cm 底径-4.7cm 器高-3.2cm	底部は平底、体部は丸みをおび、口縁部は外反して短く開く 把手を持ち、注口部分は欠損	全体にナデ調整 把手ははりつけで 底部を除く全体に釉を施す	胎土-密 焼成-良 色調-胎土-暗灰色 釉-灰オーリー	2号堀中下層
166	陶器	水注	口径-不明 底径-不明 器高-不明 体最大幅-7.6cm	形態は丸みをおび、偏平注口部分が残存	全体にナデ調整 外面には釉を施す	胎土-密 焼成-良 色調-胎土-暗赤褐色 釉-赤褐色	2号堀中下層
167	陶器	灯明皿	口径-不明 高台径-6.4cm 器高-不明	皿を2段に重ねた形態で、下皿は油受けで、細い突帯が幾重にもめぐる 上皿は油入れ、両口縁部欠損 高台の置付は丸みをおびる	高台はケズリ出し 高台内面は無施釉	胎土-密 焼成-良 色調-胎土-浅黄色 釉-綠灰色	2号堀中下層
168	陶器	小壺	口径-4.0cm 底径-不明 器高-不明	体部の最大径は中位に位置すると推定される 頸部の締まりは弱く、口縁部は円をえがいて内湾する	全体がろくろナデ調整 内外面とも釉を施す	胎土-密 焼成-良 色調胎土-浅黄色 釉-暗褐色	2号堀中下層

第11表 2号堀出土遺物観察表(4)

No	種別	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
169	陶器	猪口	口径-不明 底径-(2.2cm) 器高-不明	小型で、底部は平ら 体部中央がわずかにくびれる 口唇部は丸みをおびる	底部は糸切り 体部下位、底部、内面は無施釉	胎土-密 焼成-良 色調 胎土-褐色 釉-暗褐色	2号堀上層
170	陶器	猪口	口径-不明 底径-(2.2cm) 器高-不明	小型で、底部は平らで、中央 はケズリ痕 体部は直線的にのびる	底部はケズリ 底部から体部にかけては無施釉	胎土-密 焼成-良 色調 胎土-暗褐色 釉-灰白色	2号堀上層
171	陶器	灯明皿	口径-不明 底径-4.3cm 器高-不明	浅い皿に芯置台を有する 芯置台には数条の沈線を施す 底部は平底で、中央がくぼむ	内外面はナデ調整 底部は糸切り 芯置き台ははりつけ、全面に自然釉	胎土-密 焼成-良 色調 胎土-赤褐色 釉-暗赤褐色	2号堀一括
172	陶器	鉢	口径-13.8cm 底径-12.0cm 器高-8.3cm	底部は平底 体部はほぼ直立し、厚さは不 均一 口唇部は水平	内外面はろくろによるナデ調整 底部は糸切り 外面及び底部に自然釉	胎土-砂粒を含む 焼成-良 色調 胎土-暗灰色 釉-暗赤褐色	2号堀中下層
173	陶器	鉢	口径-(18.1cm) 底径-(10.7cm) 器高-5.2cm	底部は平底、体部はゆるやか に内湾して立ち上がり、口唇 部は水平、底部から体部にか けて部分的に取りを施す	内外面はろくろによるナデ調整 底部は糸切り 内面見込部分に施釉	胎土-砂粒を含む 焼成-良 色調 胎土-黒灰色 釉-深緑色	2号堀中下層
174	陶器	皿	口径-11.2cm 底径-4.8cm 器高-1.8- 2.2cm	底部は平底、体部はゆるやか に内湾して開き、口唇部は丸 みを帯びる 見込は1段くぼむ	内外面はろくろによる丁寧なナデ 見込に絵を施す	胎土-密 焼成-良 色調 胎土-赤褐色 絵-乳白色	2号堀中下層
175	陶器	大皿	口径-(30.9cm) 底径-(19.3cm) 器高-4.9cm	底部は平底で、格子目状に深い 刻みを施す 口縁部は大きく外反して開く 口唇部には浅い沈線が巡る	内外面はろくろによる丁寧な回転ナデ 底部はナデ後、格子目に片切彫りを施す口唇部 から内面に施釉	胎土-密 焼成-良 色調 胎土-茶灰色 釉-枯草色	2号堀上層
176	陶器	尿瓶	口縁径-5.4cm 高台径-9.3cm 器高-13.0cm 胴径-17.3cm	平面形態は楕円形を呈する 高台は外面に面取りを施し、 中央はくぼむ 口縁部は斜め上方にあり、口 唇部は丸く膨らむ	内外面に釉を施し、内面の一部は露胎する底部 はケズリ 把手及び口縁部は張りつけ	胎土-密 焼成-良 色調 胎土-弁柄色 釉-墨色	2号堀上層
177	陶器	甕	口径-不明 底径-(18.0cm) 器高-不明	底部は平底、体部は直線的に 開く	外面から底部にかけて施釉、底部の一部は露胎 内面は回転ナデ、底はタタキ後ナデ	胎土-密 焼成-良 色調 胎土-茶灰色 釉-暗赤灰色	2号堀上層
178	陶器	花器?	口径-不明 底径-13.2cm 器高-不明	底部は平底で、中央はくぼむ 体部下位が膨らむ 体部は内傾して立ち上がり、 ゆがみがはげしい	外面は回転ナデ、底部はナデで、板状の痕跡を 持つ 内面も回転ナデで、底から胴部にかけて釉を施す	胎土-密 焼成-良 色調 胎土-茶灰色 釉-オリーブ色	2号堀上層
179	窯道具	サヤ	口径-(22.4cm) 底径-20.0cm 器高-6.4cm	底部は平底で、中央は僅かに くぼむ 体部は内湾しながら立ち上 がり、口唇部はほぼ平らである 口唇部には胎土目が残存	外面は回転ナデ、底部はケズリ後ナデ 内面も回転ナデ	胎土-密 焼成-良 色調-茶灰色 胎土-暗灰色	2号堀上層
180	窯道具	サヤ	口径-(20.6cm) 底径-(15.2cm) 器高-7.2cm	底部は平底で、中央は僅かに くぼむ 体部は内湾しながら立ち上 がり、口唇部はほぼ平らである	外面は回転ナデ、内面も回転ナデ底部はナデ	胎土-密 焼成-良 色調-茶灰色 胎土-暗灰色	2号堀中下層
181	窯道具	サヤ	口径-(18.8cm) 底径-(16.0cm) 器高-7.1cm	底部は平底で、中央は僅かに くぼむ 体部は内湾しながら立ち上 がり、口唇部はほぼ平らである 口唇部の2ヶ所に胎土目	外面は回転ナデ、内面も回転ナデ 底部はヘラケズリ 底の2ヶ所に線刻あり	胎土-密 焼成-良 色調-茶灰色 胎土-暗灰色	2号堀上層
182	窯道具	サヤ	口径-(14.8cm) 底径-(10.2cm) 器高-8.8cm	底部は平底 体部は内湾しながら立ち上 がり、厚さは不均一で、口唇部 はほぼ平ら 体部下位に沈線が巡る	外面は回転ナデ、内面も回転ナデ 底部はナデで、体部にかけて面取りを施す 体部下位に線刻あり	胎土-密 焼成-良 色調-茶灰色 胎土-暗灰色	2号堀上層
183	窯道具	サヤ	口径-(8.4cm) 底径-(8.4cm) 器高-6.8cm	底部は平底 体部はほぼ垂直に立ち上 がる 厚さは不均一で、口唇部はや や外斜する	外面は回転ナデ、内面も回転ナデ 底部はナデで、他の個体の粘土が付着 体部中央に線刻あり	胎土-密 焼成-良 色調-明茶灰色 胎土-暗灰色	2号堀上層
184	窯道具	サヤ	口径-(8.4cm) 底径-(8.4cm) 器高-6.8cm	底部は平底で、中央部は盛り 上がる 体部はほぼ垂直に立ち上 がり 口唇部は丸みをおびる	内外面は回転ナデ 底部はケズリ後ナデを施す	胎土-密 焼成-良 色調-茶灰色 胎土-暗灰色	2号堀上層
185	瓦器	火舎	口径-(14.0cm) 底径-(12.0cm) 器高-8.1cm 脚高-2.3cm	底部は平らで、体部は直線的 にやや開き気味に立ち上 がり 口縁部は丸みをおびる 脚を3個有する 内面底部中央は突起を持つ	内外面とも丁寧なナデ調整 脚はりつけ	胎土-密 焼成-不明 色調-灰色	2号堀上層

第12表 2号堀出土遺物観察表(5)

No	種別	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
186	瓦器	火舎	口径-不明 底径-(13.2cm) 器高-不明 脚高-2.5cm	底部は平らで、体部は直線的にやや開き気味に立ち上がる脚を3個持ち、やや内傾する内面底部中央は突起を持つ	内外面とも丁寧なナデ調整 体部を底部に張りつける。脚もはりつけ、ナデによる接合	胎土-密 焼成-不良 色調-褐灰色	2号堀 中下層
187	瓦器	火舎	口径-不明 底径-(11.8cm) 器高-不明 脚高-1.4cm	底部は平らで、体部はやや外反気味に立ち上がり厚さは不均一 脚を3個持つ	内外面とも丁寧なナデ調整 体部を底部に張りつける。脚もはりつけ、ナデによる接合	胎土-密 焼成-不良 色調-暗灰色	2号堀 上層
188	瓦器	火舎	口径-不明 底径-(14.8cm) 器高-不明 脚高-不明	二重の屈曲をもつ脚台を有する 内面底は平らで、体部はほぼ垂直に立ち上がる	脚部及び内面は回転によるナデ調整 体部外面は丁寧な押圧で仕上げる	胎土-密 焼成-良 色調-にぶい赤褐色	2号堀 中下層
189	瓦器	羽釜	法量不明	口縁部から鍔にかけての破片 口縁部はゆるく外反する 鍔より下位は煤が付着する	全面ナデ調整 鍔ははりつけ	胎土-砂粒を含む 焼成-やや良 色調-黒褐色	2号堀 上層
190	土師器	三足鍋	脚高-(7.3cm)	脚部のみの出土 ほぼ直線的にのびる 脚上位には煤が付着	全面ナデ調整 脚ははりつけ	胎土-密 焼成-良 色調-にぶい黄橙	2号堀 下層
191	瓦器	火舎	脚高-(7.3cm)	口縁部のみの出土 口縁部は丸みをおび、下位に突帯を巡らす	全面丁寧なナデ調整 口縁部はミガキ	胎土-密 焼成-良 色調-にぶい褐色	2号堀 中下層
192	瓦器	火舎?	法量不明	底部から体部にかけての破片 体部はほぼ直立する 内面の一部に煤が付着する	内外面とも回転によるナデ調整	胎土-密 焼成-良 色調-にぶい褐色	2号堀 中下層
193	陶器	甕	口径-(24.2cm) 底径-16.0cm 器高-24.0cm	体部に比べ器高は低い 底部は平底で、体部の最大径はほぼ中央に位置する 頸部のしまりではなく、口縁部はゆるく外反し、口唇部は内部に突出する	体部上位に8本の沈線を巡らす 体部から口縁部内面まで釉を施す 底部には一部に釉が付着する 外面はナデ調整、内面は格子目のタタキ後ナデ調整を施す	胎土-白色の砂粒を含む 焼成-良 色調-胎土-明赤茶色 釉-焦茶色	2号堀 上層
194	陶器	甕	口径-(15.0cm) 底径-13.6cm 器高-27.5cm	体部は長胴で、最大径を上位に持つ 口縁部は直立し中央でわずかに外反し、口唇部はやや丸みをおびる 底部は平底で中央がくぼむ	体部上位に波状の沈線を巡らす 外面は回転ナデで多数の浅い筋を残す 内面は格子目のタタキ後回転ナデを施す 内面底部には底打ちのタタキ痕跡が残る 底部を除くすべてに釉を施し、内面の一部は露胎する	胎土-密 焼成-良 色調-胎土-暗茶灰色 釉-赤茶色	2号堀 中下層
195	陶器	甕	口径-(15.0cm) 底径-13.6cm 器高-27.5cm	体部は長胴で、最大径を上位に持つ 口縁部は直立し中央でわずかに外反し、口唇部はやや丸みをおびる 底部は平底で中央がくぼむ	体部上位に波状の沈線を巡らす 外面は回転ナデで多数の浅い筋を残す 内面は格子目のタタキ後回転ナデを施す 内面底部には底打ちのタタキ痕跡が残る 底部を除くすべてに釉を施し、内面の一部は露胎する	胎土-密 焼成-良 色調-胎土-暗茶灰色 釉-赤茶色	2号堀 中下層
196	陶器	甕	口径-(17.2cm) 底径-13.4cm 器高-26.0cm	体部は長胴で、最大径を上位に持つ 口縁部はくの字形に開き口唇部は膨らみを持つ 底部は平底 胴部上位に突帯が巡る	体部上位に粘土の連続張りつけによる突帯が巡る 外面は回転ナデで一部にタタキ目の痕跡を残す 内面は格子目のタタキ後回転ナデを施す 外面上部に施釉、内面下位には釉垂れ 底部の接合は押圧及びナデによる	胎土-密 焼成-良 色調-胎土-暗茶灰色 釉-赤茶色	2号堀 中下層
197	陶器	鉢	口径-25.3cm 底径-16.4cm 器高-9.5cm	底部には短い高台を持ち、体部は内湾しながら開き、口縁部はわずかに外反し、口唇部は丸みをおびる 焼成時の歪みあり	全面にろくろによる回転ナデを施し、外面及び内面に釉を施すが体部内面には露胎がある 内面底部周辺には釉が溜まり、その部分に気泡が生じる 外面及び内面上位に施釉、内面下位には釉垂れ 底部の接合は押圧及びナデによる	胎土-密 焼成-やや良 色調-胎土-茶灰色 釉-灰緑色 露胎-茶灰色	2号堀 上層
198	陶器	土瓶	口径-不明 胴径-17.6cm 器高-不明	全体の形態はそろばん玉状を呈する 注口及び把手部は欠損 底部中央はくぼみ、体部は中央で大きく屈曲する ひじょうに薄いつくり	全面にろくろによる回転ナデを施し、外面上部には釉を施し、体部下部には白土を塗布する 内面底部には釉垂れ	胎土-密 焼成-良 色調-胎土-赤茶色 釉-淡い緑色 化粧土-黄灰色	2号堀 上層
199	陶器	土瓶	口径-9.6cm 底径-7.0cm 胴径-20.3cm 器高-12.2cm	全体の形態はそろばん玉状を呈する 底部中央はくぼみ、体部は中央で鋭く屈曲し口縁部に至る3個の脚を持つが、それは底部より上位に位置する 注口部は外反する	全面にろくろによる回転ナデを施し、外面上部には釉を施し、体部下部には回転痕を残す 内面にも釉を施しているが、釉変は不完全 底部はケズリ後ナデ調整 注口部内面にはカス止めは無い 口縁部は一部釉をかき取る 胴部下位は煤が付着	胎土-密 焼成-良 色調-胎土-淡黄赤色 釉-暗茶色	2号堀 上層
200	陶器	土瓶	口径-7.8cm 底径-5.6cm 胴径-19.7cm 器高-10.3cm	全体の形態はそろばん玉状を呈する 底部中央はくぼみ、体部は中央で鋭く屈曲し口縁部に至る3個の脚を持つ、その形状は尖り、注口部は外反する	全面にろくろによる回転ナデを施し、外面上部には釉を施し、体部下部には回転痕を残す 内面にも釉を施しているが、一部は露胎する 底部はケズリ後ナデ調整 注口部内面のカス止め孔は3個 口縁部は一部釉をかき取る	胎土-砂粒を含む 焼成-良 色調-胎土-明茶色 釉-暗オリーブ	2号堀 上層

第13表 2号堀出土遺物観察表(6)

No	種別	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
201	陶器	土瓶	口径-(8.2cm) 底径-(7.2cm) 胴径-(16.7cm) 器高-9.3cm	全体の形態はそろばん玉状を呈する 底部中央はくぼみ、体部は中央で鋭く屈曲し口縁部に至る 脚の有無は不明、注口部は直線的に延び、外反する 注口部のすぐ上位に把手を有する	全面にろくろによる回転ナデを施し、外面上部には釉を施し、体部下部には回転痕を残す 内面にも釉を施しているが、一部は露胎する 体部上位には10条の沈線を巡らし、その下位には縦方向の沈線を巡らす 注口部内面のカス止め孔は3個 口縁部は一部釉をかき取る	胎土-密 焼成-良 色調 胎土-明赤褐色 釉-暗茶色	2号堀上層
202	陶器	土瓶	口径-(6.3cm) 底径-(7.2cm) 胴径-(16.7cm) 器高-9.3cm	全体の形態はそろばん玉状よりは膨らむ 体部は中央で緩く屈曲し口縁部に至る 脚の有無は不明、注口部は残存せず、背後の把手のみ残存	全面にろくろによる回転ナデを施し、外面上部には釉を施し、体部下部には回転痕を残す 内面の一部に釉を施しているが、一部は露胎する 体部上位には細かい沈線を巡らし、その下位には草状の沈線を飾る 口縁部は一部釉をかき取る 体部下位には煤が付着する	胎土-密 焼成-良 色調 胎土-明茶色 釉-灰オーリーブ	2号堀上層
203	陶器	土瓶	口径-(7.3cm) 底径-(7.3cm) 胴径-15.6cm 器高-11.8cm	全体の形態はそろばん玉状で 体部上位は高い 体部は中央で鋭く屈曲しわざかに内傾しながら口縁部に至る 脚は無く、注口部及び背後の把手が残存する 注口部先端は外反する	全面にろくろによる回転ナデを施し、外面及び内面に釉を施し、体部下部は一部釉が剥げる 注口部はケズリによる調整を施す 口縁部にも釉をかける 体部下位には煤が付着する 注口部内面にはカス止めの13個の孔をあける 把手は半円形ではりつけ	胎土-密 焼成-良 色調 胎土-明茶色 釉-オリーブ	2号堀上層
204	陶器	土瓶	口径-6.3cm 底径-(6.6cm) 胴径-16.2cm 器高-10.5cm	全体の形態はそろばん玉状で 底部は平ら 体部は中央で屈曲しわざかに内傾しながら口縁部に至り、 口縁部はほぼ直立する 脚は無く、注口部及び背後の把手が残存する 注口部先端はほぼ直行し、その先端は平らである	全面にろくろによる回転ナデを施し、外面及び内面に釉を施し、内面の一部は露胎する 体部下位は無施釉 注口部はナデにより調整を施す 口縁部は釉のかきとりが見られる 体部下位には煤が付着する 注口部内面にはカス止めは無い 注口部及び把手ははりつけ	胎土-密 焼成-良 色調 胎土-明黄茶色 釉-灰黄緑色 青緑色	2号堀上層
205	陶器	土瓶	口径-不明 底径-7.1cm 胴径-(16.0cm) 器高-不明	全体の形態は楕円形を呈する 底部中央は大きくくぼみ、体部は中央で緩やかに屈曲し、わずかに内傾しながら口縁部に至る 脚は無く、背後の把手が残存する 把手は台形を呈し、円形の孔を持つ	全面にろくろによる回転ナデを施し、外面上部に釉を施し、内面の一部には釉垂れがある 体部下位は白土を塗布し、一部かき取る 体部下位にはわずかに煤が付着する 把手ははりつけ	胎土-密 焼成-良 色調 胎土-明赤茶色 釉-緑青色	2号堀上層
206	陶器	油差	口径-(3.2cm) 底径-不明 胴径-(14.0cm) 器高-不明	胴部の形態は縦の樽形を呈し、上位で屈曲し油受け部にいたる。油受けはやや外反し、頸部は長く伸びて、先端部は外反する。口唇部は尖り気味	全面にろくろによる回転ナデを施し、頸部は丁寧なナデ調整を施す 内外面には釉を施し、頸部内面にはしづり痕跡が確認できる 全体に細かい貫入がある	胎土-密 焼成-良 色調 胎土-暗褐色 釉-暗黄緑色 ~暗緑茶色	2号堀上層
207	陶器	德利	口径-不明 高台径-8.4cm 胴径-15.5cm 器高-不明	胴部の形態は球形を呈し、頸部は欠損 高台はやや内傾し、豊付は平ら 高台内面はほぼ平ら	全面にろくろによる回転ナデを施す 高台は削り出し 外面に釉を施し、内面は無施釉 胴部上位には色調の異なる釉垂れ有り 豊付は釉をかき取る	胎土-密 焼成-良 色調 胎土-赤茶色 釉-暗茶灰色 釉垂-明乳黄色	2号堀上層
208	陶器	德利	口径-3.0cm 高台径-6.4cm 胴径-12.4cm 器高-19.7cm	胴部の形態は球形を呈し、頸部はほぼ直立し、口縁部は外反して玉縁状をなす 高台の断面形は逆台形を呈し内面は膨らむ	全面にろくろによる回転ナデを施す 高台は削り出しか 外面に釉を施し、内面は無施釉 胴部上位には色調の異なる釉垂れ有り 高台部は露胎がみられ、豊付は釉をかき取る 高台内面には多量の砂が付着する	胎土-密 焼成-良 色調 胎土-明赤茶色 釉-黄白色 釉垂-乳黄色	2号堀上層
209	陶器	德利	口径-3.2cm 高台径-不明 胴径-13.0cm 器高-不明	胴部の形態は球形を呈し、頸部はほぼ直立し、口縁部は外反して玉縁状をなす	全面にろくろによる回転ナデを施す 外面に釉を施し、内面にも釉垂れがある 胴部上位には色調の異なる釉垂れ有り	胎土-密 焼成-良 色調 胎土-焦茶色 釉-青灰色 釉垂-乳黄色	2号堀上層
210	陶器	德利	口径-不明 底径-10.0cm 胴径-15.8cm 器高-不明	胴部の形態は三角形を呈し、胴部の最大径は下位に位置し 胴部の内外面は凹凸を持つ 底部は中央がくぼむ	全面にろくろによる回転ナデで、凹凸を出す 底部を除く全面に釉を施す 胴部上位には色調の異なる釉垂れあり 底部から胴部にかけてはケズリ	胎土-密 焼成-良 色調 胎土-暗茶灰色 釉-暗茶灰色	2号堀上層

第14表 2号堀出土遺物観察表(7)

No	種別	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
211	陶器	徳利	口径-不明 底径-(7.6cm) 胴径-10.6cm 器高-不明	胴部の形態はやや長胴を呈し ゆるやかに頸部に移る 底部は平底で、ほぼ平ら	全面にろくろによる回転ナデを施す 外面及び底部に釉を施し、内面は無施釉 外面及び底部は一部露胎がみられる	胎土-密 焼成-良 色調 胎土-灰色 釉-オリーブ	2号堀 上層
212	陶器	徳利	口径-不明 高台径-(10.2cm) 胴径-(17.8cm) 器高-不明	胴部の最大径はやや上位に位置し、 高台の断面形は五角形 を呈する 胴部下位に一本の沈線が巡る	全面にろくろによる回転ナデを施す 内外面に釉を施し、高台は無施釉 高台はケズリ出しで、外面に面取りを施す	胎土-密 焼成-良 色調 胎土-淡黄橙色 釉-暗黄緑色	2号堀 上層
213	陶器	徳利	口径-不明 高台径-(8.0cm) 胴径-15.6cm 器高-不明	胴部の形態は球形を呈し、頸部はしまり、ほぼ直立する 高台は胴部からゆるやかにのびる	全面にろくろによる回転ナデを施す 外面に釉を施し、高台は無施釉 高台はケズリ出しで、畳付は釉をかきとり、砂粒が多量に付着する 胴部は釉の二度かけである	胎土-密 焼成-良 色調胎土-弁柄色 釉-黒茶褐色 灰黄色	2号堀 上層
214	染付	徳利	口径-不明 高台径-8.2cm 胴径-16.0cm 器高-不明	胴部の形態は球形を呈し、頸部はゆるやかに立ち上がり、 口縁部にいたる 高台は胴部からゆるやかにのび、その断面形は台形を呈し 内面に面取りを施す	全面にろくろによる回転ナデを施す 外面に釉を施し、内面は一部に釉垂れ 高台はケズリ出しで、畳付は釉をかきとる 内面底部には砂粒がたまる 度部には笹状の染付、頸部、胴部下位に1条、 高台外面に2条の染付が巡る	胎土-密 焼成-良 色調胎土-白灰色 釉-明緑灰色 吳須-淡藍色	2号堀 中下層
215	磁器	徳利	口径-不明 高台径-7.6cm 胴径-16.8cm 器高-不明	胴部の形態は球形を呈し、頸部はゆるやかに立ち上がり、 口縁部にいたる 高台は胴部からゆるやかにやや内湾してのび、内面に面取りを施す	全面にろくろによる回転ナデを施す 外面に釉を施す 高台はケズリ出しで、畳付は釉をかきとる 内面底部には砂粒がたまる 胴部中位の両面には笹状の文様を施す	胎土-密 焼成-良 色調-胎土は暗灰色、釉は黄灰色、 紋様-緑茶色	2号堀 中下層
216	陶器	碗	口径-(10.7cm) 高台径-4.1cm 高台高-0.6cm 器高-5.0cm	体部はゆるやかに内湾して立ち上がり、口唇部はとがる 高台はわずかに開き、畠付は丸みをおびる	内外面に釉を施す 体部に花文、松葉文の白色象嵌を施す 高台はケズリ出しで無施釉 内外面には細かい貫入	胎土-密 焼成-良 色調-胎土は暗茶灰色、釉は淡緑茶色、象嵌は黄灰色	2号堀 上層 高田焼 VI類
217	陶器	碗	口径-(9.9cm) 高台径-3.7cm 高台高-0.4cm 器高-5.8cm	体部はゆるやかに内湾して立ち上がり、口縁部はほぼ直立しこがる 高台はわずかに開き、中央は巴状を呈する	内外面に釉を施すが、かなり風化する 体部に文様不明の白色象嵌を施す 高台はケズリ出しで、外面に面取りを施し、無施釉 内外面に細かい貫入	胎土-密 焼成-良 色調-胎土は暗茶灰色、釉は淡黄緑色、象嵌は黄灰色	2号堀 上層 高田焼 VI類
218	陶器	碗	口径-5.7cm 高台径-2.8cm 高台高-0.7cm 器高-3.9cm	体部はゆるやかに内湾して立ち上がる、口唇部やとがり わずかに外反する 高台はわずかに開き、中央はケズリのため巴状を呈する	内外面に釉を施す 口縁部に2条の黒象嵌を巡らし、体部には桜花の白色象嵌を施す 高台はケズリ出しで、外面に面取りを施し、無施釉 内外面に細かい貫入	胎土-密 焼成-良 色調-胎土は明茶灰色、釉は灰黄緑色、象嵌は黄灰色と黒緑色	2号堀 上層 高田焼 VI類
219	陶器	碗	口径-9.0cm 高台径-3.4cm 高台高-0.5cm 器高-5.4cm	体部はゆるやかに内湾して立ち上がる、口唇部はわずかに外反する 高台はわずかに開き、中央部は巴状を呈する	内外面に釉を施す 体部には松葉文の白色象嵌を施す 高台はケズリ出しで、外面に面取りを施し、無施釉 内外面に細かい貫入	胎土-密 焼成-良 色調-胎土は暗灰色、釉は灰汁色、象嵌は黄灰色	2号堀 上層 高田焼 VI類
220	陶器	碗	口径-9.0cm 高台径-3.4cm 高台高-0.4cm 器高-5.4cm	体部はゆるやかに内碗して立ち上がる、口唇部はわずかに外反する 高台はわずかに開き、中央部は巴状を呈する	内外面に釉を施す 体部には松葉文の白色象嵌を施す 高台はケズリ出しで、無施釉 内外面に細かい貫入	胎土-密 焼成-良 色調-胎土は茶色、釉は灰オリーブ色 象嵌は灰白色	2号堀 上層 高田焼 VI類
221	陶器	碗	口径-9.0cm ~10.1cm 高台径-3.7cm 高台高-0.5cm 器高-6.1cm	焼成時の歪みあり 体部はゆるやかに内湾して立ち上がる、口唇部はわずかに内傾する 高台はわずかに開き、中央部は巴状を呈する	内外面に釉を施す 体部には水草様の白色象嵌を施す 高台はケズリ出しで、外面に面取りを施し、無施釉 内外面に細かい貫入	胎土-密 焼成-良 色調-胎土は茶灰色、釉は灰オリーブ色、象嵌は灰黃緑色	2号堀 上層 高田焼 VI類
222	陶器	碗	口径-10.8cm 高台径-(4.4cm) 高台高-0.6cm 器高-5.9cm	体部はゆるやかに内湾して立ち上がる、口唇部はわずかに外反する 高台はわずかに開き、中央部は巴状を呈する 内面に粘土の付着物	内外面に釉を施す 体部には不明文様の白色象嵌を施す 高台はケズリ出しで、外面に面取りを施し、無施釉 内外面に細かい貫入	胎土-密 焼成-良 色調-胎土は茶灰色、釉は黒緑色、象嵌は黄白色	2号堀 上層 高田焼 VI類
223	陶器	碗	口径-(10.1cm) 高台径-(4.4cm) 高台高-0.6cm 器高-7.0cm	体部は下位で屈曲し、開き気味に立ち上がる 口縁部は外反する 高台はわずかに開く 内面底部には砂粒が付着する	内外面に釉を施す 体部には枝垂れ梅の白色象嵌を施す 高台はケズリ出しで、外面に面取りを施し、無施釉 内外面に細かい貫入	胎土-密 焼成-良 色調-胎土は明灰茶色、釉は暗黄緑色、象嵌は灰黃緑	2号堀 上層 高田焼 VI類
224	陶器	碗	口径-6.0cm 高台径-(2.6cm) 高台高-0.5cm 器高-4.0cm	体部はゆるやかに開き、口縁部は外反する 高台はわずかに開き、中央部は巴状を呈する	内外面に釉を施す 体部には白と黒のこうもりの象嵌を施す 高台はケズリ出しで、外面に面取りを施し、無施釉 内外面に細かい貫入	胎土-密 焼成-良 色調-胎土は黄灰色、釉は灰緑色	2号堀 上層 高田焼 VI類

第15表 2号堀出土遺物観察表(8)

No	種別	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
225	陶器	碗	口径-10.1cm 高台径-4.2cm 高台高-0.7cm 器高-5.5cm	体部はゆるやかに内湾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する 高台は開き、中央部は巴状を呈する 内面2ヶ所に胎土目が残存	内外面に釉を施す 内外面とも粉引状の模様を施す 高台はケズり出しで、外面に面取りを施し、無施釉 内外面に細かい貫入	胎土-密 焼成-良 色調-胎土は明灰色、釉は緑茶色 化粧土は黄白色	2号堀上層 高田焼 IV類
226	陶器	碗	口径-(10.9cm) 高台径-4.3cm 高台高-0.4cm 器高-5.4cm	体部はゆるやかに内湾して立ち上がり、口縁部はわずかに内湾する 高台はわずかに開き、疊付は丸みをおび、中央部は巴状を呈する	内外面に釉を施す 高台はケズり出しで、外面に面取りを施し、無施釉 内外面に細かい貫入	胎土-密 焼成-良 色調-胎土は明黄色、釉は灰黄緑	2号堀上層 高田焼 III類
227	陶器	碗	口径-(9.9cm) 高台径-(4.3cm) 高台高-0.5cm 器高-6.0cm	体部は下位で屈曲し、やや内湾気味に立ち上がり、口縁部はほぼ直行する 高台はわずかに開き、中央部は巴状を呈する	内外面に釉を施す 口縁部上位に1条の象嵌を巡らし、胴部には□状の象嵌を2ヶ所に施す 高台はケズり出しで、外面に面取りを施し、無施釉 内外面に細かい貫入	胎土-密 焼成-良 色調-胎土は明黄色、釉は灰黄色	2号堀上層 高田焼 VI類
228	陶器	碗	口径-(10.2cm) 高台径-(4.4cm) 高台高-0.5cm 器高-6.2cm	体部はゆるやかに内湾して立ち上がり、口縁部もわずかに内傾する 高台はわずかに開き、中央部は巴状を呈する	内外面に釉を施す 胴部には亀の象嵌を施す 高台はケズり出しで、外面に面取りを施し、無施釉 釉の腐食が進み、一部に露胎が見られる	胎土-密 焼成-良 色調-胎土は暗青灰色、釉は灰白色	2号堀上層 高田焼 VI類
229	陶器	碗	口径-11.0cm 高台径-不明 高台高-不明 器高-不明	体部はゆるやかに内湾して立ち上がり、口縁部にいたる高台は欠損する	内外面に釉を施す 胴部には花の象嵌を施す 高台は無施釉 内外面に細かい貫入	胎土-密 焼成-良 色調-胎土は茶灰色、釉は黄白色	2号堀上層 高田焼 VI類
230	陶器	碗	口径-不明 高台径-(11.0cm) 高台高-0.7cm 器高-不明	体部はゆるやかに内湾して立ち上がる 高台はわずかに開き、中央部やや盛り上がる	内外面に釉を施す 胴部には「スエ」の文字と花びらの象嵌を施す 高台はケズり出しで、外面に面取りを施し、無施釉 内外面に細かい貫入	胎土-密 焼成-良 色調-胎土は茶灰色、釉は黄白色	2号堀上層 高田焼 VI類
231	陶器	碗	口径-(9.8cm) 高台径-4.6cm 高台高-0.4cm 器高-5.8cm	体部はゆるやかに内湾して立ち上がり、口縁部にいたる高台はわずかに開き、中央部は巴状を呈する 内面底部には砂が付着する	内外面に釉を施す 高台はケズり出しで、外面に面取りを施し、無施釉 内外面に細かい貫入	胎土-密 焼成-良 色調-胎土は明橙色、釉は灰オーリープ	2号堀上層 高田焼 III類
232	陶器	碗	口径-(7.6cm) 高台径-3.8cm 高台高-0.9cm 器高-5.8cm	体部はゆるやかに内湾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反して、口唇部にいたる高台はわずかに開き、中央部巴状を呈する	内外面に釉を施す 高台はケズり出しで、外面に面取りを施し、無施釉 内外面に細かい貫入	胎土-密 焼成-良 色調-胎土は明黄色、釉は茶オリーブと青緑色	2号堀上層 高田焼 II類
233	陶器	碗	口径-(10.3cm) 高台径-4.2cm 高台高-1.0cm 器高-6.7cm	体部はゆるやかに内湾して立ち上がり、口縁部にいたる高台はわずかに開き、中央部は平ら	内外面に釉を施す 高台はケズり出しで、外面に面取りを施し、無施釉 内外面に細かい貫入	胎土-密 焼成-良 色調-胎土は灰黄色、釉は灰黄緑色	2号堀上層 在地系陶器 江戸時代後期
234	陶器	鉢	口径-11.2cm 高台径-5.2cm 高台高-0.5cm 器高-6.8cm	体部はゆるやかに内湾して立ち上がり、口縁部は一度外反し、口唇部はやや内傾する 高台は大きく開き、中央部はとがる	内外面に釉を施す 高台はケズり出しで、外面に大きく面取りを施し、無施釉 内外面に細かい貫入	胎土-砂粒を含む 焼成-良 色調-胎土は青灰色、釉は灰黄緑色	2号堀上層 高田焼 III類
235	陶器	碗	口径-9.1cm 高台径-4.1cm 高台高-0.5cm 器高-5.9cm	体部はゆるやかに内湾して立ち上がり、口唇部もやや内傾する 高台はやや開き、中央部はほぼ平ら	内外面に釉を施す 高台はケズり出しで、外面に面取りを施し、無施釉 内外面に細かい貫入	胎土-砂粒を含む 焼成-良 色調-胎土は暗灰色、釉は暗オーリープ	2号堀上層 高田焼 II類
236	陶器	碗	口径-不明 高台径-4.5cm 高台高-0.8cm 器高-不明	体部はゆるやかに内湾して開き、体部の下位で屈曲し、口縁部はさらに外反する 高台はやや開き、中央部は段をもつ	外面の上位に釉を施し、内面は無施釉 高台はケズり出しで、外面に粗い面取りを施し、無施釉 内面底部には砂粒が付着する	胎土-砂粒を含む 焼成-良 色調-胎土は黄橙色、釉は黄灰色	2号堀上層 高田焼 I類
237	陶器	碗	口径-8.9cm 高台径-3.7cm 高台高-0.5cm 器高-5.1cm	体部はゆるやかに内湾して開き、口縁部は内碗する 高台は開き、砂が多量に付着する	全面に釉を施し、高台部は釉をかき取る 高台はケズり出しで、外面に面取りを施す	胎土-砂粒を含む 焼成-良 色調-胎土は青灰色、釉は灰白色	2号堀上層 在地系 1820-幕末
238	磁器	碗	口径-12.8cm 高台径-4.1cm 高台高-0.8cm 器高-5.4cm	体部はゆるやかに内碗して開き、口縁部に至る 高台は開き、疊付には砂が付着する	全面に釉を施すが、見込には蛇ノ目釉刺ぎ、高台部は釉をかき取る 高台はケズり出し	胎土-密 焼成-良 色調-胎土は灰白色、釉は明緑灰色	2号堀上層 在地系 江戸時代後期
239	磁器	德利	口径-不明 高台径-6.9cm 高台高-1.1cm 器高-不明	胴部の形態はほぼ球形を呈し 頭部は欠損する 高台は胴部からゆるやかにのび、その断面形は台形を呈し 内面に面取りを施す	全面にろくろによる回転ナデを施し、外面及び 高台内面に釉を施す 内面は無施釉、疊付は釉をはぎ取る	胎土-密 焼成-良 色調-胎土-灰白色 釉-灰白色	2号堀中下層

第16表 2号堀出土遺物観察表(9)

No	種別	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
240	陶器	碗	口径-(6.6cm) 高台径-2.7cm 高台高-0.5cm 器高-3.7cm	体部はゆるやかに内湾して開き、口縁部はやや外反する高台はわずかに開く	全面にろくろによる回転ナデを施し、内外面に釉を施し、外面に花びらの象嵌を施す 内面は白色粘土による渦巻き文様 高台内部は無施釉で、疊付外面に面取りを施す細かい貫入が入る	胎土-密 焼成-良 色調胎土-青灰色 釉-灰オリーブ 象嵌-灰色白	2号堀上層 高田焼 VI類
241	陶器	碗	口径-(6.4cm) 高台径-3.3cm 高台高-0.7cm 器高-4.1cm	体部はゆるやかに内湾して開き口縁部に至り、口唇部はやや尖る 高台はほぼ直立する	全面にろくろによる回転ナデを施し、内外面に釉を施し、外面に花びらの象嵌を施す 高台内部は無施釉で、疊付外面に面取りを施す 全面に細かい貫入が入る	胎土-密 焼成-良 色調胎土-青灰色 釉-灰オリーブ、象嵌-黒茶、乳白	2号堀上層 高田焼 VI類
242	陶器	碗	口径-不明 高台径-4.1cm 高台高-0.7cm 器高-不明	体部はゆるやかに内湾して開き口縁部に至る 高台はほぼ直立する 高台内面に「八代」の刻印	全面にろくろによる回転ナデを施し、全面に釉を施し、外面に花びらの白色象嵌を施す 高台は削り出しで、疊付外面に面取りを施す	胎土-密 焼成-良 色調胎土-黒灰色 釉-暗赤褐色、象嵌-黄灰色	2号堀中下層 高田焼 VI類
243	陶器	碗	口径-11.0cm 高台径-4.7cm 高台高-1.2cm 器高-5.5cm	体部はほぼ直線的に開き、口唇部は尖る 高台はほぼ直立する	全面にろくろによる回転ナデを施し、全面に釉を施し、見込部分は釉をかき取る 高台は削り出しで、疊付外面に面取りを施す 高台部には砂が付着する	胎土-密 焼成-良 色調胎土-青灰色 釉-緑灰色	2号堀上層 在地系 1820-幕末
244	陶器	碗	口径-不明 高台径-3.8cm 高台高-0.1cm 器高-不明	体部はほぼ垂直に立ち上がる 高台は短い	全面にろくろによる回転ナデを施し、内外面に釉を施し、高台内部は無施釉 体部には松と笹の白色象嵌を施す 高台は削り出し	胎土-密 焼成-良 色調胎土-青灰色 釉-暗オリーブ	2号堀上層 高田焼 VI類
245	磁器	碗	口径-9.5cm 高台径-3.9cm 高台高-0.8cm 器高-4.7cm	体部はゆるやかに内湾して立ち上がり、口縁部は外反する 高台はやや開き、疊付は丸みをおびる	全面にろくろによる回転ナデを施し、内外面に釉を施すが、見込には蛇ノ目釉ハギ 高台は削り出しで、疊付は釉をはぎ取る	胎土-密 焼成-良 色調胎土-灰白色 釉内面-乳白色 釉外面-茶褐色	2号堀一括
246	陶器	猪口	口径-不明 高台径-2.4cm 高台高-0.8cm 器高-不明	体部は下位で屈曲して立ち上がる 高台はやや開き、内面に「高田」の刻印	全面にろくろによる回転ナデを施し、内外面に釉を施すが、高台とその内面は無施釉 高台は削り出しで、疊付外面に面取りを施す	胎土-密 焼成-良 色調胎土-暗灰色 釉内面-乳白色 釉外面-暗緑色	2号堀上層 高田焼 VI類
247	陶器	碗	口径-不明 高台径-2.9cm 高台高-0.7cm 器高-不明	体部はゆるやかに内湾し、口縁部にいたる 高台はやや開き気味にのびる	全面にろくろによる回転ナデを施し、内外面に釉を施すが、高台とその内面は無施釉 内面は白色粘土の渦巻き 高台は削り出しで、疊付外面に面取りを施す 高台から体部にかけての部分には釉が厚く、細かい貫入あり	胎土-密 焼成-良 色調胎土-青灰色 釉内面-乳白色 釉外面-緑灰色	2号堀上層 高田焼 VI類
248	陶器	碗	口径-不明 高台径-2.8cm 高台高-0.6cm 気高-不明	体部はゆるやかに内湾し、口縁部にいたる 高台は直下のび、その断面形は台形である	全面にろくろによる回転ナデを施し、内外面に釉を施すが、高台とその内面は無施釉 内外面は白粘土の渦巻きを呈し、寿の象嵌を施す 高台は削り出しで、疊付外面に面取りを施す 細かい貫入あり	胎土-密 焼成-良 色調胎土-青灰色 釉内面-緑灰色 象嵌-深緑色	2号堀上層 高田焼 V類
249	陶器	碗	口径-(8.5cm) 高台径-5.3cm 高台高-0.5cm 気高-5.3cm	体部はゆるやかに内湾し、口縁部は直立し、口唇部は外反する 内面底部の中央は粘土は盛り上がる 高台は開き、その内面は大粒の砂が付着する	全面にろくろによる回転ナデを施し、内外面に釉を施すが、疊付は釉をかき取る 高台は削り出しで、疊付外面に面取りを施す	胎土-砂粒を含む 焼成-良 色調胎土-青灰色 釉-緑灰色	2号堀中下層 高田焼 I類
250	青磁	小碗	口径-5.5cm 高台径-2.8cm 高台高-0.8cm 器高-3.7cm	底部から体部にかけてはゆるやかに内湾し、口縁部はほぼ直立する 高台の断面形は三角形で、疊付は尖る	内外面に釉を施すが、疊付は釉をかき取る 高台内面は釉が溜まり、一部露胎する	胎土-密 焼成-良 色調胎土-白色 釉-青緑色	2号堀上層 肥前系 1820-幕末
251	陶器	鉢	口径-不明 底径-2.8cm 器高-不明	底部のみ残存 底部は平底で、周囲がややくぼむ 体部はほぼ直立するとおもわれる	底部には面取を施す 内面底部は釉を施し、中央に菊花の白色象嵌を施す	胎土-密 焼成-良 色調胎土-黄橙色 釉-オーリーブ褐色 象嵌-乳黄色	2号堀上層 高田焼 VI類
252	青磁	碗	口径-不明 底径-不明 器高-不明	口縁部のみ残存	釉を施し、単葉の蓮弁	胎土-密 焼成-良 色調胎土-明灰色 釉-青灰色	2号堀上層
253	青磁	碗	口径-不明 底径-不明 器高-不明	体部下位のみ残存	外面は蓮弁	胎土-密 焼成-良 色調胎土-灰白色 釉-緑灰色	2号堀上層
254	陶器	鉢	口径-14.1cm 底径-12.4cm 器高-16.5cm	脚は外反しながら開き、先端は丸みをおびる 体部は大きく内湾して口縁部に至り、口唇部は内傾し丸い 内面底部の中央は盛り上がる	全面にろくろによる回転ナデで調整を施す 外面は釉を施し、内面及び脚内部は無施釉 体部には3条の幅広の帯を巡らし、中央の帯には波状に文様を抜き取る 外面には細かい貫入あり	胎土-小石を含む 焼成-良 色調胎土-黄灰色 釉-灰オリーブ 紋様-暗緑茶色	2号堀中下層

第17表 2号堀出土遺物観察表(10)

No	種別	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
255	陶器	德利	口径-不明 底径-(3.1cm) 器高-不明	底部は平底、体部は内湾して立ち上がり、頸部にいたる頸部及び口縁部欠損	全面をろくろによる回転ナデで調整を施す 外面は釉を施し、内面及び脚内部は無施釉 体部下位に波と舟の白色象嵌を施す 外面には細かい貫入あり	胎土-密 焼成-良 色調胎土-茶灰色 釉-暗オリーブ 象嵌-緑白色	2号堀 上層 高田焼 VI類
256	陶器	蓋	口径-(8.8cm) つまみ径-(3.1cm) 器高-(7.3cm)	蓋は深く、つまみは大きく外反し中央はくぼむ 体部丸みをおび、鋤は外反してほぼ水平に開く	全面をろくろによる回転ナデで調整を施す 身部とに接合部以外は釉を施す 体部3ヶ所に鉢状の象嵌を施す 内外面には細かい貫入あり	胎土-密 焼成-良 色調胎土-暗茶色 釉-オリーブ 象嵌-黄白色	2号堀 上層 高田焼 VI類
257	陶器	碗	口径-11.5cm 高台径-不明 器高-不明	体部は下位で屈曲して立ち上がり、口縁部はほぼ直立し、口唇部はとがり気味 高台部は欠損する	全面をろくろによる回転ナデで調整を施す 内外面に釉を施す 体部3ヶ所に字体の異なる「寿」を、口縁部は雷文を巡らす 内外面には細かい貫入あり	胎土-密 焼成-良 色調胎土-黄褐色 釉-乳黄色 象嵌-黒緑色	2号堀 上層 高田焼?
258	陶器	皿	口径-(18.6cm) 高台径-不明 器高-不明	口縁部は平面形で輪花状を呈する 口縁部はやや外反し、口唇部は丸みをおびる	全面をろくろによる回転ナデで調整を施す 内外面に釉を施し、体部と口縁部は釉が異なる	胎土-密 焼成-良 色調胎土-黒灰色 口縁部-淡黄褐色 体部-灰オリーブ	2号堀 中下層
259	陶器	鉢	口径-18.5cm 高台径-7.1cm 高台高-1.2cm 器高-6.7cm	体部は高台部からゆるやかに内湾し、口縁部はほぼ直線的に開く 高台は開き気味にのび、その内面は平らである	全面をろくろによる回転ナデで調整を施す 内面及び外面の上位に釉を施し、内面は白色粘土で文様を表す 見込部には蛇ノ目釉ハギを施す 高台外面には面取りを施す	胎土-密 焼成-良 色調胎土-灰茶色 釉-暗灰色と緑灰色 色-紋様は黄灰色	2号堀 一括
260	陶器	皿	口径-(13.9cm) 高台径-(5.3cm) 高台高-0.6cm 器高-4.2cm	体部は高台部からゆるやかに内湾して開き、口縁部は大きく外反する 高台は開き気味に短くのび、内面はほぼ平らである	全面をろくろによる回転ナデで調整を施す 内面及び外面に釉を施し、高台及びその内面は無施釉である 高台はケズリ出しで、外面には面取りを施す	胎土-密 焼成-良 色調 胎土-明茶灰色 釉-茶オリーブ色	2号堀 上層
261	陶器	皿	口径-(11.2cm) 底径-(5.0cm) 器高-2.5cm	底部は平底で、中央はやや盛り上がる 体部はゆるやかに内湾して開き、口唇部は丸みをおびる	全面をろくろによる回転ナデで調整を施す 内面には釉を施し、見込及び外面は釉が垂れる 底部は糸切りである	胎土-密 焼成-良 色調胎土-茶灰色 釉-暗茶灰色	2号堀 上層
262	白磁	皿	口径-(13.3cm) 高台径-(7.8cm) 器高-4.1cm	体部は内湾して立ち上がり、口縁部は輪花状を呈する 高台は短くのび、疊付は丸みをおび、内面は蛇ノ目高台状である	内面は型打ちにより、菊花文を表す 内外面とも化粧土を塗布した後施釉する 口唇部は口銷を施す 底部は蛇ノ目釉ハギ	胎土-密 焼成-良 色調 胎土-黄白色 釉-乳白色	2号堀 一括 肥前系 19C-幕末
263	青磁	皿	口径-(8.9cm) 高台径-4.3cm 高台高-0.6cm 器高-2.3cm	体部はゆるやかに開き、口縁部は輪花状を呈する 高台はほぼ垂直にのびる	内外面は片切彫りを施し、釉を施す 見込に及ぶ高台部は無施釉 高台はケズリ出し 見込に他個体の高台の一部が釉着する 釉部分に粗い貫入あり	胎土-密 焼成-良 色調 胎土-黄白色 釉-淡青緑色	2号堀 一括 肥前系
264	陶器	碗	口径-(8.8cm) 高台径-3.2cm 高台高-0.6cm 器高-5.8cm	体部はゆるやかに屈曲し、口縁部はわずかに内湾する 高台は短くのびる	全面をろくろによる回転ナデで調整を施す 全面に釉を施し、高台の疊付は釉をかき取る 高台に砂が付着する 釉は上位と下部では異なる	胎土-密 焼成-良 色調胎土-黄灰色 釉上位-黄灰色 釉下位-オリーブ	2号堀 上層
265	陶器	皿	口径-不明 高台径-(5.4cm) 高台高-0.8cm 器高-不明	体部はゆるやかに開き、口縁部に至る 見込中央はわずかに盛り上がる 高台はほぼ直立する	全面をろくろによる回転ナデで調整を施す 内外面に釉を施し、見込には鶴と松の象嵌を施す 高台はケズリ出しで、外面には面取りを施す	胎土-密 焼成-良 色調胎土-暗灰色 釉-暗黄緑色 象嵌-緑灰色	2号堀 一括 高田焼 V類
266	陶器	燭台	口径-4.8cm 底径-(5.0cm) 器高-5.3cm	口縁部は大きく内湾し、中央にローソク立を持つ 脚は開き気味にのび、底部は平底で、中央に穿孔を持つ	全面をろくろによる回転ナデで調整を施す 体部上位と内面に釉を施す 底部は糸切り	胎土-密 焼成-良 色調 胎土-黄橙色 釉-灰白色	2号堀 上層
267	陶器	蓋	つまみ径-6.1cm 口径-15.8cm 器高-3.0cm	全体的に扁平で、つまみも薄い	全面をろくろによる回転ナデで調整を施す 全面に釉を施すがつまみの上面は釉をかき取る つまみ内面は渦巻状、体部はつまみ付近に2条 口縁部に2条その間に線状の象嵌を施す	胎土-密で焼成良 色調胎土-黄橙色、 釉-深緑色、 象嵌-黄白色	2号堀 上層 高田焼 VI類
268	陶器	鉢	口径-14.0cm ~15.0cm 高台径-5.3cm 高台高-0.8cm 器高-5.4cm	体部はゆるやかに内湾して立ち上がり、口縁部は段を境に内湾し輪花状を呈する 高台は直線的開き、中央部はケズリ出しにより巴状を呈する	内外面に釉を施し、見込には菊花文、口縁部には二重の蓮弁状の連続文の象嵌を施す 外面は白色粘土により、刷毛状工具で連続の蓮弁を巡らす 高台はケズリ出しで、外面に面取りを施し、無施釉 内外面に細かい貫入あり	胎土-密 焼成-良 色調胎土-暗茶色 釉-暗緑色 象嵌-深緑色 化粧土-緑白色	2号堀 上層 高田焼 V類

第18表 2号堀出土遺物観察表(1)

No	種別	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
269	陶器	鉢	口径-13.2cm 高台径-6.0cm 高台高-0.5cm 器高-4.2cm	体部はゆるやかに内湾して立ち上がり、口縁部は外面の段を境外外反し、輪花状を呈する 高台はほぼ垂直にのび、中央部はケズり出しにより巴状を呈する	内外面に釉を施し、見込には中央に菊花文その外側は円の連続スタンプ、さらに外側に菊花文の連続スタンプを、さらに二重の線を巡らす 高台はケズり出して、無施釉 内外面に細かい貫入あり	胎土-密 焼成-良 色調胎土-茶灰色 釉-茶オリーブ 象嵌-深緑色 化粧土-黄灰色	2号堀一括 高田焼 VI類
270	陶器	鉢	口径-(13.0cm) 高台径-(6.0cm) 高台高-0.6cm 器高-4.5cm	体部はゆるやかに内湾して立ち上がり、口縁部に至る 口縁部は輪花状を呈するが、角鉢になる可能性もある 高台はほぼ垂直にのび、中央部はケズり出しにより巴状を呈する	内外面に釉を施し、見込には中央に菊花文その外側は二重の円、さらに菊花文の連続スタンプ、さらに三重の円、さらに二重の連続した蓮弁を巡らす 高台はケズり出して、無施釉 内外面に細かい貫入あり	胎土-密 焼成-良 色調胎土-茶灰色 釉-深緑色 象嵌-黄白色	2号堀上層 高田焼 VI類
271	陶器	青緑釉皿	口径-(17.5cm) 高台径-(6.0cm) 高台高-0.7cm 器高-5.3cm	体部はゆるやかに内湾して立ち上がり、口縁部は外面に段を持ち、開く 高台は直線的に開き、中央部はケズり出しにより、わずかに巴状を呈する	内外面はろくろの回転によるナデ調整 内面に釉を施し、見込には蛇ノ目釉ハギを持つ 外面上位は釉をかき取るが、一部に釉垂れが見られる 高台はケズり出して、無施釉 内面はわずかに貫入が認められる	胎土-密 焼成-良 色調 胎土-にぶい橙色 釉-深緑色	2号堀一括 唐津系(内野山窯) 17C後半 ~18C前半
272	陶器	青緑釉皿	口径-12.4cm 高台径-4.8cm 高台高-0.5cm 器高-3.8cm	体部はゆるやかに内湾して立ち上がり、口縁部に至り、口唇部はやや尖り気味 高台は内湾気味に開き、中央部はケズり出しにより、わずかに巴状を呈する	内外面はろくろの回転によるナデ調整 内外面に釉を施し、見込には蛇ノ目釉ハギを持つ 高台はケズり出して、無施釉	胎土-密 焼成-良 色調胎土-灰白色 釉-緑白色	2号堀上層 唐津系 17C後半 ~18C前半
273	陶器	鉢	口径-不明 高台径-6.0cm 高台高-0.9cm 器高-不明	体部はゆるやかに内湾して立ち上がり、体部中位に段を持ち屈曲して、口縁部は内湾する 高台は直線気味に開き、中央部は平ら	内面はろくろの回転によるナデ調整 内面及び外面上位に釉を施し、見込には蛇ノ目釉ハギを持つ 高台は張りつけで、無施釉	胎土-密 焼成-良 色調 胎土-黄灰白色 釉-緑白色	2号堀上層 唐津系 17C後半 ~18C前半
274	磁器	皿	口径-9.0cm 高台径-4.2cm 高台高-0.4cm 器高-2.8cm	体部はゆるやかに内湾して立ち上がり、口縁部に至る 高台は直線気味に開き、中央部は平ら	内外面はろくろの回転によるナデ調整 内外面に釉を施し、外面は鉄釉で、見込には蛇ノ目釉ハギを持つ 高台はケズり出して、無施釉	胎土-密 焼成-良 色調胎土-灰白色 外面釉-赤茶色 内面釉-灰白色	2号堀上層
275	陶器	青緑釉皿	口径-不明 高台径-4.7cm 高台高-0.5cm 器高-不明	体部はゆるやかに内湾して立ち上がり、口縁部に至る 体部外面下位には回転ナデによる段を持つ 高台は広く直線気味に開き、中央部は尖る	内外面はろくろの回転によるナデ調整 内外面に釉を施すが釉は異なり、見込みには蛇ノ目釉ハギを持つ 高台はケズり出して、無施釉	胎土-密 焼成-良 色調胎土-淡黄色 外面釉-浅黄色 内面釉-青緑色	2号堀中下層 唐津系(内野山窯) 17C後半 ~18C前半
276	磁器	碗	口径-(11.3cm) 高台径-4.8cm 高台高-0.8cm 器高-5.6cm	体部はゆるやかに内湾して立ち上がりながら口縁部に至り 口唇部は尖る 高台はほぼ直立し、中央部は平ら	内外面はろくろの回転によるナデ調整 内外面に釉を施すが釉は異なり、見込には蛇ノ目状に白土を塗布する 高台はケズり出して、釉をかき取る	胎土-密 焼成-良 色調胎土-灰白色 釉-灰白色	2号堀上層 在地系 江戸時代後期
277	染付	蕎麦猪口	口径-7.8cm 高台径-5.6cm 器高-6.0cm	体部はやや開き気味に直線的立ち上がり、口縁部に至る 高台は短く直立し、蛇ノ目高台をなす	内外面はろくろの回転によるナデ調整 外面には格子目状の文様、内面には3条の園線見込には不明の文様を施す 全面に釉を施すが、蛇ノ目高台部は釉をかき取り、高台はケズり出	胎土-密 焼成-良 色調胎土-黄白色 釉-緑白色 吳須-濃藍色	2号堀上層 肥前系 18C末 ~19C前半
278	染付	蕎麦猪口	口径-7.3cm 高台径-4.5cm 器高-5.7cm	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部に至り、口唇部はやや尖る 高台は短く直立し、疊付は尖る	外面には牡丹の文様、高台内面には「大明年製」の文字を施す 全面に釉を施すが、高台部は釉をかき取る	胎土-密 焼成-良 色調胎土-灰白色 釉-緑白色 吳須-蓝色	2号堀上層 肥前 1760 ~1820
279	染付	筒形碗	口径-(7.3cm) 高台径-3.2cm 器高-6.0cm	体部は下位で鋭く屈曲し、ほぼ垂直に立ち上がり、口唇部は丸みをおびる 高台は小さく、やや外反して開く	外面には不明の文様、内面上位には格子目状の文様が巡り、見込には二重の園線と中央に五弁花、高台外面にも園線を施す 内外面に釉を施し、疊付は釉をかき取る	胎土-密 焼成-良 色調胎土-灰白色 釉-灰白色 吳須-濃藍色	2号堀中下層 肥前系 18C末 ~1810
280	染付	碗	口径-(9.1cm) 高台径-4.8cm 器高-5.1cm	体部は下位でゆるやかに屈曲し、ほぼ直立しながら口縁部に至る 高台はほぼ直下にのび、その内面は平らである	全面に釉を施し、疊付は釉をかき取る 外面には桃状の文様と菱格子文を交互に描き、口縁部及び体部下位、高台外面に園線を巡らす 内面見込に、わずかに吳須が付着する 高台外面には面取りを施す	胎土-密 焼成-良 色調胎土-黄白色 釉-白色 吳須-灰青色	2号堀上層 肥前系 1690 ~18C初頭
281	染付	端反碗	口径-(11.1cm) 高台径-4.5cm 器高-5.5cm	体部は下位でゆるやかに屈曲し、口縁部は外反して開く 高台は開き気味にのび、歪みを持つ	全面に釉を施し、疊付は釉をかき取る 見込には、蛇ノ目釉ハギを持つ 外面には草状の文様を描く	胎土-密 焼成-良 色調胎土-青灰色 釉-灰白色 吳須-濃青色	2号堀一括 肥前系 1820 ~幕末

第19表 2号堀出土遺物観察表(12)

No	種別	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
282	染付	丸形碗	口径-(9.3cm) 高台径-4.0cm 器高-4.8cm	体部はゆるやかに内湾し、口 縁部に至る 高台はほぼ垂直にのび、内面 中央はやや厚みを増す 見込部分には砂が付着する	全面に釉を施し、疊付は釉をかき取る 外面には草花文を描き、高台内面にも文様を持つ 高台疊付は釉をかき取る	胎土-密 焼成-良 色調胎土-青灰色 釉-明緑灰色 吳須-藍色	2号堀 一括 肥前系 18C中頃 ~18C末
283	染付	端反碗	口径-10.4cm 高台径-4.4cm 器高-6.3cm	体部はゆるやかに内湾し、口 縁部はやや外反する 高台は開き気味にのび、疊付 は丸みをおび、砂が付着する	全面に釉を施し、疊付は釉をかき取る 外面には草葉文を描き、体部下位及び高台外面 に二重の圈線、内面上位には一重の圈線、その 下位に渦状文を巡らし、その下位に二重の圈線 見込には一重の圈線、その中央に波状の文様を 描く	胎土-密 焼成-良 色調胎土-青白色 釉-緑白色 吳須-紺色	2号堀 一括 肥前系 1820 ~幕末
284	染付	碗	口径-9.9cm 高台径-3.9cm 器高-5.9cm	体部はゆるやかに内湾し、口 縁部はやや外反する 高台は薄く、垂直にのび、疊付 は丸みをおび、一部に砂が 付着し、内面は平ら	全面に釉を施し、疊付は釉をかき取る 外面には草文状を描き、体部下位に三重、高台 外面に二重の圈線、内面上位には五重の圈線及 び破線を巡らし、見込には不明の文様を描く	胎土-密 焼成-良 色調胎土-灰白色 釉-灰白色 吳須-藍色	2号堀 一括 肥前系 1820 ~幕末
285	陶胎染付	碗	口径-(11.3cm) 高台径-4.9cm 器高-7.4cm	体部下位はゆるやかに内湾し 口縁部は直行して口唇部に至 り、口唇部は丸みをおびる 高台は垂直にのび、疊付は平 ら、一部に砂が付着し、内面 は平ら	全面に釉を施し、疊付は釉をかき取る 外面口縁部には唐草文を描き、体部には不明の 文様を描く 内外面には細かい貫入が入る	胎土-密 焼成-良 色調胎土-黄灰色 釉-緑灰色 吳須-藍色	2号堀 上層 肥前系 18C前半
286	染付	端反碗	口径-(10.9cm) 高台径-(4.1cm) 器高-5.9cm	体部下位はゆるやかに内湾し 口縁部は外反して口唇部に至 り、口唇部は丸みをおびる 高台はほぼ垂直にのび、疊付 は丸みをおびる	全面に釉を施し、疊付は釉をかき取る 見込には蛇目状に白土を塗布する 外面口縁部には一重の圈線、その下位は魚文を 描き、体部下位及び高台外面にそれぞれ二重の 圈線を描く 内面は口縁部に二重の圈線、見込に一重の圈線 を巡らす	胎土-密 焼成-良 色調胎土-灰白色 釉-黄灰色 吳須-藍色	2号堀 上層 肥前系 1820 ~幕末
287	染付	端反碗	口径-(9.4cm) 高台径-(3.6cm) 器高-5.6cm	体部下位はゆるやかに内湾し 口縁部は外反して口唇部に至 る 体部内面には、砂が付着する 高台は薄く、ほぼ垂直にのび 尖る	全面に釉を施し、疊付は釉をかき取る 外面口縁部には雷文が巡り、見込には一重の圈 線と中央に「寿」の文字が描かれる 外面は菊花文の染付を施すが、さらにその上から 染付を消すように、白い化粧土状のものを塗 布する	胎土-密 焼成-良 色調胎土-黄灰色 釉-青白色 吳須-紺青色	2号堀 上層 肥前系 1820 ~幕末
288	染付	碗	口径-不明 高台径-4.4cm 器高-不明	体部下位はゆるやかに内湾し 口縁部に至る 内面体部には、砂が付着する 高台は薄く、開き気味に長く のびる	全面に釉を施し、疊付は釉をかき取る 外面下位には染付を施し、高台外面には雷文を 巡らす 高台内面には「春山」のスタンプを押す 疊付外面は面取りを施す	胎土-密 焼成-良 色調胎土-灰白色 釉-白色 吳須-暗青灰 紺色	2号堀 上層 肥前 明治以降
289	染付	丸形碗	口径-不明 高台径-3.6cm 器高-不明	体部下位でゆるやかに屈曲し 口縁部に至る 口縁部は底部に比べて薄くなる 高台はほぼ垂直にのび、疊付 に砂が付着する	全面に釉を施し、疊付は釉をかき取る 外面下位には染付を施し、高台上位に圈線を巡 らす 見込には波状の文様を施し、一重の圈線を巡ら す	胎土-密 焼成-良 色調胎土-黄白色 釉-緑白色 吳須-群青色	2号堀 上層 肥前系 18C後半 ~幕末
290	染付	碗	口径-9.9cm 高台径-3.9cm 器高-5.4cm	体部はゆるやかに内湾し口 縁部に至る 口唇部は丸みをおび、薄い高 台はわずかに外反して開く 疊付に砂が付着する	全面に釉を施し、疊付は釉をかき取る 外面には梅花文を施し、高台内面にも文様を描 く	胎土-密 焼成-良 色調 胎土-明青灰色 釉-明灰色 吳須-灰青色	2号堀 上層 肥前系 18C前半 ~18C中頃
291	染付	小壺	口径-6.7cm 高台径-3.0cm 器高-4.4cm	体部はゆるやかに内湾し、口 縁部はわずかに外反する 口唇部はやや膨らむ 高台はやや開き疊付は丸みを おびる	全面に釉を施し、疊付は釉をかき取る 外面には上位と下位に圈線を巡らし、中央に印 判文を連続して巡らす	胎土-密 焼成-良 色調胎土-黄白色 釉-緑白色 吳須-紺色	2号堀 上層 肥前系 1820-幕末
292	染付	碗	口径-10.9cm 高台径-4.2cm 器高-5.8cm	体部はゆるやかに内湾し、口 縁部はわずかに外反する 口唇部は丸みをおびる 高台はやや開き疊付は丸みを おび、疊付に砂粒が付着する	全面に釉を施し、見込は蛇目釉ハギ、疊付は 釉をかき取る 外面には渦状文様を7ヶ所に描き、見込には笹 の文様を描く	胎土-密 焼成-良 色調胎土-灰白色 釉-明緑灰色 吳須-濃藍色	2号堀 上層 肥前系 1820-幕末
293	染付	端反碗	口径-11.4cm 高台径-4.3cm 器高-6.2cm	体部はゆるやかに内湾し、口 縁部はわずかに外反する 口唇部は丸みをおびる 高台はやや開き気味に伸び、 疊付は丸みをおびる	全面に釉を施し、疊付は釉をかき取る 外面には上位と下位に圈線を巡らし、簾文と笹 文を施し、高台外面にも二重の圈線を巡らす 内面は口縁部に二重の圈線、下位に一重の圈線 見込にも文様を施す 見込みは蛇目状に粘土をはりつける	胎土-密 焼成-良 色調胎土-青白色 釉-明緑灰色 吳須-濃藍	2号堀 上層 肥前系 1820-幕末
294	染付	広東碗	口径-10.4cm -11.6cm 高台径-5.8cm 器高-7.0cm	広東形を呈し、歪む 体部は高台部から開き、口縁 部に至る 口唇部は丸みをおびる 高台は垂直にのび、底部がひ じょうに厚い	全面に釉を施し、疊付は釉をかき取る 外面には上位と下位に圈線を巡らし、霞と草花 を施す 内面は口縁部に二重の圈線下位に一重の圈線、 見込にも文様を施す 見込部に貫入あり	胎土-密 焼成-良 色調胎土-灰白色 釉-灰白色 吳須-紺色	2号堀 上層 肥前系 1780 ~19C前半

第20表 2号堀出土遺物観察表(13)

No	種別	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
295	染付	端反碗	口径-10.1cm 高台径-3.8cm 器高-6.2cm	体部はゆるやかに内湾し、口縁部はわずかに外反する 高台はやや開き気味に伸び、 疊付は丸みをおび、砂が付着する	全面に釉を施し、疊付は釉をかき取る 外面には上位と下位に圈線を巡らし、簾と草花文を施す 内面は口縁部に波状の文様を巡らし、その下位に二重の圈線、見込みも圈線を巡らせ、中央に草文を描く	胎土-密 焼成-良 色調胎土-明灰色 釉-明緑灰色 吳須-緑灰色	2号堀 一括 肥前系 1820~幕末
296	染付	丸形碗	口径-10.3cm 高台径-6.0cm 器高-5.0cm	体部はゆるやかに内湾し、口縁部に至る 高台はほぼ垂直に伸び、疊付は丸みをおび、わずかに砂が付着する	全面に釉を施すが、疊付は釉をかき取り、口唇部は口銷を施す 外面は網目文を描き、下位に圈線を巡らせる	胎土-密 焼成-良 色調胎土-青灰色 釉-明灰色 吳須-藍色 露胎-深橙色	2号堀 上層 肥前系 18C前半 ~18C中頃
297	染付	碗	口径-8.3cm 高台径-2.6cm 器高-4.8cm	体部はゆるやかに内湾し、口縁部に至る 高台はほぼ垂直に伸び、疊付は丸みをおび、わずかに砂が付着する	全面に釉を施すが、疊付は釉をかき取り、口唇部は露胎する 外面は口縁部及び下位に圈線、中心に瓢箪、紅葉、亀甲文を描き、高台から体部にかけての位置に花びら状の連続スタンプを施す	胎土-密 焼成-良 色調胎土-白色 釉-透明 吳須-濃藍色	2号堀 上層 肥前 明治以降
298	染付	筒形碗	口径-6.2cm 高台径-3.1cm 器高-5.5cm	体部は下位で鋭く屈曲し、垂直にのび、口縁部に至るいわゆる筒形を呈する 高台は外反して開き、わずかに歪みを持つ	全面に釉を施すが、疊付は釉をかき取る 外面は菊散らし文と宝文と思われる文様を交互描き、底部高台外面には唐草文を描く 内面見込には五弁花か、口縁には四方櫻文を巡らす	胎土-密 焼成-良 色調胎土-灰白色 釉-綠白色 吳須-紺色	2号堀 上層 肥前 18C中頃 ~1810
299	染付	鉢	口径-15.2cm 高台径-8.1cm 器高-7.5cm	八角形を呈し、口縁部は大きく外反する 高台は垂直にのび、疊付は丸みをおび、内面は蛇目で砂が付着する	全面に釉を施すが、疊付は釉をかき取る 内面は対角面に笹、草、格子を描き、見込みには笹文を描く 外面は山水状文を描く	胎土-密 焼成-良 色調胎土-白色 釉-灰白色 吳須-濃藍色	2号堀 上層 肥前 1813~1820
300	染付	皿	口径-13.5cm 高台径-6.4cm 器高-4.9cm	体部はゆるやかに内湾して口縁部に至り、口唇部は尖る 高台は短く、丸みをおび、内面に砂が付着する	全面に釉を施すが、疊付は釉をかき取る 内面は笹状の文様を施し、見込中央に五弁花と二重の圈線を巡らす 外面体部には草状の文様を描き、高台内面には圈線と、中央に「朝」の文字を描く	胎土-密 焼成-良 色調胎土-黄灰色 釉-青白色 吳須-濃藍色	2号堀 上層 肥前系 17C末 ~18C前半 朝妻窯
301	染付	鉢	口径-不明 高台径-5.6cm 器高-不明	体部はゆるやかに屈曲して口縁部に至る 高台は厚く、ほぼ垂直にのび 疊付は丸みをおびる 見込には3個のハマの脚跡が残る	全面に釉を施すが、疊付は釉をかき取る 見込には竹と笹状の文様を描く 外面は3ヶ所に簾文を描く	胎土-密 焼成-良 色調胎土-灰白色 釉-明緑灰色 吳須-藍色	2号堀 上層 肥前系 19C
302	染付	皿	口径-不明 高台径- (9.3cm) 器高-不明	体部はゆるやかに屈曲して口縁部に至る 高台は短くのび、内面は蛇目を呈する	全面に釉を施すが、蛇目高台は粘土を塗布し 疊付は釉をかき取る 見込は笹文、体部には二重の圈線と唐草草花文を描く 外面は、高台外面と体部下位に圈線、体部に簾文を描く	胎土-密 焼成-良 色調胎土-白色 釉-綠白色 吳須-紺青色	2号堀 上層 肥前系 18C後半 ~19C前半
303	染付	皿	口径-不明 高台径-6.3cm 器高-不明	体部はゆるやかに屈曲して口縁部に至る 高台は短くのび、内面は蛇目を呈する 見込に窯道具の接置痕跡あり	全面に釉を施すが、疊付は釉をかき取る 見込と体部に文様 外面にも文様を、高台外面に二重の圈線を巡らす	胎土-密 焼成-良 色調胎土-灰白色 釉-灰白色 吳須-藍色	2号堀 上層 肥前系 18C後半 ~19C前半
304	染付	皿	口径-不明 高台径-不明 器高-不明	体部はゆるやかに内湾して開き、口縁部に至る 見込部は盛り上がり、高台はほぼ垂直にのびる	全面に釉を施す 見込に草花文を描き、二重の圈線を巡らす 外面にも文様を描き、高台内面には印を押す	胎土-密 焼成-良 色調胎土-白色 釉-青白色 吳須-紺色	2号堀 上層 中国製 (景德鎮) 16C後半
305	陶器	皿	口径-不明 高台径-不明 器高-不明	体部はゆるやかに内湾して開き、口縁部は外反する 高台はやや開き気味にのびる	全面に釉を施すが、見込は蛇目釉ハギを持つ 見込には鉄絵を描く 高台は釉をかき取り、外面に面取りを施し、砂が付着する 外面に貫入あり	胎土-密 焼成-良 色調胎土-明橙色 釉-明灰茶色 鉄絵-暗灰茶色	2号堀 中下層 唐津系 18C後半 ~19C前半
306	染付	蓋	口径-9.6cm 高台径-3.7cm 器高-2.9cm	体部はゆるやかに内湾して開き、口縁部はやや外反する 高台はやや内湾気味に開く 蓋の可能性あり	全面に釉を施し、疊付は釉をかき取る 見込に帆文を描き、波状文を巡らす 外面にも帆文と草文を描く	胎土-密 焼成-良 色調胎土-灰白色 釉-明緑灰色 吳須-藍色	2号堀 上層 肥前系 1820 ~幕末
307	染付	碗	口径-不明 高台径-4.4cm 器高-不明	体部はゆるやかに内湾して開き、口縁部に至る 高台はやや内湾気味にのびる	全面に釉を施し、疊付は釉をかき取る 体部外面に草花文を描き、高台外面に圈線を巡らす 高台内面には不明の印を押す 釉変は不完全	胎土-密 焼成-良 色調胎土-黄白色 釉-黃灰色 吳須-藍色	2号堀 上層 肥前系 18C後半
308	染付	鉢	口径-(14.0cm) 高台径-5.3cm 器高-6.2cm	体部はゆるやかに内湾して開き、口縁部は大きく外反する 高台はやや開き気味にのびる 見込に4個の目跡	全面に釉を施し、疊付は釉をかき取る 体部内面に葡萄文を描き、口縁部には圈線を巡らす 外面は一条の圈線と萬条の文様を描く 内外面とも貫入あり	胎土-密 焼成-良 色調胎土-黄白色 釉-黃白色 吳須-紺色	2号堀 上層 肥前系

第21表 2号堀出土遺物観察表(14)

No	種別	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
309	染付	丸形碗	口径一不明 高台径一4.0cm 器高一不明	体部はゆるやかに屈曲し、口 縁部に至る 高台はやや開き気味にのび、 疊付は丸みをおびる	全面に釉を施し、疊付は釉をかき取る 体部外面に草花文を描き、体部下位と高台外面 に、二重の圈線が巡る 内面は三重の圈線が巡り、見込み中央に鳥を描 き、一条の圈が巡る	胎土一密 焼成一良 色調胎土一明灰色 釉一明緑灰色 吳須一紺色	2号堀 一括 肥前系 18C前半 ~18C中頃
310	染付	皿	口径一(13.4cm) 高台径一 (7.7cm) 器高一3.5cm	体部はゆるやかに屈曲して開 き、口縁部に至る 高台は短く、蛇ノ目高台である	全面に釉を施し、疊付及び蛇ノ目は釉をかき取 る 体部内面及び見込みには笹文を描き、上位に一 重、下位に二重の圈線が巡る 外面下位には一重の圈線が巡り、体部には文様 を描く	胎土一密 焼成一良 色調胎土一黄灰色 釉一藍白色 吳須一深紫青色	2号堀 上層 肥前系 18C後半 ~19C前半
311	染付	皿	口径一13.5cm 高台径一9.1cm 器高一3.5cm	体部はゆるやかに屈曲して開 き、口縁部に至る 高台は短く、蛇ノ目高台である	全面に釉を施し、疊付及び蛇ノ目は釉をかき取 る 体部内面に草花文、見込みには笹文を描き、上 位に一重、下位に二重の圈線が巡る 外面下位には一重、高台外面に二重の圈線が巡 り、体部には3ヶ所に文様を描く	胎土一密 焼成一良 色調胎土一白色 釉一藍白色 吳須一淡藍色	2号堀 上層 肥前系 18C後半 ~19C前半
312	染付	皿	口径一(13.3cm) 高台径一 (7.2cm) 器高一4.0cm	体部はゆるやかに内湾して開 き、口縁部に至り、口唇部は 丸みをおびる 高台は短く尖り、砂が多量に 付着する	全面に釉を施し、疊付は釉をかき取る 体部内面に鳥状文、見込みにも文様を描き、下 位に二重の圈線が巡る 外面上位及び下位に一重、高台外面に二重の圈 線が巡り、体部にも文様を描く	胎土一密 焼成一良 色調胎土一灰白色 釉一明緑灰色 吳須一藍色	2号堀 一括 肥前系 18C中頃 ~18C末
313	染付	鉢	口径一(14.7cm) 高台径一5.4cm 器高一6.3cm	体部はゆるやかに内湾して開 き、口縁部は大きく外反する 高台はやや開き気味にのび、 わずかに砂が付着する	全面に釉を施し、疊付は釉をかき取る 体部内面に葡萄文、見込みにも文様を描き、上 位に一重、下位に二重、見込みに一重の圈線が 巡る 外面中位に一重に圈線を巡らし、3ヶ所に鳥状 の文様を描く 内外面に貫入あり	胎土一密 焼成一良 色調胎土一黃白色 釉一黃白色 吳須一紺色	2号堀 一括 肥前系
314	染付	蓋	口径一(9.0cm) つまみ径一不明 器高一不明	体部はゆるやかに内湾して開 き、鋸部は外反する つまみは欠損	全面に釉を施し、身との接合面は無施釉 体部外面に草花文?を描き、上位に四重、下位 に三重の圈線を巡らす 内外面に貫入あり	胎土一密 焼成一良 色調胎土一灰白色 釉一灰白色 吳須一藍色	2号堀 上層 肥前系
315	染付	油壺	口径一2.2cm 底径一不明 器高一不明	体部は上位で肩が張り、頭部 はしまる 口縁部は外反し、口唇部は丸 みをおびる	外面及び口縁部内面に釉を施し、内面は無施釉 外面上位に梅花文を描く 外面に貫入あり	胎土一密 焼成一良 色調胎土一黃灰色 釉一黃灰色 吳須一藍色	2号堀 上層 肥前系 18C
316	染付	小皿	口径一9.7cm 高台径一4.3cm 器高一2.4cm	体部はゆるやかに内湾し、口 縁部に至る 高台は直立し、その断面形は 三角形を呈する 疊付にはわずかに砂が付着	外面及び口縁部内面に釉を施すが、疊付は釉を かき取る 内面には二重の幅広に圈線を巡らし、草文を描 く 見込みは蛇ノ目釉ハギを施す 高台外面には面取りを施す	胎土一密 焼成一良 色調胎土一黃灰色 釉一青灰色 吳須一藍色	2号堀 上層 肥前系 18C中頃 ~18C末
317	染付	小皿	口径一9.3cm 高台径一4.0cm 器高一2.3cm	体部はゆるやかに内湾し、口 縁部に至り、口唇部は内側に 屈曲する 高台は直立し、その断面形は 三角形を呈する 疊付にはわずかに砂が付着	外面及び口縁部内面に釉を施すが、疊付は釉を かき取る 内面には二重の幅広に圈線を巡らし、鳥居文を 描く 見込みは蛇ノ目釉ハギを施す	胎土一密 焼成一良 色調胎土一青白色 釉一青黄色 吳須一紺色	2号堀 上層 肥前系 18C中頃 ~18C末
318	染付	小皿	口径一(10.0cm) 高台径一4.3cm 器高一2.9cm	体部はゆるやかに内湾し、口 縁部に至り、口唇部は丸みを おびる 高台は幅広で、その断面形は 五角形を呈する 疊付にはわずかに砂が付着	外面及び口縁部内面に釉を施すが、疊付は釉を かき取る 内面には二重の幅広の圈線を巡らし、雲状文を 描く 見込みは蛇ノ目釉ハギを施す 高台外面には面取りを施す	胎土一密 焼成一良 色調胎土一灰白色 釉一青灰色 吳須一紺色	2号堀 上層 肥前系 18C中頃 ~18C末
319	染付	碗	口径一不明 高台径一4.6cm 器高一不明	体部はゆるやかに内湾し、口 縁部に至る 高台はやや開き気味にのび、 その断面形は三角形を呈し、 疊付は尖る	全面に釉を施し、疊付は釉をかき取る 見込みには二重の圈線が巡り、中央に「福」の文 字を描く 高台外面には面取りを施す	胎土一密 焼成一良 色調胎土一灰白色 釉一白色 吳須一淡紺色	2号堀 上層 中国製 16C後半
320	染付	碗	口径一不明 高台径一4.2cm 器高一不明	体部はゆるやかに屈曲し、口 縁部に至る 高台は垂直にのび、疊付は丸 みをおびる	全面に釉を施し、疊付は釉をかき取る 見込みには二重の圈線が巡り、中央に草花文を描 く	胎土一密 焼成一良 色調胎土一灰白色 釉一黃灰色 吳須一紺色	2号堀 中下層 中国製 (福建窯) 16C後半
321	染付	鉢	口径一不明 高台径一不明 器高一不明	体部はゆるやかに立ち上がり 口縁部は外反する 内面には砂が多量に付着する	全面に釉を施す 内外面には連続した唐草文を描く	胎土一密 焼成一良 色調胎土一灰白色 釉一青灰色 吳須一藍色	2号堀 中下層 肥前系
322	窯道具	ハマ	直径一10.0cm 厚さ一1.3cm	やや歪みがあり、断面形も歪 む		胎土一大粒の砂粒 を含む 色調一にぶい黄橙	2号堀 上層

第22表 2号堀出土遺物観察表(15)

No	種別	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
323	窯道具	ハマ	直径—8.4cm —8.9cm 厚さ—1.2cm	やや歪みがあり、平面形は梢円形を呈する	表面に款名か?、線刻を施す	胎土—砂粒を含む 色調—にぶい赤褐色	2号堀上層
324	窯道具	ハマ	直径—7.8cm 厚さ—1.5cm	平面形はほぼ円形を呈し、厚さはほぼ均一	表面に釉が付着する	胎土—砂粒を含む 色調—灰白色 釉—茶褐色	2号堀上層
325	窯道具	ハマ	直径—7.7cm 厚さ—9.0cm —10.0cm	平面形はほぼ円形を呈し、厚さは不均一		胎土—砂粒を含む 色調—にぶい黄橙	2号堀上層
326	窯道具	ハマ	直径—4.0cm 厚さ—1.1cm —1.3cm	小型で、平面形はほぼ円形を呈し、厚さは不均一		胎土—小石を含む 色調—青灰色	2号堀上層
327	窯道具	ハマ	直径—7.3cm 厚さ—1.4cm	平面形はほぼ円形を呈し、厚さは均一		胎土—砂粒を含む 色調—灰白色	2号堀上層
328	窯道具	ハマ	直径—7.3cm 厚さ—1.3cm	平面形はほぼ円形を呈し、厚さは均一		胎土—密 色調—にぶい橙色	2号堀上層
329	窯道具	ハマ	直径—7.3cm 厚さ—1.3cm	小型で、平面形はほぼ円形を呈し、厚さは均一		胎土—砂粒を含む 色調—にぶい黄橙	2号堀上層
330	窯道具	ハマ	直径—7.2cm 厚さ—1.1cm	平面形はほぼ円形を呈し、厚さは均一		胎土—砂粒を含む 色調—にぶい黄橙	2号堀上層
331	窯道具	ハマ	直径—6.8cm 厚さ—1.0cm	平面形はほぼ円形を呈し、厚さは均一		胎土—砂粒を含む 色調—灰黄褐色	2号堀上層
332	窯道具	ハマ	直径—5.0cm —5.2cm 厚さ—0.8cm	平面形はほぼ円形を呈し、厚さは均一	片面に径3.5cmの高台の痕跡を残す	胎土—小石を含む 色調—にぶい黄橙	2号堀上層
333	窯道具	ハマ	直径—6.2cm 厚さ—0.9cm —1.0cm	平面形はほぼ円形を呈し、厚さは不均一		胎土—砂粒を含む 色調—にぶい橙色	2号堀上層
334	窯道具	ハマ	直径—5.4cm —5.5cm 厚さ—0.9cm	平面形はほぼ円形を呈し、厚さはほぼ均一	片面に径4.1cmの高台の痕跡を残す	胎土—砂粒を含む 色調—にぶい橙色	2号堀上層
335	窯道具	ハマ	直径—5.5cm 厚さ—0.7cm —1.1cm	平面形はほぼ円形を呈し、厚さは不均一	片面に径4.1cmの高台の痕跡を残す	胎土—小石を含む 色調—にぶい黄橙	2号堀上層
336	窯道具	ハマ	直径—6.7cm —6.9cm 厚さ—1.1cm	平面形はほぼ円形を呈し、厚さは不均一	片面に径5.0cmの高台の痕跡を残す	胎土—小石を含む 色調—にぶい黄橙	2号堀上層
337	窯道具	ハマ	直径—6.8cm —7.0cm 厚さ—1.1cm	平面形はほぼ円形を呈し、厚さは均一	片面に径5.9cmの高台の痕跡を残す	胎土—砂粒を含む 色調—にぶい黄橙	2号堀上層
338	窯道具	ハマ	直径—8.3cm 厚さ—1.2cm	平面形はほぼ円形を呈し、厚さは均一 3個の脚を持つ		胎土—小石を含む 色調—にぶい黄橙	2号堀上層
339	窯道具	ハマ	直径—8.1cm 厚さ—1.2cm —1.3cm	平面形はほぼ円形を呈し、厚さは均一 4個の脚を持ち、1個は欠損する		胎土—砂を含む 色調—にぶい黄橙	2号堀上層
340	窯道具	ハマ	直径—8.0cm 厚さ—1.3cm	平面形はほぼ円形を呈し、厚さは均一 3個の脚を持つ		胎土—小石を含む 色調—にぶい黄橙色	2号堀上層
341	窯道具	ハマ	直径—5.7cm —6.0cm 厚さ—0.7cm —1.0	平面形はほぼ円形を呈し、厚さは不均一 3個の脚を持つ		胎土—砂粒を含む 色調—にぶい黄橙	2号堀上層
342	窯道具	ハマ	直径—6.3cm —6.6cm 厚さ—1.0cm —1.2cm	平面形はほぼ円形を呈し、厚さは不均一で、やや反り気味	片面に径4.5cmの高台の痕跡を残す	胎土—小石を含む 色調—にぶい黄橙	2号堀上層
343	窯道具	ハマ	直径—6.0cm —6.1cm 厚さ—1.0cm —1.1cm	平面形はほぼ円形を呈し、厚さはほぼ均一	片面に径4.0cmの高台の痕跡を残す	胎土—砂粒を含む 色調—にぶい黄橙	2号堀上層
344	窯道具	ハマ	直径—6.6cm 厚さ—1.0cm —1.2cm	平面形はほぼ円形を呈し、厚さは不均一で、歪みを持つ	片面に径3.9cmの高台の痕跡を残す	胎土—小石を含む 色調—灰黄褐色	2号堀上層
345	窯道具	ハマ	直径—7.2cm 厚さ—1.2cm	平面形はほぼ円形を呈し、厚さは均一	片面に径6.2cmの高台の痕跡を残す	胎土—砂粒を含む 色調—にぶい黄橙	2号堀上層

第23表 2号堀出土遺物観察表(16)

No	種別	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
346	窯道具	ハマ	直径—6.6cm ～6.9cm 厚さ—1.0cm	平面形はほぼ円形を呈し、厚さは均一	片面に径4.6cmの高台の痕跡を残す	胎土—砂粒を含む 色調—にぶい黄橙	2号堀上層
347	窯道具	ハマ	直径—6.0cm ～6.3cm 厚さ—0.9cm	平面形はほぼ円形を呈し、厚さは均一	片面に径4.6cmの高台の痕跡を残す	胎土—砂粒を含む 色調—にぶい黄橙	2号堀上層
348	窯道具	ハマ	直径—6.0cm ～6.2cm 厚さ—0.9cm	平面形はほぼ円形を呈し、厚さは均一	片面に径3.8cm～4.0cmの高台の痕跡を残す	胎土—小石を含む 色調—にぶい黄橙	2号堀上層
349	窯道具	トチン	底径—(6.5cm) 残存高—8.6cm	中型のトチンで、上部が欠損	手捏成形 底面にくの字形の線刻を持つ款名か	胎土—砂粒を含む 色調—灰褐色	2号堀上層
350	窯道具	トチン	底径—(5.8cm) 残存高—14.0cm	中型のトチンで、棒状を呈する	手捏成形	胎土—砂粒を含む 色調—黒褐色	2号堀上層
351	窯道具	トチン	底径—6.3cm 残存高—8.9cm	中型のトチンで、棒状を呈する	手捏成形 胴部に釉が付着する	胎土—砂粒を含む 色調—黒褐色	2号堀上層
352	窯道具	トチン	底径—5.8cm 残存高—7.1cm	中型のトチンで、棒状を呈する	手捏成形	胎土—砂粒を含む 色調—橙色	2号堀上層
353	窯道具	トチン	底径—(10.8cm) 器高—14.5cm	大型のトチンで、棒状を呈する	手捏成形	胎土—砂粒を含む 色調—にぶい橙色	2号堀上層
354	窯道具	トチン	底径—8.5cm 器高—7.1cm	大型のトチンで、鼓状を呈する	手捏成形	胎土—砂粒を含む 色調—浅黄色 胴部—褐灰色	2号堀上層
355	窯道具	トチン	底径—(5.5cm) 残存高—5.5cm	中型のトチンで、棒状を呈する	手捏成形	胎土—砂粒を含む 色調—にぶい橙色	2号堀上層
356	窯道具	トチン	底径—3.4cm 器高—2.6cm	小型のトチンで、鼓状を呈する	手捏成形	胎土—砂粒を含む 色調—暗赤褐色	2号堀上層

4 堀 跡

調査区の南西側及び北東の端に2条の堀の跡を確認した。堀は背後の山裾から掘りはじめられ、北東の調査区外に延びる。調査区外の確認はできないが、地形等から推定するとJR鹿児島本線の線路部分まで延び、この2条の堀はこの遺跡を取り囲むように巡るものとおもわれる。

1号堀跡（第18図）

C—4区からD—2区にかけて位置し主軸は下端のラインでみるとW—35°—Nである。断面形はV字形に近い逆台形を呈し、最深部で195cmを測る。

1号堀跡からは瓦をはじめ瓦器、陶磁器等の遺物が多量に出土した。また図に示したのは実測にたえうる代表的なもので、その法量等は観察表で示した。

2号堀跡（第19図）

H—9区からK—7区にかけて位置し主軸は下端のラインでみるとW—38°—Nで1号堀跡とほぼ平行になる。断面形はV字形に近い逆台形を呈し、最深部で171cmを測る。

2号堀跡からは土師器をはじめ瓦器、陶磁器、窯道具等の遺物が多量に出土した。また図に示したのは実測にたえうる代表的なもので、その法量等は観察表で示した。

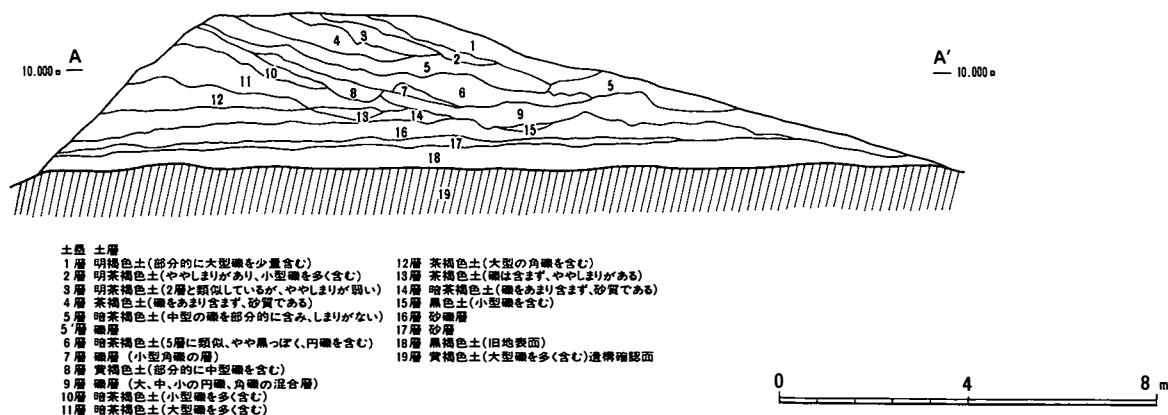
5 土壘（第66図）

2号堀跡と平行して、遺跡の内側に延びるが、I-8区で削平のため無くなっていたが、本来はさらに続いているであろう。この土壘は堀を掘った土を積み上げて造られており、その高さは約160cm、堀の底からの差は約330cmである。後世の削平等をかんがえると、もっと高かったと推定される。土壘の上面は平らになっており、塀等の痕跡を探したが、柱穴は確認できなかった。削平により消失した可能性もかんがえられる。

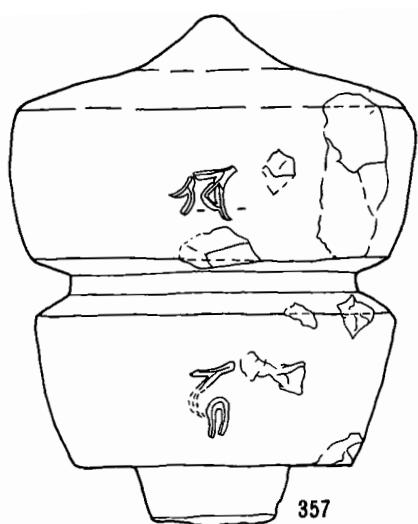
6 五輪塔（第67～74図）

遺跡の中央部よりやや北東寄りの、一段高くなった部分で、集中して埋められていた。この部分は納骨堂の建設及び解体時に瓦礫を埋め込むため、重機によって深く掘り込まれた箇所が多数あり、この穴に瓦礫と混ざり込んで埋め込まれていた。当時は五輪塔は現位置を保ちセットで建っていたであろうとおもわれるが、調査開始時は草の中から一部顔をのぞかせている状態であった。

ここでは主なものを図で示し、解説は観察表にまとめた。



第66図 土壘断面実測図



357



西



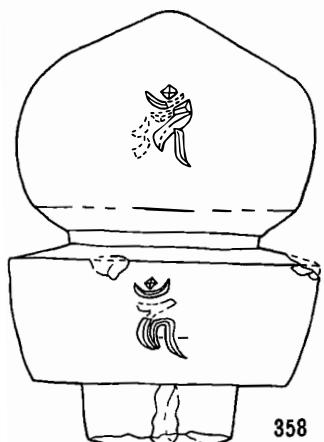
南



北



東



358



西



南



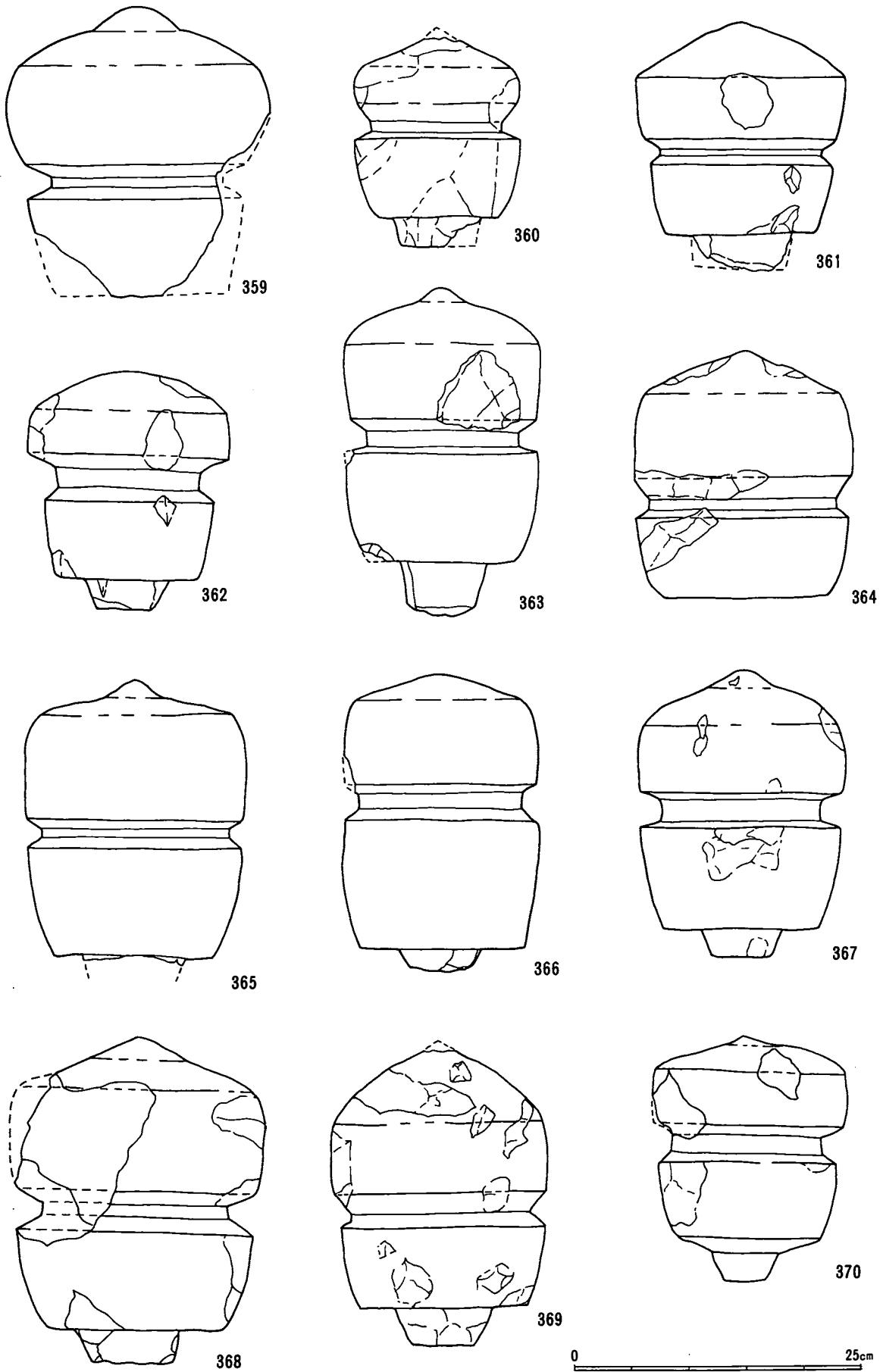
北



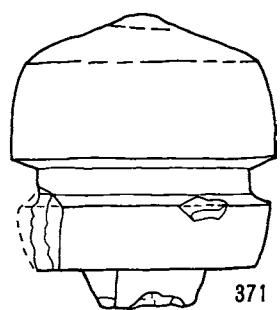
東

0 25cm

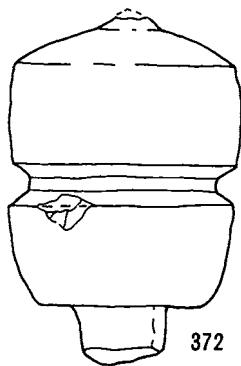
第67図 五輪塔実測図(1)



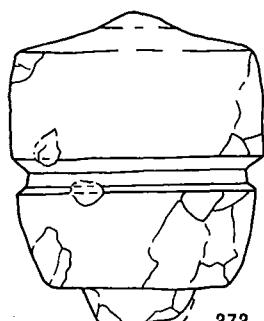
第68図 五輪塔実測図(2)



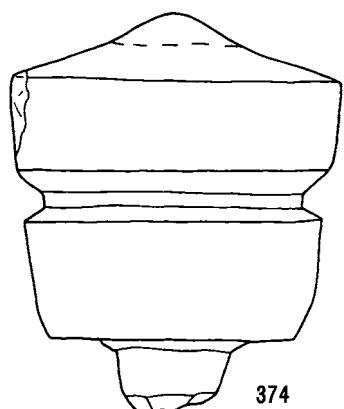
371



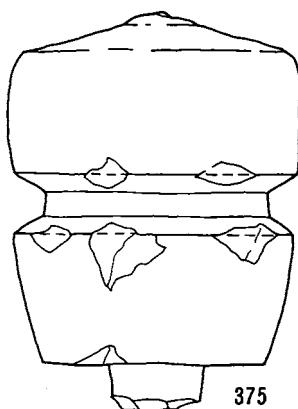
372



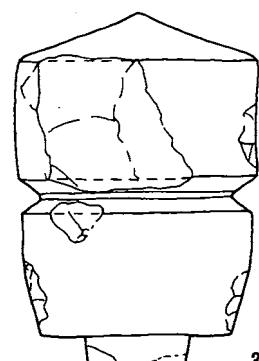
373



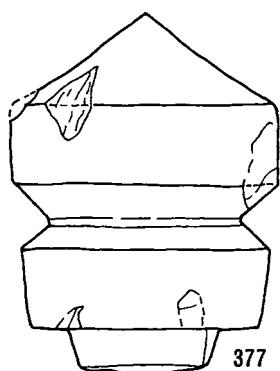
374



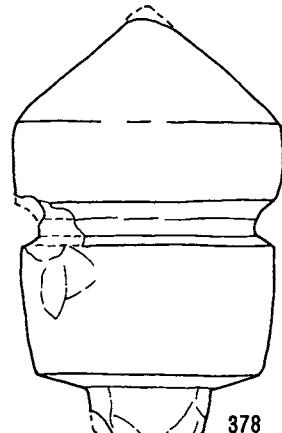
375



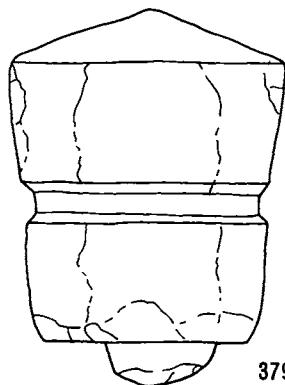
376



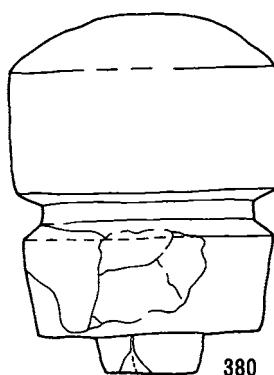
377



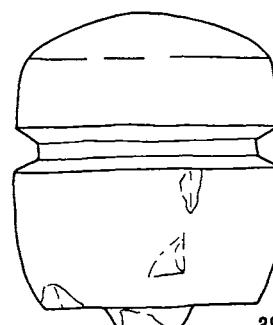
378



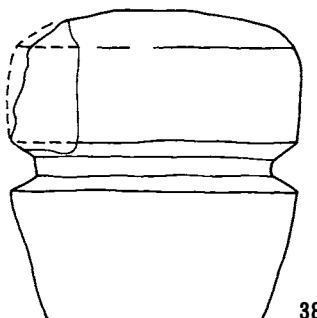
379



380



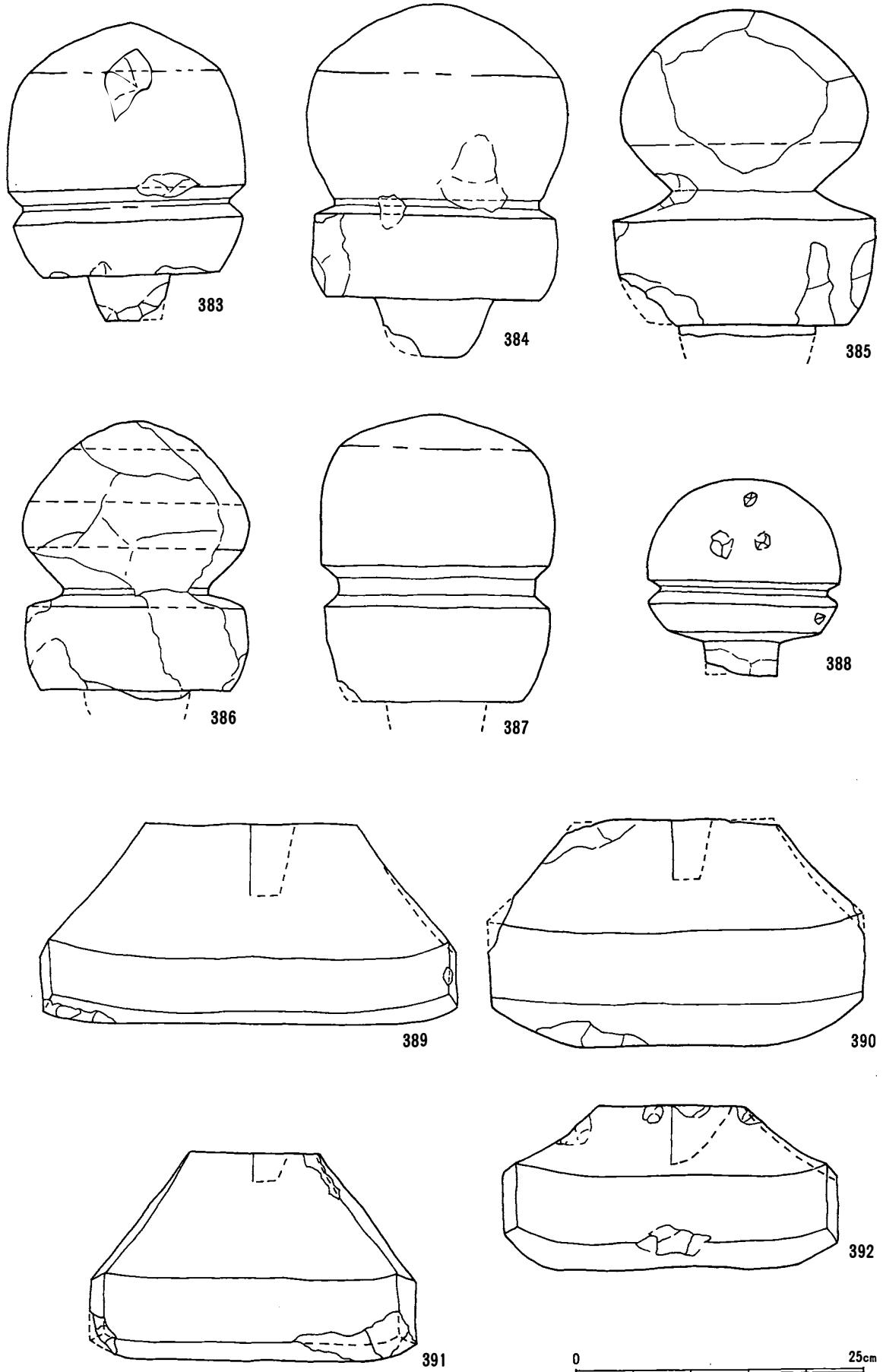
381



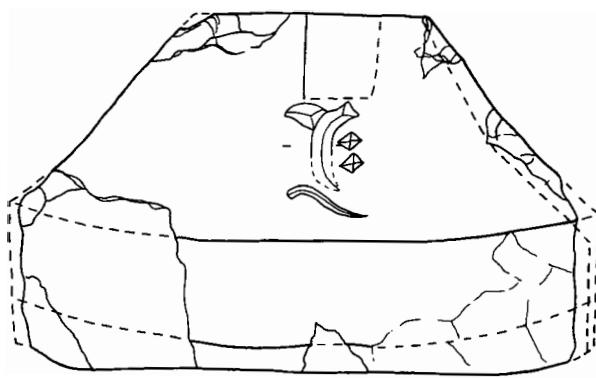
382

0 25cm

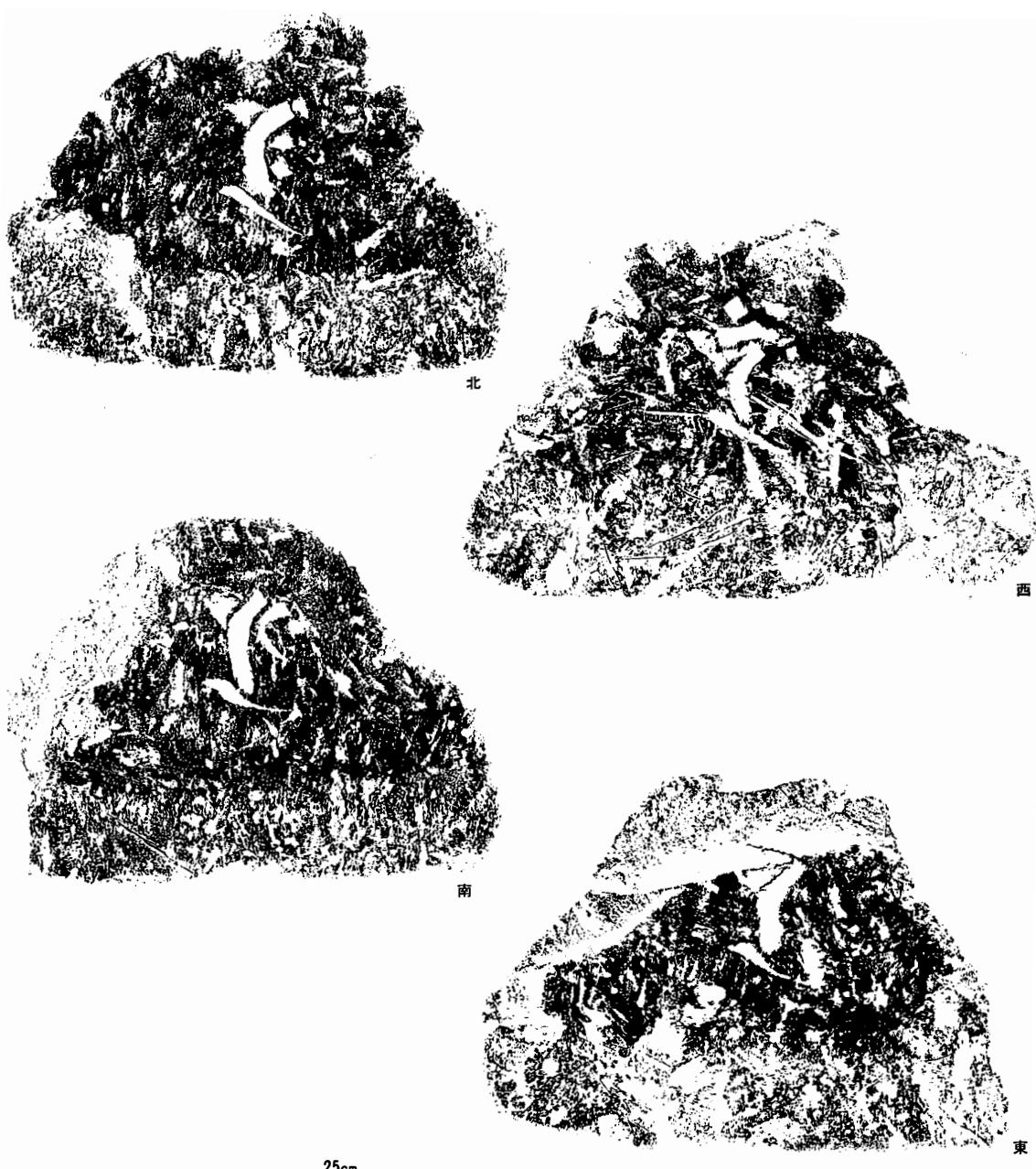
第69図 五輪塔実測図(3)



第70図 五輪塔実測図(4)



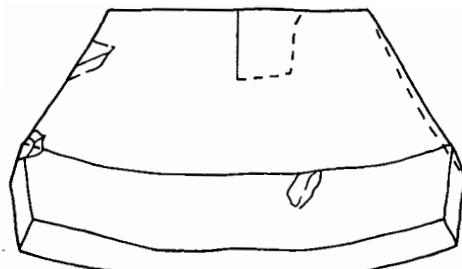
393



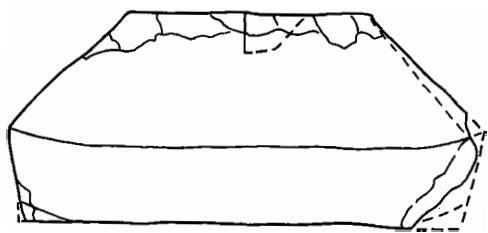
0

25cm

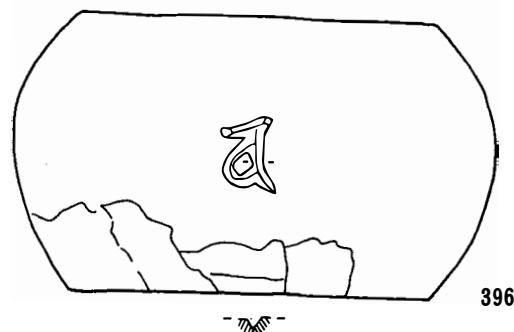
第71図 五輪塔実測図(5)



394



395



396



北



西



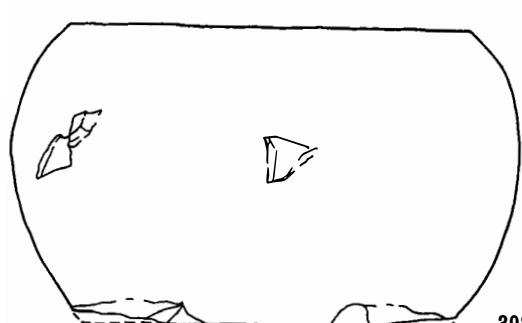
南



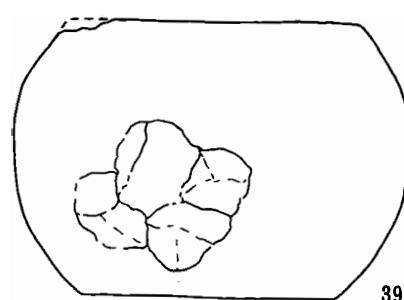
東



397



398



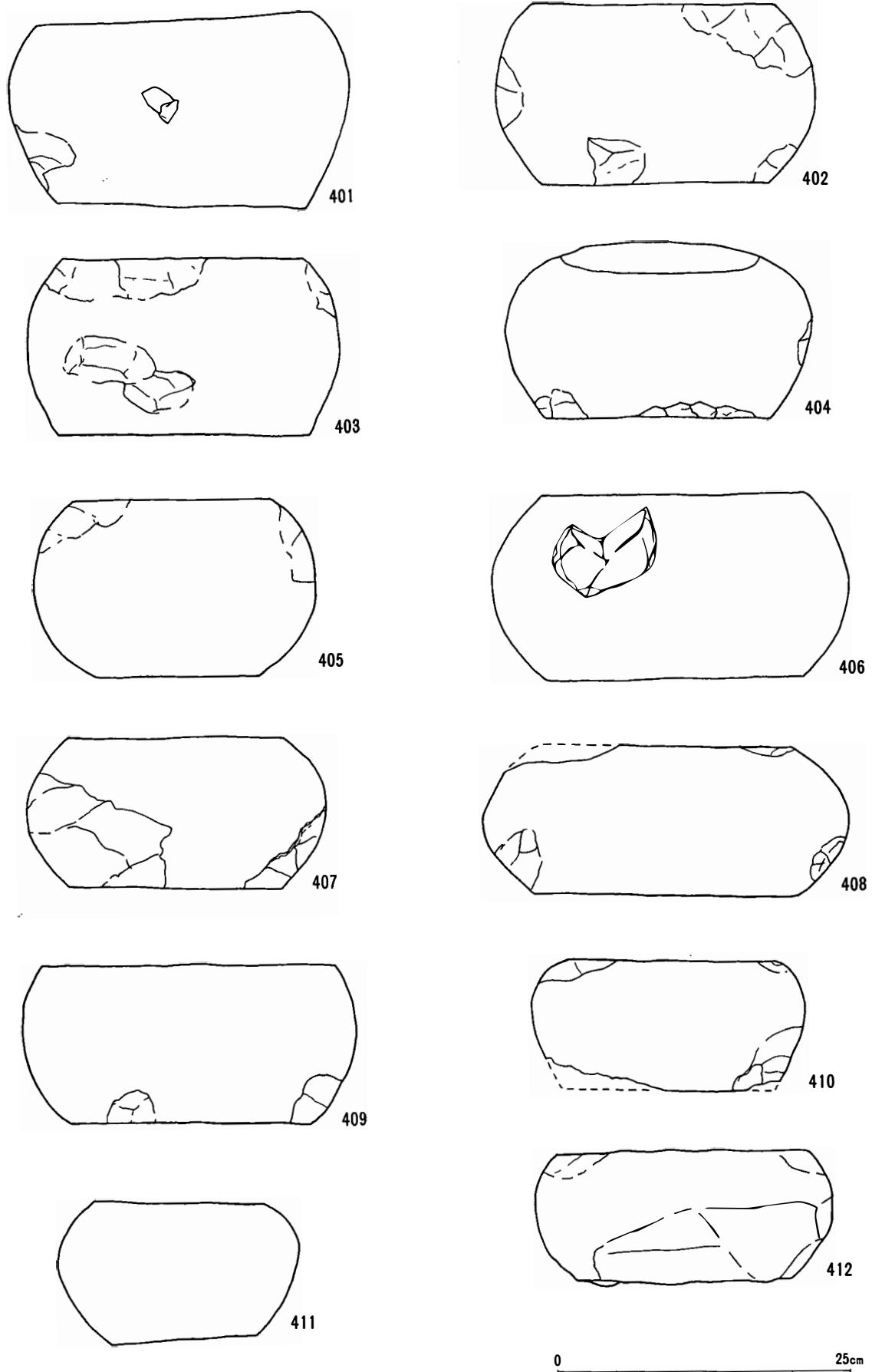
399



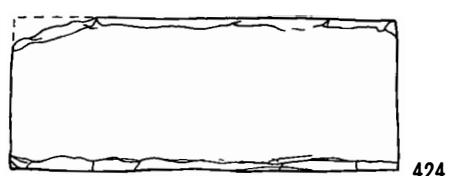
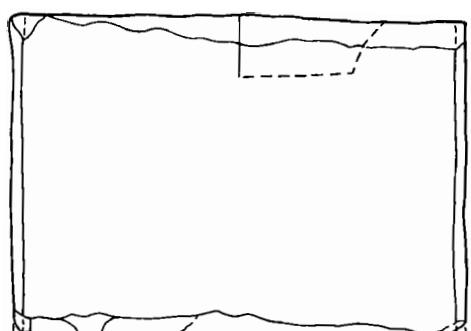
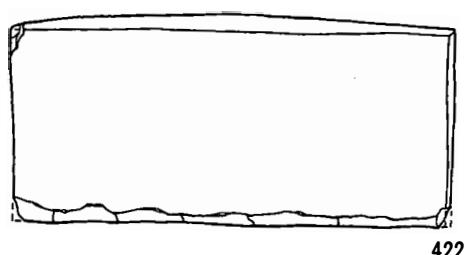
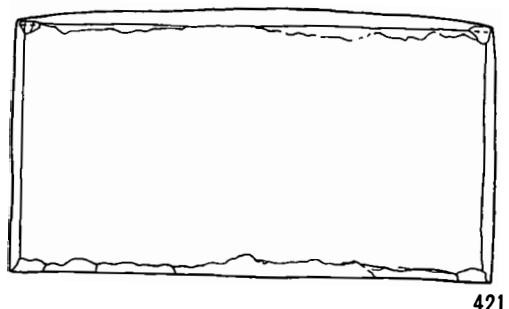
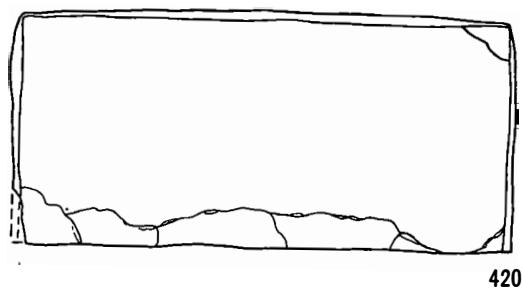
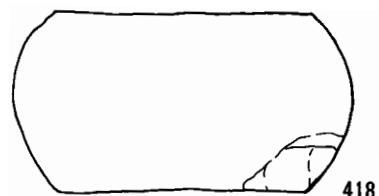
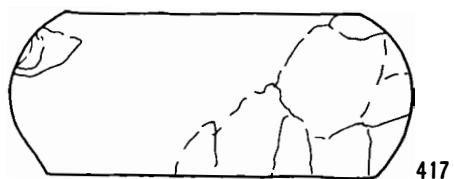
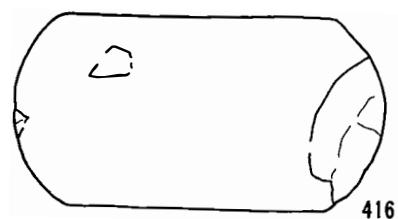
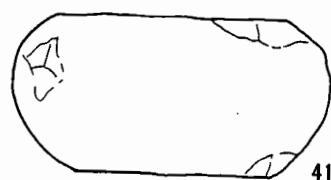
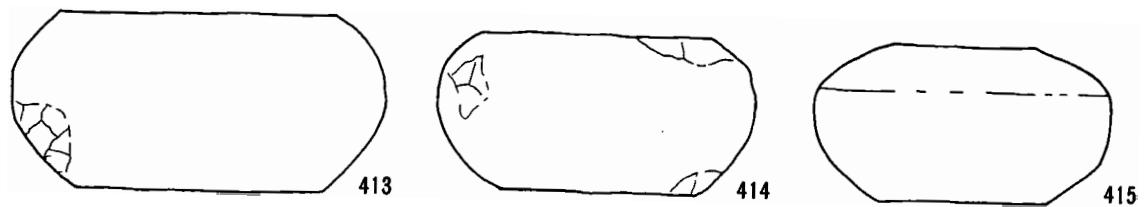
400

A scale bar ranging from 0 to 25 cm.

第72図 五輪塔実測図(6)



第73図 五輪塔実測図(7)



0 25cm

第74図 五輪塔実測図(8)

第24表 五輪塔観察表(1)

No	種別	器種	法量	形態及び技法の特徴	備考
357	五輪塔	空風輪	空輪幅-26.7cm 風輪幅-24.1cm 器高-29.2cm 溝幅-2.7cm	4面に梵字を刻み、墨を塗る 頂部は尖頭型で肩張り 接続突起は正方形	一括資料 凝灰岩製
358	五輪塔	空風輪	空輪幅-19.6cm 風輪幅-20.2cm 器高-24.2cm 溝幅-1.9cm	4面に梵字を刻み、墨を塗る 頂部は尖頭型で肩張り 接続突起は円形	一括資料 凝灰岩製
359	五輪塔	空風輪	空輪幅-22.9cm 風輪幅-18.4cm 器高-24.9cm 溝幅-2.0cm	上面平面形は隅丸方形 頂部は尖頭型で丸みをおび肩張り 接続突起は欠損	一括資料 凝灰岩製
360	五輪塔	空風輪	空輪幅-14.9cm 風輪幅-14.9cm 器高-15.4cm 溝幅-1.4cm	上面平面形は隅丸方形 頂部は尖頭型で肩張り 接続突起は方形	一括資料 凝灰岩製
361	五輪塔	空風輪	空輪幅-18.1cm 風輪幅-15.8cm 器高-18.0cm 溝幅-1.2cm	上面平面形は肩張り隅丸方形 頂部は主頭で側面を削りそいだ肩張り 接続突起は方形	一括資料 凝灰岩製
362	五輪塔	空風輪	空輪幅-17.2cm 風輪幅-14.4cm 器高-17.8cm 溝幅-2.8cm	上面平面形は肩張り隅丸長方形 頂部は円頭型で肩張り 接続突起は長方形	一括資料 凝灰岩製
363	五輪塔	空風輪	空輪幅-17.3cm 風輪幅-(17.3cm) 器高-23.4cm 溝幅-2.1cm	上面平面形は肩張り隅丸長方形 頂部は尖頭型で肩張り 接続突起は方形	一括資料 凝灰岩製
364	五輪塔	空風輪	空輪幅-18.9cm 風輪幅-18.7cm 器高-14.1cm 溝幅-1.5cm	上面平面形は円形 頂部は主頭型で腰張り 接続突起は欠損	一括資料 凝灰岩製
365	五輪塔	空風輪	空輪幅-19.2cm 風輪幅-18.7cm 器高-23.7cm 溝幅-1.8cm	上面平面形は肩張り隅丸長方形 頂部は尖頭型で側面を削りそいだ腰張り 接続突起は欠損	一括資料 凝灰岩製
366	五輪塔	空風輪	空輪幅-16.5cm 風輪幅-17.1cm 器高-23.6cm 溝幅-2.5cm	上面平面形は肩張り隅丸方形 頂部は主頭型で側面を削りそいだ腰張り 接続突起は軸がずれる	一括資料 凝灰岩製
367	五輪塔	空風輪	空輪幅-18.0cm 風輪幅-17.7cm 器高-22.5cm 溝幅-2.0cm	上面平面形は肩張り隅丸方形 頂部は尖頭型で肩張り 接続突起は正方形	一括資料 凝灰岩製
368	五輪塔	空風輪	空輪幅-22.0cm 風輪幅-20.7cm 器高-25.3cm 溝幅-2.5cm	上面平面形は円形 頂部は主頭型で側面を削りそいだ肩張り 接続突起は方形	一括資料 凝灰岩製
369	五輪塔	空風輪	空輪幅-19.2cm 風輪幅-17.9cm 器高-22.8cm 溝幅-1.1cm	上面平面形は肩張り隅丸長方形 頂部は尖頭型で肩張り 接続突起は隅丸長方形	一括資料 凝灰岩製
370	五輪塔	空風輪	空輪幅-16.2cm 風輪幅-(15.4cm) 器高-15.4cm 溝幅-2.5cm	上面平面形は肩張り隅丸長方形 頂部は主頭型で側面を削りそいだ肩張り 接続突起は方形	一括資料 凝灰岩製
371	五輪塔	空風輪	空輪幅-17.4cm 風輪幅-(16.6cm) 器高-16.2cm 溝幅-2.2cm	上面平面形は梢円形 頂部は尖頭型で腰張り 接続突起は長方形で軸がずれる	一括資料 凝灰岩製
372	五輪塔	空風輪	空輪幅-14.9cm 風輪幅-14.5cm 器高-19.6cm 溝幅-1.6cm	上面平面形は円形 頂部は尖頭型で側面を削りそいだ肩張り 接続突起は方形	一括資料 凝灰岩製
373	五輪塔	空風輪	空輪幅-16.4cm 風輪幅-15.6cm 器高-17.9cm 溝幅-1.5cm	上面平面形は肩張り隅丸方形 頂部は主頭型で側面を削りそいだ肩張り 接続突起は方形	一括資料 凝灰岩製
374	五輪塔	空風輪	空輪幅-21.6cm 風輪幅-19.6cm 器高-20.7cm 溝幅-2.5cm	上面平面形は肩張り隅丸方形 頂部は主頭型で側面を削りそいだ肩張り 接続突起は方形	一括資料 凝灰岩製

第25表 五輪塔観察表(2)

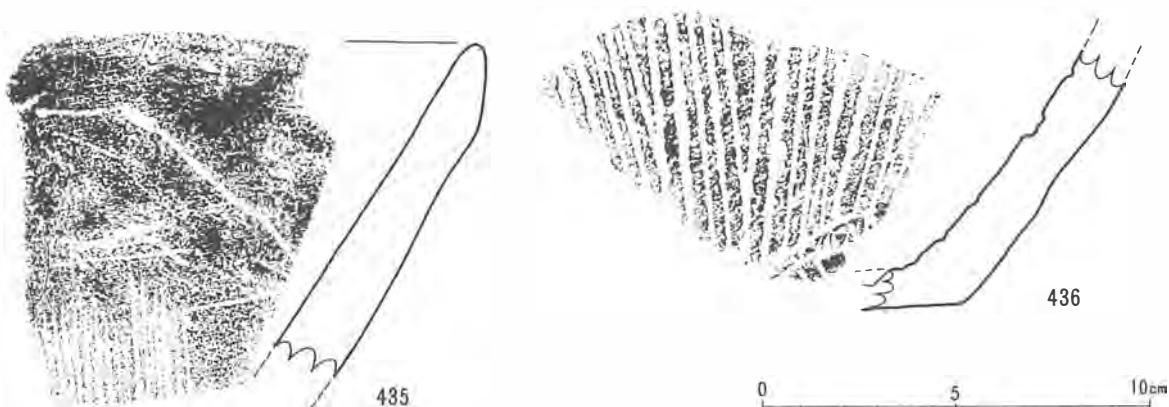
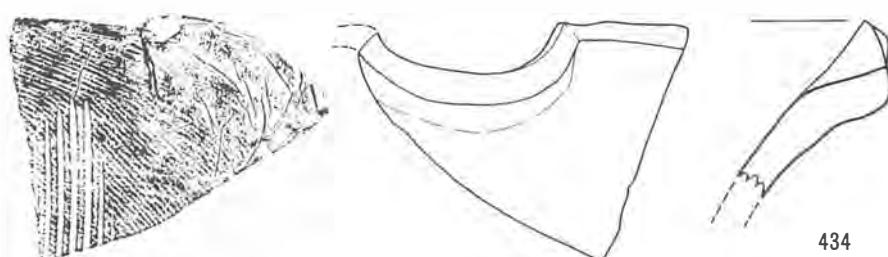
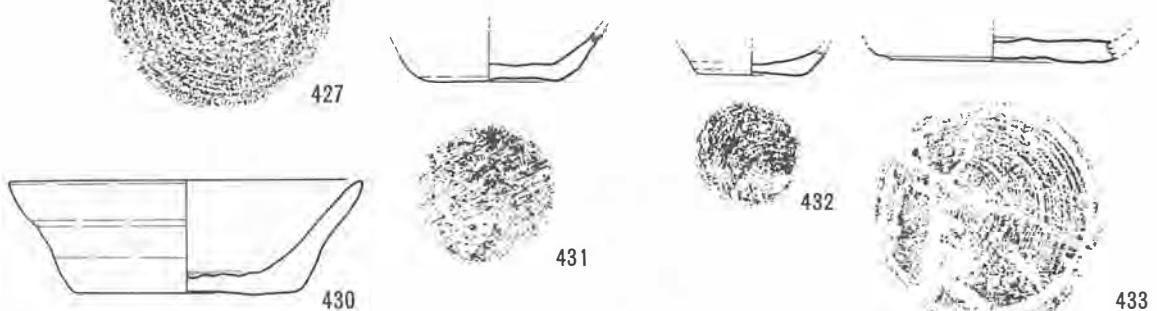
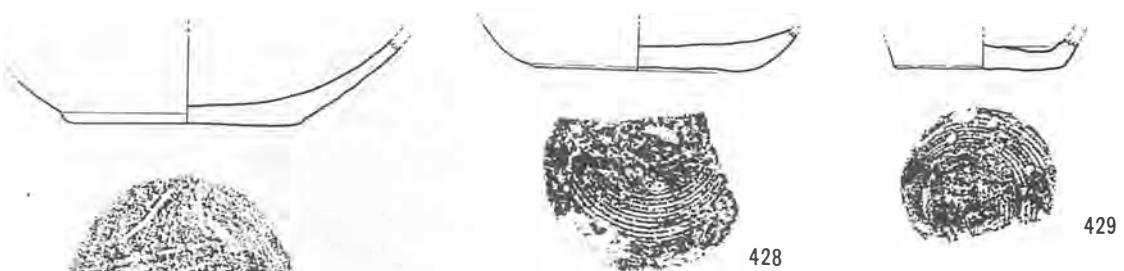
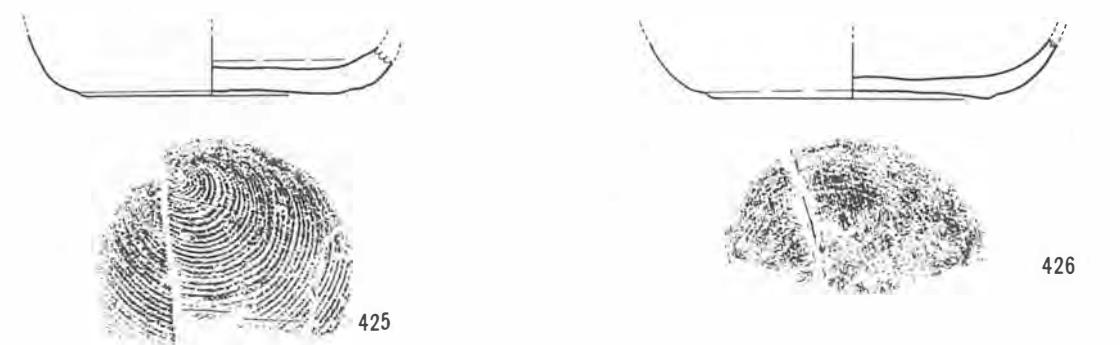
No	種別	器種	法量	形態及び技法の特徴	備考
375	五輪塔	空風輪	空輪幅-19.8cm 風輪幅-18.3cm 器高-22.7cm 溝幅-2.8cm	上面平面形は円形 頂部は圭頭型で側面を削りそいだ肩張り 接続突起は方形	一括資料 凝灰岩製
376	五輪塔	空風輪	空輪幅-15.6cm 風輪幅-15.0cm 器高-20.9cm 溝幅-1.3cm	上面平面形は胴張り隅丸長方形 頂部は尖頭型で側面を削りそいだ肩張り 接続突起は長方形	一括資料 凝灰岩製
377	五輪塔	空風輪	空輪幅-17.3cm 風輪幅-16.3cm 器高-20.3cm 溝幅-0.5cm	上面平面形は円形 頂部は圭頭型で側面を削りそいだ肩張り 接続突起は方形	一括資料 凝灰岩製
378	五輪塔	空風輪	空輪幅-18.2cm 風輪幅-16.9cm 器高-27.1cm 溝幅-1.5cm	上面平面形は胴張り隅丸長方形 頂部は圭頭型で側面を削りそいだ肩張り 接続突起は方形	一括資料 凝灰岩製
379	五輪塔	空風輪	空輪幅-18.0cm 風輪幅-15.8cm 器高-21.3cm 溝幅-2.0cm	上面平面形は胴張り隅丸長方形 頂部は圭頭型で側面を削りそいだ肩張り 接続突起断面形は不明	一括資料 凝灰岩製
380	五輪塔	空風輪	空輪幅-17.9cm 風輪幅-16.5cm 器高-21.0cm 溝幅-1.5cm	上面平面形は胴張り隅丸長方形 頂部は尖頭型で側面を削りそいだ肩張り 接続突起は方形で、軸がずれる	一括資料 凝灰岩製
381	五輪塔	空風輪	空輪幅-17.2cm 風輪幅-17.8cm 器高-19.3cm 溝幅-1.8cm	上面平面形は円形 頂部は円頭型で腰張り 接続突起は方形	一括資料 凝灰岩製
382	五輪塔	空風輪	空輪幅-19.2cm 風輪幅-19.0cm 器高-20.4cm 溝幅-2.1cm	上面平面形は円形 頂部は円頭型で側面を削りそいだ肩張り 接続突起は無い	一括資料 凝灰岩製
383	五輪塔	空風輪	空輪幅-20.6cm 風輪幅-20.0cm 器高-21.6cm 溝幅-0.5cm	上面平面形は円形 頂部は圭頭型で腰張り 接続突起は方形	一括資料 凝灰岩製
384	五輪塔	空風輪	空輪幅-21.4cm 風輪幅-21.2cm 器高-18.3cm 溝幅-1.5cm	上面平面形は円形 頂部は円頭型で胴張り 接続突起は方形	一括資料 凝灰岩製
385	五輪塔	空風輪	空輪幅-20.9cm 風輪幅-22.8cm 器高-27.4cm 溝幅-0.0cm	上面平面形は円形 頂部は円頭型で胴張り 接続突起は方形か	一括資料 凝灰岩製
386	五輪塔	空風輪	空輪幅-19.4cm 風輪幅-19.2cm 器高-23.0cm 溝幅-1.1cm	上面平面形は円形 頂部は円頭型で胴張り 接続突起は方形か	一括資料 凝灰岩製
387	五輪塔	空風輪	空輪幅-20.8cm 風輪幅-19.4cm 器高-24.5cm 溝幅-2.4cm	上面平面形は胴張り隅丸長方形 頂部は円頭型で腰張り 接続突起の痕跡あり	一括資料 凝灰岩製
388	五輪塔	空風輪	空輪幅-16.7cm 風輪幅-16.2cm 器高-13.7cm 溝幅-1.4cm	上面平面形は円形 頂部は円頭型で腰張り 接続突起は方形	一括資料 凝灰岩製
389	五輪塔	火輪	火輪幅-36.0cm 火輪厚-17.2cm 軒厚-5.7cm 口孔径-7.5cm	厚型で、平面形は方形 軒を持ち、そり有り 口孔を持ち、その平面形は方形	一括資料 凝灰岩製
390	五輪塔	火輪	火輪幅-33.0cm 火輪厚-19.4cm 軒厚-6.5cm 口孔径-6.5cm	厚型で、平面形は方形 軒を持ち、そり有り 口孔を持ち、その平面形は方形	一括資料 凝灰岩製
391	五輪塔	火輪	火輪幅-28.2cm 火輪厚-17.8cm 軒厚-5.5cm 口孔径-6.0cm	厚型で、平面形は方形 軒を持ち、そり有り 口孔を持ち、その平面形は方形	一括資料 凝灰岩製
392	五輪塔	火輪	火輪幅-29.1cm 火輪厚-14.0cm 軒厚-5.8cm 口孔径-10.9cm	薄型で、平面形は方形 軒を持ち、そり有り 口孔を持ち、その平面形は円形	一括資料 凝灰岩製

第26表 五輪塔観察表(3)

No	種別	器種	法量	形態及び技法の特徴	備考
393	五輪塔	火輪	火輪幅-29.5cm 火輪厚-26.5cm 軒厚-8.3cm 口孔径-9.5cm	4面に梵字有り 厚型で、平面形は方形 軒を持ち、そり有り 口孔を持ち、その平面形は方形	一括資料 凝灰岩製
394	五輪塔	火輪	火輪幅-28.3cm 火輪厚-17.4cm 軒厚-6.9cm 口孔径-8.5cm	厚型で、平面形は方形 軒を持ち、そり有り 口孔を持ち、その平面形は方形	一括資料 凝灰岩製
395	五輪塔	火輪	火輪幅-31.6cm 火輪厚-13.6cm 軒厚-6.2cm 口孔径-8.0cm	薄型で、平面形は方形 軒を持ち、そり有り 口孔を持ち、その平面形は方形	一括資料 凝灰岩製
396	五輪塔	水輪	上面径-23.6cm 下面径-24.0cm 最大径-32.0cm 厚さ-23.6cm	4面に梵字を彫り、墨で塗る 厚手で、平面形は梢円形 納骨孔は無し	一括資料 凝灰岩製
397	五輪塔	水輪	上面径-19.2cm 下面径-17.4cm 最大径-29.2cm 厚さ-19.2cm	厚手で、平面形は円形 納骨孔は無し	一括資料 凝灰岩製
398	五輪塔	水輪	上面径-26.3cm 下面径-24.2cm 最大径-33.8cm 厚さ-19.6cm	厚手で、平面形は円形 納骨孔は無し	一括資料 凝灰岩製
399	五輪塔	水輪	上面径-19.1cm 下面径-16.8cm 最大径-26.7cm 厚さ-18.2cm	厚手で、平面形はやや梢円形 納骨孔は無し	一括資料 凝灰岩製
400	五輪塔	水輪	上面径-21.4cm 下面径-20.7cm 最大径-25.2cm 厚さ-11.5cm	薄手で、平面形は円形 やや歪み有り 納骨孔は無し	一括資料 凝灰岩製
401	五輪塔	水輪	上面径-24.0cm 下面径-21.4cm 最大径-29.2cm 厚さ-16.8cm	厚手で、平面形は円形 やや傾き有り 納骨孔は無し	一括資料 凝灰岩製
402	五輪塔	水輪	上面径-20.5cm 下面径-19.6cm 最大径-27.3cm 厚さ-15.3cm	厚手で、平面形は円形 納骨孔は無し	一括資料 凝灰岩製
403	五輪塔	水輪	上面径-20.4cm 下面径-21.4cm 最大径-26.7cm 厚さ-15.3cm	厚手で、平面形は円形 納骨孔は無し	一括資料 凝灰岩製
404	五輪塔	水輪	上面径-17.0cm 下面径-19.1cm 最大径-26.2cm 厚さ-14.6cm	厚手で、平面形は円形 納骨孔は無し 上面はケズリ後粗く仕上げる	一括資料 凝灰岩製
405	五輪塔	水輪	上面径-17.0cm 下面径-14.2cm 最大径-24.2cm 厚さ-15.3cm	厚手で、平面形は円形 納骨孔は無し	一括資料 凝灰岩製
406	五輪塔	水輪	上面径-22.2cm 下面径-22.1cm 最大径-30.4cm 厚さ-15.9cm	厚手で、平面形は円形 納骨孔は無し	一括資料 凝灰岩製
407	五輪塔	水輪	上面径-18.5cm 下面径-18.4cm 最大径-25.8cm 厚さ-12.7cm	薄手で、平面形は円形 納骨孔は無し 上面にケズリ痕跡	一括資料 凝灰岩製
408	五輪塔	水輪	上面径-22.5cm 下面径-21.3cm 最大径-31.3cm 厚さ-12.9cm	薄手で、平面形は円形 納骨孔は無し 風化が激しい	一括資料 凝灰岩製
409	五輪塔	水輪	上面径-25.1cm 下面径-21.0cm 最大径-28.4cm 厚さ-13.5cm	薄手で、平面形は円形 納骨孔は無し 風化が激しい	一括資料 凝灰岩製
410	五輪塔	水輪	上面径-17.0cm 下面径-18.2cm 最大径-23.4cm 厚さ-11.2cm	薄手で、平面形は円形 肩が張る 納骨孔は無し 風化が激しい	一括資料 凝灰岩製

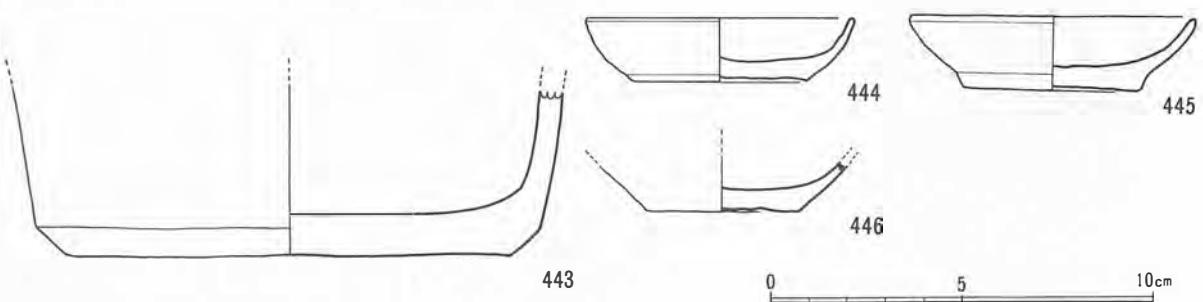
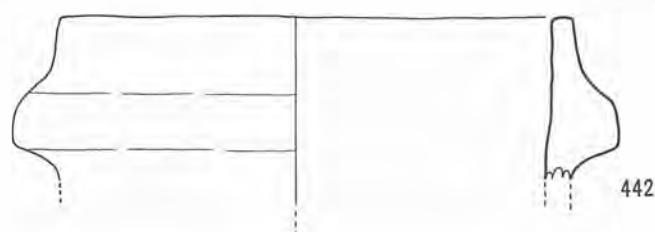
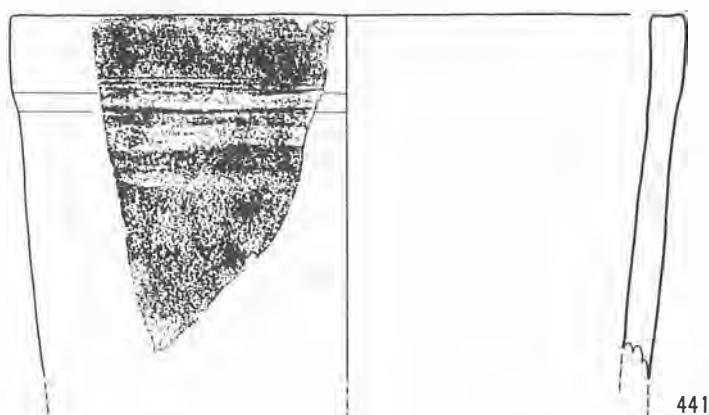
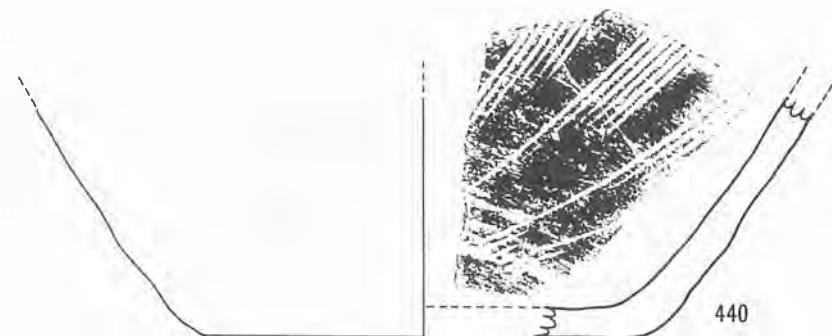
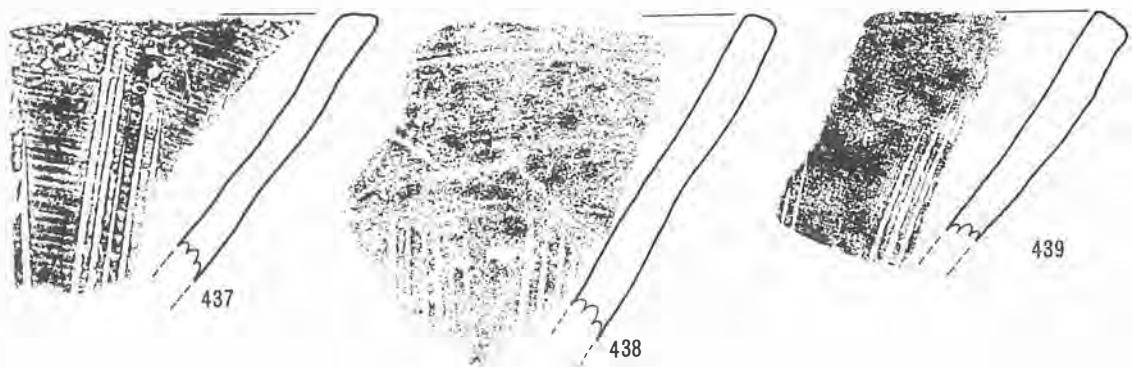
第27表 五輪塔観察表(4)

No	種別	器種	法量	形態及び技法の特徴	備考
411	五輪塔	水輪	上面径-11.9cm 下面径-12.9cm 最大径-20.6cm 厚さ-12.3cm	小型で薄手、平面形は円形 やや傾きを持つ 納骨孔は無し	一括資料 凝灰岩製
412	五輪塔	水輪	上面径-21.7cm 下面径-18.5cm 最大径-25.4cm 厚さ-11.1cm	薄手で、平面形は円形 肩が張る 納骨孔は無し	一括資料 凝灰岩製
413	五輪塔	水輪	上面径-18.4cm 下面径-16.8cm 最大径-24.8cm 厚さ-11.5cm	薄手で、平面形は円形 納骨孔は無し	一括資料 凝灰岩製
414	五輪塔	水輪	上面径-15.2cm 下面径-13.4cm 最大径-21.2cm 厚さ-10.2cm	小型で薄手、平面形は円形 納骨孔は無し	一括資料 凝灰岩製
415	五輪塔	水輪	上面径-8.6cm 下面径-11.0cm 最大径-19.7cm 厚さ-10.4cm	小型で薄手、平面形は円形 納骨孔は無し 上位及び下位に面取りを施す	一括資料 凝灰岩製
416	五輪塔	水輪	上面径-18.7cm 下面径-16.8cm 最大径-24.8cm 厚さ-12.5cm	薄手で、平面形は円形 納骨孔は無し	一括資料 凝灰岩製
417	五輪塔	水輪	上面径-19.2cm 下面径-21.5cm 最大径-26.8cm 厚さ-11.7cm	薄手で、平面形は円形 納骨孔は無し	一括資料 凝灰岩製
418	五輪塔	水輪	上面径-17.0cm 下面径-16.4cm 最大径-22.6cm 厚さ-11.5cm	薄手で、平面形は隅丸方形 納骨孔は無し	一括資料 凝灰岩製
419	五輪塔	水輪	上面径-17.4cm 下面径-20.6cm 最大径-28.2cm 厚さ-10.0cm	薄手で、平面形は円形 肩が張る 納骨孔を有し、その平面形は方形	一括資料 凝灰岩製
420	五輪塔	地輪	一辺-33.0cm 厚さ-14.8cm 最大幅-33.2cm 最大厚-15.5cm	厚手で、平面形は方形 受部は無し	一括資料 凝灰岩製
421	五輪塔	地輪	一辺-30.4cm 厚さ-16.5cm 最大幅-31.28cm 最大厚-17.5cm	厚手で、平面形は方形 受部は無し	一括資料 凝灰岩製
422	五輪塔	地輪	一辺-28.6cm 厚さ-12.5cm 最大幅-29.2cm 最大厚-13.8cm	薄手で、平面形は方形 受部は無し	一括資料 凝灰岩製
423	五輪塔	地輪	一辺-28.6cm 厚さ-21.0cm 最大幅-30.5cm 最大厚-21.2cm	厚手で、平面形は方形 方形の受部を有し、一辺19cm、深さ4.0cmを測る	一括資料 凝灰岩製
424	五輪塔	地輪	一辺-25.2cm 厚さ-10.0cm 最大幅-25.5cm 最大厚-10.0cm	薄手で、平面形は方形 受部は無し	一括資料 凝灰岩製

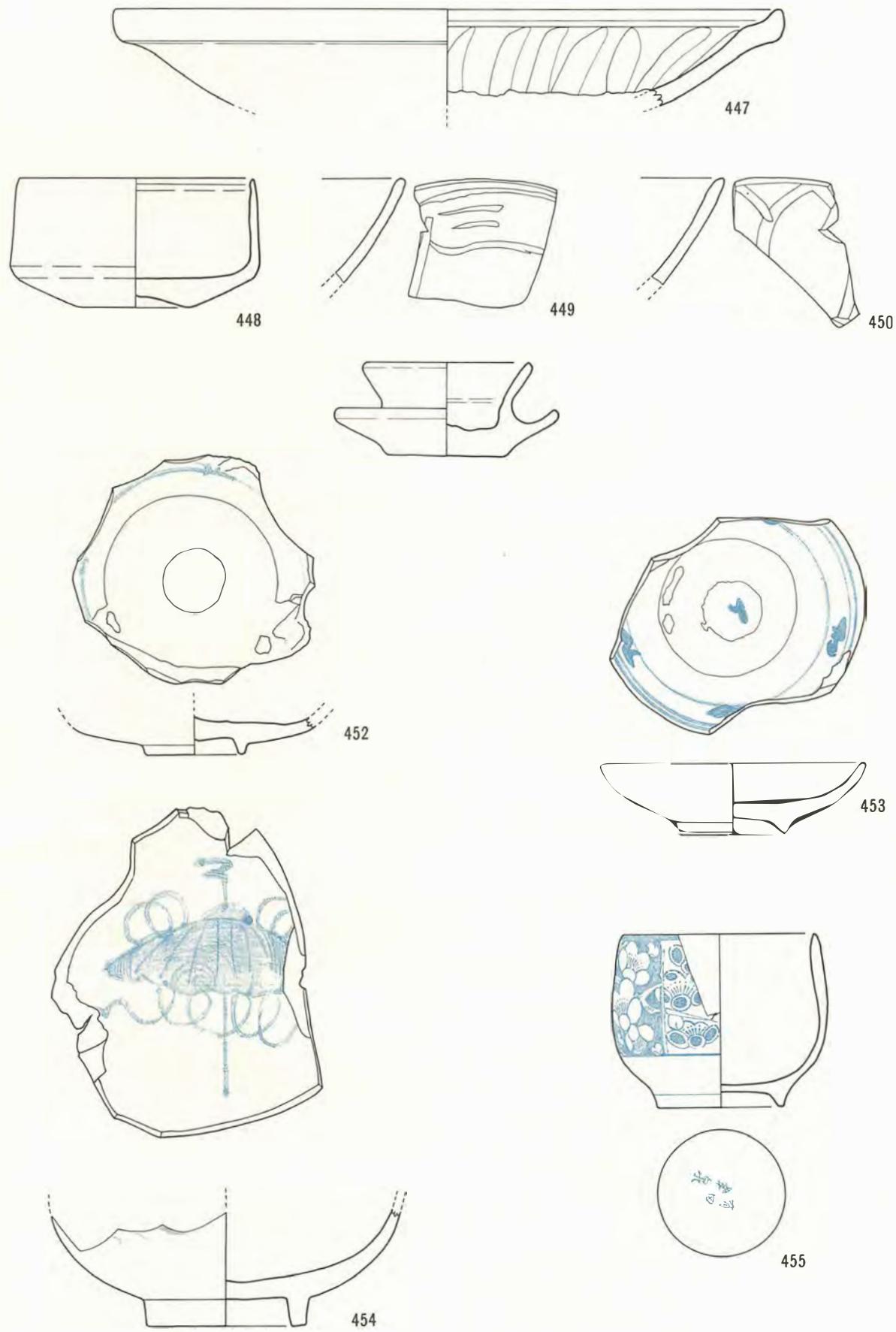


0 5 10 cm

第75図 一括遺物実測図(1)



第76図 一括遺物実測図(2)



0 5 10cm

第77図 一括遺物実測図(3)

第28表 一括遺物観察表(1)

No	種別	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
425	土師器	壺	口径-不明 底径-7.0cm 器高-不明	底部は中央がややくぼむ 体部は内湾して立ち上がり、 口縁部に至る 底部から体部にかけて段を持つ	内外面はろくろによるナデ調整 底部は糸切り	胎土-砂粒を含む 焼成-不良 色調-橙色	一括
426	土師器	壺	口径-不明 底径-7.3cm 器高-不明	底部は中央がややくぼむ 体部は内湾して立ち上がり口 縁部に至る 底部から体部にかけて段を持つ	内外面はナデ調整 底部は糸切り	胎土-砂粒を含む 焼成-不良 色調-にぶい橙色	一括
427	土師器	皿	口径-不明 底径-6.0cm 器高-不明	底部は平ら 体部はわずかに内湾して開き 口縁部に至る 底部から体部にかけて段を持つ	内外面はナデ調整 底部は糸切り	胎土-微砂粒を含 む 焼成-やや良 色調-橙色	一括
428	土師器	皿	口径-(8.4cm) 底径-5.7cm 器高-(1.2cm)	底部は厚く、平ら 体部はわずかに内湾して開き 口縁部に至り、口唇部は薄い 底部から体部にかけて段を持つ	内外面はナデ調整 底部は糸切り	胎土-微砂粒を少 量含む 焼成-やや良 色調-にぶい橙色	一括
429	土師器	壺	口径-不明 底径-4.4cm 器高-不明	底部は厚く、平ら 体部はするどく屈曲して立ち 上がり、口縁部に至る 底部から体部にかけてわずか に面取りを施す	内外面はナデ調整で、内面は凹凸が見られる 底部は糸切り	胎土-砂粒を少量 含む 焼成-やや良 色調-にぶい橙色	一括
430	土師器	壺	口径-(9.3cm) 底径-(5.9cm) 器高-3.0cm	底部は平ら 体部は屈曲して開き、口縁部 はやや膨らむ	内外面はろくろによるナデ調整で、内面は凹凸 が見られる 磨耗が激しいため、底部は糸切りかへら切りか は不明	胎土-砂粒を含む 焼成-不良 色調-橙色	一括
431	土師器	壺	口径-不明 底径-3.6cm 器高-不明	小型で、底部は平ら 体部は屈曲して開き、口縁部 に至る	内外面はナデ調整 底部は糸切り痕をナデで消している	胎土-砂粒を含む 焼成-やや良 色調-にぶい橙色	一括
432	土師器	壺	口径-不明 底径-2.8cm 器高-不明	小型で、底部は平ら 体部は屈曲して開き、口縁部 に至る	内外面はナデ調整 底部は糸切り	胎土-砂粒を含む 焼成-不良 色調-橙色	一括
433	土師器	壺	口径-不明 底径-5.4cm 器高-不明	小型で、底部は凹凸が激しい 体部は屈曲して開き、口縁部 に至る	内外面はナデ調整 底部は糸切り後ナデ	胎土-砂粒を含む 焼成-不良 色調-橙色	一括
434	瓦器	すり鉢	口径-不明 底径-不明 器高-不明	注ぎ口のみ残存	内面は刷毛目調整後、7本セットの沈線を施す 外面はナデ調整	胎土-密 焼成-良 色調-褐灰色	一括
435	瓦器	すり鉢	口径-不明 底径-不明 器高-不明	口縁部から体部にかけてのみ 残存 口縁部はとがる	内面は横ナデ後、6本セットの沈線を施す 外面は多方向のナデ調整	胎土-砂糖を含む 焼成-やや良 色調-淡赤橙色 外面は灰黄褐色	一括
436	瓦器	すり鉢	口径-不明 底径-不明 器高-不明	底部から体部にかけてのみ残 存 沈線は太く深い	内面はナデ後、5本セットの沈線を施す 内面底部にも沈線を施す 外面は多方向のナデ調整	胎土-密 焼成-良 色調-褐灰色	一括
437	瓦器	すり鉢	口径-不明 底径-不明 器高-不明	口縁部から体部にかけてのみ 残存 口唇部は水平、体部の厚さは 不均一	内面はへら状工具による横ナデ後、5本セット の沈線を施す 外面は押圧後、多方向のナデ調整	胎土-密 焼成-良 色調-褐灰色	一括
438	瓦器	すり鉢	口径-不明 底径-不明 器高-不明	口縁部から体部にかけてのみ 残存 口唇部はやや丸みをおび、体 部の厚さは不均一	内面はへら状工具による横ナデ後、6本セット の沈線を施す 外面は押圧後、多方向のナデ調整	胎土-密 焼成-良 色調-褐灰色	一括
439	瓦器	すり鉢	口径-不明 底径-不明 器高-不明	口縁部から体部にかけてのみ 残存 口縁部にいくにしたがって厚 みを増す	内面はナデ後、5本セットの沈線を施す 外面は押圧後、横ナデ調整	胎土-密 焼成-良 色調-灰色	一括
440	瓦器	すり鉢	口径-不明 底径-(11.8cm) 器高-不明	底部から体部にかけてのみ残 存 体部の厚さは不均一	内面はナデ後、6本セットの沈線を施す 外面は押圧後、ナデ調整	胎土-密 焼成-良 色調-灰色	一括
441	瓦器	鉢	口径-不明 底径-(18.0cm) 器高-不明	口縁部から体部にかけてのみ 残存し、直線的に立ち上がる 口縁部は一段厚みを増す	内面ともナデ調整	胎土-密 焼成-良 色調-にぶい橙色	一括
442	瓦器	鉢	口径-不明 底径-(18.0cm) 器高-不明	口縁部から体部にかけてのみ 残存し、直線的に立ち上がる 口縁部にゆるい突帯を持つ	内外面ともナデ調整	胎土-密 焼成-良 色調-にぶい橙色	一括

第29表 一括遺物観察表(2)

No	種別	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
443	瓦器	鉢	口径ー不明 底径ー(12.2cm) 器高ー不明	口縁部から体部にかけてのみ残存し、直線的にやや開きながら立ち上がる 底部から体部にかけて、明確な面取りを施す	内外面ともナデ調整	胎土ー密 焼成ー良 色調ーにぶい赤褐色	一括
444	窯道具	チャツ	口径ー6.9cm 底径ー5.2cm 器高ー2.4cm	体部は内湾して立ち上がり、 口縁部にいたり、口唇部は丸みをおびる 底部は平らで、中央がややくぼむ	内外面ともろくろによる回転ナデ調整 底部は糸切り 内外面に自然釉が付着する	胎土ー密 焼成ー良 色調 胎土ー黒灰色 釉ー暗茶褐色	一括
445	窯道具	チャツ	口径ー3.6cm 底径ー4.8cm 器高ー1.8cm	体部は内湾気味に立ち上がり 口縁部に至る 見込中央は盛り上がる 底部中央はくぼむ	内外面ともろくろによる回転ナデ調整 底部は糸切り	胎土ー密 焼成ー良 色調ー灰黒色	一括
446	窯道具	チャツ	口径ー不明 底径ー4.1cm 器高ー不明	体部は内湾気味に開き、口縁部に至る 見込中央は盛り上がり、底部には他個体の釉が付着する	内外面ともろくろによる回転ナデ調整 内面には釉を施し、外面底部にも部分的に釉が付着する	胎土ー密 焼成ー良 色調ー黒灰色	一括
447	青磁	鉢	口径ー(23.4cm) 底径ー不明 器高ー不明	体部はゆるやかに開き、口縁部は外反し、さらに屈曲し立ち上がる	内面に連弁状の文様を持つ	胎土ー密 焼成ー良 色調ー釉は緑灰色 胎土は灰白色	一括
448	磁器	碗	口径ー8.2cm 底径ー4.0cm 器高ー4.5cm	底部から体部にかけて屈曲し 体部はほぼ垂直に立ち上がり 口唇部はとがる 高台は幅広で、疊付はとがる	内外面に釉を施すが、高台内面及び口唇部内面は無施釉 見込は白の縞文様	胎土ー密 焼成ー良 色調ー釉は灰白色 胎土は灰白色	一括
449	青磁	碗	口径ー不明 底径ー不明 器高ー不明	口縁部から体部にかけての破片 口唇部は丸みをおびる	外面には不明の文様を描く	胎土ー密 焼成ー良 色調ー釉は青白色 胎土は灰オーリープ	一括
450	青磁	碗	口径ー不明 底径ー不明 器高ー不明	口縁部から体部にかけての破片 口唇部は丸みをおびる	外面には連弁を描く	胎土ー密 焼成ー良 色調ー釉は深緑色 胎土は青灰色	一括
451	陶器	灯火具	上皿口径ー 5.8cm 下皿口径ー 7.6cm 底径ー4.2cm 器高ー3.4cm	底部は平らで、下皿は外反して開き、口縁部は内傾し、さらに上皿は外反して開き、口唇部はややとがる 見込中央は突起する	内外面ともろくろによる回転ナデ調整 上皿内面及び下皿内面には薄く釉を施し、下皿外面及び底部には一部釉が付着する 底部は糸切り	胎土ー密 焼成ー良 色調ー釉は茶灰色 胎土は明茶色	一括
452	磁器	皿	口径ー不明 高台径ー3.6cm 器高ー不明	体部はゆるやかに内湾して開き、口縁部に至る 高台は短く、やや外反する 疊付外面は面取りを施し、やや丸みをおびる	内外面ともろくろによる回転ナデ調整 内外面に釉を施し、疊付は釉をかき取る 体部内面に染付を描き、見込は蛇ノ目状に粘土を塗布する	胎土ー密 焼成ー良 色調ー釉は透明 胎土は灰白色 吳須は濃青色	一括 肥前系 18C中頃 ~18C末
453	磁器	皿	高台径ー9.2cm 底径ー3.8cm 器高ー2.5cm	体部はゆるやかに内湾して開き、口縁部に至る 高台は短く、ほぼ垂直にのび、疊付はほぼ平らで、その内面中央はくぼむ	内外面ともろくろによる回転ナデ調整 内外面に釉を施し、疊付は釉をかき取る 体部内面及び見込に染付を描き、見込は蛇ノ目状に粘土を塗布する	胎土ー密 焼成ー良 色調ー釉は透明 胎土は灰白色 吳須は濃紺色	一括 肥前系 18C中頃 ~18C末
454	磁器	碗	高台径ー不明 底径ー5.6cm 器高ー不明	体部はゆるやかに内湾して立ち上がり、口縁部に至る 高台は厚く、ほぼ垂直にのび、疊付はほぼ平らで、その内面には砂が付着する	内外面ともろくろによる回転ナデ調整 内外面に釉を施し、疊付には他個体の粘土が付着する 見込には5個の目跡が残る 見込には傘の絵を染付する	胎土ー密 焼成ー良 色調ー釉は透明 胎土は灰白色 吳須は紺色	一括 肥前系 19C
455	磁器	碗	高台径ー (6.6cm) 底径ー4.2cm 器高ー6.1cm	体部はゆるやかに内湾して立ち上がり、口縁部に至り、やや内傾し、口唇部はとがる 高台はやや開き気味にのび、疊付は丸みをおびる	内外面に釉を施し、疊付は釉をかき取る 体部外面上には梅花文を描き高台部には1条の圈線をめぐらす 高台中央には「有田登泉」の銘あり	胎土ー密 焼成ー良 色調ー釉は透明 胎土は白色 吳須は紺青色	一括 肥前系 明治以降

第3節 まとめ

今回の調査で堀跡及び土壘の確認を前節で報告したが、堀跡の平面的規模、立体的規模、それに付随する土壘等を考えると、外敵からの防御施設と判断するのが適当であろう。この万年寺遺跡は以前から中世寺院跡と伝えられていたが、すぐ隣接する松岡屋敷跡から、豪族の居館跡とする施設等の確認は出来なかった⁽¹⁾。その規模も小規模であったことから、本来この地に居館を構えており、以後居館を移転する際、当地に松岡家の菩提寺（万年寺）が開かれたと解するほうが自然であろう。

また、この堀跡の中からは、中世から近世に至る多量の遺物が廃棄された状態で出土した。中世の青磁をはじめ、すり鉢や火舎等の瓦質土器、近世の肥前系の磁器や在地の陶器類、さらにはハマ、トチン、チャツサヤ等の窯道具も多量に出土した。

調査期間中は、これら陶磁器の出土を消費地として、生産地との関連及び流通経路等を念頭においていたが整理作業の段階で専門調査員（人吉市文化課和田氏）の指導により、窯道具の多量の出土とその出土状況等から、2号堀跡が物原的性格をも兼ね、付近に窯跡が存在する可能性が高いことを指摘された⁽²⁾。陶器類については、消費地遺跡的性格から生産地遺跡的性格という観点への転換を行い、整理作業を進めた。

以下陶磁器について述べてみたい。

1 染付について

2号堀跡から多量の染付が出土したことは前に述べたが、その大半は肥前系の染付が占めていることである。在地系の磁器も僅かに見られるが、整理作業の時点で専門調査員に指摘を受けたことも含めて、特徴的なことがらをここで述べてみることにする。

1820年～幕末に比定される肥前系の端反碗（286・292・293）、江戸時代後期に比定される碗（276）、18世紀中葉～18世紀末に比定される染付皿（317・318・452・453）の見込部分を観察してみると、重ね焼きを行う場合は釉着を防ぐための技法として、蛇ノ目釉ハギを施す例は肥前を含め各地の窯で行われているが、上記の染付は釉をはぎ取る代わりに、蛇ノ目状に白土を塗りつけ釉着を防ぐ技法を用いている。在地の窯の特殊な技法であろうか、その窯跡の所在は現段階においては不明である。また肥前系の碗（301・308・313・454）の見込み部分に、脚付ハマの痕跡が目跡状に残存し、その脚数は3～5個である。また、脚付ハマ自体も2号堀跡から出土していることから、隣接地において磁器の生産も行われていた可能性も否定できない。資料不足であるため、磁器生産の技法及び磁器窯の存在を断定するには無理があり、今後の資料の増加と窯跡の発見に期待し、当地における陶磁器の生産流通の解明がなされることを、今後の課題にしていかなければならないであろう。

2 朝妻焼について

朝妻焼は、染付の皿（第59図300）が出土しており、見込に手書きの五弁花、体部内面には笹文を描き、高台内面中央に「朝」の文字を染付している。さらに本報告には紹介できなかったが、他に1点同様の皿が確認できた。これは、久留米市で確認された朝妻窯跡南物原出土の染付皿と、文様形態、見込の五弁花、高台内面の「朝」の染付とどれをとっても非常に類似している⁽³⁾。

朝妻焼は、18世紀前半の正徳・享保年間、六代藩主有馬則維の命により、肥前から陶工を招き操業を行っ

た久留米藩の御用窯であり、平成4年に宅地造成に伴う物原の緊急発掘調査と、窯本体の確認調査が行われている⁽⁴⁾。朝妻焼の特徴として、高台内に「朝」の銘を記す点が挙げられる。

出土例では、三潴郡や小郡市、遠くは東京や神奈川でも確認されているが、これらは、すべて久留米藩域内であり、藩域外での出土例は無いとされている。今回万年寺遺跡からの出土は藩域以外という点で、朝妻焼の流通等で重要な意味を持つものであろう。

3 高田焼について

前述した2号堀跡に投棄された陶磁器類と、それに伴い出土した多量かつ各種の窯道具、ハマに釉着した陶器等から窯跡の存在は容易に理解できるし、窯跡が万年寺遺跡の隣接地に所在することは間違いないと思われる。

高田焼は八代焼・平山焼とも呼ばれ、御用窯として保護されてきた。高田焼は朝鮮から渡来し、肥前の上野焼をおこした陶工尊楷（上野喜蔵）によって八代市奈良木町に窯を開き、1660年には平山の地に窯を移転させている。奈良木窯当時の胎土は平山窯に比べてかなり粗く、釉も青色・青黒色・茶褐色・ねずみ色・なまこ色である。唐津焼の影響を受けており、器形も唐津焼に類似したものも多いといわれ、技法も平山窯になると底部に渦文が見れるようになり、しだいに力強く深くなっていく⁽⁵⁾。

万年寺遺跡出土の高田焼をみてみると、形態・釉・技法の変化が僅かながら見えてくる。今回出土した高田焼を、これらの変化をもとに分類を試みることにした。

I類（奈良木窯から平山に開窯する時期）

- 碗 a 胎土は粗く、内外面には黒色釉を施し、高台は高くその内面は削り出しで、渦文は見られない。
見込みに蛇ノ目釉ハギを施すものもある。（未掲載）
- 碗 b 胎土は粗く、内外面には白土を刷毛により渦状に塗布し、高台内面は削り出し後ナデ調整を行い、中央が尖る。（未掲載）
- 碗 c 胎土は粗く、内外面及び高台内面にも釉を施す。（232）
- 皿 器形は唐津焼に類似する。高台内面には渦文が見られるが、後にナデを施している。釉は黒褐色、青緑色がある。（未掲載）

II類（なまこ釉を施し、青色釉掛けのもの）

- 器形が多種におよび、大型製品も製作する。碗の高台内面には渦文が見られるが、その渦文はあまり。
油壺（206）、大型鉢（197）、大型皿（175）、碗（232・235）、水差（165）、灯火具（167）

III類（規格の統一化）

成形の特徴として、高台内面の渦文はあまり、指で押されたもの。象嵌を持たない。

碗（231・226）

IV類（釉の開発、透明釉）

白土を刷毛により、渦文状に塗布し、釉は透明に近く器面はなめらか、高台内部は中央部のみに明確な渦文。胎土もきめ細かになる。

碗（225）

V類（象嵌技法の確立の前段階、沈線で文様を施す段階）

皿の器形は唐津に類似し、高台内部は中央部のみ渦文が明確

皿（248・265・268）

VI類（象嵌技法が確立される時期、1688年以降）

線刻・スタンプに白色又は黒色粘土をうめて、象嵌を施す時期で、器種は碗を中心に皿・徳利・小型碗蓋等多種に及ぶ。高台内部の渦文はきわめてシャープである。

碗（216・217・219・220・221・222・223・227・228）、皿（269・270）、徳利（255）、蓋（256）、小型碗（218・224・240・241・244）

Ⅷ類（高台底部に刻印を施し、渦文が無いもの、釉を施す段階）

象嵌を施し、釉が茶褐色を呈するものも出現する。

碗（230・242）

以上2号堀跡から出土した高田焼の分類を確認できる範囲で試みたが、遺構別・層序別の確認が不可能であったこと、窯本体の調査ではなかったことから、無理な点もあるかと思われる。平山窯時代の高田焼の時期的変遷・編年等試案と受け止めていただければ幸いである。本報告に掲載出来なかった資料を含めて再検討を行い、さらに資料が増加し、窯本体の調査が実施され、さらに高田焼の編年等の研究が進展することを期待して、まとめとしたい。

- (1)園村辰実他「松岡屋敷跡・平山瓦窯跡」熊本県埋蔵文化財調査報告第150集 1995 熊本県教育委員会
- (2)人吉市教育委員会文化課 和田好史氏より、染付の窯、年代等の指導をうけた。また、窯道具の出土等の事実から、窯跡本体の存在、高田焼の器種及び製作技法の変遷、平山窯変遷等貴重な助言をいただいた。
- (3)久留米市教育委員会水原道範氏の御教示による。
- (4)大石 昇「朝妻について」第7回九州近世陶磁器学会資料 1997
- (5)河原 正彦「九州の陶器諸窯－八代－」世界陶磁全集7 小学館 1980

[参考文献]

- 蓑田 勝彦 「幕末の肥後藩窯－八代焼の生産構造－」 熊本近世史論集 熊本近世史の会 1985
- 名和 達夫 「上野焼（あがのやき）に関する資料紹介と考察」 夜豆志呂85号 八代史談会 1987
- 名和 達夫 「八代焼（高田焼）についての諸論」 夜豆志呂89号 八代史談会 1987
- 園村 辰実 「松岡屋敷跡・平山瓦窯跡」 熊本県文化財調査報告 第150集 熊本県教育委員会 1995
- 大石 昇 「朝妻焼について」 第7回九州近世陶磁器学会資料 久留米市教育委員会 1997
- 河原 正彦 「九州の陶器諸窯－八代・小代（岱）－」 世界陶磁全集7 小学館 1993
- 大橋 康二 「百間窯・樋口窯」 肥前地区古窯跡調査報告書 第2集 佐賀県立九州陶磁文化館 1985
- 大橋 康二 「南川原窯ノ辻窯・広瀬向窯」 肥前古窯跡調査報告書 第3集 佐賀県立九州陶磁文化館 1986
- 大橋 康二 「楠木谷窯・小溝上窯」 肥前古窯跡調査報告書 第4集 佐賀県立九州陶磁文化館 1987
- 大橋 康二 「下白川窯・年木谷1号窯」 肥前古窯跡調査報告書 第5集 佐賀県立九州陶磁文化館 1988
- 大橋 康二 「嬉野町吉田1号窯跡」 肥前古窯跡調査報告書 第7集 佐賀県立九州陶磁文化館 1990
- 大橋 康二 「北波多村帆柱窯跡」 肥前古窯跡調査報告書 第12集 佐賀県立九州陶磁文化館 1995
- 和田 好史 「肥後の古陶磁」 城南町歴史資料館講座資料 人吉市教育委員会文化課 1997
- 岩永 哲夫他 「山内石塔群」 宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書 第1集 宮崎県教育委員会 宮崎県文化財研究所 1984
- 「柴田コレクション展(Ⅱ)」〔図版編〕〔資料編〕 佐賀県立陶磁文化館 1991
- 「柴田コレクション展(Ⅲ)」 佐賀県立陶磁文化館 1993
- 「柴田コレクション展(Ⅳ)－古伊万里様式の成立と展開－」 佐賀県立陶磁文化館 1995
- 加藤 唐九郎編 「原色陶器大辞典」 淡交社 1975
- 増村 外喜雄 「やきもの辞典」 光芸出版 1980
- 長坂 一雄 「陶磁用語辞典」 雄山閣 1981

写 真 図 版

図版1



(上. 遺跡近景 東より, 中. 1号弥生土壙, 下. 3号弥生土壙)

図版 2



(上. 4号弥生土壤、中. 5号弥生土壤、下. 1号土坑確認状況)

図版 3



(上. 1号土坑完掘, 中. 2号土坑, 下. 3号土坑)

図版 4



(上. 4号土坑, 中. 5号土坑, 下. 6号土坑)

図版 5



(上. 7号土坑, 中. 8号土坑, 下. 9号土坑)

図版 6



(上. 10号土坑, 中. 11号土坑, 下. 13号土坑)

図版 7



(上. 14号土坑, 中. 15号土坑, 下. 16号土坑)

図版 8



(上. 17号土坑, 中. 18号土坑, 下. 19号土坑)

図版9



(上. 20号土坑, 中. 21号土坑, 下. 22号土坑)

図版10



(上. 23号土坑, 中. 24号土坑, 下. 25号土坑)



(上. 26号土坑, 中. 27号土坑, 下. 28号土坑)

図版12

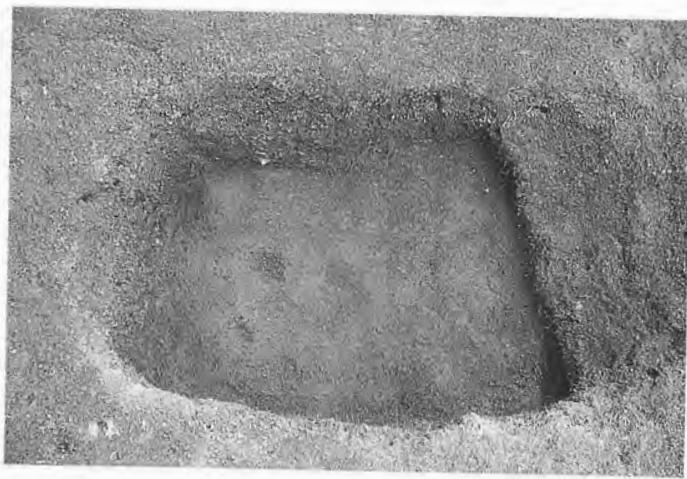
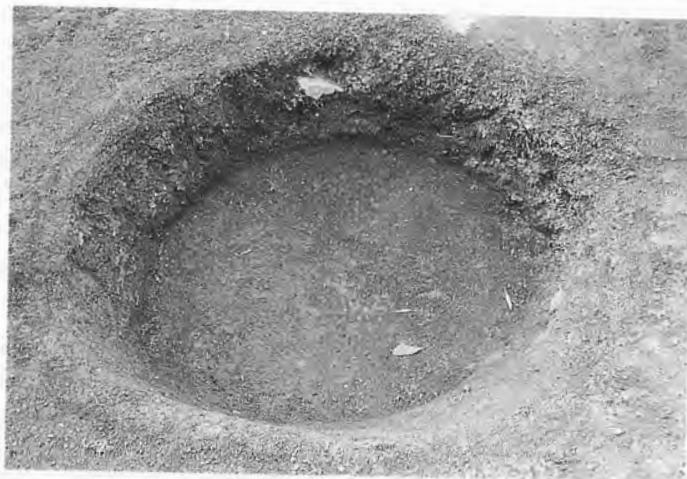


(上. 29号土坑, 中. 30号土坑, 下. 31号土坑)



(上. 32号土坑, 中. 33号土坑, 下. 34号土坑)

図版14



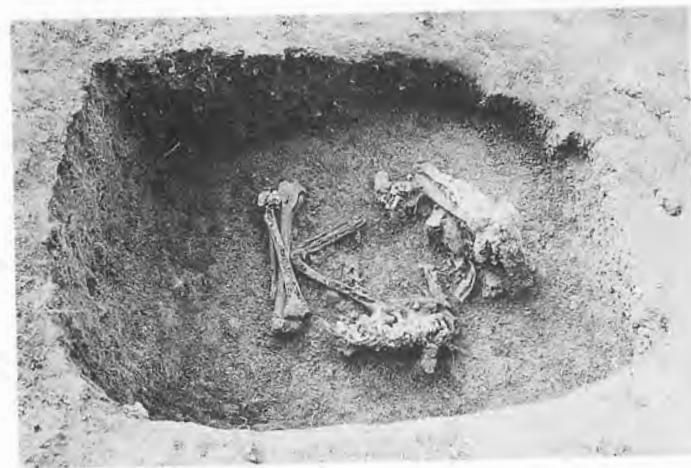
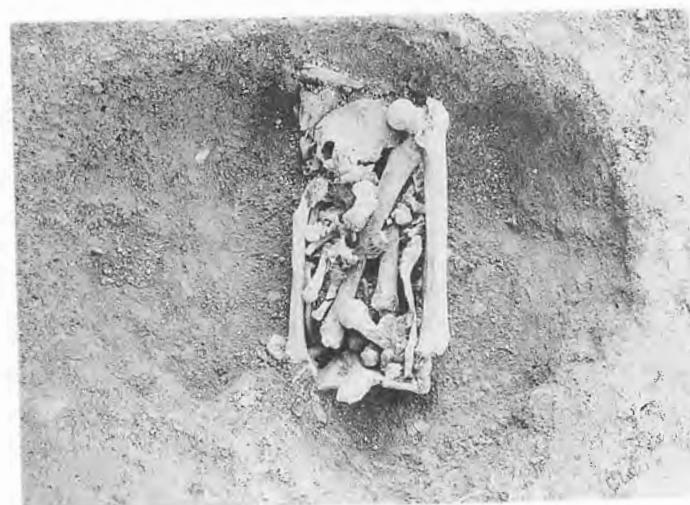
(上. 35号土坑, 中. 36号土坑, 下. 37号土坑)

図版15

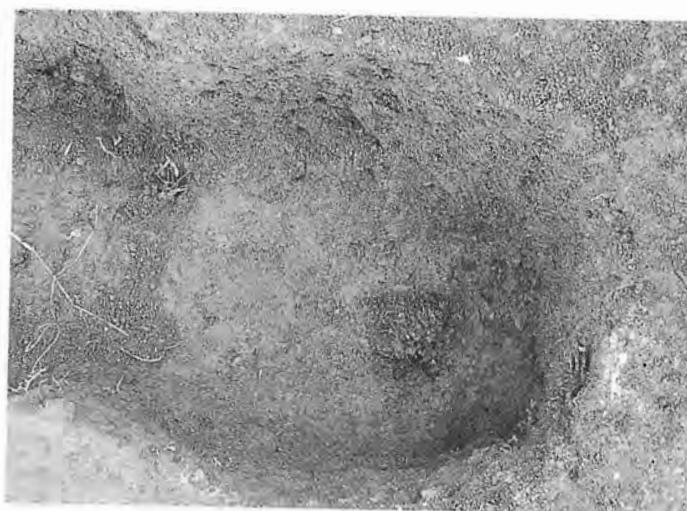


(上. 38号土坑, 中. 39号土坑, 下. 1号土壤墓)

図版16



(上. 2号土壤墓、中. 3号土壤墓、下. 4号土壤墓)



(上. 5号土壙墓, 中. 6号土壙墓, 下. 7号土壙墓)

図版18



(上. 8号土壙墓, 中. 9号土壙墓, 下. 10号土壙墓)



(上. 11号土壙墓, 中. 12号土壙墓, 下. 13号土壙墓)

図版20

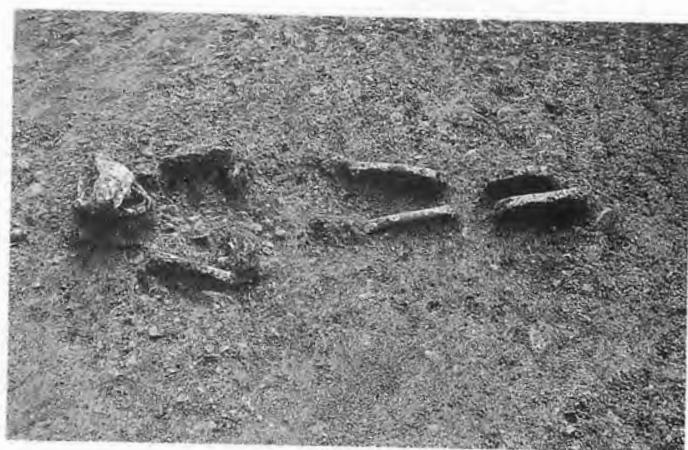


(上. 14号土壙墓, 中. 15号土壙墓, 下. 16号土壙墓)



(上. 17号土壙墓, 中. 18号土壙墓, 下. 20号土壙墓)

図版22



(上. 21号土壙墓, 中. 22号土壙墓, 下. 23号土壙墓)



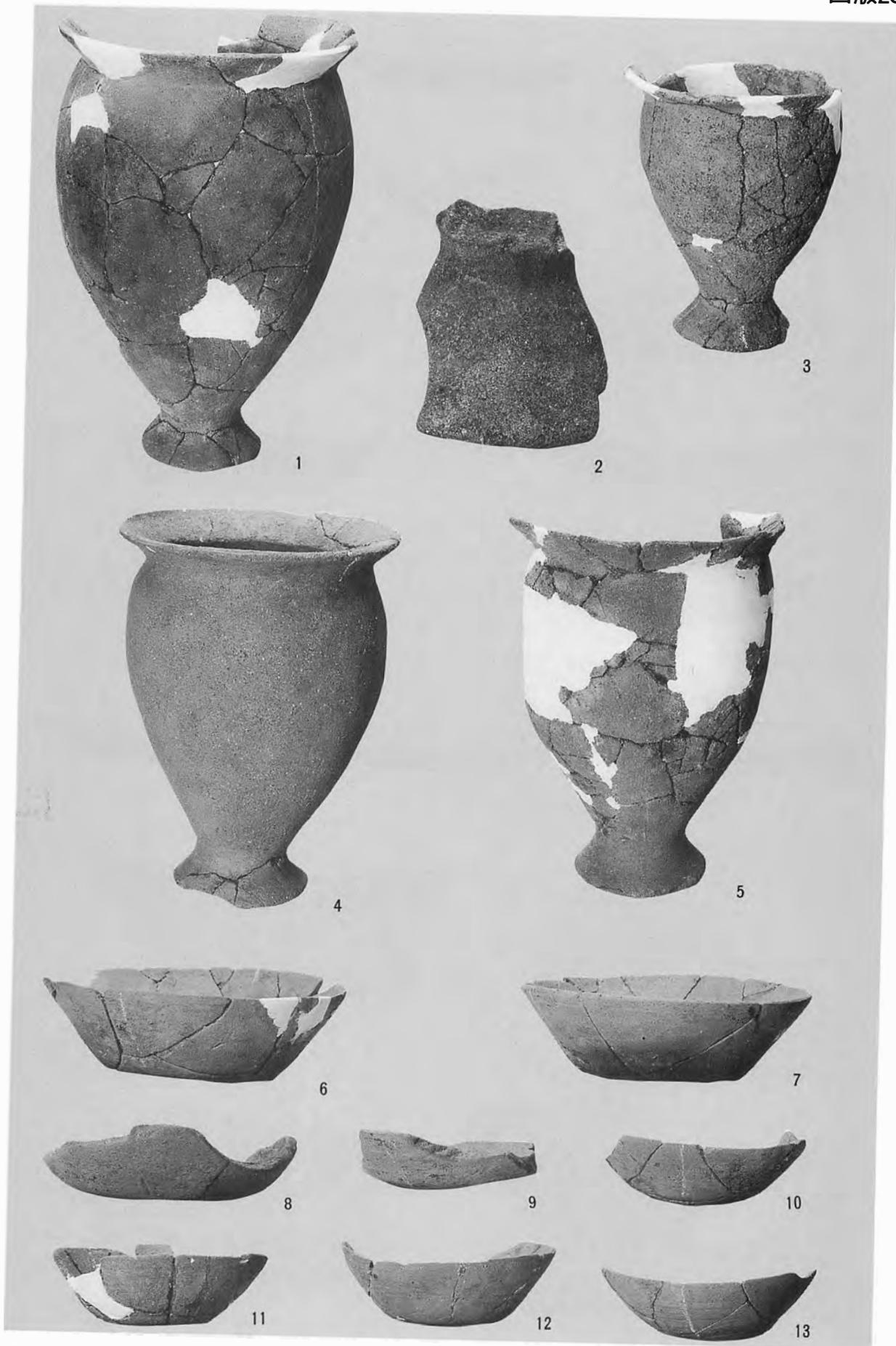
(上. 1号堀跡, 中. 2号堀跡北西断面, 下. 2号堀跡中央断面)

図版24



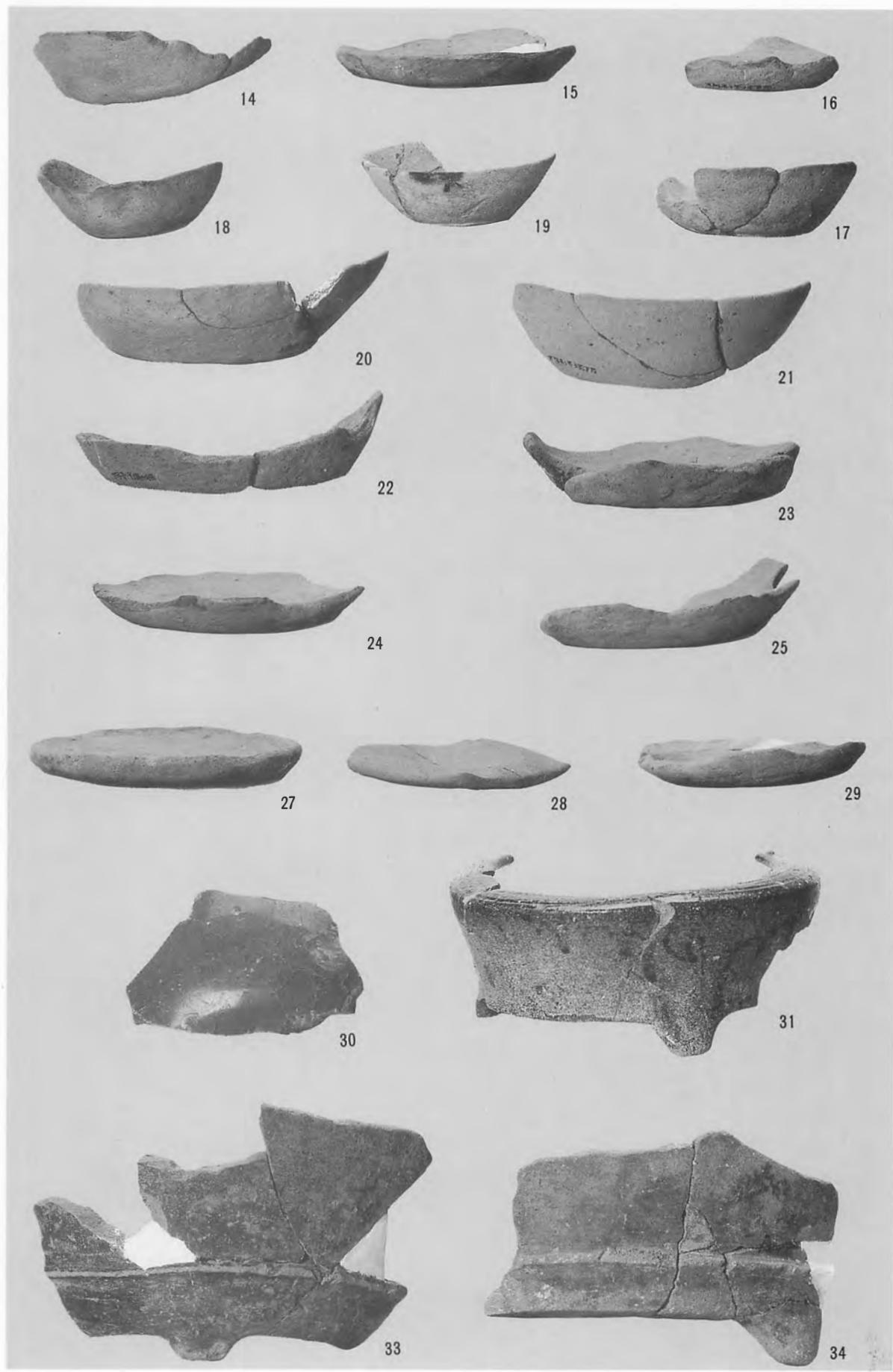
(上. 2号堀跡及び土壙断面, 中. 発掘調査風景, 下. 人骨実測風景)

図版25

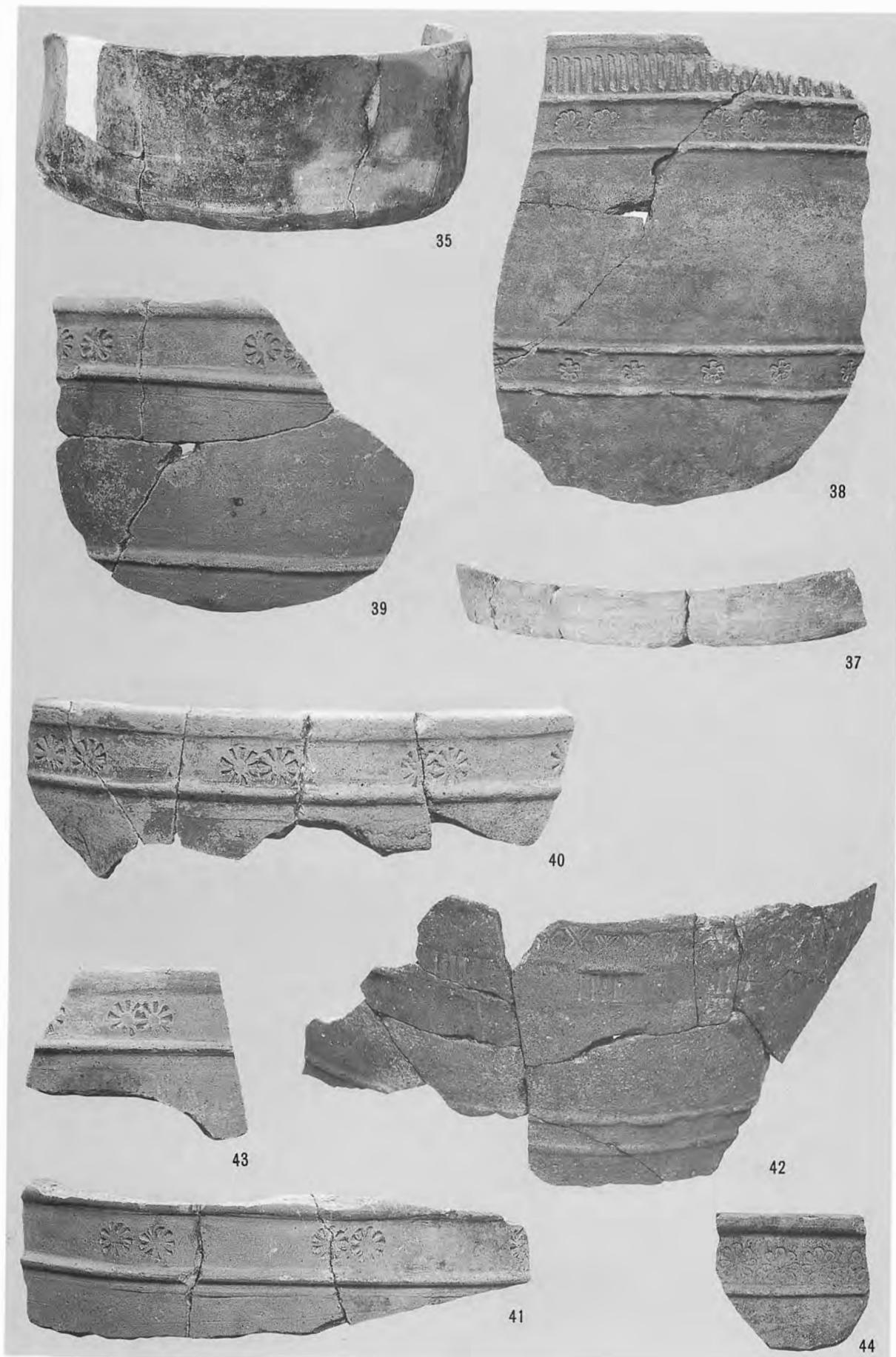


万年寺遺跡出土遺物 No. 1 ~No. 13

図版26

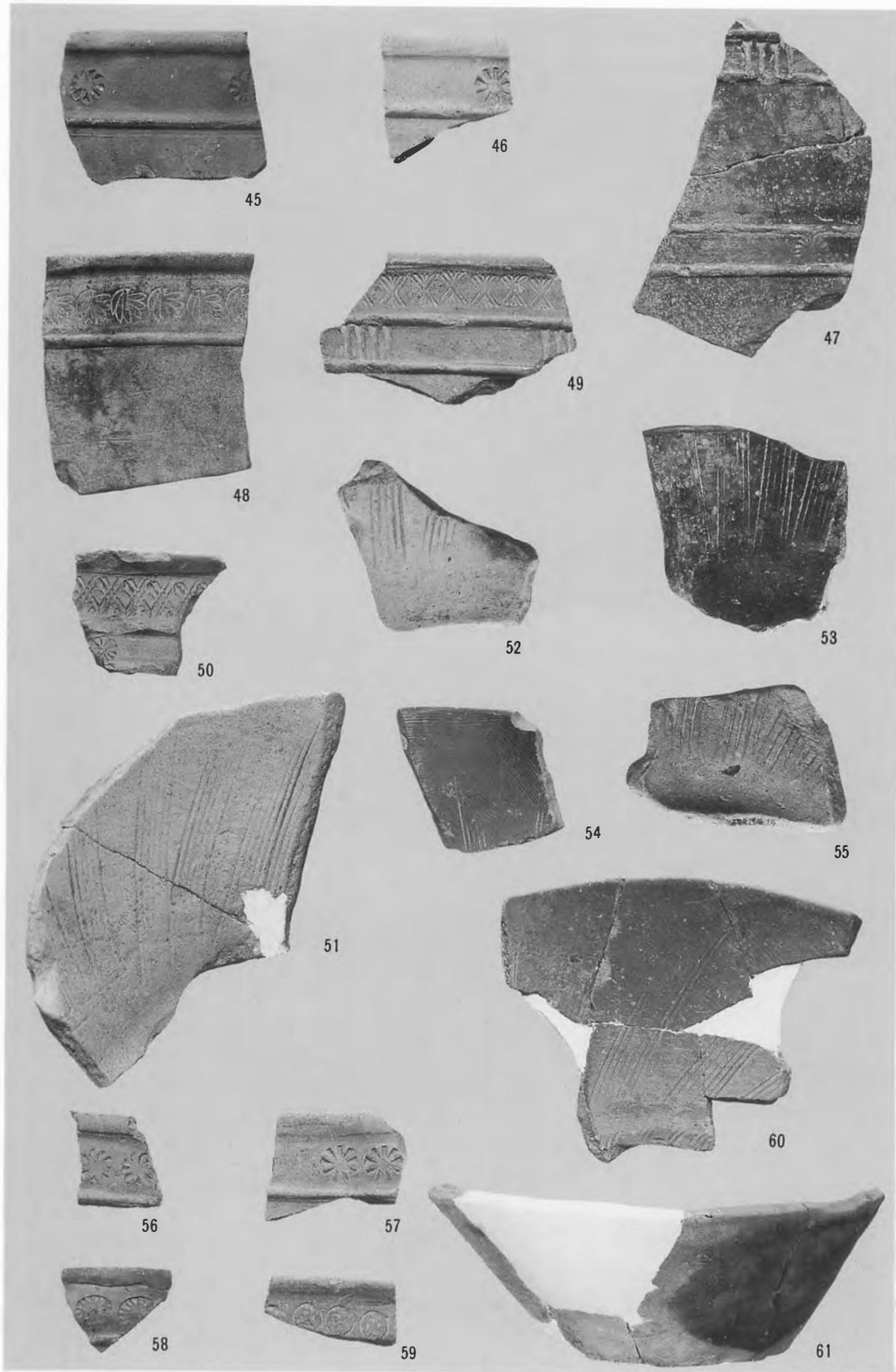


万年寺遺跡出土遺物 No.14~No.34

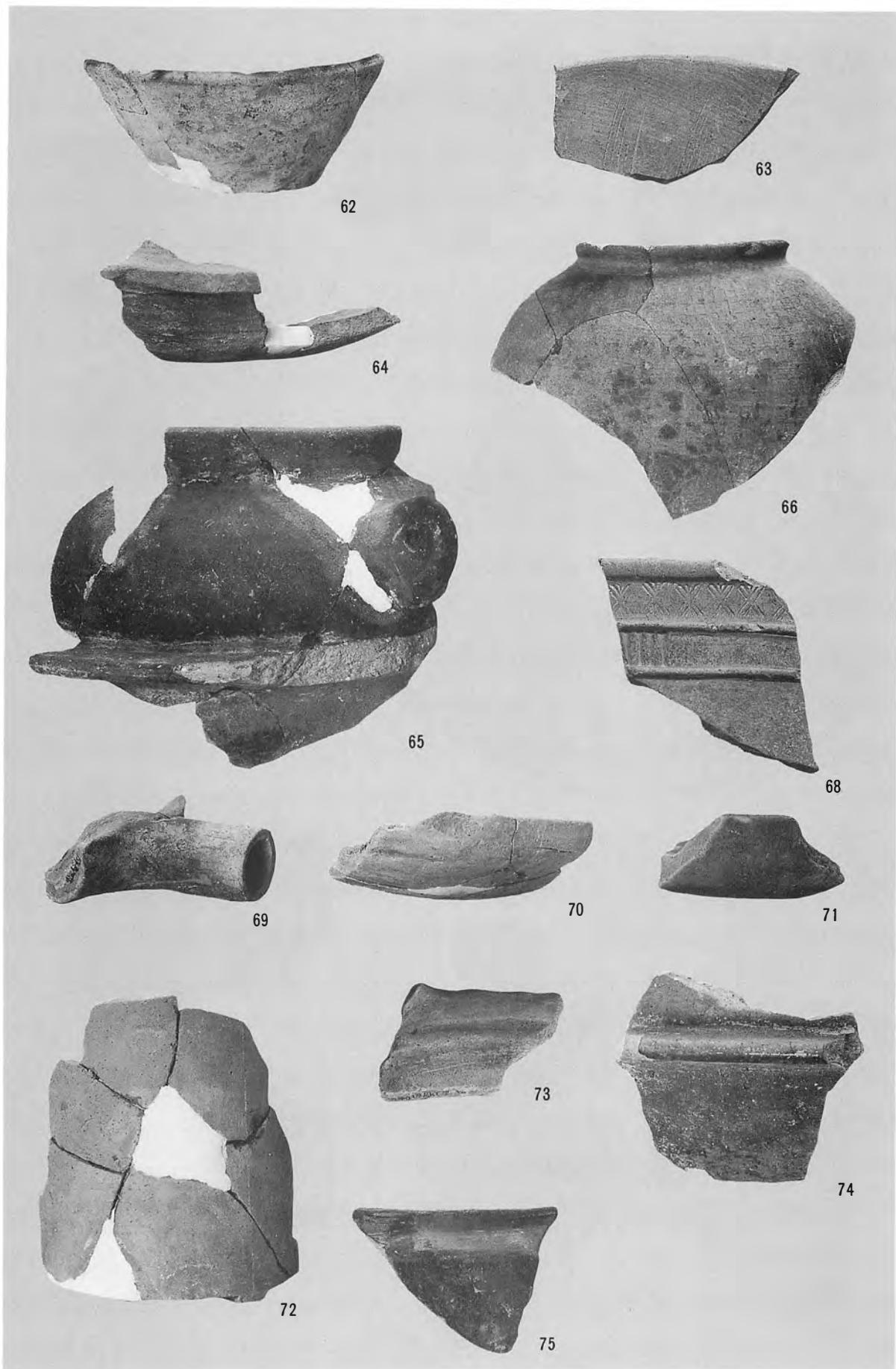


万年寺遺跡出土遺物 No. 35～No. 44

図版28

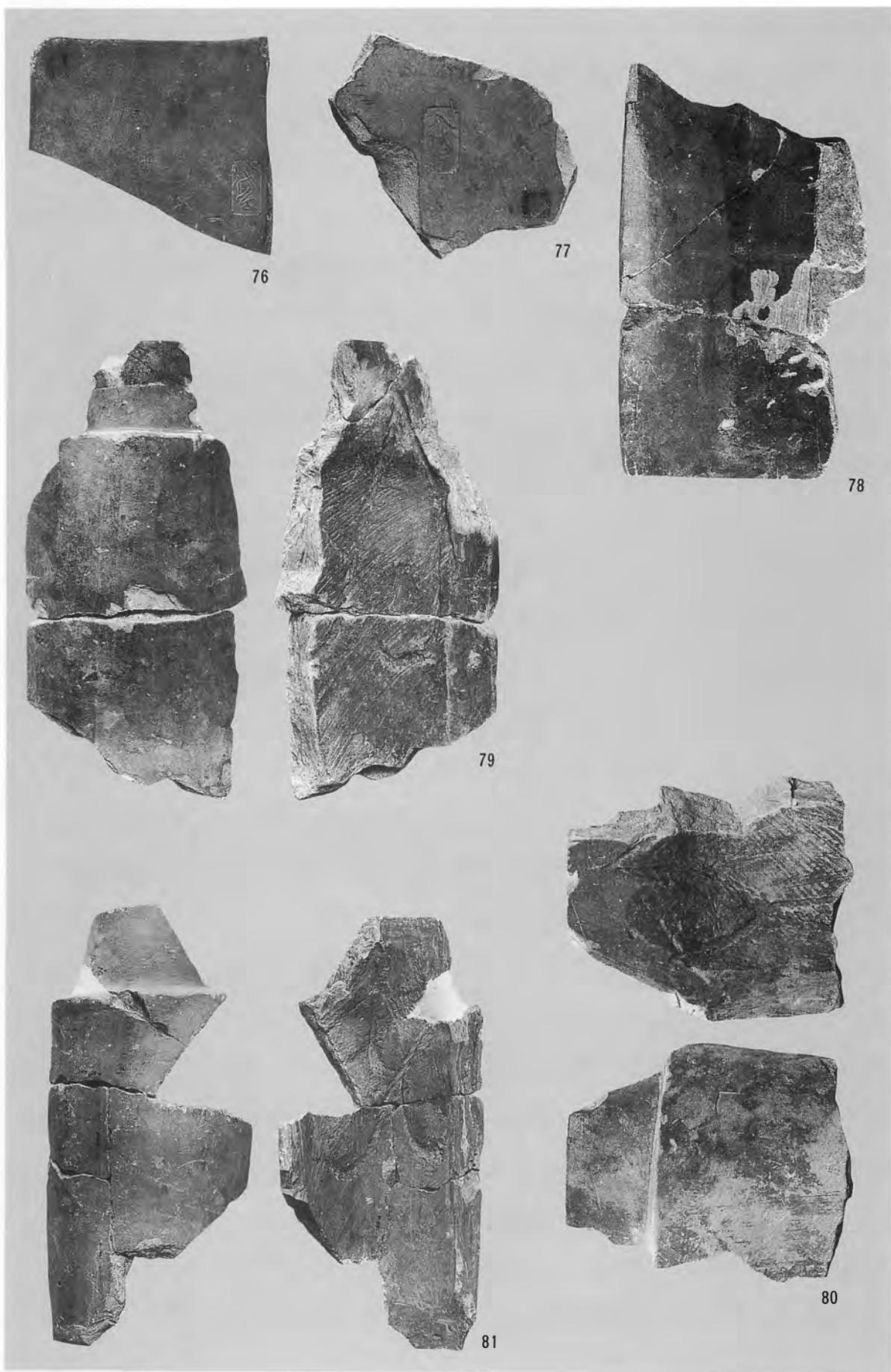


万年寺遺跡出土遺物 No. 45～No. 61

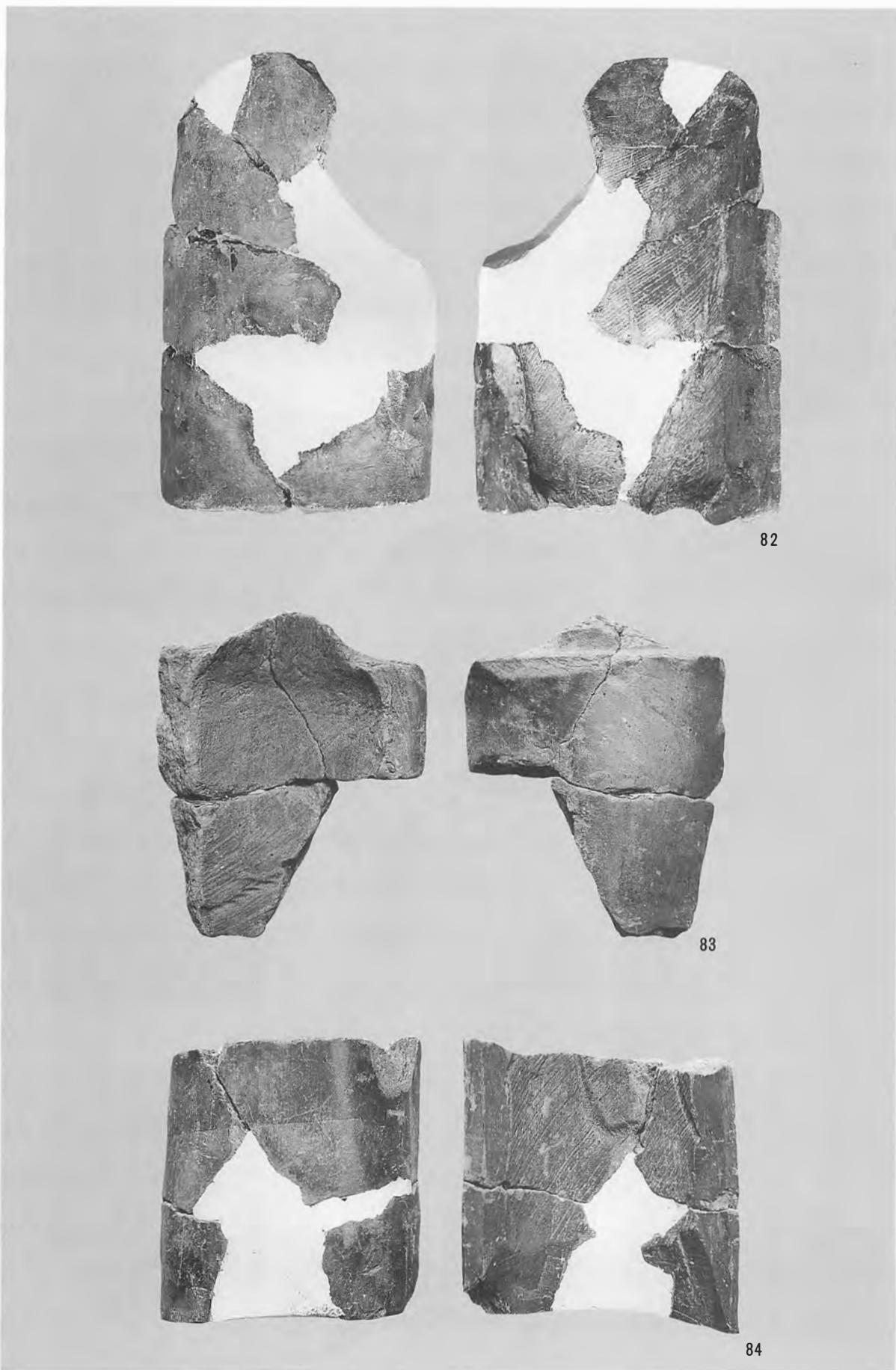


万年寺遺跡出土遺物 No. 62～No. 75

図版30

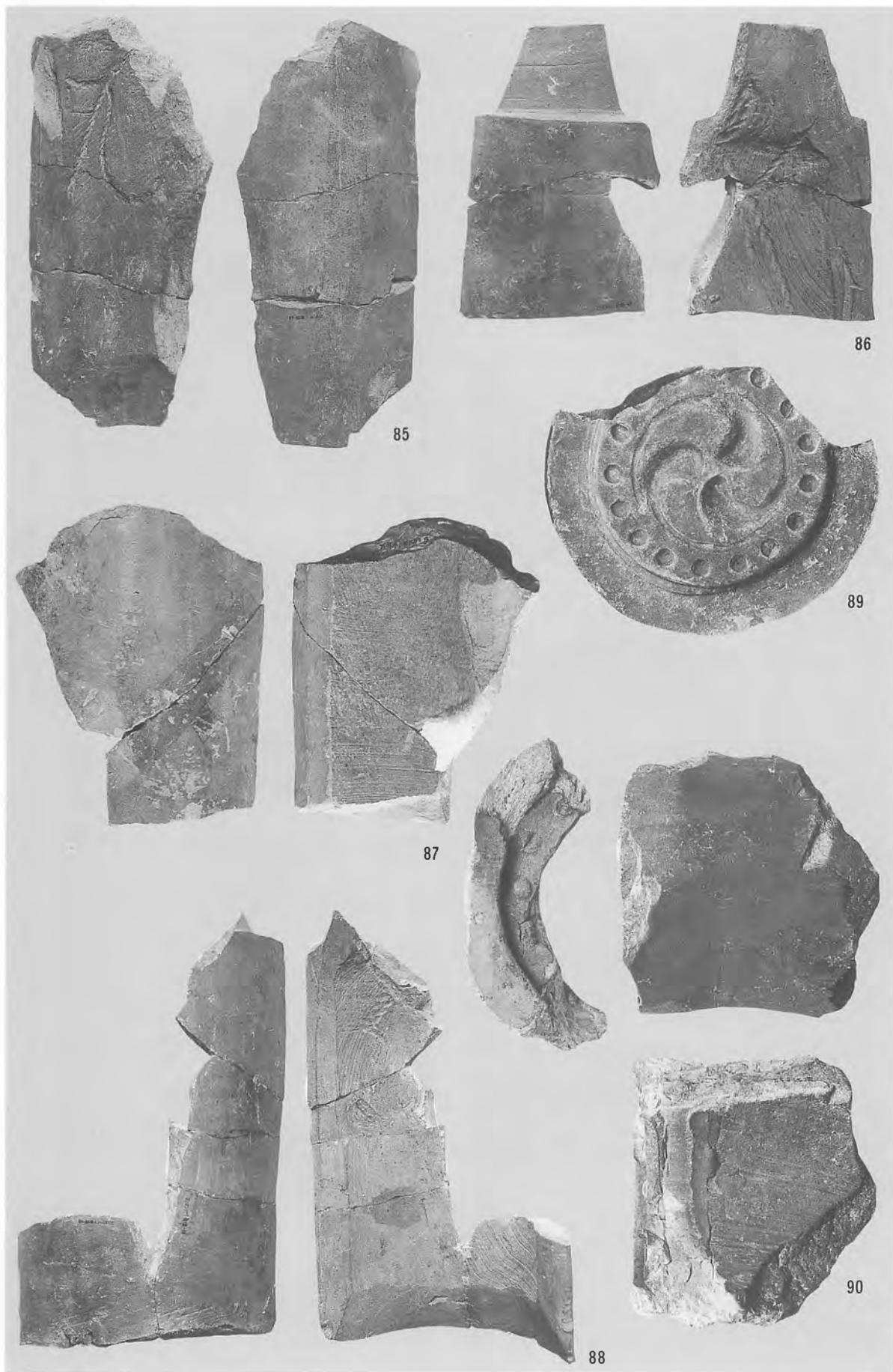


万年寺遺跡出土遺物 No. 76～No. 81



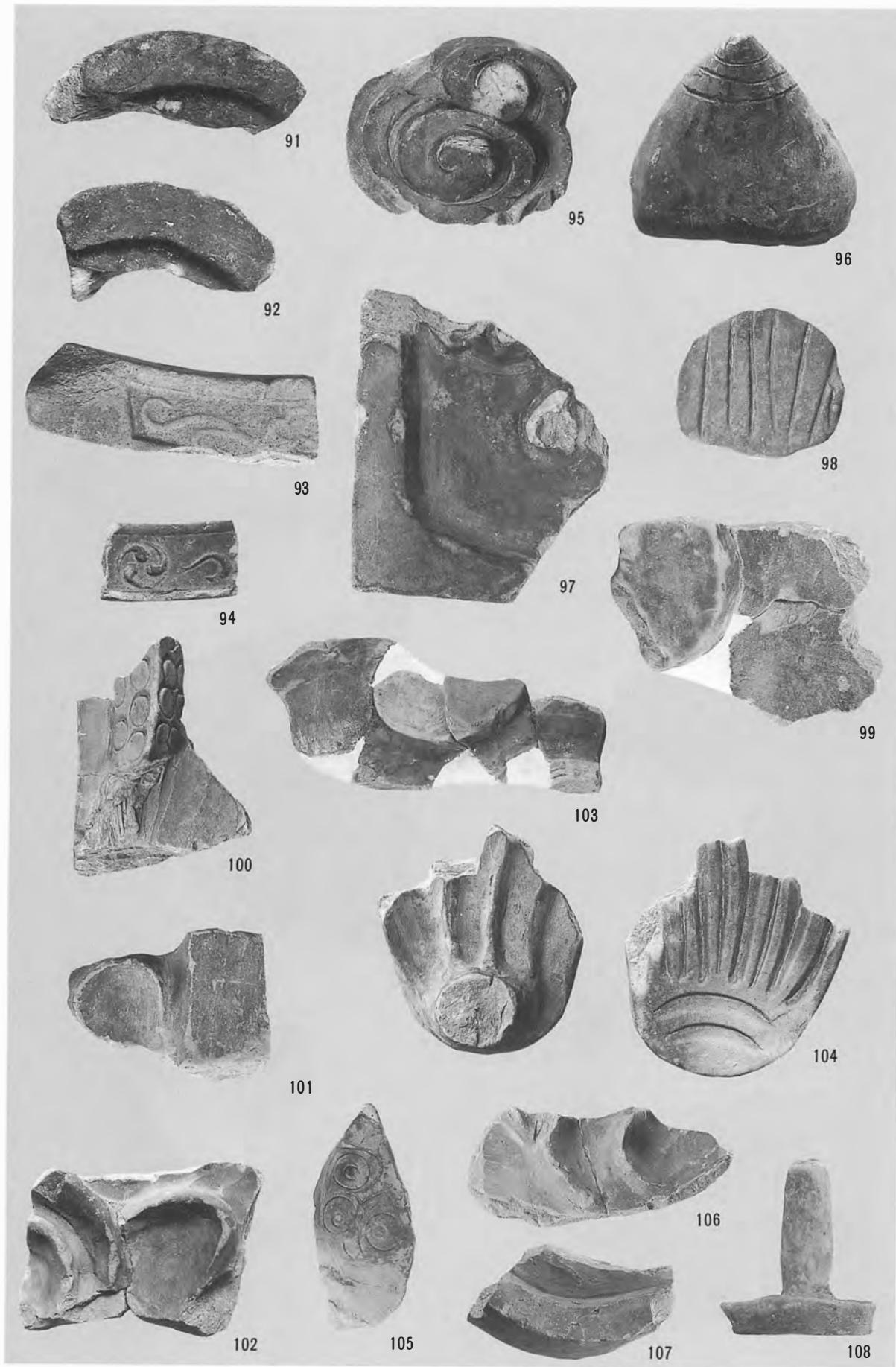
万年寺遺跡出土遺物 No. 82～No. 84

図版32



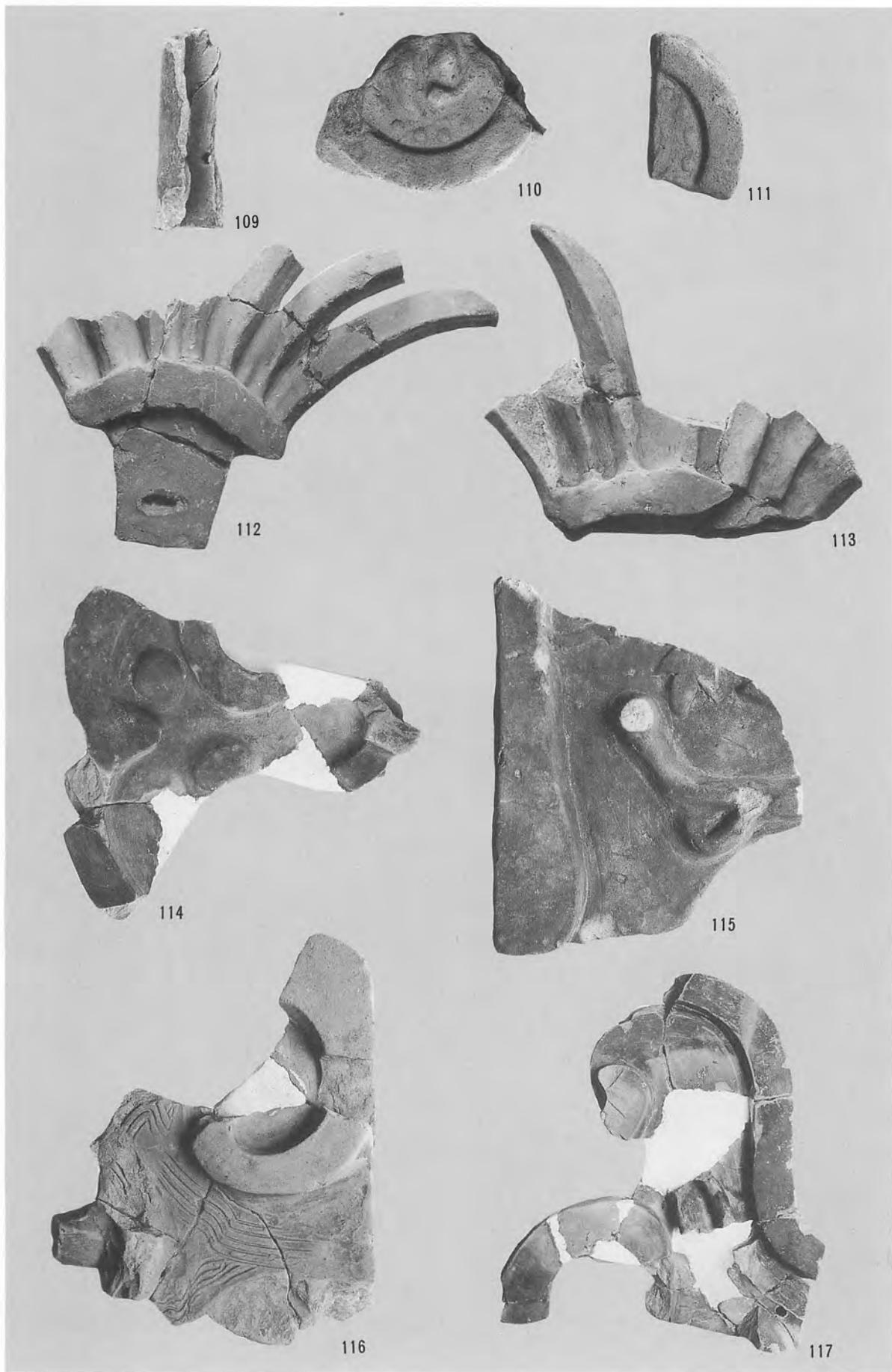
万年寺遺跡出土遺物 No. 85～No. 90

図版33



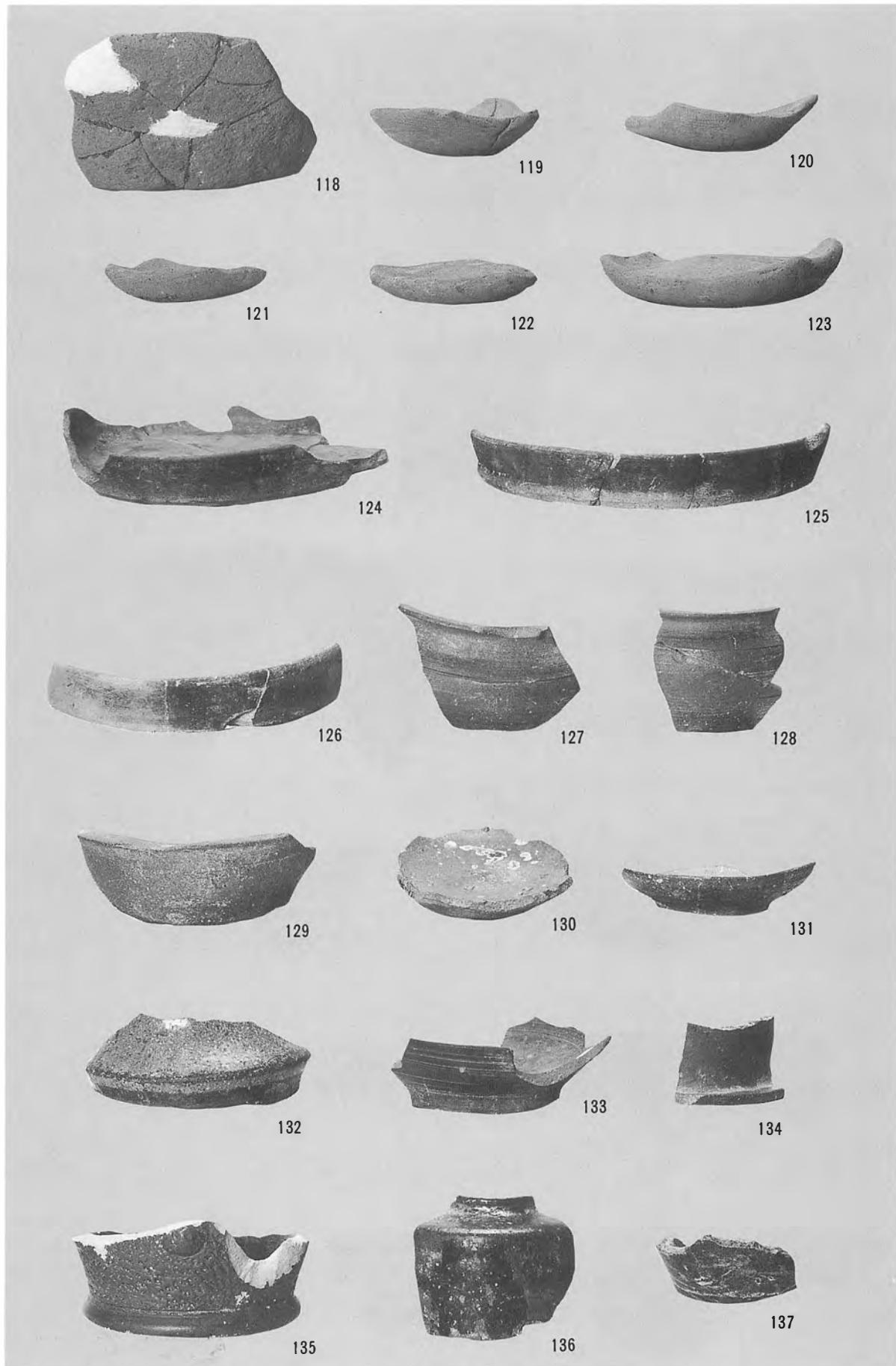
万年寺遺跡出土遺物 No. 91～No. 108

図版34



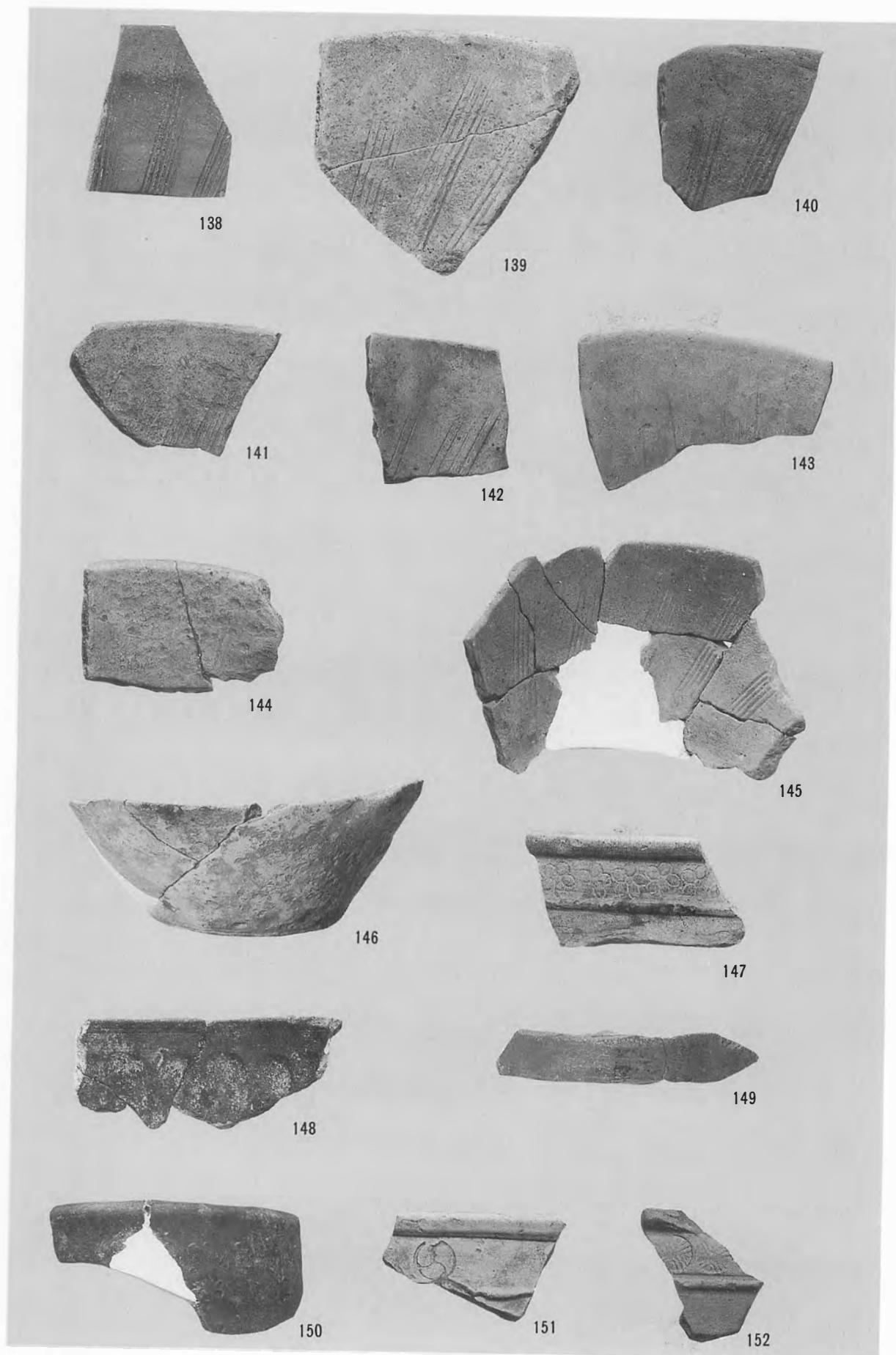
万年寺遺跡出土遺物 No. 109~No. 117

図版35

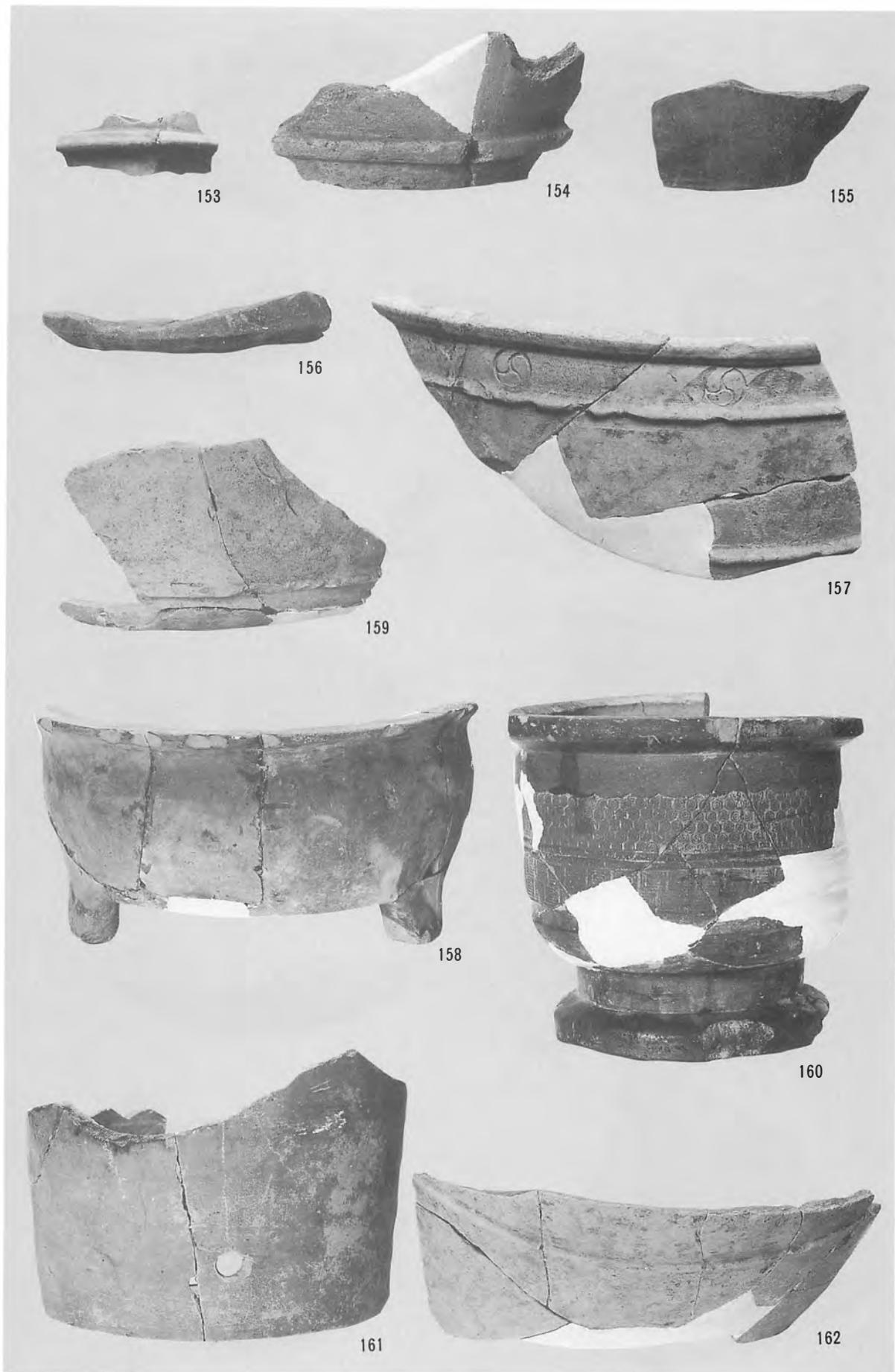


万年寺遺跡出土遺物 No. 118~No. 137

図版36

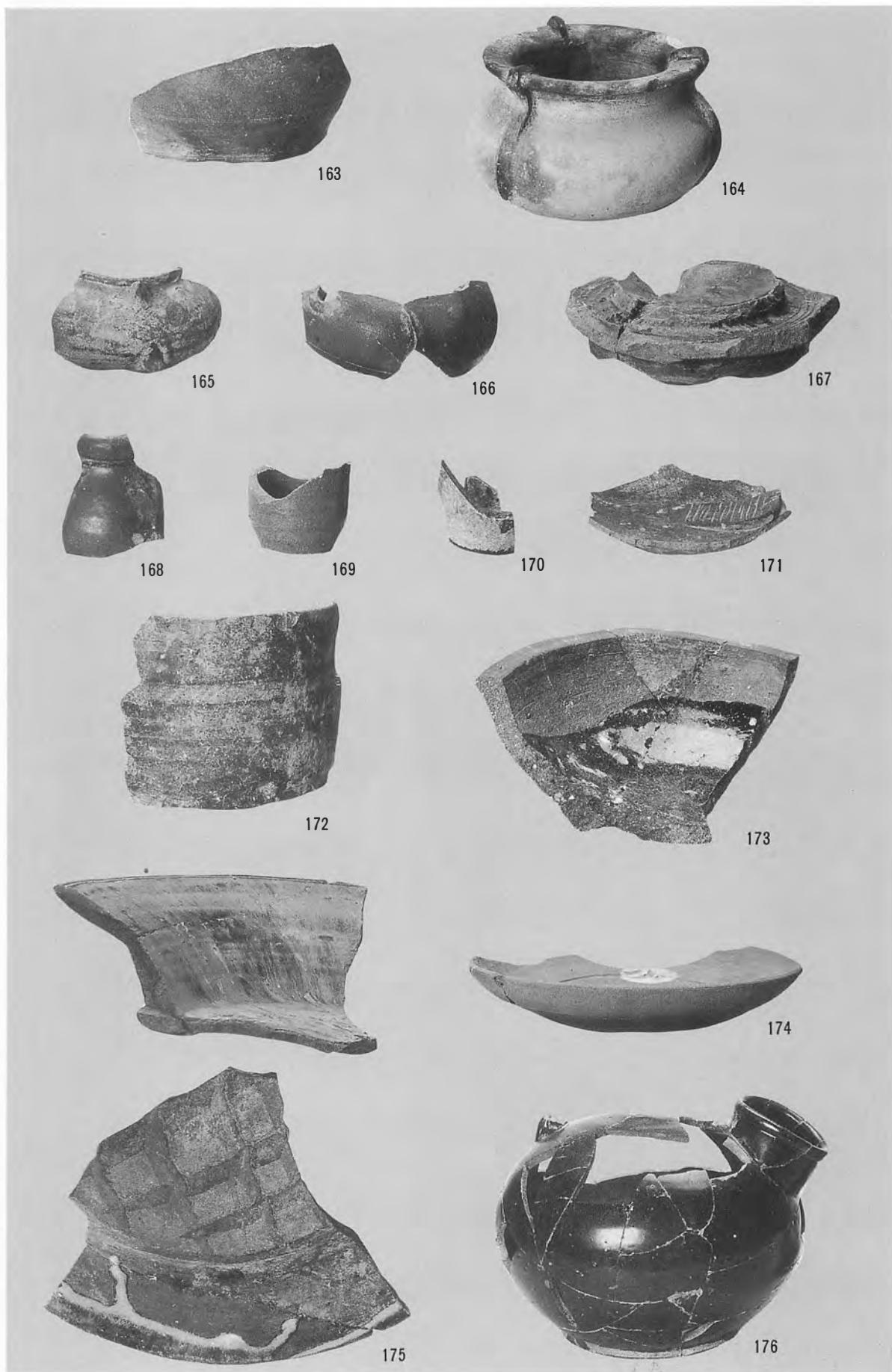


万年寺遺跡出土遺物 No. 138～No. 152



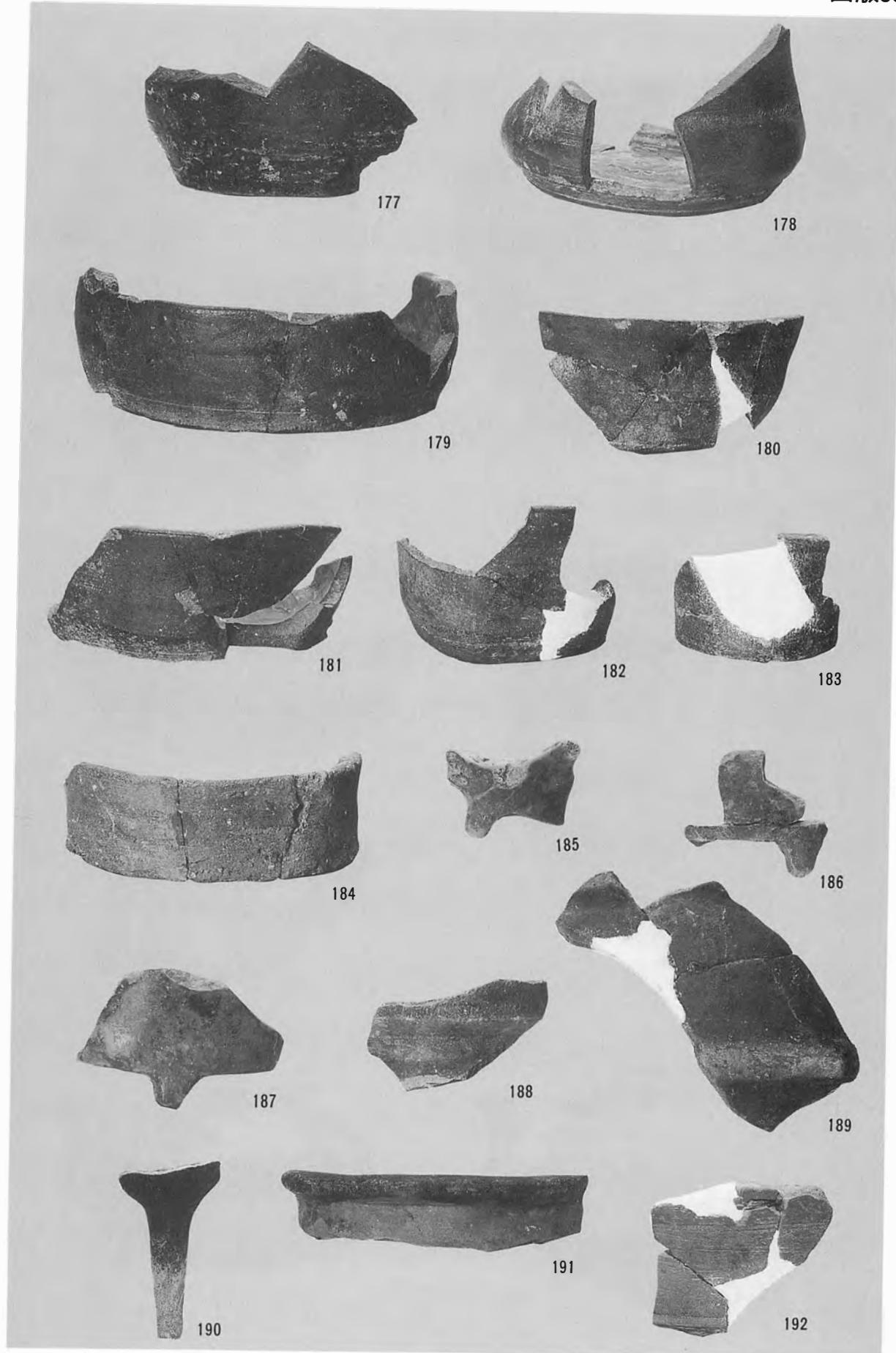
万年寺遺跡出土遺物 No. 153～No. 162

図版38



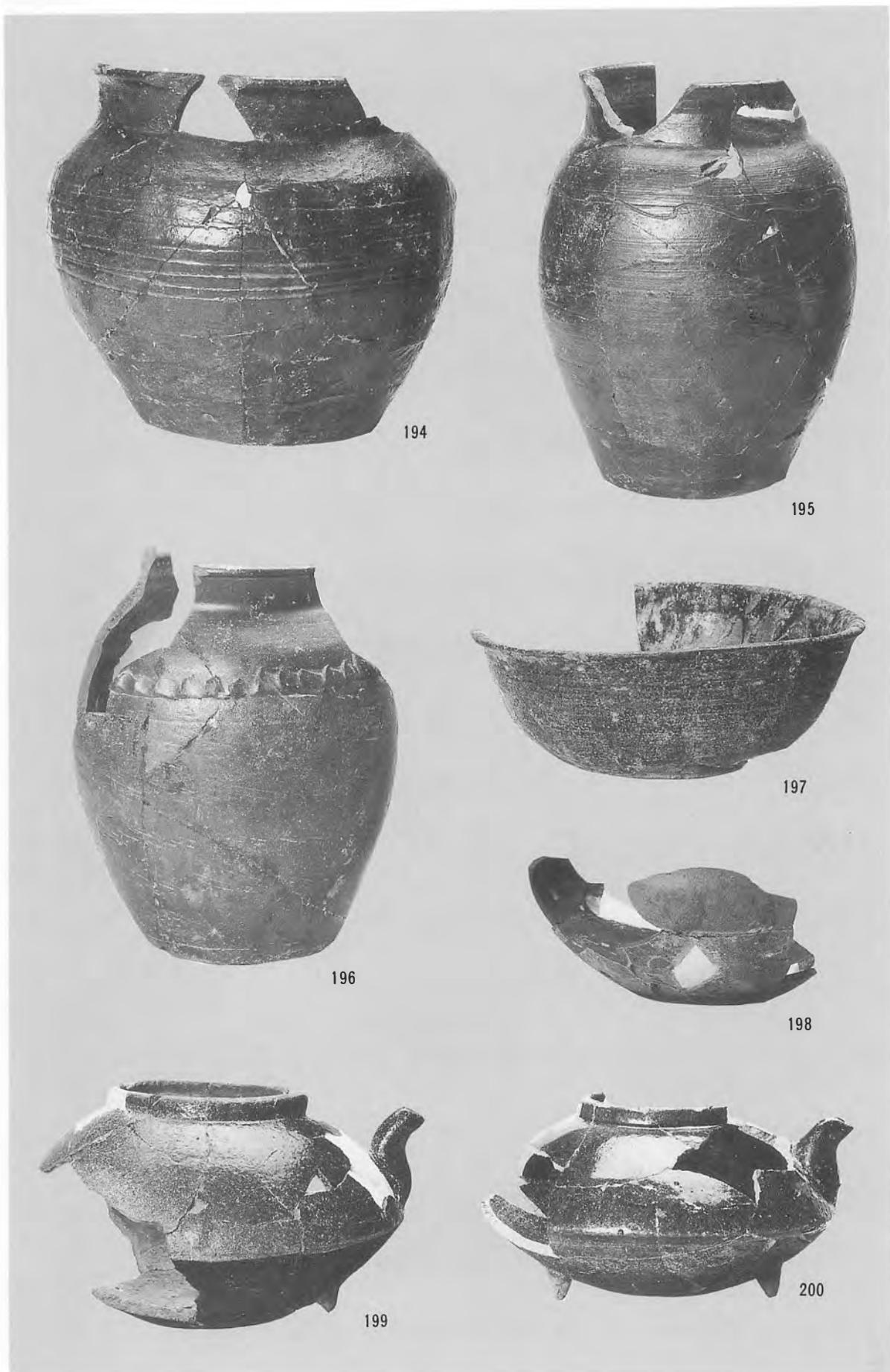
万年寺遺跡出土遺物 No. 163～No. 176

図版39



万年寺遺跡出土遺物 No.177～No.192

図版40



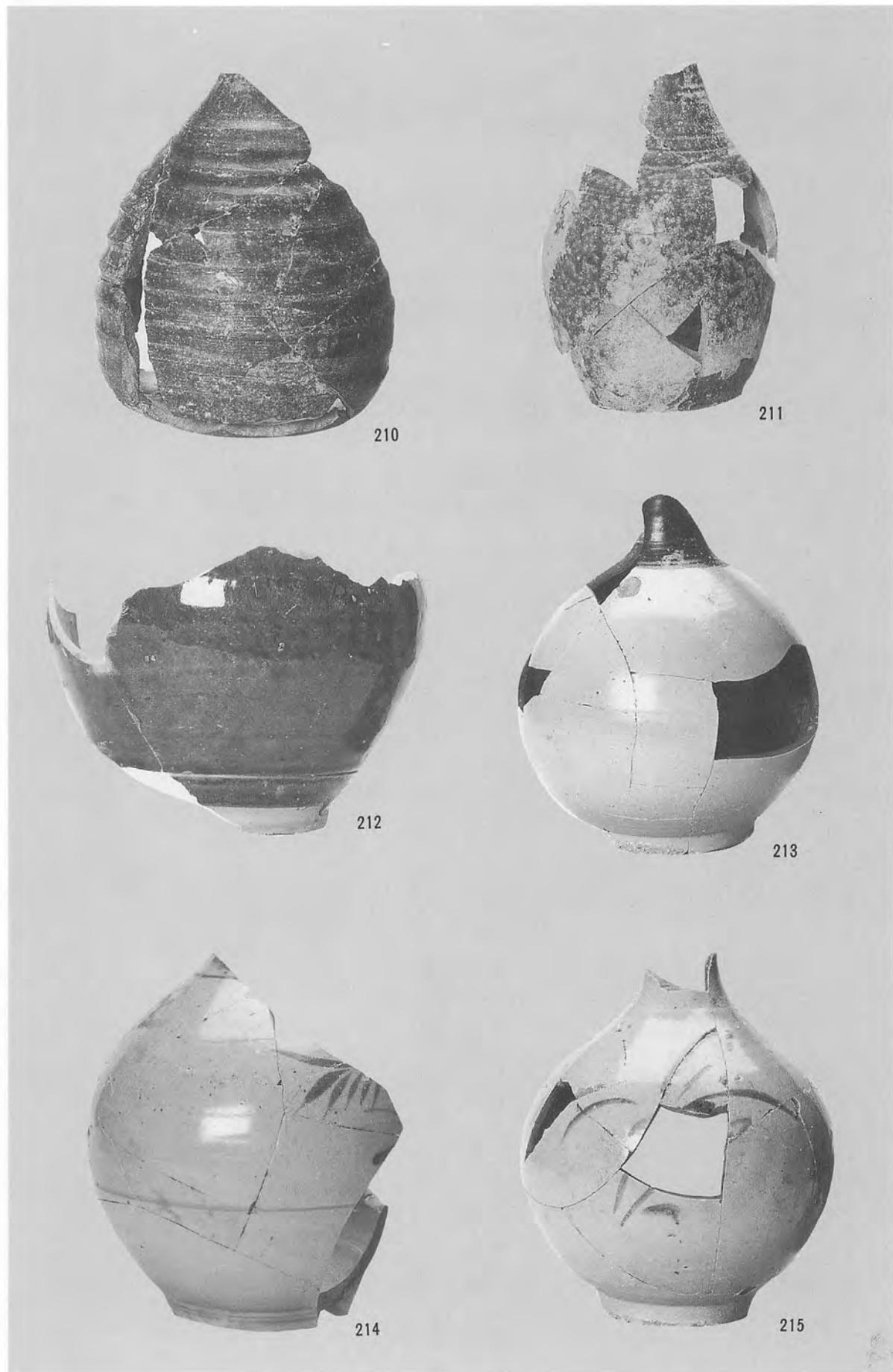
万年寺遺跡出土遺物 No. 194～No. 200

図版41

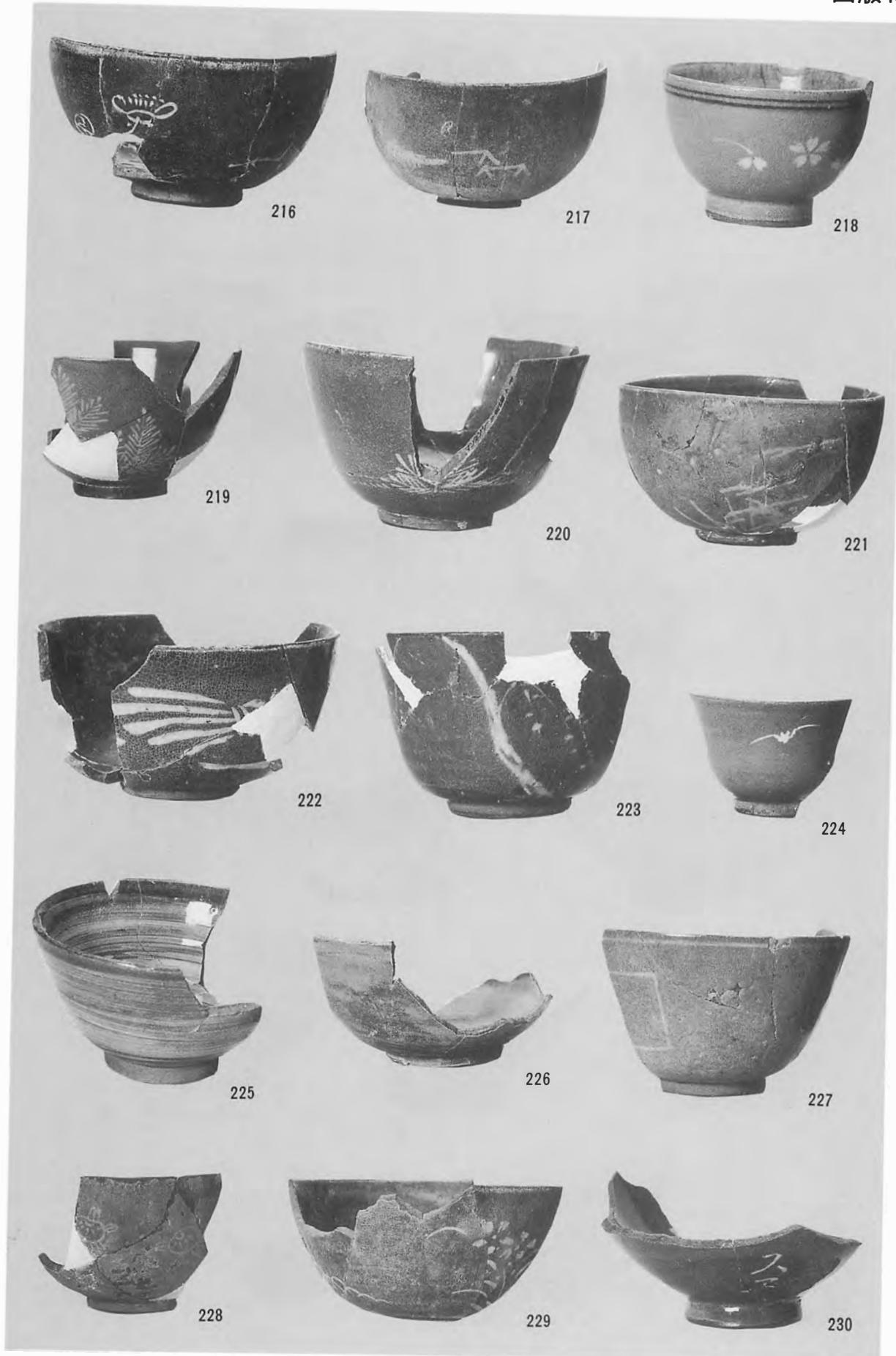


万年寺遺跡出土遺物 No.201~No. 209

図版42



万年寺遺跡出土遺物 No.210～No.215



万年寺遺跡出土遺物 No. 216～No. 230

図版44



万年寺遺跡出土遺物 No. 231～No. 247

図版45



万年寺遺跡出土遺物 No. 248～No. 262

図版46



万年寺遺跡出土遺物 No. 263～No. 276



万年寺遺跡出土遺物 No. 277～No. 288

図版48



万年寺遺跡出土遺物 No. 289～No. 300

図版49

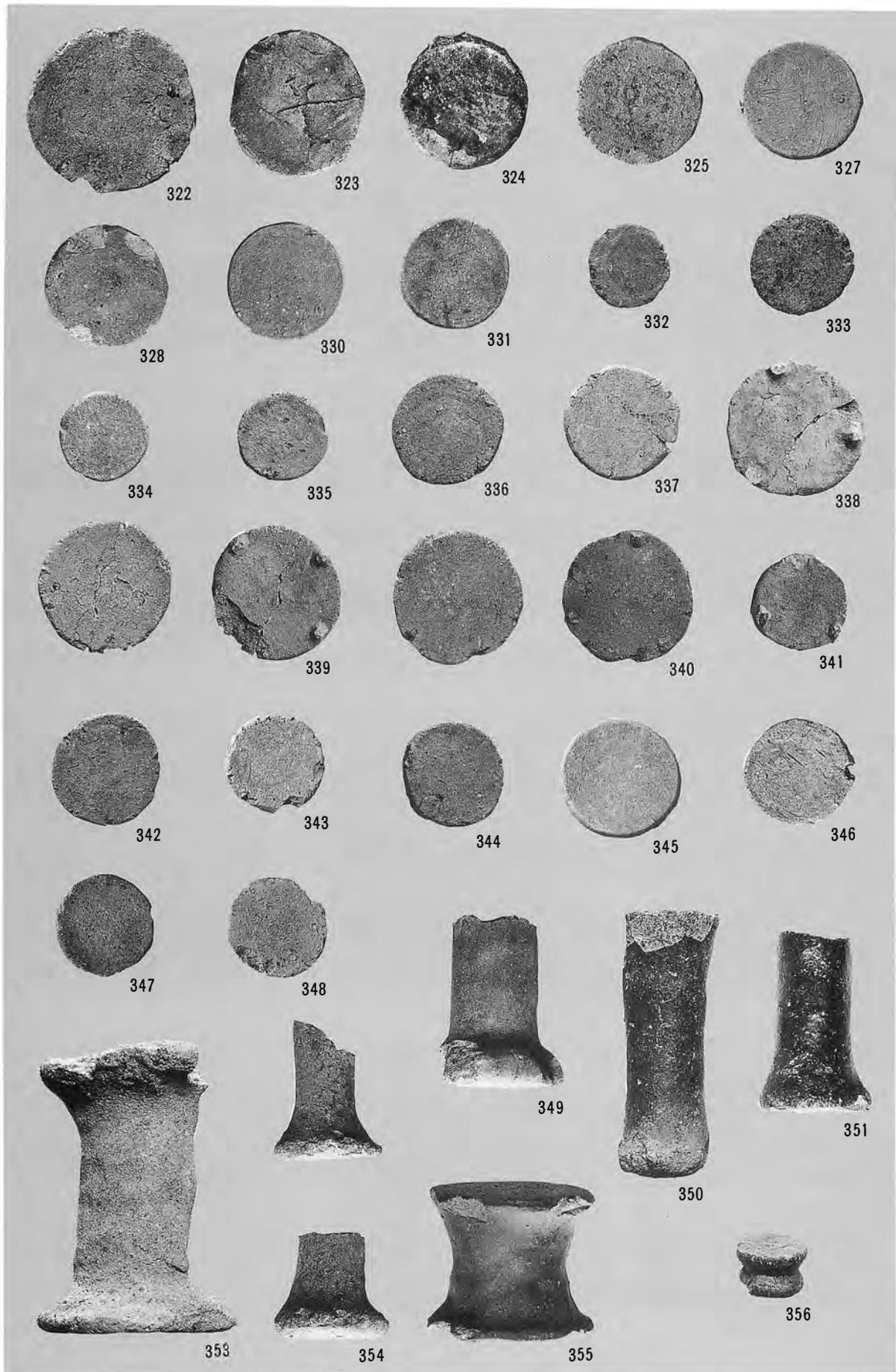


万年寺遺跡出土遺物 No.301～No.309

図版50

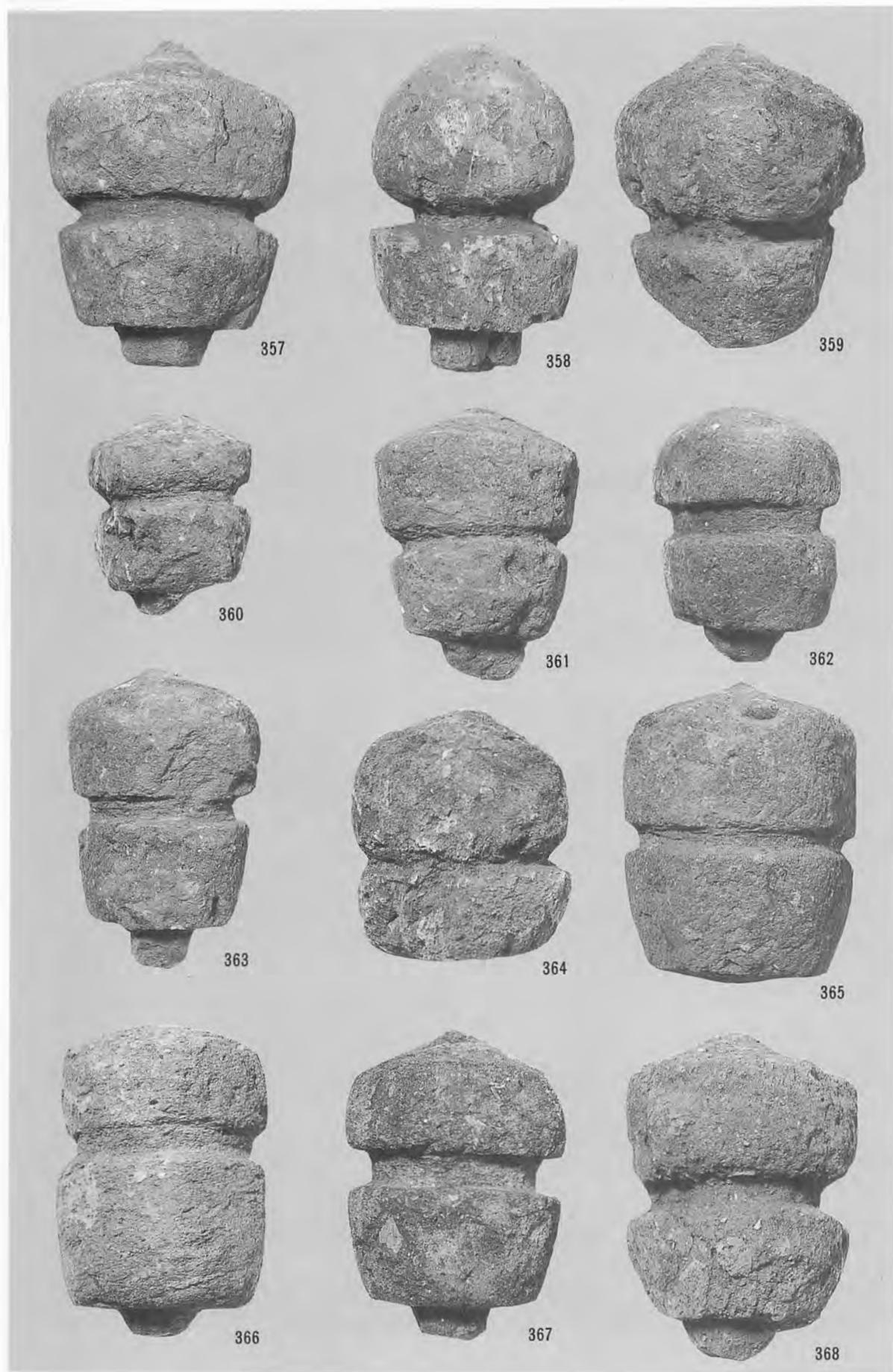


万年寺遺跡出土遺物 No. 310～No. 321



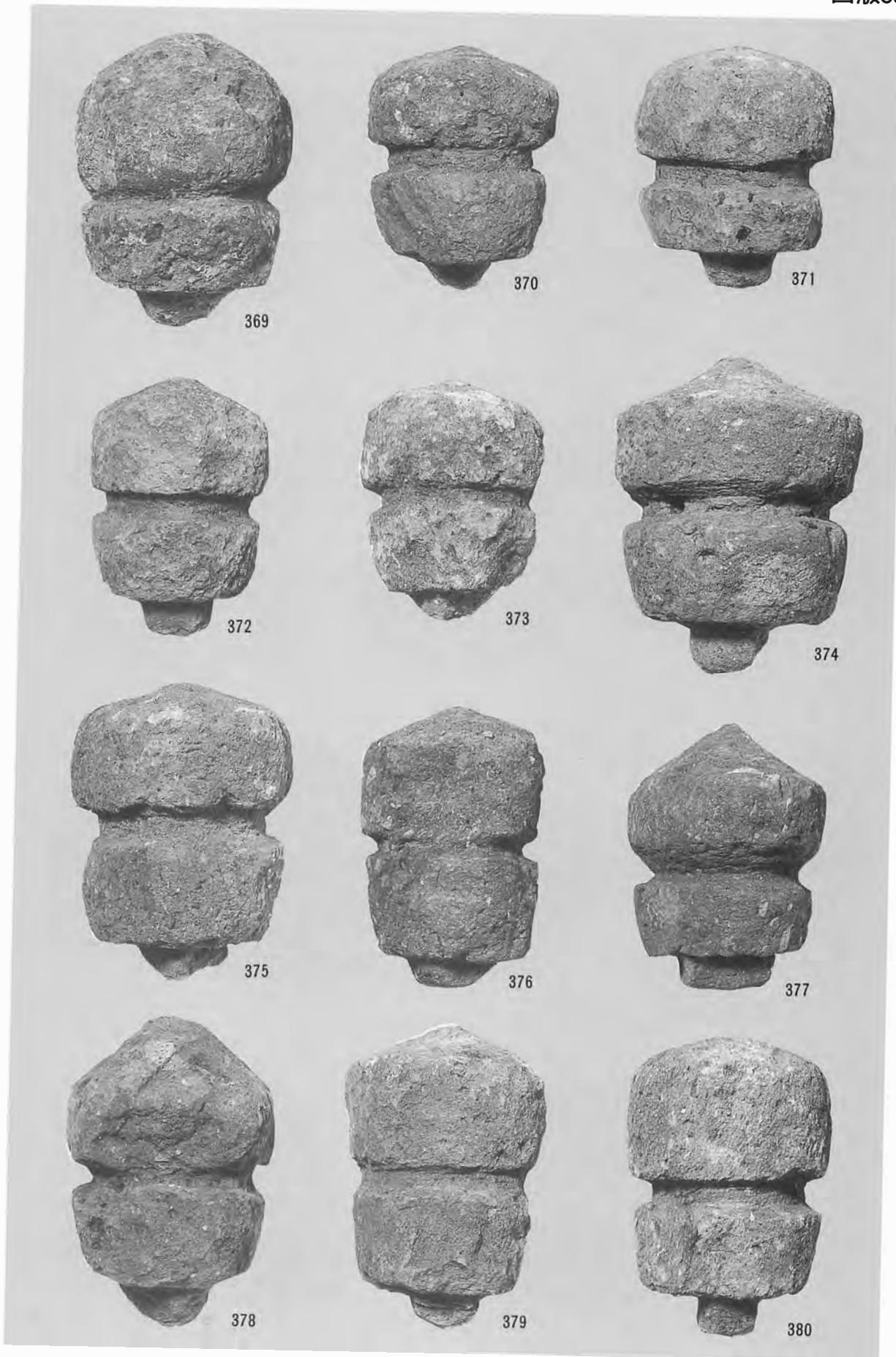
万年寺遺跡出土遺物 No. 322～No. 356

図版52



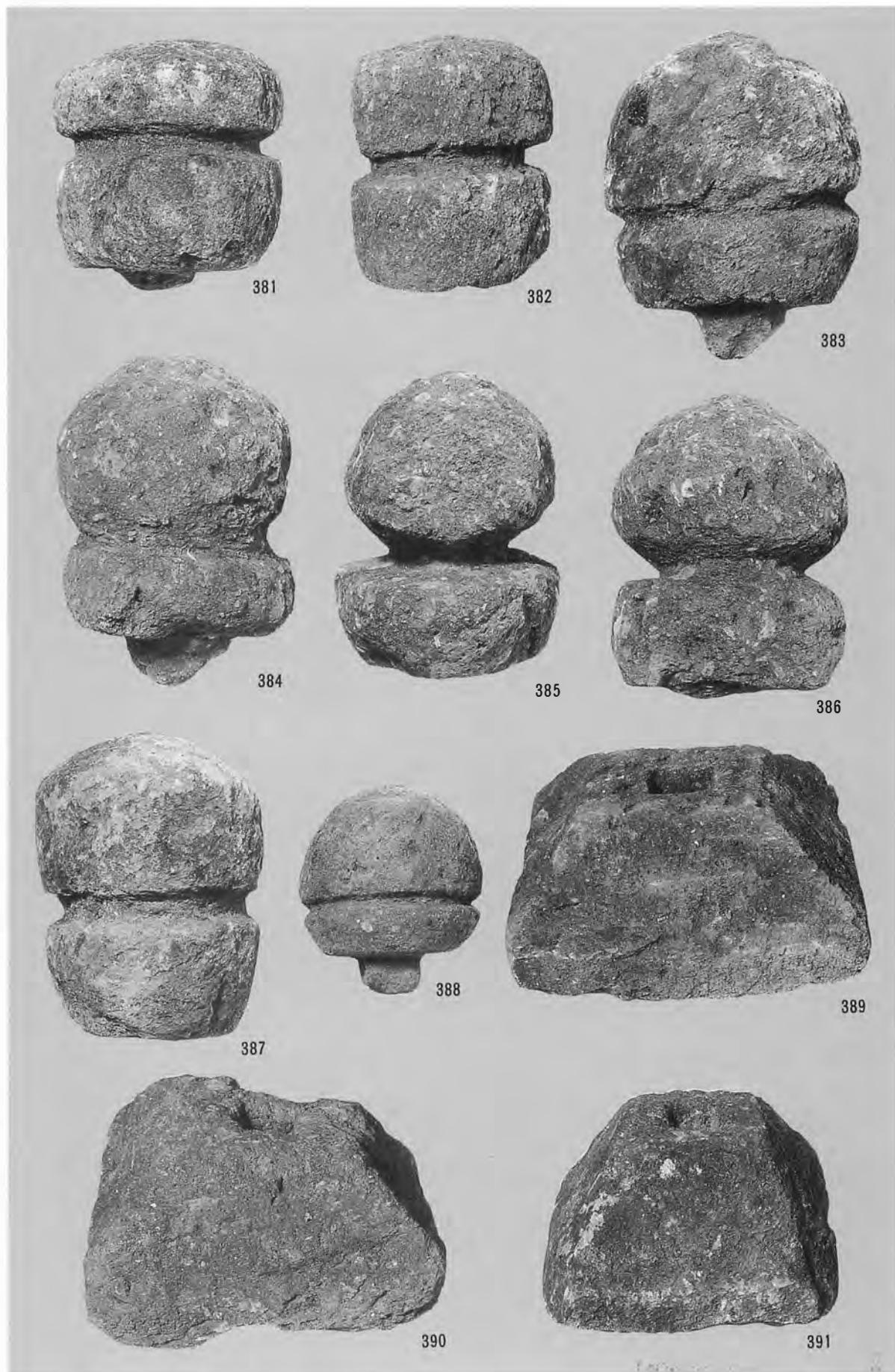
万年寺遺跡出土遺物 No. 357～No. 368

図版53

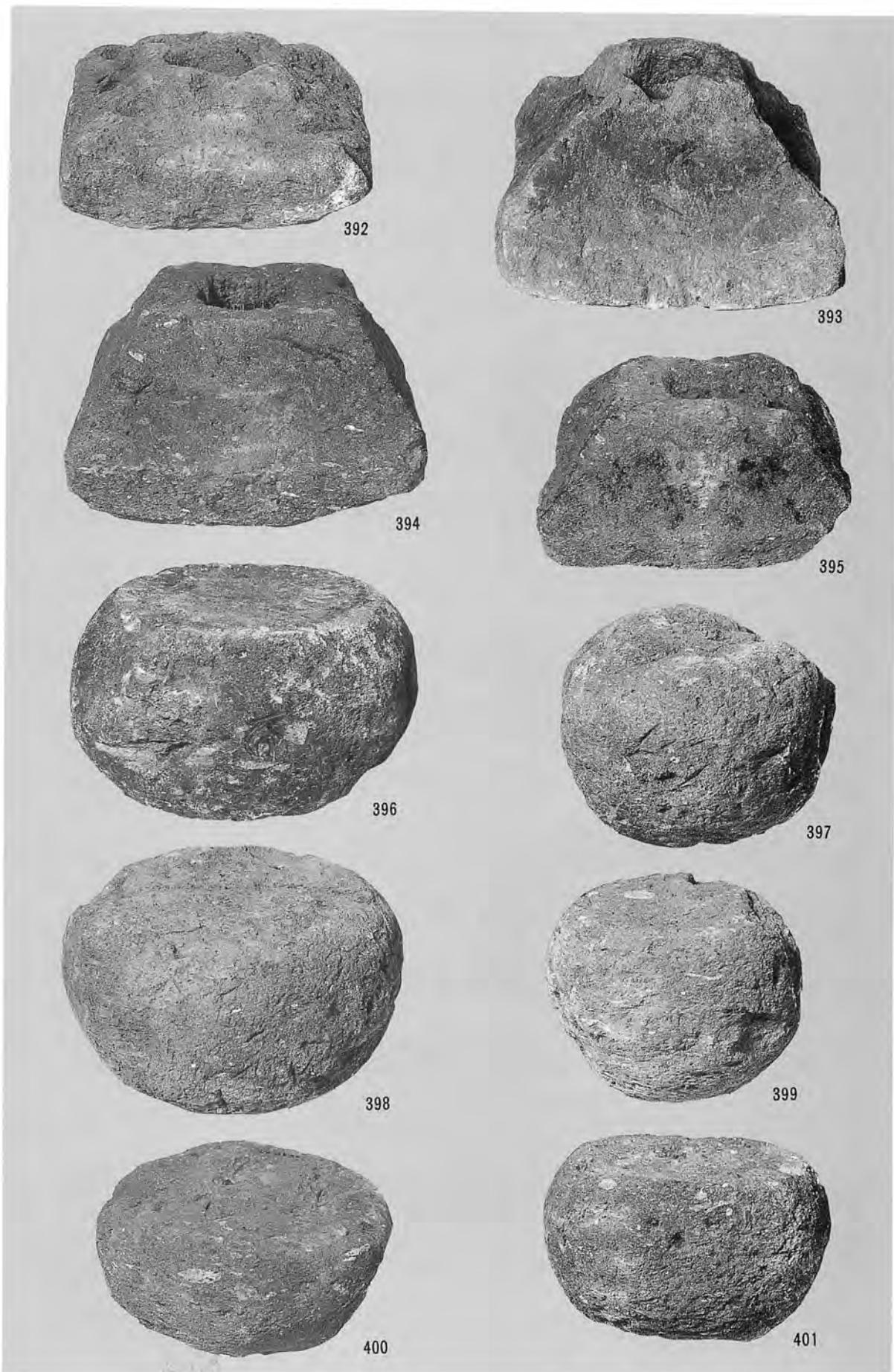


万年寺遺跡出土遺物 No. 369～No. 380

図版54

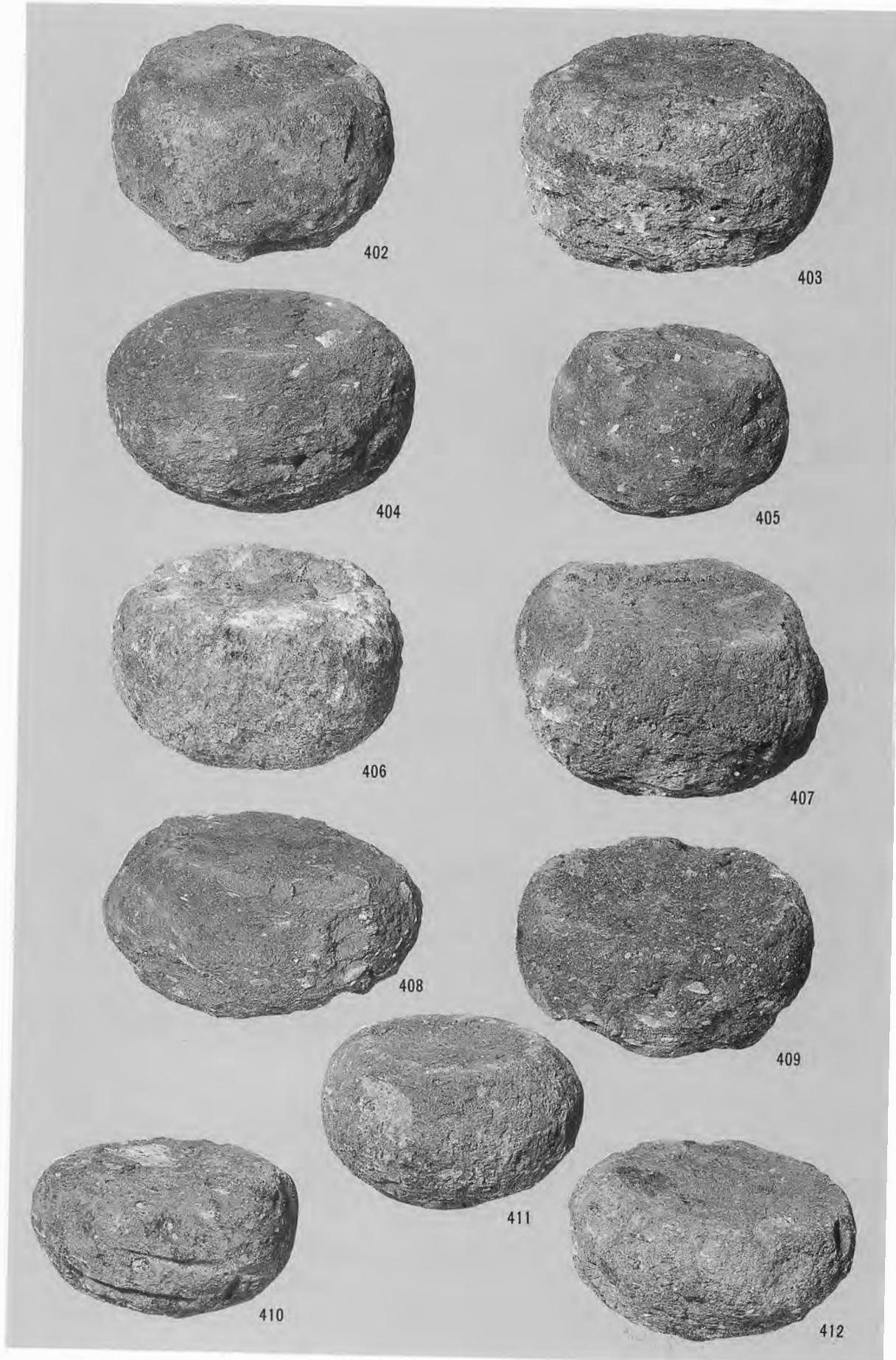


万年寺遺跡出土遺物 No. 381～No. 391



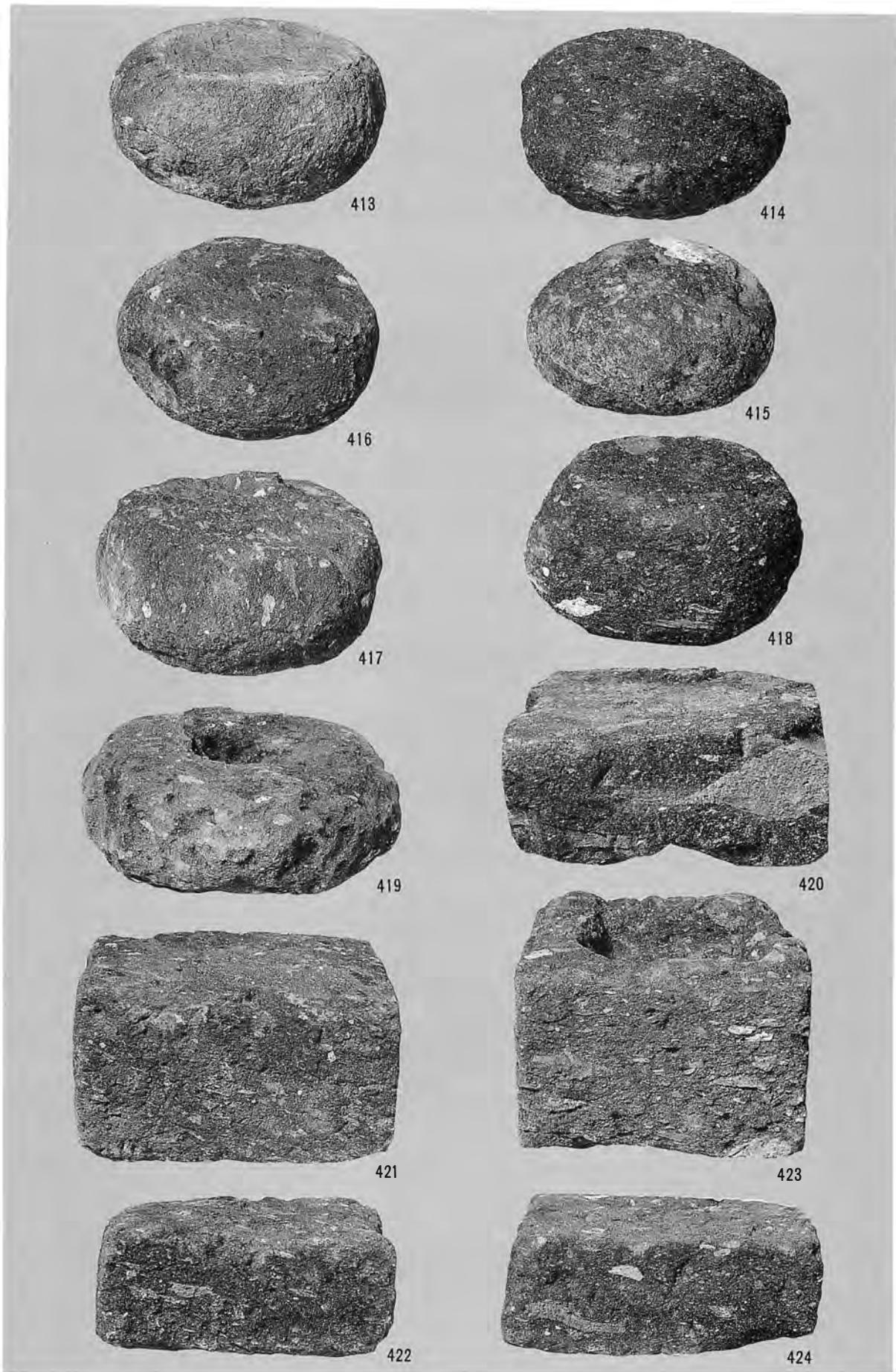
万年寺遺跡出土遺物 No. 392～No. 401

図版56



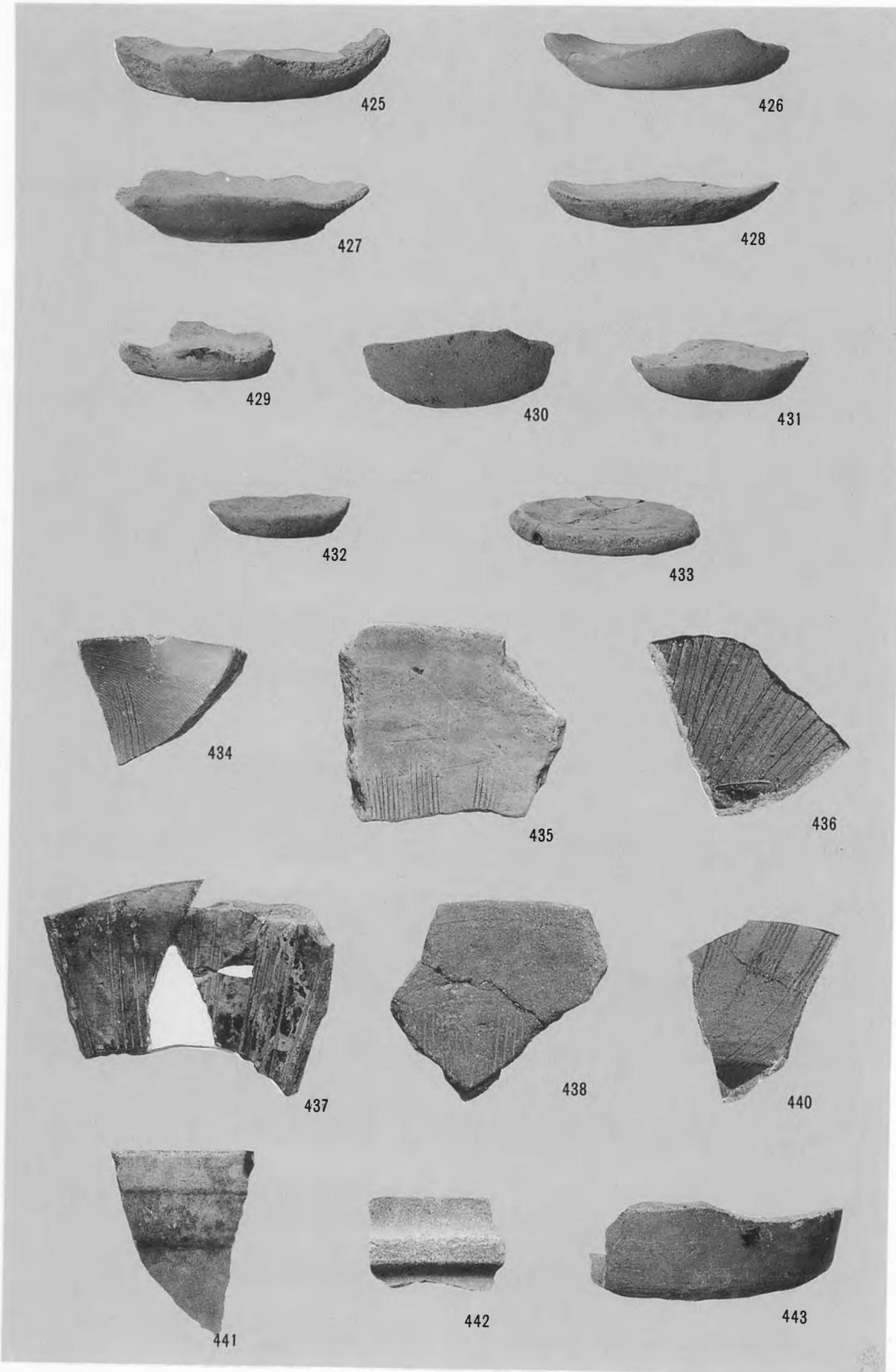
万年寺遺跡出土遺物 No. 402～No. 412

図版57

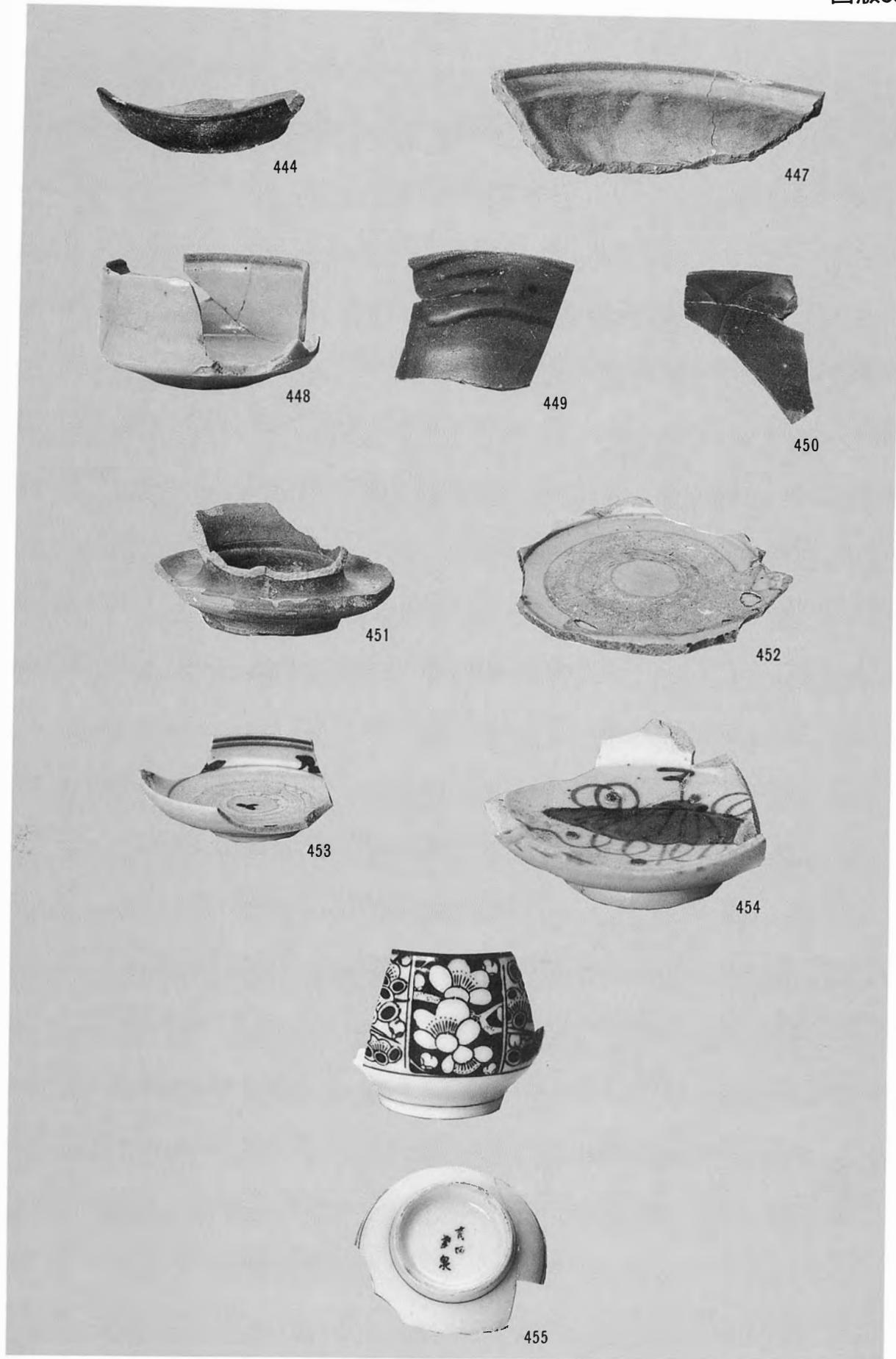


万年寺遺跡出土遺物 No. 413～No. 424

図版58



万年寺遺跡出土遺物 No. 425～No. 443



万年寺遺跡出土遺物 No. 444～No. 455

報告書抄録

書名	万年寺遺跡
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第163集
編著者名	園村辰実・松本健郎・澤田宗順
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号
発行年月日	1997年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村：遺跡番号	調査期間	調査面積	調査原因
万年寺遺跡	八代市平山新町		199504 ～199603	約5,000m ²	南九州西回り 自動車道

主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
弥生時代後期	土壙	甕	埋甕状に埋納された甕が5基出土 その他の遺構遺物は存在しない
中世から近世	土坑 土壙墓 堀跡 土塁跡 掘立柱建物跡	土師器 土師器 土師器、瓦器、青磁 陶磁器類、瓦類 五輪塔	多種多様の近世陶磁器出土 有田・唐津・朝妻・高田・波佐見等の各窯製の日常雑器

熊本県文化財調査報告 第163集
万年寺遺跡

平成9年3月31日

編 集 熊本県教育委員会
発 行 〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号

印 刷 中央印刷紙工株式会社
〒860 熊本市田崎2丁目5-38

08 教委 教文

(2) 006

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第163集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：万年寺遺跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2015年12月24日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会

URL：<http://www.kumamoto-bunho.jp/>